

Reソードアート・オン
ライン～蒼い死神と絶
剣～IS物語

ヤトガミ・レイナ・マリー・エクセ
リア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての始まりの鋼鉄の浮遊城《アインクラッド》から二年間と言う歳月が掛かってしまったが少年少女たちは脱出することができた

しかし、鋼鉄の浮遊城の終わりは新たな戦い：妖精の世界の始まりであった

2人の少年は愛する者の為、妖精の世界を駆け、苦難があつた物の愛する者を取り戻すことができた

そして、鋼鉄の浮遊城を終わりに導いた三人の少年は現実の世界に起ころうとしている戦いに身を投じることとなった

少年たちの運命はまだ誰にも分からない

Re ソードアート・オンライン〜蒼い死神と絶剣〜IS物語 始まります

この作品はソードアート・オンライン〜蒼い死神と絶剣のIS編のリメイクです。

目次

プロローグ

プロローグ

入学・クラス代表戦

兄妹の再会

クラス代表決めと怒り

凍結と謝罪

委員長と開発

生還者達の専用機

クラス代表決定戦 蒼VS蒼

出でる夏・迷える刀

クラス代表決定戦 夏VS秋

クラス代表決定戦 蒼VS秋 I

1

11

20

32

47

58

65

80

88

95

クラス代表決定戦 蒼VS秋 II

105

クラス代表決定

嵐の中国転入生！

専用機完成・赤の少女の失恋と夏の思

い

クラス代表戦 鈴VS秋

IS乱入戦 地獄の管理人

IS乱入戦 純白の輝き

祝賀会

SAO生還者の集まり

金銀とトーナメント

110

118

129

142

150

161

172

177

177

金銀の転校生	192	ことはありえないしそれを決めつけるなんてあっちゃいけないんだよ	260
元代表候補生と英と中の代表候補生		ソウさんは卑怯です	265
タッグ	197	タッグトーナメント4回戦 蒼・夜V	
貴公子の女の子	207	S 春・黒兎	271
白銀に輝く漆黒の剣	221	V S 過去の亡霊 I	278
哀れな掃除道具と秋、タッグトーナメント	229	V S 過去の亡霊 II	287
新たな剣と要塞化学校	235	V S 過去の亡霊 III 星々の輝き	
タッグトーナメント開戦	240	295	
タッグトーナメント一回戦 春・黒兎	247	金の貴公子と夏、春の新たな旅立ち	
V S 秋・箒	253	302	
歌姫な委員長と暴君な冬		臨海前日常回	
姉ができるから妹が絶対できるなんて		木綿季の日 1	314

木綿季の日	2	—	—	321
木綿季の日	3	—	—	325
木綿季の日	4	—	—	331
木綿季の日	5	—	—	340
デート	蒼と音	二人の距離	—	348
蒼と夜	二人の気持ち1	—	—	360
蒼と夜	二人の気持ち2	—	—	366
蒼と夜	二人の気持ち3	—	—	374
蒼と風	暴風の夜明け	一	—	383
蒼と風	暴風の夜明け	二	—	388
蒼と風	暴風の夜明け	三	—	393
蒼と風	暴風の夜明け	四	—	400
蒼と風	暴風の夜明け	五	—	406

蒼と風	暴風の夜明け	六	—	415
臨海学習	—	—	—	—
絶剣来る!!	—	—	—	420
蒼紫の夏	—	—	—	426
不思議な国の罪の天才	—	—	—	433
赤き二翼と青き翼	—	—	—	441
絶望の始まり	—	—	—	449
V S 福音	作戦会議	—	—	458
V S 福音	浜辺の喧嘩	—	—	464
V S 福音	ラウラの新機体	—	—	469
V S 福音	戦闘開始	—	—	473
V S 福音	赤い粒子	—	—	481
V S 福音	擬似太陽炉	—	—	488

563	不思議な国の出鱈目旅行 1 1	556
	蒼の過去	556
	夏休み	
	一学期の終わり	550
	宣戦布告 2	542
	宣戦布告 1	533
	一時の安らぎ 3	527
	一時の安らぎ 2	518
	一時の安らぎ 1	511
	V S 福音 終わりと戦艦	503
	V S 福音	498
	V S 福音 敗北と二つの水色	494

592	不思議な国の出鱈目旅行 1 8	587
	不思議な国の出鱈目旅行 1 7	587
	不思議な国の出鱈目旅行 1 6	582
	不思議な国の出鱈目旅行 1 5	578
	不思議な国の出鱈目旅行 1 4	574
	不思議な国の出鱈目旅行 1 3	567
	不思議な国の出鱈目旅行 1 2	

プロローグ
プロローグ



ユウキ……どうして、僕達の道はすれ違ってしまったのかな

ずっとすれ違わないと思っただ僕達の道がすれ違って破滅を生み出し、全てを狂わせた君もそう思うだろ？ユウキ……

みんなのことをお願いするよ……ユウキ……

“サヨナラ” ゆうちちゃん……僕の……愛する人……

2025年 3月10日 港北総合病院

「ソー！」

ボク……紺野木綿季は病院のベッドで目を覚ました

「……また……同じ夢……」

ALO……アルヴヘイム・オンラインから帰還してから全く同じ夢をみるようになった……ソーと戦い、ソーをボク自身の手で殺してしまう夢を……

ソーとはソードアート・オンラインでお互い気づかないで再会してからいつも一緒に行動し……ある日、お互いの事を知り、再会した……それ以前から何度かボクやキリト達から離れようとしたことがある……その事があり、ボクはあの夢をどうしてもただの夢と思えないでいた

「……」

ボクは拭いきれない不安を抱きながら窓ガラス越しに空を見上げていると看護師さんが入ってきた

「紺野さん、おはようございます。よく寝れましたか？」

「おはようございます。うん、何時も通りよく寝れたよ！」

ボクは看護士さんに何時も通りの笑顔を見せる……看護士さんはここ……港北総合病院に入院してからずっとお世話になってるから心配させたくない……それと、今日はボクのもの……ボク達の大切な日なんだ！

「それはよかったです。紺野さん、今日を楽しみにしてましたもんね」

「うん！ずつーと待ってたから！楽しみなんだ！」

ボクがそう返すと看護士さんは微笑み、車椅子に移動するのを手伝ってくれた

「あつ、ソー！」

俺は港北総合病院の待合所の椅子に座っているとゆうちゃんが車椅子を看護士さんに押されながらきた。

ゆうちゃんはALLOから帰還した後、すぐにエイズの「ナノマシン」治療を始めた。

この「ナノマシン」治療は体内に治療用ナノマシンを投与する治療法なのだが医療機関では医療として確立されて無く、数年前に大怪我での成功が一例あるのみでそれ以降の成功例はあげられてない……それもそのはずでナノマシン治療には莫大な医療費が掛かりふつうの家庭には払えない額なのだ。

そして、一回の成功例は俺自身である。

俺がまだ、暗殺者で未熟だったとき、一瞬の迷いで背中に深い傷を負ったことがある……その時に使ったのがナノマシン治療なのだ。

今では背中の傷跡は何もなかったように消え去った。

ゆうちゃん達の話に戻るがゆうちゃんとお姉さんのランさんの治療は成功して今では外出も許されている……だが、ゆうちゃんのリハビリは三日前から始まったばかりでまだまだ、一人で歩くまでには時間がかかる。

「やあ、ゆうちゃん。おはよう」

「おはよう、ソー！」

俺達が挨拶を交わしていると看護師さんが俺に言ってきた。

「更識さん、今日は紺野さんのこと、お願いしますね。……まあ、あなたたちなら大丈夫だと思いますが……」

「もちろん、わかっています。ゆう……ユウキのことは僕が一番分かっています……それに、ユウキは僕の彼女ですから」

俺と看護士さんがそう話しているとゆうちゃんが顔を赤くしていた。

「それじゃあ、みんな待たしているのでそろそろ、行きますね。ゆうちゃん、行くっか」
「う、うん！それじゃあ、行って来ます！」

俺とゆうちゃんは看護士さんに挨拶して俺がゆうちゃんの車椅子を押しながら病院を後にする。

10日 IS展示会場

「あつ、ソウくん！」

「よお、ソウ」

俺とゆうちゃんが待ち合わせのIS展示会場前に着くと刀奈姉さんと恋人のチカこと一夏が待っていた。

「久しぶり！カタナさん！チカ！」

「お待たせ、刀奈姉さん」

「そんなに待つてないわ。それと、久しぶりね、ユウキちゃん。それから、呼び捨てでかまわないわよ?」

「久しぶり、ユウキ」

俺達4人は軽く挨拶をすませると会場内に入っていく。キリト達がいまいことが気になり刀奈姉さんに聞いてみた

「そういえばキリト達は?」

「会場の出店辺りにいるはずよ……………噂をすればね」

「?……………ああ、なるほど……………」

刀奈が何かを見つけ俺たち三人が顔を向けると、入って直ぐの出店エリアの一角のベンチにイチヤイチャオーラ全開で座っている二人の姿がそして、周りのお客はみんな、辛いものや苦い物を買って込んでいた。

「お〜い、アスナ、キリト!」

「あつ、ソウ君、ユウキちゃん!カタナちゃんにチカ君!」

俺が二人を呼ぶとアスナが手を振ってきた。

「久しぶり、アスナ!」

「久しぶり、ユウキちゃん!」

アスナとゆうちゃんを抱き合う……二人とも大の親友でたぶん、《西風の旅団》の女性陣メンバーで一番仲が良いと思う。

「みんな集まったし、行こうか。」

「うん！」

「ええ、そうね」

「そうだね」

「「そうだな」

俺達は会場の室内に入っていく。

「それにしても、よかったの？ I Sの展示会で？」

室内に入ってから少しするとカタナ姉さんがキリト達に少し申しわけなさそうに聞いてくる

「うん。私もキリト君も I Sには少し興味があつたし、それにみんなで会う事に意味があるんだよ？」

「そうだけ、カタナ」

「そう言ってもらえると……それじゃあゆつくり見て回りましょうか」

そう言つて会場を回つていく、そしてなんだかんだでISSに詳しくISS学園に入ることが決まつているカタナ姉さんとその恋人のチカのバカアップルが先頭に立つて色々説明されながらあちこち回つていく

「こうして見ると、ISSって結構スマートなんだね」

「うん……それに、装甲つて言う装甲はそんなにないんだ……」

「ええ、元々が宇宙空間での活動を想定した機体だから、競技用になつても形はそこまで崩れてないの。それに絶対防衛の存在や量子変換技術はとんでもないわよ」

アスナとゆうちゃんのつぶやきにカタナ姉さんが説明してくれる。

そして、次の場所に移動すると次はISS適性検査が無料で行える会場になつていた。並んでいるのももちろん、女性しかない……特別見る物も無いので進もうとしたとき、ゆうちゃんが聞いてきた

「ねえ、ボク受けてみたいんだけどいいかな……?」

「……わかった。みんな、いいよね?」

俺が四人に聞くと四人とも頷いてくれたので車椅子を押す係として俺も一緒に並ぶ、刀奈姉さんの勧めでアスナも適性検査をうけることに……………

そして、二人の結果はカタナ姉さんと同じ『Aランク』だった。

「う、うーん」

「ソー！ボク、Aランクだったよ！」

その結果にアスナは微妙な反応でゆうちゃんは喜んでいた。

しかし、この後とんでもないことが起きる。

アスナとゆうちゃんの適性検査を受けた後、俺とキリト、チカはISに触れられるという会場の端にある場所に着ていた。そこにおいてあったのは日本の量産型ISの打鉄とフランスの量産型ISラファール・リヴァイブが一機ずつおいてあった。

「触れるとまた違うな……………」

「そうですね……………」

「いやな予感……」

俺がキリト達を見ているといやな予感がして仕方がなかったが、それが直ぐに明らかになる。

キイイイイイイイイイ!

キリトとチカが変わるために手を離れたその時、ISが光り出して何事かと思つてキリト達を見るとISに乗っていた。

それから、直ぐに日本政府に俺たち六人は連れて行かれてキリトとチカ、アスナ、そして、菊岡の策略により俺もIS学園に行くこととなった。ゆうちゃんのことだが、リハビリで一人で歩けるようになってから編入ということで収まった。

続く

入学・クラス代表戦

兄妹の再会

2025年 4月10日 I S学園 《一年一組教室》

「（これはなかなか、キツイな）」

今、俺は……いや、俺達はI S学園の自分たちの教室一年一組の自分たちの席に着いていた。

この教室には俺の他に、キリトにチカ、アスナにカタナ姉さん、本音に響……そして、サクヤという豪華なメンバーがそろっている。

それはいいのだが……わかつてはいたが、俺とキリト、チカの三人とチカの元兄以外全員女の子なのだ……それに、俺達の席は一番前で後ろの女の子全員の視線を感じてしまう。確実にキリトもチカも同じ気持ちなのだろう。

そんなことを考えていると教室の扉が開き、一人の女性が入ってくる。緑色の髪を肩

の辺りまで伸ばし、胸以外は迷い込んだ中学生の様な容姿をした女性……女性はそのまま教壇に立った。

「皆さん、入学おめでとうございます！ 私はこのクラスの副担任の山田 真耶です！

これから一年間よろしくお願いしますね」

『……………』

「あ、あれ……………」

副担任の山田真耶先生がスタンダードな自己紹介するが……誰も反応しない。俺やチカ、キリト、カタナ姉さんにアスナは反応しようとするが周りの反応が無く反応ができなかった。

それで、先生は無理矢理に自己紹介をはじめさせてチカの元兄の順番になる。

「織斑秋羅（あきら）です。趣味は剣道です。一年間よろしくお願いします」

直後、鼓膜を破壊しかねないほどの音の爆発が巻き起こる。

「男の子！ イケメンの男の子よ!!」

「生まれてきて良かったあああああッ!!」

咄嗟に耳を塞いでいたが、それでも十分に聞こえてくる女子生徒達の歓声。

「ほう、随分騒がしいと思えばお前だったか」

クラスが騒がしい中、黒スーツを着た女性が一人、織斑千冬が入ってくる……その時一瞬だが、チカから殺気が漏れた

少しチカの事を心配していると織斑千冬の自己紹介と俺達以外のクラスメイトの暴走とかあつたが自己紹介に戻った。

「日本代表候補生の織斑春萎はるなです。趣味は家事とスイーツを作ることです。それから、織斑先生と織斑秋羅さんとは無関係なので比べたり、織斑千冬の妹として接しないで下さい。一年間よろしくお願いします」

チカの元妹？の自己紹介が終わり、クラスが少しざわめく……その中で織斑千冬と織斑秋羅は織斑春萎を睨んでいた。

自己紹介は続き。サクヤと《西風の旅団》一コミュ障のキリトの番になる。

「神無月サクヤ。趣味はALLO……よろしく」

「……桐ヶ谷和人です。趣味はALLO、それと機械いじりが好きです。よろしくお願
いします！」

「ALLOって言えば有名なゲームだね？ 桐ヶ谷君つてもしかしてオタクなの？」

「え、イケメンがオタクってシヨックかも」

ALOを知らない人間が好き勝手言うてくれる。キリトやアスナ……ここにいる《西風の旅団》メンバー達は何か言いたげそうだったけど、みんな堪えた

サクヤは趣味以外にも言わず終わる

キリトは自己紹介した後直ぐに席に着く、キリトという人を知らないとはわからないがものすごく緊張していたはずだ。

キリトの自己紹介に脱力した女子生徒が何人か居たが、まあ、何であれキリトの番が終わって、俺達更識家の番になる。

「ええ」と、更識 一夏です。趣味はキリト……和人さんと同じでALOで、家事全般が得意です。一年間よろしくお願いします！」

自己紹介が終わり、一夏に拍手が贈られる……が、ALOと聞いて何人かは脱力して織斑秋羅と茶髪のツインテの少女は鼻で笑っていた

「更識簪です……趣味はALO……一応、日本代表候補生です。よろしくお願いします」名前順で簪が最初になった……簪の言うとおり、簪は更識家という理由で日本代表候補生になっている……俺もできなくは無いが卒業後はIS操縦者になるつもりは無いで日本代表候補生にはならなかった。

おっと、俺の番か……

「更識蒼です。趣味はALOと機械いじりなどいろいろ。嫌いなのは女尊男卑に染まっ

た奴……一年間よろしく願います」

俺の自己紹介でも趣味のA L Oで何人か残念がる。

「ロシア国家代表の更識楯無よ！趣味はA L Oと最近だと料理かな？ みんなより年上だけど、とある事情でここに入學するのが遅れてみんなと同じ学年になったわ！一応、生徒会長だから困ったときは何でもいってね？それじゃあ、一年間よろしく！」

「結城明日奈です。趣味はA L Oと料理です！ちよつとした事情で走る事が出来ませんが、よろしく願います！」

クラス最後に近くになってようやくアスナの番になる。クラス的女子たちは俺達全員を含めると8人のA L Oにお腹いっぱいみたいだ。全員終わると丁度よくチャイムがなりH Rが終わった。

休み時間となり、みんな思い思いに過ごす。と、言っても俺達三人とチカの元兄を見たいが為に外には他のクラスの女子たちが集まっていた。

そんなことはさておき俺、チカ、キリト、サクヤ、アスナ、カタナ姉さんは席が近かった上に、俺とキリト、チカの視線地獄からの解放後のケアをする為に集まる。

「サクヤ、現実では久しぶりかな？」

「うん………久しぶりです。ソウさん」

サクヤはやつぱり少しよそよそしい……緊張しているのかなんなのか……

「サクヤ、お昼に渡したい物があるから昼食一緒に食べないか？」

「?もちろん、いいですよ」

俺はサクヤに昼食を食べる約束を取り付ける。そしていると……

「あの、ちよつといいですか？」

この場にはいない誰かが話しかけてきて全員で振り向くと……某ボカロみたいな長いツインテールの女子生徒が立っていた

「君は確か、織斑さん？」

「はい、織斑春萎です。あの、すみませんが、更識一夏さんを少しだけお借りしてもいいでしょうか？」

「あ……えつと……」

突然の元妹からの誘いで戸惑うチカ……俺が助け船を出そうとすると……

「チカ、行ってきなさい」

「良いのか、カタナ？」

「ええ、それに話したいって言うてるんだから話してきなさい」

「……わかった……屋上で良いかな？」

「はい」

チカの恋人のカタナ姉さんが後押ししてチカは織斑春萎さんと屋上に向かった

「ねえ、ちよつといいかな？」

二人を見送った後、今度は男：織斑秋羅が話しかけてきた

「お前と関わるつもりはないから他を当たれ」

俺が冷たくそう、言いのけると織斑秋羅と一緒に着た篠ノ之箒が怒鳴ってきた
「貴様！秋羅が話しかけてやったと言うのになんだその態度は!!」

「だから、なんだ？ 去年の剣道大会準優勝者兼 I S の生みの親、篠ノ之束の妹」

「あいつとの名前を言うな！」

俺がそう言うのと篠ノ之箒がまた、キレるが…だが、織斑秋羅がなだめる

「後で謝っても許さないからな？」

捨て台詞を残して織斑秋羅と篠ノ之箒は席に戻っていった。

その頃……………屋上では……………

「久しぶりですね、兄さん」

「ああ、と、言っても3ヶ月振りくらいか？」

俺、更識一夏……………元は織斑一夏だった……………春菱は双子の妹で秋羅は一つ上の兄だった

俺は姉の織斑千冬と兄の織斑秋羅とずっと比較され続けていた……………それと、兄姉からの虐待……………そんな生活から逃げたくて……………強くなりたくて俺は《ソードアートオンライン》に入ったんだ……………だけど、二年後、ソードアートオンラインがクリアされて現実に戻ってきた俺に突きつけられたのは妹の春菱以外から捨てられたと言ったことだった……………それも、兄の秋羅が何度かナーヴギアの破壊や取り外しを行おうとしたことを知った……………俺は織斑にいることが嫌になってリハビリを終えて直ぐに恋人のカタナの更識家に身を寄せた……………カタナの情報操作で織斑一夏は死んだことにしてもらい、俺は更識一夏として生きていくことにしたのだ

「春菱……………あの時は悪かった……………勝手に居なくなつて…」

「兄さんが謝ることじゃありません……………でも、私も連れて行って欲しかったです……………

兄さんと一緒に行きたかったです」

春菱は泣きながら俺に抱きついてくる

「ごめん……あの時は自分のことでもいいいいだったから春菱ことまで考えてなかった……ごめん……でも、これからは一緒だ……この三年間は一緒に入れるから……この三年間で……あいつらとの縁を切って一緒に暮らそう……」

「うん………」

春菱は頷いて涙を拭き取る……俺は春菱の頭を撫でる

「そろそろ、戻ろう。」

「うん、兄さん！」

俺たちは教室に向かって歩き出した

続く

クラス代表決めと怒り

2025年 4月10日 IS学園・《一年一組》

予備鈴がなって直ぐにチカと織斑春萎さんが屋上から戻ってきてから直ぐに山田先生と織斑千冬が入って来てしまった為、チカと話すことが出来ずに一時間目の授業が開された。俺は教科書を開くが授業は無視してパソコンのキーボードを叩いていく………始めて直ぐに織斑千冬が俺の方に近づいてきて声をかけてきた。

「更識兄、授業中になにをしている？」

「人に渡す専用機の最終調整を会社と家から頼まれたのでそれをしていただけです……なにか、ご不満でも？ 授業にでることは既に覚えていますし、内容は聞いているので問題無いので気にせず続けてください。」

俺はつつみ隠さずに作業を進めながら話すと織斑千冬はものすごく不満そうな顔をしているが無視して山田先生に授業を進めさせる。

「ここまでで分からない人はいませんか？ 織斑君と桐ヶ谷君は更識君達は大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません」

「俺もです」

「大丈夫です」

「こちらも大丈夫です」

「そうですか…ッ！ なら、良かったです！」

そう言つて気分上々に授業を進める山田先生。

まあ、俺達は入学するまでの間、カタナ姉さんと簪、本音に本音の姉でカタナ姉さんの従者の虚うつつさんに徹底的に扱かれ、一年で習う所は全て教わった

次の話はISのコアに関してだ。

「ISのコアには、人格に似たようなものがあり、操縦者の操縦時間に比例して、操縦者の特性を理解していきます。ですので、ISは機械と言うより、パートナーとして扱つて下さいね？」

「しつもん!!」 パートナーって彼氏彼女みたいな感じですか？」

「うええっ!!!?」 そ、それはそうですねえ、私はそう言う経験が無いので分かりませんが……ああ、でもそれはそれで……」

女子生徒……（俺達三人以外女子なのだが）の一人がそんなことを言い出して山田先生が顔を赤くする。

そこで授業が終わり、再び山田先生と織斑千冬は教室をあとにし休み時間に入った

次の休み時間になった俺たちは今度は簪と本音も含めて8人で集まり、夜のALOの雑談をし始める

そうして雑談をしていると……

「ちよつとよろしく……」

「[[[ん]]」

誰かが声をかけてきて、振り返ると、そこには金髪の少女が立っていた。

「まあッ！ 何ですのそのお返事！ このわたくしに声をかけられたのですから、それ相応の対応があるのではなくて？」

その言葉にチカの恋人のカタナ姉さん、キリトの恋人のアスナは怒ったのか目が鋭くなっていた。ここに、ゆうちゃんがいいたら即戦闘になっていたかもしれない

「全く興味のない相手にどんな対応が必要なのかな、エリート気取りのセシリア・オルコット。それに言わなかったか、俺は『嫌いなのは女尊男卑に染まった奴だ』と。不愉快だ失せろ」

俺はこの場の代表として金髪wのセシリア・オルコットに言っただけ。こうでもないかとアスナとカタナ姉さんがキレそうだった。

セシリア・オルコットは俺の物言いにキレて自分の席に戻って言った。

「さすが、ソウくんね」

「そうか？でも、あのセシリア・オルコットとは何かあるだろうから注意してな」

俺がそう言うのとみんな頷いてからそれぞれの席に戻る。

「では、ISの各種武装についてだが…その前に再来週のクラス対抗戦クラス代表を決めなくてはならない。クラス代表はその名の通りクラスの代表者だ、各種委員会の集ま

りや会議、その他にも今度の学年別クラス代表対抗リーグに参加する事になる。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「要はクラス委員長をやれつてことだが……キリトとチカはこう言うのには関わらないだろうな」

「はい！ 織斑君がいいと思います！」

「まあ、当たり前かな」

「私も賛成です！」

「じゃあ、私は桐ヶ谷君で！」

「ええッ!？」

「私も私も!!」

「なら、私は更識一夏君で！」

「ええッ!？」

「私も」

「私は、更識蒼君で！」

「……だろうな」

ある程度……俺達四人が上がって織斑千冬先生が『他に居ないのか』と念のために聞いてくると、セシリア・オルコットが異議を唱えてきた。

「納得いきません!!」

バシンと、机を叩いて立ち上がってくる

「その様な選出は認められません! 男だからと言ってクラス代表だなんていい恥さらしですわツ!! 代表ならこのわたくし、セシリア・オルコットが一番の適任者ですわ!」

「あら、じゃあそう思う理由を聞いてもいいかしら?」

セシリアの言葉にカタナ姉さんが反応し、セシリアに問いかける。

「ふんっ! そんなの当然ですわ……わたくしはイギリスの代表候補生セシリア・オルコット。こんな文化的にも後進的でイギリスよりも劣っている様な極東の猿……よりもよってオタクなどの下等生物よりもずっと適任ですよ?」

セシリア・オルコットの『オタクなどの下等生物』の言葉にカタナ姉さんとアスナは怒っていたが必死に抑えていた

「イギリスだつて対して自慢なんかできないだろ。世界一マズイ料理で何年連続覇者だ

よ」

俺達が我慢している中、チカの元兄の織斑秋羅が我慢出来なくなり、セシリアとの言い合いに。そして、織斑秋羅の言葉にセシリアがキレた。

「なっ!!イギリスにだって美味しい料理はいっぱいありますわ! あなた方、わたくしの祖国を侮辱いたしますの!」

「先にバカにしたのはそっちだろ!!」

一つ歳が上の癖に短気な奴……仕方ない、止めるか……

俺はそう思いながら拍手する。

俺が拍手したことでクラス全体の意識が俺に向く

「いやくなかなか、おもしろくもない物を見せてもらったよ……お礼として、二人には言っておこうか、まずは……セシリア・オルコット」

「な、何ですか?」

「セシリア・オルコット、あんたはイギリスの代表候補生なのだろう?その一代表候補生が日本という国を侮辱したそれはどういふことなのか分かるかな? 分からないなら国家代表にでも聞いてみようか? 楯無姉さんは知ってるよね?」

俺はロシアの国家代表であるカタナ姉さんに話を振った

そうそう、刀奈姉さんは更識家の当主で楯無の名を受け継いでいてそう簡単に本名を

出すことが出来ない……俺達もその事を知り、理解しているのでこういう公の場は更識楯無としての名前を呼ぶことになっている

「ええ、国家代表又は国家代表候補生の言葉はその国の言葉と同じ、今回で言えばイギリスからの言葉と同じ……イコールセシリア・オルコットの日本侮辱はイギリスからの侮辱よ……だから、私達国家代表と国家代表候補生は発言には気を付けないといけないわ」

「だ、そうだ。付け加えて俺から言うとセシリア・オルコット、お前は今、どの国にいる？このクラスにはどの国の人が多い？ISはどの国の人間が作り出した物だ？そして、フルダイブ型VRはこの国の人間が作り出した物だ？……それを踏まえて言いたいことがあればどうぞ」

「クツ……ありませんわ」

カタナ姉さんの言葉が重くのしかかり、俺の言った事が突き刺さったのかセシリアは引き下がった

「さてと、残りはお前か織斑秋羅」

「な、なんだよ」

俺が鋭い視線で見ると織斑秋羅は少しだけおどけた

「確かにイギリスの料理は不味いとも言われているだろう……だがな、それは国として

の違いがもたらした事でしか無い。俺は昔、ちよつとした仕事で世界をあちこち回っていてその国の料理を食べたことがある……もちろん、イギリス料理も食べたさ。そこで感じたのは日本は贅沢しすぎだつてことだ。不味いから食べない、不味いから食べたくないとか言うけどお前はイギリス料理を食べたことがあるのか？」

「そんなの、あるわけ……」

「無いだろ？お前は食べたこともないイギリス料理を世界の評価だけで決めつけて侮辱したんだよ。それに、お前は織斑で男性 I S 操縦者の一人だ……それは、織斑を男性 I S 操縦者を汚すことにつながるんだ、それを踏まえて侮辱するなりなんなりとすればいい。俺が言いたいことは言ったがなにか、言うことはあるか？セシリア・オルコットも？」

「……………みなさま、すみませんでした」

「……………ウザアテエ」

セシリア・オルコットはみんなに向かって謝つたが織斑秋羅は謝らずに俺を睨みつけてきた

「なんだ、その目は？まさか、自分が悪いとは思つてなかつたか？」

「うざあてえんだよ！たかがゲームに二年間も費やし無駄にした凡人が！天才の俺に説

教じみたことしてんじゃねえ！たかがゲームで死んだ奴らも天才の俺と違って無能だったろ！んなもん、死んで当たり前だろ！生き残った奴だつてそうだ！自分たちのことを生還者なんて呼んで同情を誘ってんじゃねえよ！」

「「「「ツ！」」」」

俺達八人は軽く驚き、殺気がこみ上げてくる。

教室の空気も凍りつき、カタナ姉さん、サクヤの周りの生徒が次々気絶していく……
そして、俺は自分でも気づかない内に織斑秋羅の首を掴み、締めていた

「「「「蒼（くん）（お兄ちゃん）！」」」」

「……ガキが、調子にのってんじゃねえよ？貴様がどうして俺達のことを知ってるのかなんて、どうでも良いが……」「無能」？」「死んで当たり前」？……貴様は……あの世界で生きていた人達のことを知らないで良く、そんなことを言えたな？」

「グウ……はな……せよ……てん……さい……の……俺に……ふれてんじゃ……グウ」

「そこまでにしろ、更識兄」

ここで織斑千冬が止めてくるが止める気なんて起こらなかった

「教師面をしないでくれませんか？世界を混沌に落とし入れた『ホワイトナイト』さん？そ

れとも、こう呼んだ方がいいですか？実の弟を見捨てた『キリングナイト』

「ッ！」

「『?!?!?!?』」

俺のこの言葉にクラス全体がどよめき、織斑千冬と織斑秋羅、篠ノ之箒が俺を睨みつけてきた……すると、後ろから槍らしき長物武器の先が俺の首裏に当たった

「ソウ君……これ以上は生徒会長として……姉として止めるわ。少し頭を冷やしなさい」

「ッ！」

俺は刀奈姉さんの声が聞こえた後ろをゆつくりと向くとS A O時代の刀奈姉さん愛用レジェンダリー武器《ロンギヌス》を構えた刀奈姉さんがど怒り状態の顔をして立っていた

「……は、はい……すみませんでした」

流石の俺も顔色が真っ青になり、織斑秋羅を離れた……織斑秋羅はせき込んでいるが俺にはそれを気にしている余裕は無く、何もせずに席に座った

「……で、では、一週間後に第三アリーナでクラス代表決定戦を行う。オルコット、織斑、更識兄弟、桐ヶ谷の五名は準備を怠らないように……更識兄は放課後、私のところに来るように」

こうして、一週間後俺達のクラス代表決定戦が行われることとなった…

続く

凍結と謝罪

2025年 4月10日 I S学園・《屋上》

パシン！

I S学園の屋上に何かを叩いた音が響いた……セシリア・オルコットと織斑秋羅とのクラス代表決定戦がきまったあと、俺達は屋上に来ていた足を運んでいた

そして、屋上に来て直ぐに俺はみんなの目の前でカタナ姉さんに頬を引っぱたかれた理由はもちろん、クラス代表決めの織斑秋羅への首締めとかだ

「なんで、叩かれたかわかってるわよね？ソウ君？」

「……はい……」

俺の正面にはカタナ姉さんの他にサクヤと簪も立っていて他のメンバーはカタナ姉さん達の後ろで見守っていた

「確かにあの世界の事を……生きていた人達を悪く言われた事には私も良くは思わないわよ？でも、ソウ君……いくらなんでも首締めと教師への暴言はやり過ぎよ。あの人はあれでも元ブリュンヒルデで今でも発言力は大きいのよ……わかるわよね？」

「は、はい……」

カタナ姉さんに言われ……更に冷静になつて考えると自分でもやり過ぎたと思つた……元々はあいつらの自業自得だから反省はするが謝りはしない

「わかっているならいいわ……さてと、みんな、待たせてたわね。ご飯にしましょう！」

カタナ姉さんがそう言うのと簪と本音がどこからか出したブルーシートを敷き、アスナはバスケット、カタナ姉さんと簪は三段の重箱をブルーシートの上に置いた

「それじゃあ……」

「「「「いただきます！」」」」

全員揃つて久々の「いただきます」をしてカタナ姉さんとアスナ、簪はバスケットと重箱を開け始めた

「お兄ちゃん、はい。これ」

俺は簪から少し形が崩れてしまってるおにぎりを受け取る。

周りを見るとキリトはアスナ手作りのサンドイツチを、チカはカタナ姉さんの重箱からおにぎりをアスナとカタナ姉さんに渡されていた

「……はむ……美味しい」

おにぎりを一口囓ると塩加減絶妙なおかかおにぎりですごく美味しかった

「良かった……サクヤさんに教えたけど不安だった……」

「え？これってサクヤが作ったのか？」

簪の話聞いた後、隣のサクヤを見ると顔をほんのり赤くしていた

「……はい……今朝、簪さんと一緒に作りました……」

サクヤは嬉しそうだが少し不安がっていた

「美味しいよ、サクヤ。俺の為にありがとう。サクヤは良いお嫁さんになるよ」

「お、およめ……はう……」

俺はサクヤの頭を撫でながらお礼を言うと顔を真っ赤にしていた

「そう言えば、なんであの人が私達のことSAO生還者だって知ってたんだろ……普通なら知らない筈なんだけど……」

「ブリュンヒルデが漏らしたか別から漏れた可能性がある……まあ、気にしなくても良いとは思うぞ?」

「……それもそうだけど……多分、俺が居たからかな」

チカが呟いき、みんなの視線が集まる

「どういうこと?」

「……………キリトさんやアスナさん、サクヤには言つてませんでした。俺……………元々は織斑秋羅の弟で織斑春菱の双子の兄だったんです」

「!?!」

キリト、アスナ、サクヤはチカの言葉に驚いていた

「SAOがクリアされて、俺は現実世界に戻ることができました……………だけど、戻ってくる姉の織斑千冬には見捨てられて、春菱の話では織斑秋羅には何度かナーヴギアを取り外されそうになっていました……………だから、俺は織斑を捨てて更識になったんです」

「そう……………だったんだ」

「チカも大変だったんだな」

「キリトさんやソウ達に比べたらこんなの軽いものですよ」

俺達もそうだが……………チカも大変な目に会っていた……………

そんな感じで話をしていると……屋上の扉が開いた
「あ、皆さん。ご一緒にしてもいいですか？」

開いた扉から織斑春菱がお弁当箱を持って出てきた

「あ、織斑さんか……どうぞ」

「ありがとうございます。失礼しますね」

俺がそういうと織斑春菱は礼儀正しく軽くお辞儀してからブルーシートに座った

「そう言えば、織斑さんは織斑秋羅のところに行かなくていいの？」

「えっ？あ、はい。秋とは仲が言い訳じやありませんから……それに……にい……..
いえ、一夏さん達と居た方が気が楽なので……」

織斑春菱は一瞬、一夏を兄と呼びそうになるが……一夏さんと言い直した

「あ、良ければ、私のこと春菱って呼んでください……ここには織斑は三人いるので
……」

「わかったよ、春菱さん。俺のことは蒼って呼んでくれ」

「俺は和人って呼んでくれ」

「なら、私も明日奈って呼んでね」

「私は楯無って呼んでね」

「……簪って呼んで」

「私はサクヤって呼んでください」

「私は好きに呼んで良いよ」

「俺も今まで通りでもいいし、一夏って呼び捨てでもいいぞ」

「はい。蒼さん、和人さん、明日奈さん、楯無さん、簪さん、サクヤさん、本音さん、兄さん、これからよろしくお願いします」

「「「「「うん（ああ）（はい）！」「」」」」」」

そんな感じで春萎さんと仲良くなった……そんな、楽しいお昼休みは直ぐに終わりを迎える

「それじゃあ、そろそろ時間だから戻らないと……その前にサクヤ……さつき言った渡すものだよ」

俺はそう言ってポケットから《レッドルチルクオーツ》のブレスレットを取り出して

渡す。

「これ……………」

サクヤはそのブレスレットを見て泣きそうになっていた

「覚えていてくれた？サクヤが一度居なくなつた後に渡した《レッドルチルクオーツ》のブレスレットだよ……………サクヤにあげたのでISの待機状態に一番適していて、あの世界”の思いが詰まってると思つたんだ。どうかかな？”

「あ……………ありがとう……………ごさいます……………ソウさん……………」

サクヤは俺に抱きついてきて泣き出してしまふ。

「よしよし、サクヤは直ぐ泣くんだから……………」

俺は抱きついてるサクヤの頭を撫でた。

「あく疲れた……………」

「俺も……………」

「流石に堪えるな……………」

時間は過ぎ、俺達はようやく一日目を終えることができ、教室で集まっていた

「なんだがキリト君、年寄り臭いよ」

「実際この一日で五歳は歳喰った気分だよ」

「俺もそんな感じですよ……」

キリトとチカに苦笑いしていると山田先生が教室の扉を開けて入ってきた

「ああ、良かった！ みなさんまだ残っていてくれたんですね……!?!」

「山田先生、一体どうしたんですか？」

「はい。実はですね、更識一夏君と桐ヶ谷君と更識蒼君の寮の部屋が決まったので、お伝えしようと思っていたんですよ」

「えっ?」

「り、寮の部屋ですか？」

「はい、そうですが……?」

「えっと、俺達三人ともしばらくは通学だったはずなんですけど?」

俺が三人の代表で山田真耶先生に聞いてみた

「ああッ! すみません……ちゃんと伝えてませんでしたね。政府からの通達で三人と織斑くんには今日から寮へと入ってもらおう事になったんですよ……これが鍵です」

そうやって俺とキリト、チカに部屋の鍵を渡す山田先生。

「俺は、1100室か……」

「俺は、1099室ですか……」

「えっ!? 俺は1098室……キリトさんとソウとは別々の部屋なんですか?」

「……それがですねえ……急遽決まった事だったんですが……桐ヶ谷君は結城さん、更識一夏君と楯無さんは同じ部屋にしろと『総務省』からの指示みたいなんです……どうして、総務省がそんなことを言ってきたのかはわかりませんが……」

山田先生の言葉に俺、キリト、アスナ、カタナ姉さんは総務省のある一人の顔が浮かび上がった

「「(菊岡(さん)だ(わ)……………」」」

「……取り敢えず、山田先生ありがとうございます。」

「いえ、先生として当たり前ですよ……それでは、私はこれで失礼しますね」

山田先生はそう言うのと教室を出て行った。

職員室

俺は一人、職員室の前にいた……今朝の事で織斑千冬に呼ばれていたことをすっかり忘れていたのは内緒だ

コンコン

「失礼します。更識です」

「入れ」

中から織斑千冬の声が聞こえ、扉を開けて入ると普通の学校と変わらない職員室で一人、椅子に座る織斑千冬がいた

「更識兄、今朝はなぜあんなことをした？」

「そんな理由を聞くためにわざわざ、呼んだんですか？」

俺は呆れていた……IS学園の教師には俺達《SAO生還者^{サブバイパー}》のことは総務省から伝えられ更には総務省からカウンセラーを迎え入れて接し方を教えられていると菊岡から聞いていたのにこれなのだから

「いいから、答えろ」

「まあ、いいですよ。この後に用事があるんで簡単に……何も知らないで禁句を口にしたガキと総務省からの指示を無視したホワイトナイトへの最後通告です……これの

意味が分からないようだったら二人揃って地獄ヘルを見ることになります。それでは……」
俺はそれだけ言うと職員室を去った

生徒会室

「ようこそ、生徒会室へ！待ってたわよ、ソウ君」

俺は職員室を後にした足で生徒会室に足を運んでいた。

生徒会室にはカタナ姉さんと従者の虚さん、簪と従者で友達の本音、チカとサクヤの六人が中央のソファアに座っていた。アスナはリハビリにキリトはその付き添いでこの場にはいない

「空いてる席に座ってちょうだい」

カタナ姉さんに言われ空いてる席（サクヤの横）に腰を掛けた

「集まってくれてありがとう……早速だけど来て貰った理由を話すわ……特に簪ちゃん……あなたに大きく関係してるの……」

「わ、私……に関係してる？」

簪はカタナ姉さんの言葉に少し驚き、不安な顔をしていた

「ええ……簪ちゃん……あなたの専用機開発が凍結されたわ」

「え？……」

カタナ姉さんの言葉に生徒会室の空気が凍り付く……簪の方を見ると顔色が見る見るうちに絶望に変わっていく……

「カタナ姉さん……確か簪の専用機を作っていたのって倉持技研だったよな？彼処って日本ではそれなりに良い企業だったはずだろ？何があつたんだ？」

カタナ姉さんに俺は記憶をあさりながら疑問をぶつけた

「………全ての元凶は織斑姉弟よ」

「ツ!!」

俺とチカは織斑を聞いて顔を歪ませる……とくにチカは少しだけ殺気が漏れていた

「………簡単に言う簪ちゃん専用機を作っていたところを織斑秋羅が見つかり、織斑千冬が織斑秋羅の専用機を政府を介して倉持技研の上に作るように指示したのよ………上が断らないし、そもそも倉持技研には2機を同時並行で作れる人力は無かった………だから、簪ちゃんの専用機を凍結させて織斑秋羅の……男性IS操縦者の専用機制作を進めることになったみたいなの……ほんと、ふざけるじゃ無いわよ！」

カタナ姉さんは最後まで怒りを抑えていたが抑えきれずにソファー前の机を叩いて

いた……簪の方を見ると顔を俯かせていたが泣いていた

「落ち着けよ、カタナ。簪も涙を拭いて……」

チカはカタナ姉さんを落ち着かせながらポケットからハンカチを取り出して簪に渡した

「ありがとう……私……造る」

「造るって専用機をか？」

簪は涙を拭き取って俺の問いに頷いた

「うん……だから……お兄ちゃん、お姉ちゃん、サクヤさん、チカさん、本音、虚さん……力を貸してください！」

簪は立ち上がり俺達に頭を下げてきた……実の兄と姉である、俺とカタナ姉さんにすら、この状態だ……よっぽど悔しいんだろう……

「……簪……最初から答えは決まってるだろ？俺が出来ることは何でもするよ……」

「私もよ、簪ちゃん！」

「私もだよ」

「もちろん、私もですよ、簪様」

「私も微力ながらお手伝いさせて頂きます！」

「俺もだ」

皆が皆、それぞれの言葉で簪に力を貸すことを承諾……簪は嬉し涙を流していた

寮1099室

「相部屋って蒼さんだったんだ……私、秋でも来るかと思いましたがよ」

あの後、これからの計画を大雑把に決めてから解散して俺が使う部屋に入るとなんとまあ……春萎さんとの相部屋だった

「俺も驚きだ……でも、まあ、これからルームメイトとしてもよろしく」

「うん、よろしくお願ひします……ところで……簪さんって日本代表候補生ですよね？」
「ああ、そうだけど……どうかしたの？」

俺が軽く答えると春萎さんが頭を下げてきた

「ごめんなさい！簪さんの専用機……秋の所為で開発中止なって……本当にごめんなさい……後で楯無さんや本人の簪さんにも……謝りに行きます……」

俺は謝ってくる春萎さんがすごいと思った……自分がやったことでもないのに仲のよくない兄のために謝ってくるなんて……本当にすごいと思った

続く

委員長と開発

2025年 4月11日 IS学園・一年一組

「織斑兄、更識兄弟、桐ヶ谷」

ホームルームの途中、山田先生の連絡の後、織斑千冬に織斑秋羅を含めた男性IS操縦者は呼ばれた

「「はこ」」

「なに、千冬姉」

織斑秋羅の発言後、直後ズヴァン！と言う音と共に織斑千冬が出席簿を織斑秋羅の脳天に振り下ろしていた

「馬鹿者、織斑先生」だ。公私の区別を付けろ！……ンンツ！、それでだがお前達のISだが時間が掛かる。学園で専用機を準備する事になった」

織斑千冬の言葉にクラス全体が響めいた……それもそうだ、この時期に専用機……しかも四人分もだ

「俺達三人には必要ない」

「専用機の事は既に決定事項だ。お前達に拒否権は無い」

織斑千冬はそう言うが：俺達三人には……いや、アスナやサクヤを含めれば五人の専用機は更識家、レクト社で共同開発されている（サクヤのは完成している）

「俺達三人の専用機は更識家、レクト社で共同開発されている。更に国際IS委員会や総務省からもその有無は伝えられているはずだが……」

「そんなことは知らん。お前達のは学園で準備する。これは決定事項だ、異論は認めん」
この言い様には俺達はいい顔をしなかった……学園の一教師がこんなことをして良い分けないが、織斑千冬は反論させまいと睨みで俺達に重圧を掛けてきた

『そこまでですわ、織斑さん』

!!??

俺がどう、反論しようかと考えていると黒板型ディスプレイにピンクロングヘアの女性が映し出された

「貴様……誰だ？」

織斑千冬はディスプレイ越しの女性を睨んでいた

初対面の人に貴様呼ばわりは不味いと思うが……織斑千冬には関係ないのだろう

『あら、私を……存じないのですか？わたくしは……』

【きゃあああああああああ!!!】

女性が話そうとするとグニャスの大半の女子が悲鳴のような叫び声を上げた

「ラクス様よ!ラクス様!」

「歌手のラクス様!?!なんで!?!」

他、諸々とディスプレイに映る女性を知る女子が喜びに叫び声を上げた

「お前達、静かにしろ!」

織斑千冬の怒声で静かになるがディスプレイの女性は織斑千冬を冷たい目で見ていた

「改めまして、国際IS委員会本部委員長のラクス・クラインですわ。」

「……………失礼しました。IS学園、教師織斑千冬です。きよ、今日はどのような御用件で?。」

入学してそんなに経っていなかったが織斑千冬の敬語姿を見て少し驚いた

『先程の専用機の事に関してですわ。蒼、一夏さん、和人さんの専用機は先程、蒼が言いました通り、レクト社と更識家共同開発されてますわ。それは委員会日本支部の者と総務省の方に貴女とお隣の方、学園長さんに通達してもらったはずです。それをお知りにならないと仰り、専用機を別に用意する……………そのようなことを一教師の貴女がして良いことなのでしょうか?』

「……………そ、それは」

デイスプレイ越しの女性……………ラクスさんの少し強めの口調からの正論はいつも上からの物言いの織斑千冬は言葉を詰まらせていた

『確かに貴女は『ブリュンヒルデ』として名誉を持っています。ですが、『ブリュンヒルデ』は称号であり名誉

であり、『権力』や『力』ではありませんわ。その事を間違わないで下さい。そして、行動する前に考えてください、周りへの影響を……………貴女が動いた事による未来を考えてください。

それから蒼、あなたの専用機は開発に時間が掛かっていますわ。

繋ぎとなってしまいますがわたくしからカスタム機を用意しました。明日には届くと思いますので確認お願いします。それではわたしは失礼します。』

「了解しました」

ラクスさんは微笑むと通信が切れクラス内は静まり返っていた

4月11日 IS学園・第二アリーナ・整備室

翌日の放課後：俺と簪、サクヤ、チカは第二アリーナにある整備室に来ていた……リハビリ中のアスナと付き添いのキリト、生徒会の仕事でカタナ姉さんと虚さん、本音はこの場に居ない

「これが、簪の専用機《打鉄式式》か……」

俺達の前にはハンガーに鎮座するIS……簪と同じく水色を強調している機体……

打鉄式式……第二世代の打鉄を元に簪用にカスタマイズされた機体……

「うん……スペックや完成度は昨日言った通りだよ」

ディスプレイを見ながら打鉄式式の装備を再度確認する

まずは春雷

背中に搭載された2門の連射型荷電粒子砲

次に夢現

近接武器である対複合装甲用の超振動薙刀

最後に山嵐

打鉄式式の最大武装。第3世代技術のマルチロックオン・システムによって6機×8門のミサイルポッドから最大48発の独立稼働型誘導ミサイルを発射する

武装はこの三つで武装自体はある程度完成しているがその中でも山嵐が一番完成度が低い

その理由は第三世代技術のマルチロックオン・システムが完成どころか白紙同然な状態らしくどうしようも無いらしい

他にもOSが全く完成しておらずハリボテ状態で予備のパーツすら無い……普通ならお手上げ絶望状態だ

「そう言えば、お兄ちゃん……お昼に言ってた助っ人はいつ来るの?」

「もう来るはずなんだけど……」

そう、俺は昨日の内にいる人達に《打鉄式》制作の助っ人を頼んでいた……はつきり言っただけ助っ人はチートだ

「更識君!お客さんを連れてきましたよ」

「ソウ、遅れてごめん」

「すまん、坊主」

「失礼する、ソウ遅れてすまない」

考えていると整備室の扉が開き山田先生と肌が茶色く焼けている男性、茶髪で白を中心にした服を着たひ弱そうな男性、紺髪で赤黒いスーツを着た男性が入ってきた

「お久しぶりです、マードックさん、キラさん、アスランさん」

「久しぶりだな、坊主。知らない坊主達も居るから……俺はコジロー・マードック。国際 I S 委員会委員長直属の I S 部隊の整備士をしてる……よろしく頼むぜ」

「久しぶり、ソウ。国際 I S 委員会委員長直属 I S 部隊総隊長のキラ・ヤマトです。よろしく」

「久しぶりだな、ソウ。同じく国際 I S 委員会委員長直属 I S 部隊第一部隊隊長のアスラン・ザラだ、よろしく頼む」

三人の男性はそれぞれ自己紹介をしてくれた……三人から出た「国際 I S 委員会委員長直属」の言葉に俺以外のこの場にいる人達が驚いて固まっていた

「そ、それでは私はこ、これで失礼しますね！」

かなり動揺していたが山田先生はそう言うのと整備室を出て行った

「ソ、ソウさん……どうやって知り合ったのですか？」

次に硬直から回復したサクヤが俺に聞いてきた

「キラさんとアスランさんとは小さいときに戦闘術やサバイバル術にハッキング術、プログラムソフト面やハード面を教わっていてね、マードックさんとはIS学園に入学が決まる少し前からISの整備を教わってるんだよ」

俺の説明に硬直から既に回復していたチカや簪が苦笑いしていた……そして直ぐに簪がキラさん達の前に歩き止まった

「……更識簪です……私のために来て下さってありがとうございます」

簪はキラさん達に深々とお辞儀とお礼をいう……キラさんが前に出て微笑んだ

「顔を上げて、簪さん。君のことはソウから聞いていますよ。可愛くて大切な妹ってね」

「ああ、昨日もソウの奴が《大事な妹の為に力を貸してほしい》とラクスとカガリ……本部委員長と日本支部委員長に頭を下げてたからな」

「……………」

キラさんとアスランさんからの暴露に俺は顔を真っ赤にした

「さ、さっさと始めましょう!」

俺は今の空気に耐えられなくなり無理矢理に作業を始めようとする……その場の俺と簪以外は少し笑っていた

「そうだね、始めようか……マードックさんは機体で僕がソフト面、アスランがハード

面、ソウは僕とアスランのサポートをお願いね」

「分かってるぜ、坊主。嬢ちゃん、聞きたいことがあるから手伝ってくれないか?」

「は、はい」

「マードックさんは簪と話をしながら機体をいじり始める……マードックさんと話をしてる簪はどこか楽しげだった」

「俺達も始めよう……ソウ手伝ってくれ」

「了解です、アスランさん。キラさんも何度も言ってください」

「うん、分かってるよ」

俺は眼鏡型ディスプレイを付けて両手で違うプログラムを作るためにキーボードを

叩く

「す、すげー……てか、俺らはここに必要なのか……」

「……」

チカが何呟いて居たが、俺は何を言っているか聞こえなかった

「……サクヤ、バーニアの制御数値を出してほしい、来てくれ」

「分かりました」

サクヤは軽く頷くと小走りで俺の隣に来て俺と同じ眼鏡型ディスプレイを掛けて早

速、打ち込み始めた

「制御数値を出して、打ち込んでおきました。それと、拡張領域内からの武器展開速度も数値化して入力しておきました……確認お願いします」

「…流石だよ、サクヤ。こちらは、終わりましたよ」

サクヤから送られてきたデータを確認すると全くミスの無い…それどころか俺の頭にあつた物より良い出来だった

「こつちもできあがつたよ、アスラン、そつちは？」

「俺も問題なく完成している」

キラさんとアスランさんも出来上がっており、後は機体面をと思い簪とマードックさんの方を見るとなぜか簪が泣いていた

「か、簪!? マードックさん! 一体どうして簪が泣いているんですか!?!」

「……大丈夫……だよ……お兄ちゃん……ただ、嬉しくて……お兄ちゃんやキラさん達が手伝ってくれて嬉しくて……マードックさんがいろいろと教えてくれたり、強化案を出してくれたのが嬉しくて……止まらなくて……」

簪は嬉し涙を堪えられなくなって涙を流していた

マードックさんはいきなり涙を浮かべられて戸惑っていたらしい

「…マードックさん…… “打鉄式” を強化して下さい……」

「……良いのか? ……少し時間が掛かっちゃうぞ?」

「……………はい、お願いします…時間掛かってもお兄ちゃんやお姉ちゃんの隣に立ちたいから……………お兄ちゃんやんは代表戦の方に集中して…私の所為で負けてほしくない……………」

「簪……………わかった……………でも、無理するなよ」

「……………うん」

簪は顔を赤くして頷く……………周りを見るとサクヤが顔を赤く、チカとアスランは呆れ顔を、キラさんとマードックさんは俺の方を見て微笑んでいた

続く

生還者達の専用機

2025年 4月12日 IS学園・第二アリーナ格納庫

キラさん達と簪の専用機、〃打鉄式〃を作りマードックさんの下強化が決定した翌日の放課後、俺とサクヤ、チカとカタナ姉さん、キリトとアスナは第二アリーナの地下格納庫である人達を待っていた

「俺達の専用機ってどんなのなんだ？カタナ、何か知らない？」

「私も詳しくは知らないのよ……でも、私達がよく知る機体になって居るみたいよ？」

「専用機かぁ。気になるな……」

「私もだよ、キリト君」

キリト達、三人は自分たちの専用機が気になりお昼からずっとわくわくが止まらないみたいだった

話ながら待っていると地下格納庫の扉が開きトラックとバイクが地上から降りてきた。

トラックとバイクが俺達の前に止まると人が三人降りてくる……うち一人に俺達は驚いていた

「お久しぶりです。皆さん」

「……ラン（さん）!?!……」

トラックの助手席側から降りてきたのは俺達と同じ《S A O 生還者》サバイバーで元《血盟騎士団》副団長でありユウキの姉で《西風の旅団》の仲間のランさんこと紺野こんの藍子あいちこさんだった

「そう言えば言ってますませんでしたね。私は生還者学校に通いながらレクト社と更識家合同のI S 開発チームにいます。今日はルクスさんとI S 委員会の方と和人さん、一夏さん、明日奈さんの専用機説明とI S 委員会が用意してくれました蒼さん用カスタム機の説明に来ました」

ランさんからの簡単な説明を聞くとバイクから降りたくせのある黒髪と深紅の瞳の青年とトラックの運転席から降りてきた銀髪の青年がトラックの荷台を開けた

そこにあつたのは………見慣れない灰色の全身装甲フルスケインの機体と俺達がよく知る服と

武器だった

「それは!？」

「……こんな事って……」

「……そういうことだったのね」

「……」

サクヤの専用機以外知らなかった俺も含めこのことを知らなかった I S 学園メンバーは驚愕するが懐かしくも感じた

SAOの事を思い出しているとランが一步前に出てきた

「まずは和人さんのから説明します。和人さんの専用機……名前は『キリト』といい、以前和人さんが動かしてしまった『ラファール・リヴァイブ』のコアを使用した機体でナーヴギアのローカルメモリーから解析し完成させた『ソードスキル・システム』を積んでいる第三世代型……いえ、第四世代型の機体です。」

キリトの専用機……『キリト』は名前の通りSAOの75層でキリトが着ていた『コート・オブ・シャドーナイト』を完全再現してその場においてあった

「『『ソードスキル・システム』!?!』」

全世界では第三世代の試作機を血眼で造っていると言う中での第四代もすごいと言うのに……あの天才『茅場晶彦』が造ったナーヴギアのローカルメモリーを解析し

《ソードスキル》を再現したシステムを積んでいるという事に一番驚いた。

「サクヤの機体にも俺も見れていなかったシステムがあつたが……このシステムだったのか……」

「はい、そうです。次は一夏さんの機体です。機体名は“チカ”といい、一夏さんが動かしてしまった“打鉄”のコアを使用した機体で和人さんと同じく《ソードスキル・システム》を積んでいる第四世代型機です」

チカの専用機は白八割で所々に青や黄色がある、日本の戦国時代あたりの着物をイメージした……と言うよりは昔のアニメ「るろうに剣〇」の主人公が着ていた服だろうか……S A Oでは世界観が少しだけ違っていた気がするが……

「最後に明日奈さんの機体です。」

明日奈さんの機体名は“アスナ”といい、イタリアのテンペスタを基礎として設計しましたのでこの3機の中で最速を誇ります。3機ともS A Oの服を再現してますがI S 自体の機能は全部ついてますのでご安心下さい」

最後にアスナの専用機は白が大半で所々に赤がある服で十字架を入れれば“血盟騎士団”の服そのものに見えるくらいだ。

確か当時、S A Oで“血盟騎士団”の服をモデルにアスナができてプレイヤーメイドで作ってもらった物だったはずだ、攻略会議や階層ボス戦前とかに“血盟騎士団”の変態

共（クラデイル）とかが五月蠅かったような覚えがある

ランさんは3機の大まかの説明をしてくれた

俺やカタナ姉さんも色々驚いて疲れていたが次のIS委員会が用意してくれた機体の方が驚いた

「ソウの機体は俺から説明する。その前に国際IS委員会・本部委員長直属IS部隊・第一部隊所属シン・アスカです。早速ですが：こいつの名前は「ストライクF」。隊長……委員会直属IS部隊・総隊長のキラが使っていた第二世代「ストライク」を改修し第三世代試作ストライカー「プロトフリーダムストライカー」を装備した機体になっている。

装備は頭部両側二門内蔵対空防衛機関砲75mm対空自動バルカン砲塔システムイーゲルシュテルン。腰部両脇ホルダーに内蔵されている超硬度金属製の戦闘ナイフ、対装甲コンバットナイフ・アーマーシユナイダー。両翼に一機ずつついているのがM100 バラエーナプラズマ収束ビーム砲。近接戦闘用のMA-M01 ラケルタビームサーベル。遠距離用の57mm高エネルギービームライフル、対ビームシールドになっている。この機体の欠点としてイーゲルシュテルンとアーマーシユナイダー以外は「シールドエネルギー」を喰うため連射や長期戦は出来ない。《拡張領域^{バサスロット}》に予備

バッテリーを幾つか入れてあるが直ぐに切れるから注意が必要だ……」

青年……シンは淡々と説明してくれるがカタナ姉さんはあることに驚いていた

「ビーム兵器ですって!?!どの国でも開発が出来ていない代物じゃない?! I S 委員会は完成させたってこと?」

「まだまだ、改良の余地ありますけどね。エネルギーを喰うし銃身は耐えられなくて融解するなど問題は山積みですけど……ソウのは出力をある程度抑えてあるから使いすぎなければ大丈夫ですよ。予備のライフルも積んである」

シンはカタナ姉さんの問いに答える

シンが答えた後直ぐに銀髪の青年……ルクスさんが前に出た

「それでは《初期化》フイットイングと《最適化》パソナライズを行いますので装着して下さい」

ルクスさんに言われるがまま俺達は専用器に触れると俺達は光に包まれ次には所々変わった機体を纏っていた

まず、キリトののだが……背中に先程まで無かった二対二のALOのスプリガンを思わせる黒い羽根

次にチカ、キリトと同じようにシルフを思わせる薄緑色の羽根

最後にアスナ、キリトとチカと同じようにウンディーネを思わせる空色の羽根が現れ

既に《一次移行》ファーストシフトが完了していた

「これが一次移行した三人の専用機か……」

「ええ、そうみたいね。ソウ君のは……変わって無いわよ？」

「ストライクの一次移行は見た目より性能に現れやすいんだ。要塞ぼく装甲が増える人も居るけど大半は性能向上される」

ストライクFの変化が無いことにカタナ姉さんが気づいて俺に話しかけてくるとシ
ンがその事に答えてくれた

その後は機体の操作をカタナ姉さんにアリーナで猛特訓され俺達四人はフラフラで
アリーナを後にした

続く

クラス代表決定戦 蒼VS蒼

2025年 4月16日 IS学園・寮

『そう言えば明日だよね？クラス代表戦って』

クラス代表決定戦前日の放課後、俺は“ストライクF”を貰ってからキラさん達、IS委員会組数人と連日模擬戦をして、今日も部屋に戻るまで模擬戦をシしていた。

それからは部屋に戻り夕食を食べて、春萎さんが入浴中にゆうちゃんと連絡を取っていた

入学初日の出来事で一年の……特に1組の生徒達から突き放されていた

仕方が無い事だと思っているがキリトやアスナ達が心配してくれているし普段通り話しかけてくれている。

その所為でキリト達にも近寄る生徒は少なくなったりや白い目で見られている事に

負い目に感じ謝るとカタナ姉さんや簪に叩かれたりした

「うん、明日と明後日に総当たりで俺、キリト、チカ、セシリア・オルコツト、織斑秋羅の五人で試合してクラス代表を決めるんだって」

『そうなんだ……ソ、頑張ってるからさ！』

「ありがとう、ゆうちゃん……ゆうちゃんの応援があるならなんでも、できる気がするよ！」

『えへへ、ソーがそう言ってくれると嬉しいな……あつ、そろそろ時間だね……ソ、頑張ってるね！おやすみなさい！』

「うん、ありがとう。ゆうちゃん、おやすみ」

お互い、おやすみといって通信が途切れる……それから少しして春菱さんが水色生地で白水玉パジャマ姿で脱衣場から出てきた

「蒼さん、お風呂上がりしました」

「ありがと。それじゃあ、俺も入ってくるかな……先寝ちやいなよ、女の子の体は夜更かしには向かないからね」

「え。あつ、はい……お気遣いありがとうございます」

俺はそう言ってから椅子から立ち、脱衣場に向かって歩く……

「あの……蒼さん、先ほど誰かと話してませんでしたか？」

春萎さんとすれ違うとゆうちゃんとの話が聞こえていたらしくそれに関して聞いてきた

「うん？ああ、してたよ、俺の大切な彼女とね……本当なら一緒に入学したかったんだけど、体調が思わしくなくて……もうしばらくは転入できないんだ……」

「あ……なんか、すみません……聞いちゃいけないような話を聞いて……」

「いいさ、それじゃあ、また後で」

俺は春萎さんにそう言ってシャワーを浴びに脱衣場に向かった

2025年 4月17日 IS学園・第三アリーナ

「満員だな……」

次の日……午前中の授業を終えた俺達、1年1組は第三アリーナに試合をするメンバーはA・B・Cのピットに別れて機体のメンテと最終確認をしていた

俺やキリト、チカの三人はAピットで整備科志望の本音とIS委員会のマードックさ

んに機体のメンテナンスを頼んでピット内からアリーナの観客席を見ると満席状態だった

「きつと、セシリア・オルコット女ソウ君達に負ける男を嘲笑いに来てるのよ」

「お兄ちゃん達に勝てるわけも無いのに……」

カタナ姉さんと簪が観客席に来ている生徒達の考えを見透かし俺達には勝てないと呆れながら言っていた

「坊主、機体の方は良いぞ。頼まれていたのもしっかり積んでおいたからな！」

「ありがとうございます。マードックさん！これで全力で戦えます！」

「良いってことよ！勝ってきな、坊主！」

「はい！」

俺とマードックさんが話しているとサクヤが一人、静かにこちらを見ていた

『更識君、オルコットさん、出撃して下さい』

俺がサクヤの視線に気づくと山田先生の放送が聞こえてきた

「……最初は俺か……それじゃあ行って来る」

俺は皆に言うとかたパルト前に歩くと「ストライクF」の待機状態の右手だけに付けた水色の指無し手袋を眺める

「ストライク……俺に力を貸してくれ！」

俺が「ストライクF」に語りかけると手袋に付いている赤い玉が少し輝いた気がし

た

俺はそのまま、「ストライクF」を展開すると同時にPS装甲が起動して灰色では無く白、赤、青のトリコロール姿となった

「ソウ君……無いとは思うけど負けないで油断せずに行ってください！」

「お兄ちゃん……頑張つて！」

《ああ、もちろんだ！》

カタナ姉さんと簪からの応援を聞いてから カタパルトに機体を固定させる

「……あ、あの……ソウ……さん」

固定させて出撃しようとする……サクヤがとぼとぼと歩いてきた

「……サクヤ……」

「……は、はい……」

俺は「ストライクF」の顔を粒子変換して顔を出した

不安そうなサクヤにどういう風に声を掛ければ良いかわからない……不安そうな顔をしたサクヤやシリカ……ゆうちゃんを何度も慰めてきた……だけ……ほぼ全部、一緒に……隣で見守っていた……でも、今回はこれから俺が戦いに行く……そんな時にどう言えば良いか……一言……一言だけで思いを伝える言葉……

「……………行つて来る！」

「……………はい！」

俺はそれだけ言うと、ストライクFの顔を戻した

サクヤは今の一言で顔から不安が取り除かれ、頷くと皆の方に戻った

《ソウ・サラシキ。ストライク行きます！》

俺とストライクはカタパルトから一気に飛び出した……プロトフリーダムストライカーの左右5枚の青き翼を広げ、アリーナに出ると、驚愕の声と歓声が観客席から聞こえてきた

◇ソウが居なくなったAピット

「ソウ君はもう少し気を聞いた事が言えないのかしら？お姉さんとして心配よ……」

ソウの姉である刀奈がため息を吐きながらソウの事を心配していた

「……………いいんですよ、ソウさんの気持ちはしっかりと伝わってきましたから」

ソウとの一瞬の会話まで不安がついていたサクヤが、自分用の専用機のレットチルクオーツのブレストレットを胸元で握りしめながら言った

「……まあ、私には分からないけどサクヤちゃんが分かっているのなら……でも、お姉さんとして、ソウ君にはその辺も勉強させないといけなにかしらね♪」

刀奈の扇子には「勉強」と描かれていた

刀奈の笑顔に彼氏であり弟でもあるチカは顔を引き攣らせていた

◆ 第三アリーナ

《待たせたな、セシリア・オルコット》

「ホントに遅いですわねエリートのわたくしを待たせるとは……」「前置きはいい……」
 ……「まあ、そうですね。それにしても……あなたのISは全身装甲なのですかね？」

《ああ、そうだ。これがIS委員会から借りている俺の機体だ》

セシリア・オルコットは俺の機体……全身装甲の「ストライクF」に少しだけ驚いていた

驚きは一瞬で消え去りセシリア・オルコットはライフル……<スターライトMar

kⅡ>の銃身を俺に向けて、俺はくラケルタビームサーベル>の柄をくコール>して その時を待つ

「中遠距離型のわたくしに近接武器で挑もうなんて……わたくしの勝ちは決定も同然ですわ！」

《ふん、その様に思っているのも今のうちだ……》

セシリア・オルコットの言葉に少しだけ苛立ちを感じたが……苛立ちを振り払い時間を持つ

そして……時間はその時を刻んだ

『試合、開始！』

「お別れですわ！」

山田先生のくコール>と共に先手必勝でセシリア・オルコットのくスターライトM a r kⅡ>の銃身からレーザーが俺の脳天目掛けて真っ直ぐ放たれた

《軌道が丸わかりだ！》

俺はラケルタビームサーベルの柄をレーザーの軌道にタイミング良く振るい、その一瞬だけ刀身を展開させてレーザーを斬り裂いた

「な!? な、な、なんなんですか、あなた!? レーザーを斬るなんて聞いた事がございませんわよ!? あなた、本当に人間ですか!?」

《失礼だな……俺は人間を辞めたつもりは無い……ただ、お前の射撃が読みやすい……レーザーの軌道に合わせて剣を振るっただけだ》

そんな馬鹿なこと……と、誰もが思っ居ることだろ……世界大会の「モンド・グロツソ」に参加していた者達……「ブリュンヒルデ」こと織斑千冬ですら躲した事くらいあるだろうが斬ったことは記録上無い

Aピット

「……レーザーを斬る事なんてなんで出来るんですか!?」

「そうね……SAOでの実践経験とALOでの魔法戦闘……それから、オルコツトさんの射撃が教科書通り過ぎるから余計にソウ君には簡単に出来るわね。それに、あれくらいならキリトやチカ、アスナちゃんにでも出来ると思うわよ?」

「カタナちゃん、言い過ぎだよ。私には流石に無理だよ」

「俺は……どうだろうな……銃相手は経験無いしな……でも、キリトさんなら出来る

んじや無いですか？」

「いや……一発じや、流石に無理だぞ？俺だつて銃相手は慣れてないし……それよりも、俺よりチカの方が出来るんじやないか？抜刀術使えばアスナ並みの剣速だし」

「いやいや！武器破壊とかシステム外スキルを作ったキリトさんには及びませんよ！それに、『二刀流』のキリトさんに勝つたことないんですから！」

平然と話す四人に代表候補生だけの春萎は付いていけずにいたが春萎の隣にいる同じ代表候補生の簪は何度か頷いていて話に加わって居なかつたが理解していた

《SAO生還者》^{サブイパー}は何処か常識がズレていると春萎は思いそして、彼らが戦ってきた二年間の事が気になった

アリーナ

一方アリーナではくスターライトMark IIを連射するセシリア・オルコットとそれをソウが細かな動きで避けきっていた

「……はあ……はあ……はあ……ど、どうして当たりませんか!？」

《先程も言った通り、お前の射撃が教科書通り……素直すぎる。急所しか狙わないしフェイントも掛けず最初から銃口を向けていたら誰だって躲せる……超人だったら斬ることなんて容易だ》

「クッー」

セシリア・オルコットは目の前でレーザーを避け、斬ったソウに色々混ざり合った感情を持っていた

苛立ち、妬み、油断、女尊男卑……完全に自身が有利だと思つて居たのに最初から目の前の男……ソウがレーザーを斬つてしまい自身の有利が崩れてしまった

更には先程までの攻撃を自ら攻撃せず最小限の動きで全部躲しきつていたセシリア・オルコットはこの状況で内心気がついていた

“今の自分では何をやっても勝てないと”

だが、彼女は認めたくは……認めなかった

「認めませんわ! わたくしが負けるなんて認めませんわ!!」

セシリア・オルコットの宣言共に、[〃]ブルー・ティアーズ[〃]の背部スラスターから四つの子機がパージされた。

四つの子機はそれぞれに意志があるように小刻みに動きセシリア・オルコットの後方にとどまつた

「これが、わたくしの[〃]ブルー・ティアーズ[〃]第三兵装の[〃]ブルー・ティアーズ[〃]ですわ！ さあ、踊りなさい！ わたくし、セシリア・オルコットと[〃]ブルー・ティアーズ[〃]の奏でる^{ワルツ}で!!」

《……俺は好きな奴としか踊らん!》

ソウは4方向からのレーザーを避けながらラケルタビームサーベルの柄をしまい、57mm高エネルギービームライフルを[〃]コール[〃]する

「今更、^ラ遠距離武器^フを出したところで! 墜ちなさい!」

《その言葉……そっくり返してやる!》

四方八方に動く[〃]ブルー・ティアーズ[〃]のレーザーを避けながら[〃]ビームライフ[〃]から[〃]ビーム[〃]を放つ。

セシリア・オルコット……[〃]ブルー・ティアーズ[〃]は反応できずにビームが一基に当たり爆発する

「い、今のはビーム兵器!?なぜ、ですの!?ビーム兵器は未だに何処の国も完成はしてないはずなのに!?な!?な、なぜですの!?」

《I S 委員会は完成させていたんだ……扱いが難しいから公表はされていないとか言っていたが……今回ののは……良い宣伝になったか……まあ、いい……》

ソウは<ブルー・ティアーズ>からの三方向レーザーを躲しながら先程と同様にライフルで三基とも瞬時に破壊した

《……これで終わりだ!》

<ブルー・ティアーズ>を破壊したソウはライフルをしまい、<ラケルタビームサーベル>を刀身を出したまま展開して<ブルー・ティアーズ>を失い動揺しているセシリア・オルコットに急接近する……セシリア・オルコットは<スターライトMark II>で狙撃するが全て躲かれてしまう……そして、ソウがセシリア・オルコットの懐に入ると……セシリア・オルコットは笑みを零していた

「……掛かりましたわね!<ブルー・ティアーズ>は六基でしてよ!」

「ブルー・ティアーズ」の装甲が一部外れ他の<ブルー・ティアーズ>とは違う実弾型ミサイルが現れればゼロ距離でミサイルを発射しソウとセシリア・オルコットを巻き込み爆発した

爆風でセシリア・オルコットが吹き飛ばされて出てきた……誰もがセシリアの勝ちと

思った……だが

《……今のは良い戦術だ》

「ツッ！」

爆煙からほぼ無傷の「ストライクF」が出てきた

《：自分へのダメージを顧みずにゼロ距離ミサイルを使うにはかなりの度胸がいる。
 ……：戦術的には良かったが：詰めが甘かったな。俺の機体「ストライクF」の装
 甲はくフェイズソフト装甲」と言いつて実体弾とかを完全に無効化できる物だ。衝撃
 はどうしようも無いが……慣れてしまえば問題ない》

「……な、何ですの……そんな装甲聞いた事がございませぬわよ……」

《事実だ……お前に勝ち目は無い……これから一方的になる……その前に降参しろ
 ……お前も無様な負けを晒したくは無いだろ？》

セシリア・オルコットは既に折れている……ソウはそれが分かっていた

「……分かってました……今のわたくしでは勝てないと……ですから：わたくしの負
 けを認めますわ……ですが今はですわ！」

《……ほう？》

「わたくしはもつと強くなって更識蒼さん……貴方を絶対に超えて見せますわ！」

セシリア・オルコットの目は先程までの見下した目では無く、チャレンジャー挑戦者としての目
……強者^{ソウウ}への挑戦する目をしていた

《フツ……何時でも、掛かってこいセシリア・オルコット!!お前が上に行くというなら俺は……俺達は更に上を目指そう!》

「……はい!」

ソウとセシリア・オルコットはお互いを称えあうように握手する。

直後、観戦者達から大きな拍手が聞こえてきた

ソウとセシリア・オルコットは拍手が鳴り止まない中を自分たちのピットへ戻って
いった

続く

出でる夏・迷える刀

2025年 4月17日 IS学園・第三アリーナ Aピット

俺はAピットに戻り機体を待機状態に戻すと待つていたキリト達の方に歩み寄った。

Aピットで待つていてくれた、キリト、アスナ、チカ、カタナ姉さん、簪、サクヤ、本音、春菱さん、マードックさんが笑顔で迎えてくれた

「おつかれ、ソウ」

「お疲れ様、ソウ君」

「お疲れ様でした、ソウさん！」

「ソウ君、お疲れさまー」

「見事な勝ちだったぜ、ボウズー！」

「ありがとう、皆。マードックさんもありがとうございました」

俺はキリト達に笑顔を返しマードックさんには軽く頭を下げた

「辞めてくれ坊主。俺は俺の仕事をしているだけだ。それから『ストライクF』をかな、整備しておくよ」

「あ、整備なら私も手伝う〜」

「ありがとうな、嬢ちゃん。そうしてくれると助かるぜ、俺も常駐は出来ないからな」

「よお〜し、ソウソウの機体を整備できるようにするぞ〜」

「マードックさん、本音、よろしくお願いします」

「のほほんさんに任せて〜」

「任せておきな坊主!」

俺は本音とマードックさんに『ストライクF』を渡した

マードックさんと本音が『ストライクF』を整備し始める中、俺はキリト達と話し始めた

「お疲れさま、ソウ君。オルコットさんはどうだったのかしら?」

「技術は申し分ないけど素直すぎるな。ピット操作もムラがあつて躲しやすい。
フレキシブル
偏向射撃 も出来てないみたいだからピット攻撃時にはピットの数に依存……キラ

さん達の方がよっぽどキツイ」

「確かにあれはキツすぎるぞ……」

「俺もそう思います……」

「私もその通りだと思っようよ」

俺や皆が苦い顔をしていたのは理由がある

クラス代表決定戦が決まってから直ぐに I S 委員会本部委員長直属 I S 部隊の “キラ・ヤマト” さん、“ムウ・ラ・フラガ” さん、“レイ・ザ・バレル” さん、“ラウ・ル・クルーゼ” さん、“アスラン・ザラ” さん全員同時の模擬戦を俺、チカ、キリト、アスナ、サクヤの五人は受けてたのだ。

キラさん、ムウさん、レイさん、ラウさんの四人同時の偏向射撃^{フレキシブル}、36 基計 93 門のドラグーンからのオールレンジ攻撃の中アスランさんの超近接型機 “インフィニツトジャスティス” と戦い続けなければならなかった

「次はチカだな」

「……はい、過去との決着を一先ずは付けてきます」

チカはそれだけ言うとかタパルトに歩き出した

カタナ姉さんはチカの勝ちを確信していたが何処か悲しそうだった

「……チカ！ 私、信じてるから！」

カタナ姉さんは何時もの口調では無く……一人の女としてチカに声援を送った。

チカはこちらを見ずに右手を掲げるだけだった

《リンク・スタート》！」

SAOやALOを：やっていた：やっている者：：：強いてはフルダイブ型VRをやっている者なら誰もが一回は言ったことがある言葉をチカが言うと：：チカの服装がIS学園の制服から八割白で青と黄色が所々に入っている服：：：チカの専用機“チカ”を纏う

「：：：：“白の剣士チカ”行く！」

チカはそのまま黄緑色の羽を広げアリーナに飛んでいった

「カタナ姉さん：：大丈夫？」

「：：：え、ええ。大丈夫よ、ソウ君」

チカがアリーナに飛んで直ぐにカタナ姉さんはピット内にある椅子に座り込んでしまった

「：：：どうして：：家族は上手くないのかしらね」

「「「え？」」」

カタナ姉さんの眩きにピット内にいる皆がカタナ姉さんの方を向いた

「……いえ、何でも無いわ……気にしないで」

カタナ姉さんはそう言う顔と顔を俯かせてしまう

「……家族でも全く同じ人が居ない……どんなに顔が似ていてもお考えが似ていても全くの別人……だから上手くいかないときがあるんじゃないかな」

「……ソウ君……」

俺はチカの方を……大空を見上げながら呟くとカタナ姉さんが顔を上げた

「全く同じ人なんて居ない……人それぞれ個性があつて性格がある……それが人です……いろいろな人達が個性や性格がぶつかり合うのが……家族です……そして、仲間でもあるんです……そこに血の繋がりがなくて関係ないです……だからこそ、人は他人を知らない……他人と繋がりを持たないと生きては生けないんです」

「……サクヤちゃん……」

俺の隣に立っていたサクヤの言葉は俺やカタナ姉さんに簪、アスナにキリト、春萎さんの心に重くのしかかってきた。

「……そうね……そうよね……私がこんなじゃ駄目ね！皆、心配を掛けたわ！多分、もう大丈夫よ！」

カタナ姉さんは何時も通りの元気を取り戻し開いた扇子には「元気が一番」と描

かれていた

「カタナちゃん！ソウ君！サクヤちゃん！チカ君の試合始まるよ〜」

アスナの言葉で俺とサクヤ、カタナ姉さんはキリトとアスナの方へと走る。

カタナ姉さんの笑顔は何時もよりスツキリしていた

◆アリーナ

俺……チカがアリーナに出ると秋羅が全体を白の装甲で覆った機体………名を
びやくしき
 白式〃………手には近接ブレードで現役時代の織斑千冬忌ま忌ましい記憶が使っていた武器の発展型<
ゆきひらにがた
 雪片式型>を持っていた

「よお、同情誘いの無能凡人？天才の俺を待たせるなんて良い度胸じゃねえか」

「……………」

「無視してんじゃねえよ！それとも怖くて何も言えねえのか？」

織斑秋羅が何かを言っているが俺は全く興味はなく……目をつぶり腰に付けている刀……薄ピンクの鞘に真つ白な柄……リズさん作<桜雪>を何時でも抜刀できるように構える

「ハッ！やる気満々だが、凡人の貴様が天才の俺に勝てるわけねえだろ!」

「……五月蠅い奴だ……少しは静に出来ないのか？それとも天才様はポツチだから寂しくて話し相手が欲しいのか？」

「んだと？」

織斑秋羅は俺の挑発にキレたのか無言で俺のを睨んできた

そして……IS学園に入学することが決まったあの日……いや、織斑秋羅がIS学園に入学することが決まったあの日から待ちに待った時がやってきた

『試合、開始!』

続
く

振るわれているく雪片ゆきひらにがた式型は気にせず相手の懐へと入り抜刀：

「ガツハツ!!」

頭で織斑秋羅の顎を打ち、そのまま下段から切り上げ、上段で切り下げる。

「………〔秋波あきはぐれ久礼〕」

◆Aピット

「………秋………波久礼?」

Aピットからチカの戦いを見ているとチカの初撃にキリトやアスナ、サクヤに春萎さんが驚き、春萎さんが声を漏らした

「………あれは更識家に伝わる流派………更識流の居合術の一つよ」

「………更識流?」

皆が驚いている中、カタナ姉さんがチカの初撃に………更識流に関して話し出した

「……ええ、色々な伝承とか有名な流派があるじゃ無い？例えば伝承では【京都神明流】や【飛天御剣流】、有名所で言えば【天霧辰明流】や【刀藤流】かしらね。そして、私達の更識家にも流派があるのよ、それが【更識流】なの」

カタナ姉さんの説明にアスナとキリトはどうにかついて行っている感じで苦笑いしていた

「…そ、そうなんだね……ソウ君やカタナちゃん、カンザシちゃんも……【更識流】？を使えるんだよね？」

「ええ、もちろんよ。私は槍術に体術、剣や弓もそれなりには出来るわよ」

「私は……薙刀と体術、弓はお姉ちゃんよりかは出来ると思う……それから剣はそれなりにできる」

簪の言葉にカタナ姉さんは少しショックを受けたのか「カンザシちゃんが虐める」となんとか言っていたが触れないで置こう

「……俺は剣術と体術、小太刀術……弓も出来るけど簪よりは上手くないな……」

「……嘘つき」

簪は俺の言葉を聞いて怒ったのか俺のことをジト目で見てきた

「……お兄ちゃん……私より弓上手い……」

「そんなことは無いよ。確かに俺は簪より上手く見えるかもしれないけど、それは色々

な物を努力してきた結果に過ぎない……それにどれかに特化しているカタナ姉さんや簪と比べればいろいろな物を平均的に出来る俺は半端物さ」

「それは、違うよ！（違います！）」

俺の言葉を聞いて簪とサクヤが怒り怒鳴ってきた

「お兄ちゃんは半端物じゃないよ！お兄ちゃんは強くて優しくて何時も頼れるけど、少し自分だけで抱え込む所がある……私の……憧れだよ！」

「そうです！ソウさんはS A O βテストでもテストゲームの二年間でもコタや私達を支えてくれました！そんな人が半端物なんてあり得ません！」

「……簪、サクヤ……」

俺は直ぐには簪とサクヤの顔を直視出来なかった……簪とサクヤは怒鳴る中泣いていて顔を見ることが出来なかった

「……カンザシちゃん、サクヤちゃん。一先ずは落ち着きなさい。ソウ君の話は寮の部屋でたっぷりさせてあげるから今は、チカの試合よ」

「……はい」

「……うん」

カタナ姉さんの言葉でこの場での話が終わり、サクヤと簪は観戦に戻るが最後、俺に向けた視線は冷たかった

◆第三アリーナ

「……はあ……はあ……はあ……はあ……んでだよ……天才の俺が疲れてるのに凡人のお前が息一つ乱れてねえんだよ!」

俺が「更識流・居合術」の一つ「秋波久礼」^{あきはぐれ}で織斑秋羅にダメージを入れた後、織斑秋羅は怒りで出鱈目にく雪片^{ゆきひら}式^{らがた}型>を振るってきた

俺はその全てをく桜雪>で受け流すか回避してやった

「攻撃している方が疲れるに決まってる……天才様は凡人の俺が知っていることを知らないのか?……まあ、いい。お前の実力と覚悟も今の俺の実力もお前との差も分かった……終わりにしよう……」

俺はく桜雪>を鞘に納め、少しだけ姿勢を低くして構える
「クソガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

織斑秋羅は怒りで我を忘れ俺に向かひてきた
俺も織斑秋羅の方に構えを解かず飛んでいく

「………拔刀術」

俺と織斑秋羅の影が重なり合いすれ違う

鞘から抜き出されたく桜雪の刀身はオレンジ色のライトエフェクトに包まれていた

「グッハツ!!」

「……〔雷火一閃〕」

すれ違いお互いに背中を向けていた……ほんの数秒後、織斑秋羅のISが解除され白目を向いた織斑秋羅は落下し地面に倒れ込んだ

『試合終了!勝者更識一夏!』

＜桜雪＞を鞘にしまうと試合終了のアナウンスが聞こえると観客席から色々と混じった声が聞こえてきた。

俺は右腕を空に向けて掲げてからAピットに戻った

続く

クラス代表決定戦 蒼VS秋I

2025年 4月18日 IS学園・第三アリーナ

クラス代表決定戦一日目の翌日の放課後、クラス代表決定戦二日目として俺は「ストライクF」を纏い第三アリーナの空にいた。

昨日のあの後、簪とサクヤの部屋で俺とカタナ姉さん、サクヤに簪の四人が集まり、サクヤ、簪の二人にこっぴどく怒られ更に、通信越しにゆうちゃんも加わり色々大変だった

今朝もサクヤと簪は口を聞いてくれず二人で先に朝飯を済ませて何処かに行ってしまった。

《待ちくたびれたぞ、織斑秋羅》

「待たせたな、凡人。お前だけは絶対に潰す！」

織斑秋羅の怒りの発狂は誰かの……いや、俺の中の切っては行けない糸を切つてしまつた

《……寝言は寝て言え：》

【ツ！】

俺のドスの利いた声で第三アリーナ全体が凍り付いたように静になつた

《弱い犬ほど良く吠える……クソな天才ほど見下したがる……：自分で何も出来ないくせにに天才ぶってんじやねえよ》

「んっだといお前の方こそ……：誰が喋つて良いと言つた》ツ！」

織斑秋羅が何かを言おうとしたが俺のドスの利いた声で黙り込んでしまふ

《俺の知っている才能を持つた天才達は見下しなんて愚かなことをしなかつた……：俺の知る天才達は半端物の俺についてきてくれる……お前のように見下しませず俺についてきてくれる！》

俺はもう一本くガーベラ・ストレートをくコールし織斑秋羅の方に向ける

《お前のシナリオなんてクソ喰らえ、自分の家族を出来損ない呼ばわりして死んで当たり前のように言い、自分の都合が悪い奴も死ぬと言う奴には……：

【更識】として斬り捨ててやろう》

《さあ、第二라운드의始まりだ……早々に朽ち果ててみせるなよ》

俺は静かな怒りに身を任せ目の前の害虫織斑秋羅に向かって蒼い翼を広げ飛んでいく

観客席

「……………」

昨日と違い観客席の方で観戦していたキリト達、IS学園《西風の旅団》メンバーと春菱は最初の方は静に試合を観戦していたが……

『何奴も此奴もなんで、天才の俺のシナリオ通りにうごかねえんだよ!!凡人のお前等は天才のこの俺に従ってれば良いんだよ!出来ねえ奴は死ぬ!あの出来損ないの屑弟一足同様死ぬ!』

プチン

織斑秋羅の怒りの発狂はこの場のメンバー全員何かを斬ってしまった

この場にいるカタナ、簪、チカ、春菱の四人の顔は今のを聞いて直ぐに狂気染みたの
に変わり春菱に至っては今すぐにでも織斑秋羅を潰しにいかんとばかりに立ち上がり
何処かに行こうとしていた

《……寝言は寝て言え……》

〔ツ〕

だが、蒼のドス効いた声で春菱の動きが止まりアリーナ内にいる声の主……蒼の方に
目を向けた

「……ソウさん……初日のあれ以上に怖いです……」

「……そう……ですね……ソウさんが何度か怒ってる所は何度か見てましたが
……あんなにキレてる所は初めて見ました……」

「……お兄ちゃん……」

「……ソウソウ……」

ここで観戦している中で最年少のサクヤ、蒼と同年の本音、簪、春菱はIS学園初
日以上に冷たい蒼の声に怯えていた

ここのメンバーの中で蒼と同年のチカ、一つ年上のキリト、刀奈、最年長の明日奈
は余り動じて無く怯えているサクヤ達を心配していた

《俺の知っている才能を持った天才達は見下しなんて愚かなことをしなかった……俺の知る天才達は半端物の俺についてきてくれる……お前のように見下しもせず俺についてきてくれる！》

「「ツッ！」」

蒼の言う「天才達」はキリト達の事でありキリト達もその事に気がつき、少し驚きながらも嬉しそうに笑みが見えた

「ソウはそこまでして自分を過小評価して……俺達のこと……を？」

「……ソウ君はそうしないと自分を認められないのよ……過去に守ろうとした人や心を守れなくて……自分を認められなくなつて……!!」

悲しそうに話す刀奈……話している途中で刀奈はアリーナの蒼が2本目の打刀を展開したのを見て目を見開いていた

《お前のシナリオなんてクソ喰らえ、自分の家族を出来損ない呼ばわりして死んで当たり前のように言い、自分の都合が悪い奴も死ぬと言う奴には……》

【更識】として斬り捨ててやろう》

「……ソウ君・貴方は……本当の意味で【更識家】に戻つてくるのね……」

カタナの言葉に簪と本音以外は首を傾げて言葉の意味を理解できていなかった

「……私とカンザシちゃんとソウ君がまだ、喧嘩して無くて仲が良かったとき……三

人でいろんなアニメを見ていた

時期があるの……その時期に見ていたアニメの二人のキャラにソウ君は憧れて戦いのスタイルや指示に必要な知識を身につけたのよ……ギルド名の《西風の旅団》もアニメのギルドの一つよ」

刀奈の話を聞いている中……話にでているアニメをチカ、春菱、サクヤは知っていたのか三人とも『あつ』と思っていた

「**【更識流】**の剣術にも二刀術があつてソウ君は一通りの技術を覚えて二刀術を物にしたの……でも、私と喧嘩してからずっと使つてなかったのよ……」

「……どうして、ソウ君は使わなかったの？」

「ソウは使つてなかったじゃなくて使えなかったんだろ？」

明日奈の間にカタナが答える前に答えを見いだしたキリトがカタナに聞くように話すとカタナは軽く頷いた

「キリトの言うとおりよ……ソウ君は自分の家系……**【更識】**と言う血が嫌いなものよ……」

「**【更識】**だからお姉ちゃんに突き放された……**【更識】**だから私を守れなかった……**【更識】**だからお姉ちゃんと仲良く暮らせない……お兄ちゃんはお姉ちゃんに私と一緒に突き放されたときからそう思うようになってた……だから、**【更識】**の中で使う人が少

ないけど二刀術を自分自身で封印して他の事に力を入れて自分の事を半端物って……私……強かったら……お兄ちゃんがそんな思いを……そんなことにならなかった……」

簪は顔を俯かせ泣いた……簪の膝に簪の流す涙がぽたぽたと落ちる

「カンザシちゃんの所為じゃ無いわ……ソウ君がこうなったのも私の所為よ……二人を守るのに突き放すことしか出来なかった私がね……でもね、カンザシちゃん……今の私はあの時の選択は間違ってた……」

「え？」

刀奈の今の言葉に簪は怒りがこみ上がってきた……『あの時の所為でお兄ちゃんがああ、なってしまったのにあの時の選択は間違ってた……』と心の中で怒りと一緒にこみ上がってきた

「だって、ソウ君にはこんなに仲間が友達が出来たじゃない！あの時に突き放してなかったらソウ君もカンザシちゃんもそして、私もSAOに……仮想世界に出会わなかったかも知れない……クラインさんやエギルさん、チ力達にも会わなかったかも知れない……こんなに仲間が友達がいる生活を送れなかったかもしれない……あの時の後悔はあるけど、ソウ君やカンザシちゃん、そして、私もあの時が在ったから成長し今があるならあの時の間違いは間違ってたと思ってるわ」

「……お姉ちゃん・うん、そうだね……お姉ちゃんの言う通りかもしれない……仮想世界……S A Oを始めてお兄ちゃんは笑うようになった……少し辛いこともあったけどお兄ちゃんと私にも仲間が出来た……」

簪はこみ上げてきていた怒りが無くなり仮想世界での思い出を思い出していた
そして、刀奈と簪の姉妹をキリト達仲間は優しく見守っていた

続く

俺の言葉に織斑秋羅は激怒し剣を振るってくるが俺は距離をとるように後ろに下が
り回避する

そして、織斑秋羅が次に移る前に急接近した

《だらあ!》

「クツッ・舐めるなあ!」

俺の剣撃を織斑秋羅は〈雪片式型〉で受け強引に押し返してきた

《少しは出来るか……だが、次はどうかな!》!!

「グウ・ガア・クソガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

二刀からなる連続斬撃であつと言う間に織斑秋羅は“白式”はボロボロになってい
き織斑秋羅は最後の足掻きで〈雪片式型〉の《零落白夜》を発動して振るってくるが左
手の〈ガーベラ・ストレート〉で刀身のレーザーブレードごと、〈雪片式型〉を斬り落
とした

「ナ?!なんだよ?!なんで《零落白夜》を斬れるんだよ?!」

《俺が使っている〈ガーベラ・ストレート〉は第1世代型機の装備だがビーム兵器を
切り裂く事が出来るようになってな、ビームより低出力のレーザーなんて糸も簡単に
切り裂けることができる》

「んっなの卑怯だろうが!!正々堂々戦いやがれ!」

織斑秋羅が怒鳴りつけてくるが、ガーベラ・ストレートは卑怯も無いだろう

実際に第1回、第2回モンド・グロツソで、<ガーベラ・ストレート>の保持機第1世代型機「アストレイレッドフレーム」でレーザー兵器を何度も切り裂いた人を見たこともあるくらいだ

《卑怯と言うなら、そつちの一次移行で単一仕様さらには《零落白夜》をさせるそつちの方が卑怯だと思いがな……お前に言っても仕方ないか……次で終わらせる》

織斑秋羅に言っても仕方なく俺は小声で呟き、二本の<ガーベラ・ストレート>を構え直す

織斑秋羅がそれに気がつき俺に向かって接近してきた

《我振るいし剣に次無》

【更識流】の中で限られた人しか使わない二刀術……その中で詠唱ルイテイ！ンを使う技は相手の二点以上を狙う集中力が高くないと使用を認められない

《故に不殺ならぬし剣》

「いれどー」

織斑秋羅が目の前に接近し折れている<雪片式型>を振るってくるがもうこちらも

出
来
て
い
る

《敵慈悲皆無………〔更識流劍術・二刀……突六角水月華〕》

二本のくガーベラ・ストレートから袈裟斬り、逆袈裟、右薙に放たれた劍撃と閃光は織斑秋羅の“白式”の装甲とく雪片式型を全て破壊し背中の装甲だけ残っている見るも無惨な状態になっていた

「……クソツタレ……」

織斑秋羅はそれだけ眩くとき“白式”が解除されアリーナの地面に落下していった

『試合終了。勝者更識蒼！』

続
く

クラス代表決定

2025年 4月19日 I S 学園・《一年一組教室》

「と言う訳で、1年1組のクラス代表は織斑君に決まりました」

「あ？」

クラス代表決定戦翌日のHR……俺達の教室：1組ではクラス代表が発表され、俺達含め代表決定に拍手がクラス全体に響きわたった

「ちよ、ちよつと待つて下さい！俺は「卑怯な手」で負けたんですよ!?!それなのにどうして俺なんですか？卑怯な此奴らにやらせるべきでしょ!?!」

当の本人……クラス代表になった織斑秋羅は自分の負けを《卑怯な手》と強く強調しセシリア・オルコット含め俺達の事を《卑怯な此奴ら》と言い、クラス代表を俺達に押

し付けてこようとした

そんな織斑秋羅に篠ノ之箒除いてクラス全体が冷ややかな視線を送っていた

「私は代表候補生でありながら日本を侮辱して皆さんに不快な思いをさせてしまいました。あの時は真面に謝れませんでしたので、こちらで皆さん申し訳ありませんでした。

そんな私がクラスの代表を務める資格は無いと思い昨日の全試合終了後、織斑先生と山田先生に辞退を申しました」

「それから、俺は生徒会長のカタナ姉さんから生徒会に誘われてるんだ、それに自分の訓練や個人的にやらなければならない事があるからクラス代表なんてとてもじゃないが両立は出来ない」

「えっと、俺はレクト・更識家合同 I S 開発チームのテストパイロットで和人さんに至っては明日奈さんと二人でレクトの企業代表なのでクラス代表を両立することは出来ません」

俺とチカの言葉にキリトやカタナ姉さんは何度か頷いていてクラスの皆も何だかんだ納得してくれていたが……織斑秋羅は勿論だが篠ノ之箒と教師の織斑千冬は全くもって納得してないのかずつと俺を睨んでいた

「……クラス代表は織斑で異存は無いな！では、今日の午前中は I S の実習だ。着替えて、グラウンドに集合すること。遅刻した者はグラウンド十周させる、いいな！」

織斑千冬が半分怒鳴るように言う。とチャイムが鳴り織斑千冬と山田先生が教室を後にするとクラス的女子達が騒がしく話し始めた。

「俺達も動かないとな。サクヤ、簪、また後でな。キリト、チカ、早く行くぞ」

「ああ、カタナまた後でな」

「はい、ソウさん」

「うん、お兄ちゃん」

「ええ、またブランドでね」

「ああ、アスナ、また後で」

「うん、ブランドでね、キリト君」

俺とチカ、キリトの三人は簪達に軽く言いながら教室を後にし男子用の更衣室に歩き出した。

教室を出るまで終始、織斑秋羅と篠ノ之箒が俺達を睨んでいた

ブランド

一組が全員ISスーツ（俺、チカ、キリト、アスナの五人はジャージ）でグラウンドに集まるとジャージ姿の山田先生と織斑千冬が歩いてきた

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑兄妹、桐ヶ谷、結城、更識姉弟、神無月、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「……………はい……………」

織斑千冬に指名されこの場の専用機持ち（簪は製作中で除く）全員が前に出る。

「……………リンク・スタート!!!……………」

無言で機体を展開する俺とカタナ姉さんに春萎さん、セシリア・オルコットの隣ではキリト達四人が仮想世界へダイブするように唱えながら機体を展開する

「更識弟、桐ヶ谷、結城、神無月、その掛け声をする必要はあるのか?」

「いえ、無しでも展開はすることは出来ませんが、私達にとっては気持ちの切り替えになります」

「……………そうか……だが、その掛け声はなるべく控えろ、余り良いと思わない奴らが居るみたいだ、いいな?」

「……………分かりました」

アスナの返答に織斑千冬は余り良い顔をしてなかったが一応教師としての態度？で話していた

織斑千冬の言葉に軽く納得は出来た……確かに「リンク・スタート」と四人が唱えるとクラスの何人かが怒りが少しこもった嫌そうな顔をして……多分だが【SAO】事件の被害者遺族なのだろう……それを考えれば確かに控えた方がいいかも知れない……

「それよりも……織斑、貴様は一体装着にとれだけ掛かっている！」
スパアアアアアアアアアア!!!

織斑秋羅が展開に手間取っており織斑千冬になぜか持っている出席簿で叩かれていた

「ああ!!もう……いゝ白式!!」

織斑秋羅は織斑千冬に叩かれてから直ぐに《音声入力》で「白式」を展開させるが……展開された「白式」は昨日の俺との試合で装甲とく雪片式型を完全に破壊されたのを短時間で展開できるまでに修復したみたいだが装甲は頭部と腕部装甲は存在無く、アンロック・ユニット、脚部と胸部装甲が元通りとは行かずとも半分くらいは治っていた

「遅い! 熟練操縦者なら一秒できるぞ!」

《（素人にそれを言っても意味は無いだろう）》

ここに入学して1週間くらい……機体を操縦するのもにも展開するのもにも企業代表や国家代表候補生なら兎も角、素人が熟練者並に出来るわけ無いだろう……

「よし、飛べー！」

織斑千冬の掛け声で俺達、九人は一斉に直上に上昇する。

先頭は機動特化のアスナ、その後ろにチカ、2人に続くように国家代表のカタナ姉さん、代表候補生のセシリア・オルコットと春萎さん、俺とキリトにサクヤ、それから、俺達から遠く離れた……陸上で言えば逆転は絶望な程の距離に織斑秋羅が半壊状態の“白式”で上昇していた

『遅いぞ、織斑！スペックでは“ブルー・ティアーズ”と“白夜”より上だぞー！』

『……チィ』

いくらスペックでは上だろうが操縦者は素人、機体は半壊……こんな状態で代表候補生のセシリア・オルコットと春萎さんみたいには行かないだろう

『皆さん、お速いですわね……飛行も……その、ALOのイメージで？』

『ん？ああ、そうなる。俺とキリトさん、アスナさん、サクヤさんの機体はレクトと更識家合同開発チームが作ってるから見た目はSAOで飛行はALOを完璧に近いレベル

で再現されてるみたいなんだ』

《俺の場合は決定戦前の一週間に気合いと訓練で覚えた……まあ、飛行自体は背中
のバーニアで行ってるから自由に飛行できるようになるにはそんなに時間が掛からな
かった》

『そ、そうなんですの……』

直上上昇から全員で正面飛行に移ってから少してセシリア・オルコットが通信で話し
かけてきた……がなぜか、俺が話してる途中にセシリア・オルコットに少しだけ引かれ
た

『織斑、桐ヶ谷、結城、更識姉弟、神無月、オルコット、急下降と完全停止をやって見せ
ろ。目標は地表から十センチだ』

「了解です。ではみなさん、お先に」

俺達が飛行しながら話していると地上にいる織斑千冬から指示が送られて来た。

セシリア・オルコットは、自分がお手本になるように急降下していき丁度10センチ
で完全停止を行った。それから、カタナ姉さん、サクヤ、アスナ、チカ、キリト、と続
いて完全停止を行っていき、俺の番で地表から数mの完全停止をやると山田真耶先生含
めて驚愕していた。なお、織斑秋羅はグラウンドに激突した

それから、武器の展開でセシリア・オルコットがライフルの展開時に銃身を俺の方に

向けてしまいサクヤにライフルの銃身をカタナ姉さんに槍を簪に冷やかな目を向けられて青い顔をした後、近接武器<インターセプター>の展開に時間が掛かり織斑千冬に怒られていたりした

続く

嵐の中国転入生！

2025年 4月19日 IS学園・《一年一組教室》

「おい」

クラス代表戦の翌日のお昼、土曜日で授業は午前で終わりなため、俺達が教室から出ようとする^{織斑}秋羅の^之腰巾着^帯が俺達……いや、この場合は俺、キリト、チカの三人に睨みながら話しかけてきた

「なんの用だ篠ノ之」

「貴様等、秋羅との試合で如何様^{いかさま}しただろ？」

話しかけられて直ぐに、難癖付けることは分かっ^てはいたが随分馬鹿な奴だと思っ^う

「随分の物言いだな。あんな雑魚にどうして俺達が如何様^{いかさま}しなくちゃならない？

……」

「貴様！秋羅の事を雑魚だど!？」

「雑魚じゃ無ければ何なんだ？一週間を無駄に過ごして動きも何もかもが素人、それで負ければ腰巾着を使つて俺達に難癖付けてくる……はつきり言うが小学生以下のガキなんだよ、おめえらはな」

「貴様！言わせておけば!!」

篠ノ之は俺の言葉に完璧にキレて持ち歩いていると思われる木刀を取り出し振るってきた

「……へえ、生徒会長の前で暴力沙汰を起こすなんて、少しおいたが過ぎるんじゃないかしら?」

「ツ！貴様には関係ない！そこを退け！」

俺が木刀を止めるよりも前にカタナ姉さんが間に入り何時も持っている扇子で木刀を止めた

クラスに響いたカタナ姉さんの声はクラス内の生徒達を青ざめさせクラス全体を凍り付かせたが、篠ノ之は少し距離を離れてまた、直ぐに木刀を振るってきた

「……更識流・体術」

カタナ姉さんは木刀を避け篠ノ之の胸ぐらを掴んで投げ倒した

「安心しなさい、加減はしたし最後まで技は掛けないわ……ただし、次は無いわ」

空中から着地したカタナ姉さんは篠ノ之に冷たく言い放つ、篠ノ之は痛みと恐怖からなのかカタナ姉さんの声を聞くと気を失ってしまった

「……はあ……織斑君、この子を医務室に運んでおきなさい。それから、今朝は何も言わずに黙ってたけど貴方にも次は無いわ」

カタナ姉さんは織斑秋羅にそれだけ言うとそのまま教室を出て行った

俺達もカタナ姉さんを追うように教室を出て行く……俺達の中で織斑秋羅に目を向けたのは誰も居なかった

4月21日　I S 学園・《一年一組教室》

俺達A L O 組八人が教室に入るとなにやらクラスが騒がしかった。

「ねえ聞いた？　二組に転校生が来たんだって！」

「聞いた！ 中国からの転校生なんだよね？」

話によると隣のクラスに転校生がやって来た……ということらしい。

「転校生？ この時期に？」

「いくらなんでも急過ぎじゃないか？」

チカとキリトが言うのとセシリア・オルコットが腰に手を当てて自慢げに言ってきた

「今更ながら、わたくしの事を恐れての転校でしょうか？」

「「無いな（わね）（です）」」

俺とカタナ姉さん、サクヤの三人同時にセシリア・オルコットの言葉を否定するとセシリア・オルコットは崩れ落ちた

「それよりも、織斑君！ デザートフリーパス券……みんなの思いが織斑君の剣にかかってるからね！ 頑張って！」

クラス対抗戦には、優勝したクラスにデザートフリーパス券が与えられることとなっているのだ……俄然みんなの期待を背負うと同時に、他のクラスのクラス代表もやる気に満ちているのらしい。

が、今の織斑秋羅では優勝所か一勝あげるのも至難だろうが……

「今の専用機持ちは一組だけだから余裕だよ!!」

「その情報古いよ！」

「「「「「ん？」」」」」」

クラスメイトの言葉に反応する形で、第三者の声が一組内に響く。

その方向を見てみると、一人の女子が左手を腰に当て、仁王立ちのように立っていた。「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には、優勝させてあげないんだから！」

その言葉にクラスがざわめくが織斑秋羅が驚きながら席を立てて少女に聞く

「鈴……お前、鈴かッ?!」

「げっ……! 秋羅、アンタこのクラスだったの?」

「知ってて来たんじゃないのかい?」

「偶々通り掛かったら2組の事を話してるみたいだったから顔を出しただけよ! 知っ

てたら絶対に来なかったわ!この人殺し!」

再会を喜ぶように笑顔で話し掛ける織斑秋羅だったが、当の少女はその対応をとつばねる

少女の最後の言葉に他の一般生徒がざわめき出す

「それから気安く鈴って呼ばないでくれる? アンタにそう呼んでほしいって言った覚えはないし言って欲しくないんだから!」

「弟は良くって俺は駄目なんだ? 全く、あれの事なんて早く忘れれば良いのに」

「……………やっぱりアンタとは反りが合わないわ。実の弟をあれ呼ばわれの挙句、さつきと忘れろなんて言う人殺しのアンタとはね……………」

転校生の少女はそう言つて他男性操縦者の俺達を見てきて、チカと目があつた……………そして、少女は顔色を変えて、こちらに歩いてきて所力の前に立つ

「この……………バカやろおおおおおおお!!!!」

少女はそう怒鳴ると行きよい良くチカを一発殴つね!!

チカはいきなりすぎて対処できずに殴られ倒れ込む

「痛つてえ!いきなりなにすんだよ!」

「いきなりはこつちの台詞よ!《S A O》が終わつたつてきいて弾に電話したら死んだつてなによ!?!更識一夏つてなによ!?!全部説明しなさいよ!?!あたし二年間心配だったのよ!?!」

少女はチカの胸ぐらをつかんですごい見幕でしゃべり、俺達もクラスのみんなもついで行けなかつた

「……………流石鈴……………直ぐに気がついたか……………ごめん、鈴……………心配かけた……………ちゃんと話すよ……………鈴には……………鈴達には話す……………でもその前に……………」

「その前に?」

「ただいま、鈴」

「い、一夏あああああああああああ!!!!!!」

少女はチカの言葉を聞いて泣きながらチカに抱きつく……チカは少女を優しく抱く……その光景をどす黒いオーラを放つてみているカタナ姉さん……そして、呼び鈴が鳴り出した

「鈴、呼び鈴が鳴った。早くクラスに行け。このクラスの担任は織斑千冬だから早く戻れ話は昼、食堂でな」

「げっ、あの人までここに來てるの？教えてくれてありがとう、うん……」
転校生の少女は顔を赤くしながら教室を後にする。

21日 IS学園・食堂

「一夏、待つてたわよ」

午前の授業を終えた俺達ALO組（セシリア・オルコットと春萎さん含む）の10人は食堂に來ていた。

來て早々、転校生の少女が待つていた

「鈴……とりあえず、食券買うから並ぼうな」

「ええ、そうね」

少女にチカが言うのと少女が軽く頷いて俺達の前に並ぶ形で食券を買い、食事を選んで1人座れそうな席を確保して座って食べ始める

「朝は言えなかったけど……ハル久しぶり!」

「うん、久しぶり!聞いてたよ、中国代表候補生になったって……おめでとう!」

「ありがとう、そう言う、ハルだって今じゃ日本代表候補生でしょ?すごいじゃないの」
「私のは……そうでもないよ、織斑ってだけで特別扱いだったから事実試験とかパスしてたから実力で取った鈴の方がすごいよ」

「また、そう言つて……まあ、いいわ、それにしても一夏……あんた、SAOやIS動かしちゃうとか大変ね」

「あはは……でも、何で俺が分かったんだ?髪色も変えたし目の色も変えたんだぞ?」
春萎さんと話していた少女が話をいきなりチカに振りチカは苦笑いするしかなかった。

「……ああ、そりゃあ分かるわよ……短い間だったけどずっとアンタを見てたのよ?分らない方が可笑しいわよ……それで一夏、さっきから聞きたかったんだけど、アンタと同じもう二人の男って、そっちの?」

「ああ。俺と同じSAO帰還者の桐ヶ谷和人さんと俺達を支え続けた更識蒼」

「……桐ヶ谷和人だ、よろしく」

「更識蒼だ、SAOではソウ……SAOでギルド《西風の旅団》のギルドマスターをして
いた。よろしく……えっと……」

「あつ、まだ私の自己紹介してなかったわね。私は中国代表候補生、凰 鈴音、鈴って呼
んでかまわないわ。和人、蒼……一夏のことありがとう」

少女……鈴音は俺達に頭を下げてくる

「いいさ、俺もチカがいたからカタナ姉さんと和解できたからな。よし、今度は俺たちの
自己紹介だな。」

「じゃあ、私から……神無月サクヤナ……サクヤって呼んで……三人と同じSAO生還者
……よろしく」

「よろしく、サクヤ」

それから簪、本音と続いていき、最後、カタナ姉さんの番になる

「私は更識楯無。SAO生還者でカタナって名乗っていたわ。ついでに言うとか力や貴
女の一つ上でソウ君と簪ちゃん、チカの姉よ。それからこのIS学園の生徒会長よ」

「生徒会長ツ!? 一年で?!でも、それはそうですね。一つ上で《SAO生還者》ですな
ら」

鈴音がカタナ姉さんの生徒会長の言葉で驚いていたが直ぐに納得していた

「ええ、そして……………」

カタナ姉さんは一度深呼吸をし、改めて鈴音の目を見て発言する。

「彼、チカと…………一夏くんと、結婚を前提にお付き合いをさせていただいてるわ…………えっ?」

この場の時間がカタナ姉さんの一言で静止した。

「一夏…………ホントなの?」

鈴音はゆっくりと一夏の方を向いて恐る恐る聞く

「ああ、俺はカタナと付き合っている…………もちろん、カタナの事が好きだ」

「そう…………(アタシの初恋は随分と前に終わってたのね…………それを気がつかないで一人で初恋の相手を待って追いかけていたなんて…………馬鹿みたい)」

鈴音の眼から一粒の雫がこぼれ落ち…………次々にこぼれ落ちる

「鈴、大丈夫か?!」

それにチカも気づいて慌てながら鈴音にハンカチを渡ながら聞いた

「な、何でもないわよ…………何でも…………無いわ…………何でも…………無い…………ハンカチ有り難」

鈴音はそれだけ言うとう涙を流しながら食堂を出て行った。

続く

専用機完成・赤の少女の失恋と夏の思い

2025年 4月22日 I S 学園・第二アリーナ 《Aピット》

「待たせたな、坊主達と嬢ちゃん達」

「お待たせ、蒼、簪さんやみんな」

「待たせたな、蒼、簪、みんな」

転入生の少女……チカの幼馴染みの鈴音が I S 学園に来た翌日の放課後、俺達は第二アリーナの Aピットに来ていた

俺達が Aピットに来て少しするとマードックさん、キラさん、アスランさんの三人とこの場に来るのが始めての眼鏡を掛けた黒髪で白を基準で灰色の服を羽織った男性と眼鏡を掛けた金髪で濃いピンクの服を着た女性の五人が来ていた

「俺はイアン・ヴァステイだ。マードックと同じで部隊の整備士をしている、よろしくな。それから、此奴は俺の嫁だ」

「私はリンダ・ヴァステイ。夫と一緒によろしくね」

女性……リンダさんの自己紹介とイアンさんに俺を除いたみんなが「は？」と驚きながら固まっていた

「……イアンさん……いつ見ても犯罪ですね……」

「蒼、お前な！」

「まあまあ、良いじゃ無いか、イアン」

「ああ！お前も思ってるのかマードック！」

俺がツツコンでからほぼ自然にイアンさんとマードックさんが笑いながら話し始める、そんな状態を固まりから戻ったみんなは面白そうに見ていた

「それじゃあ、本題に入るぞ。とつ、言っても昨日の連絡の通り、嬢ちゃんの専用機が完成した……これだ」

マードックさんの言葉と一緒にコンテナが開き、中から見た目は変わってない用に見える簪の専用機 “打鉄式” の姿があつた

「僕から説明させてもらおうよ。正式名は “ORB-03IS 伐鐵^{うちがねせいしき}星式” 簪さんの専用機 “打鉄式” を改修した機体です。 “伐鐵” には蒼の “ストライクF” に使われて

る《ストライカーシステム》の上位互換《シルエットシステム》を採用してあります。今は元々の武装を装備した“ノーマルシルエット”を装備させてます。それから、装甲はヴァリアブルフェイスソフト装甲
V P S 装甲 甲に加えてEカーボンを使用、その為滅多に装甲の破損は無いよ。次は武装の説明に移ります。“ノーマルシルエット”の装備は三つ、連射型荷電粒子砲二門の＜春雷＞。超振動薙刀の＜夢現＞。6機×八門の独立稼働型誘導ミサイルポット＜山嵐＞が装備されてます。武装全てに対ビームコーティングをしてあり《マルチロックオンシステム》も勿論積んであります。他にもシルエットはありますがここで終わりにさせて貰います。詳細は簪さんの端末にスペックデータと共に送ってあります。それでは《初期化》と《最適化》をするから装着して」

「あ、はい」

キラさんの説明が終わると早速、《初期化》と《最適化》をするために簪は“伐鐵星式”を装着する。

簪が装着するとアスランさん、キラさん、リンダさんの三人が投射型ディスプレイを操作して《初期化》と《最適化》を行って行く……三人が作業している中、簪は“伐鐵星式”を見てるわけでは無くキラさん達の投射型ディスプレイを目をキラキラさせながら見ていた

「《初期化》と《最適化》は終了しました。それでは、“伐鐵星式”の動作テストで少し飛

んで見ようか」

《初期化》フィッティングと《最適化》パーソナライズを終えた“伐鐵星式”はする前と変わり全身装甲では無いが簪

の体にも装甲が増え、更に背中には装甲と一緒に円錐形の物が追加されていた

「あ、はい」

キラさんの指示で“伐鐵星式”を纏った簪がコンテナから出て来てAピットのカタパルトに“伐鐵”を固定する

「……行こう、“伐鐵星式”。……カンザシ・サラシキ“伐鐵星式”行きます！」
簪は俺のような出撃をしてアリーナに飛び立っていった

◇アリーナ

どうも、更識簪です。今、私は完成した専用機“打鉄式式”……うん、
“伐鐵星式”を装着して始めてアリーナに出て空を飛んでいます

「速い！ 凄い速い！ 想定以上に速い！」

そうです、“打鉄式式”の時に想定した速度より数倍速いです！

『こちら、キラ・ヤマト。簪さん、聞こえますか？』

「あ、はい、聞こえています」

始めてアリーナで飛ぶ嬉しき、自分の専用機が出来た嬉しき、予定以上の機動力の嬉しきの余り気持ちが高ぶっているとピットから管制室に移ったキラさんからプライベートチャンネルで通信が来た

『飛行は問題ないね。これからターゲットを射出していくので<春雷>で撃ち落として下さい』

「分かりました」

私が返事をしてから直ぐにクレーが五機、射出されてきた

「……カンザシ・サラシキ、目標を狙い撃ちます！」

私は射出されたクレー五機に<春雷>を連射して撃ち落とした

撃ち落として直ぐに四方向からクレーが今度は一方向四機計16機、射出される

「狙い撃つ！」

機体を旋回させ、後ろ二方向の八機を<春雷>で撃ち落として再び旋回させて残りの八機を撃ち落とした

『<春雷>は問題ない、次は<夢現>でターゲットを破壊してくれ』

「了解」

キラさんじゃなくてアスランさんがプライベートチャンネルで次の指示をしてくれると三機のクレーが私に目掛けて三方向から飛んで来ました

「目標を破壊します！」

私は〈夢現〉を構えて正面のクレー目掛けて〈夢現〉を振るとクレーが真つ二つに斬れた

正面のクレーを斬って直ぐに機体を回転させて左右のクレーを薙ぎ払う

『うん、〈夢現〉も問題ないね。最後に赤いターゲットを《マルチロツクオン・システム》と〈山嵐〉で落として下さい』

「了解です」

〈夢現〉でクレーを破壊して息を整えるとキラさんからの通信で〈山嵐〉でクレーを破壊することになった

通信を切って少してクレーが赤青それぞれ40機ずつ程射出されてきました

「《マルチロツクオン・システム》起動！」

『《マルチロツクオン・システム》起動、《マルチロツクオン・システム》起動』

私が《マルチロツクオン・システム》を起動させようとすると何処からか機械の音が聞こえてから《マルチロツクオン・システム》が起動した

「ロックオン完了……全門解放……<山嵐>発射！」

《マルチロックオン・システム》で40機の赤いクレーだけをロックオンして全門解放からの全ミサイルを発射してクレーを破壊した

『簪さん、お疲れ様。これにて全て終了。ピットに戻って下さい』

「はい、ありがとうございます」

私は通信越しにキラさんにお礼を言ってからAピットの方に戻りました

ただ一つ……運用テスト中……シールドエネルギーS Eの残量が1すらも減らず、アリーナで飛行し始めてからずっと背中中の円錐形の中から白っぽい緑色の粒子が排出されているのが運用テスト中ずっと気になっています

Aピット

「ふう……」

私はAピットに戻って“伐鐵星式”を待機状態……“打鉄式”の頃からの待機状態、右手中指に填めたクリスタルの指輪に戻しました。

「お疲れ、簪」

「お疲れ様、カンザシちゃん!!」

「かんちゃん、お疲れ〜」

「お兄ちゃん！お姉ちゃん！本音！」

Aピットに戻った私を最初に出迎えてくれたのはお兄ちゃんにお姉ちゃん、本音の三人でした

それから直ぐにキリト……和人さんに明日奈さん、一夏さんにサクヤさん……そして、キラさん、アスランさん、マードックさん、イアンさん、リンダさんが遅れてAピットに来てくれました

「簪さん、どうだったかな？」

「はい！凄く良かったです！私が考えていた以上に凄かったです！……ですが、二つほど気になったんですが……テスト中、シールドエネルギーS Eの残量が1も減って無くて……それに背中の中の円錐形の物から白っぽい緑色の粒子が出てたんですが……」

気になっていましたが……専用機の嬉しさからテスト中は置いておいた事を私はキラさんに尋ねました

「それは儂から説明させてもう。先に粒子からだな。あの円錐形の物は委員会が儂が作った「GNドライブ」通称「太陽炉」だ。本物は半永久的にエネルギーを生産できるが「伐鐵星式」には形や粒子の色が同じなだけの別の物を付けている。此奴の原理は光の粒子「フォトン」を周囲から集め、圧縮しエネルギーに変換する。余分なエネルギーは白っぽい緑色の粒子に変換され排出される。それを繰り返すだけだ。その代わりに

シールドエネルギー

S Eは攻撃用と防御用の二つに分け表記も分けてある。お前さんの見ていたのは防御用のS Eシールドエネルギーだな。防御用には戦闘中には回復されないようにシステムを調整して被弾しなければ減ることは無い。逆に攻撃用のS Eシールドエネルギーは攻撃すれば減るが1度に使いすぎなければ直ぐに回復する……まあ、こんなもんだ」

イアンさんの説明に和人さんに明日奈さん、お姉ちゃんにサクヤさん、一夏さんに本音はついて行けてないのかイアンさんの話し中ずつと苦笑いをしていました

「これで『伐鐵星式』は簪さんの機体になります。運用試験お疲れ様でした」

「あ、はい。いえ、こちらこそありがとうございます。キラさん、アスランさん、マードックさん、イアンさん、リンダさん、ありがとうございます！」

私はキラさん達、五人に精一杯の笑顔でお礼を言いました……多分、委員会の皆さんには一生、返しきれない恩だと思えます

I S 学園 屋上

俺の視点は、はじめだよな？俺は一夏、更識一夏だ。

大空をオレンジに染める夕焼けの頃、俺はある人に呼び出されて簪の専用機運用試験後に学園の屋上に来ていた

「屋上に呼び出してどうしたんだ、鈴？」

そう、俺をここに呼び出したのは昨日編入してきた俺の幼馴染みの鈴こと凰鈴音だ。

鈴は昨日のお昼の刀奈の事がショックから今日の呼び出しまで一切話しをしていなかった

「別にいいじゃない？少し二人で話したかっただけよ」

鈴の顔には前からの元気良さは無くショックから立ち直れてないのかどんよりとしていた

「ねえ、一夏……小学校の頃にアタシが言ったこと覚えてる？」

「へ料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」
「だろ？勿論、覚えてる……」
「ごめん！」

「え？いきなりどうしたのよ？アタシ、アンタに謝られる事なんてしてないわよ？」

鈴は俺にいきなり謝られて戸惑っていた

「いや、してる……俺は少し前まであの言葉の意味を間違つて受け取っていた……お前の精一杯の勇気を踏みにじつてた……だから、ごめん！」

「……そういう事……やっぱりの頃のアンタにはアタシの想いは届いて無かったのね……でも、今は違うでしょ？なんせ、彼女まで作つてるんだからあの意味を気がついてこうして謝つてくれてる……そうよね？」

鈴は残念そうな顔をするが何となく分かっていたのか軽くため息を吐いてから聞いてきた

「ああ、俺はあの時はへたダで飯が食えるなんて受け取っていた……だけど、刀奈と出会つて……《浮遊城アインクラッド》で過ごした二年で気がつけた……あの言葉は中国なりの……鈴なりの告白……だった……そうだろ？」

「……ええ、そうよ。あの言葉はアタシなりの告白……アタシは一夏……アンタの事が……更識一夏の事が好きです……ずっと昔から好きでした」

鈴は顔色を真っ赤にしながらも俺に告白してきた……だけど、俺にはもう既に刀奈と心に決めている

「ごめんなさい、鈴の想いには答えられません……」

「……やっぱり答えが分かっているのに……いざ言われると……堪えるわね

………
「鈴……」

鈴は俺がフルのを分かっていた………それでもなお、こんな俺に告白したのは………多分………いや、これ以上は言えない………フラれるのを分かっていて鈴は俺に告白してきた………そして、俺の目の前でフラれた鈴は泣いている………

「ごめん鈴………ごめんな」

「バカ！………今さつきフツた相手に………優しくするんじゃ………無いわよ！一夏の………バカ！」

俺は鈴を優しく抱きしめた………鈴は泣きながら怒っていた………普通それが当たり前だ………ほんの数分前に俺は鈴をフツた………フツた相手がフラれた相手に優しくすれば怒るのが当たり前だ

「ああ、分かってるよ、俺がバカで現在進行形で馬鹿をやっていることも………全部分かっている………だけどき、目の前で大切な幼馴染みの鈴が泣いているのに何もしいのは………幼馴染み失格だろ？たとえ今さつきお前をフツたとしても俺達は友達で幼馴染みってことは変わらないだろ？」

「………ほんと、アンタは馬鹿よ………フツた相手を今まで通り友達って思えるなんて………ホント馬鹿………だからアタシはアンタに惚れたんだけど………暫くこのまま

「お願い」

鈴は泣きながらも俺に呆れていた……だけど、鈴の顔は俺にフラれる前より何処かスツキリしていた

「ああ、分かったよ」

「………ありがとう一夏。大好き」

鈴は泣きながらもしつかりと俺に呟いた

「鈴のお願いの通り暫く抱きしめていると鈴から寝息が聞こえてきて俺は鈴を背負い屋上を後にした」

続く

クラス代表戦 鈴VS秋

2025年 4月24日 IS学園・第二アリーナAピット

「そろそろだな、鈴」

「ええ、そうね、一夏」

俺は更識一夏。今はソウ達と春菱と一緒にクラス代表戦一回戦目に出る鈴がいるAピットに来ていた

「ハルも一夏も……それから、みんなも昨日はありがとう。これなら負ける気がしないわ！まあ、元々アイツに負ける気はしてないけどみんなのおかげで更に自身が持てたわ！」

鈴はこの場に集まった俺達に軽くお礼を言ってきた

昨日……俺達は鈴に頼まれ朝、放課後をフルに使って鈴と模擬戦を重ねた。

理由は鈴が「織斑秋羅を捻り潰したいから力を貸して欲しい」と一昨日の夜に頼まれ

俺も含めてみんな、快く受けて昨日を鈴の特訓に付き合っただの。

そのおかげか、鈴は一日で相当強くなったみたいで喜んでいた

「それじゃあ、行つて来るわね。アイツだけは捻り潰してやりたいんだから！」

鈴は一回戦の相手……織斑秋羅への色々と混じったオーラを放ち闘志を燃やしていた

「大丈夫だと思いが油断するなよ、鈴」

「一応……秋は兄だけ……鈴、私の変わりにコテンパンにして！」

「任せなさい、ハル！アンタが受けた屈辱はアタシが兆にしてアイツに返してやるわ!!
その為にアタシはこれ身を身につけるのよ！」

鈴はプレスレットを俺達に見せるように腕を掲げながらISを展開させた

鈴のISは中国の第三世代型機体……紫っぽいピンクと黒に黄色のラインでアンロック・ユニットが円形をした機体で名前は「甲龍」。

「それじゃあ、行つて来るわ！ボロ雑巾にしてやるわ！」

鈴は俺達にそう言うたアリーナに飛んでいった

第二アリーナ

「よお、鈴。待ってたぜ」

アリーナに鈴が出るとアリーナの上空で対戦相手の秋羅が修復された。『白式』を纏って待っていた

「最後のチャンスをやろ。鈴、俺の女になれ……そうすれば俺が……」

「寝言言ってるじゃ無いわよ、自称天才。アンタの女になんてなるわけ無いでしょ？ アタシがアンタの事が嫌いなのもまだ分からないわけ？」

「……チイならないのなら力尽くで俺の物にしてやるよ！」

「やってみるがいいわ！ 今まで出来なかつた分、コテンパンにしてやるわよ！」

鈴、秋羅共に試合前から気合い十分で今すぐにも戦闘を始めそうな一触即発にまでお互いの気持が高ぶっていた

カウントダウンは刻々と過ぎていき……そして……

『試合、開始！』

「はあああああああああああ」

先制攻撃は織斑秋羅、《イグロツシヨン・ブースト》と単一仕様《零落白夜》の取り柄も無い攻撃を仕掛けてきた

「……馬鹿みたい」

鈴は一言呟くと織斑秋羅の攻撃を手に持つ大型の青龍刀の双天牙月で防がず機体を逸らして回避した。

当然、織斑秋羅は観客席の防護シールドに激突して既に無様な姿をさらしていた

「クソ！避けるな！卑怯者！」

（アイツの性格ならこう言えば乗ってくるはず！）

一つ、織斑秋羅は勘違いしていた……目の前の鈴は確かに性格は短気な所があるがそれはコンプレックスや一夏に対してのことで「卑怯者」と言われた程度で沸点は超えることは無いのだ

「……馬鹿みたい……アンタ、この一週間何してたわけ？代表決定戦のデータを見せてもらったけど何の成長もしてないわよ……これで良くクラス代表戦に望めたわね……クラス代表にも一夏や蒼達が辞退したからなれた……とんだ茶番ね」

「ちや、茶番だと!？」

織斑秋羅は鈴を挑発してのせるつもりだったが逆に鈴にのせられていることに気がついていない

「ええ、茶番よ。なんの面白くも無い茶番。クラス代表決定戦から一週間も何もせず素人が代表候補生に勝てると思つたのかしら？自称天才は一週間前にも同じ先制攻撃で負けるのに全く進歩が無いわね？それで代表候補生のアタシに勝てるなんて片腹痛いわよ！」

「グエツ!!」

鈴は双天そうてん牙月がげつで秋羅を叩き勢い良く、防護シールドにあたり、アリーナの地面に倒れ伏した

「まさか、これで終わりじゃ無いわよね？さっさと立ちなさいよ！」

「ガアア！」

倒れていた織斑秋羅を鈴は蹴りとばしアリーナの壁にぶち当たり再び倒れそうな所を鈴が背負い投げするように大空へ投げ飛ばした

「ホントはアンタには使いたくは無いです……特別に見せてあげるわ！」

「グフア!!ガハア!!」

鈴がそう言うのとアンロック・ユニットの円形の中心が少し動くとき織斑秋羅が何かに当たったように吹き飛ばされた

「どうかしら、龍砲の威力は？本当ならアンタには勿体ないのをわざわざ使ってあげたのよ、少しは喜びなさい」

「鈴の癖にクソがああああああああああ
!!!!!!」

（漸く本音を見せたわね……相変わらず薄汚いわね）

「これで終わりにしてあげるわ！」

鈴は龍砲を連続で撃ち放つが、織斑秋羅は当たってもダメージを気にせず突っ込んできた

「……学習しないのね」

鈴は双天そうてん牙月がげつを量子変換して14!しまうと拳を腰の位置で構えた

「はあああああああああ
!!!!」

鈴は体を横に向けながら腰で構えた拳を織斑秋羅に放ち、織斑秋羅は腹にもろにくらい《絶対防御》が発動し残りの《S E》を全て持つて行った

鈴が放ったのは中国八極拳の技の一つ冲捶ちゅうすい。

腰に構えた拳を体を横に向けながら放つ威力重視の突き技である

『し、試合終了！勝者……』
「ッ！」

勝負が決まりアナウンスがされて直ぐにアリーナの防護シールドが極大レーザーで破壊された

「いつ、一体何なのよ！」

試合終了に合わせてAピットに戻ろうとした鈴は極大レーザーに軽く動揺していたが直ぐに冷静になりレーザーでおきた土煙の中心をそうてんがげつ双天牙月を構えて見た

「なによ……アンタ達、何処の所属!？」

土煙が張れるとそこには灰色の全身装甲機体フルスキに同じく全身装甲で頭部がサングラスを掛けたみたいな群青と黒と赤の機体に頭部がモアイの黒い全身装甲フルスキの計3機が姿を現した

そして、3機の肩には赤くFと書かれていた

続く

IS乱入戦 地獄の管理人

2025年 4月24日 IS学園・第二アリーナAピット

「なんだあの機体……」

クラス対抗戦第一回戦終了直後、アリーナに3機のISがアリーナ内の防護シールドを破り侵入し観客席は騒然となった

『緊急事態発生！アリーナに所属不明ISが3機侵入！観客席の生徒は直ちに避難して下さい！専用機持ちは避難誘導をお願いします！繰り返し……』

「ど、どうしようキリト君！」

「お、落ち着けアスナ！」

「キリトの言うとおりだ。取り敢えずは手分けして避難ゆう……」

「と、扉が開かないよ!？」

「ど、どうしてよ!？」

「わ、私に聞かれても分からないわよ!!」

「い、嫌だ、出してよ!出さないよ!」

「[[[[[[[[!?!]]]]]]」

山田先生の放送に従い避難誘導をしようとするが観客席の扉が開かないと誰かが叫び観客席にいる生徒達から悲鳴が漏れ出した

どうしようかと考えようもすると俺のスマホが鳴り、誰かと確認する前に電話に応答する

「はい、ソウです」

『アスランだ。緊急事態なのは分かっているが蒼に頼みがある。そちらに所属不明機が3機侵入したのは分かっているがそいつらの破壊をお願いしたい。』

「破壊ですか?」

（I S委員会の委員長の直属部隊のアスランさんが普通こんなことを一生徒に頼むことなのか?）」

俺はアスランさんの頼みに少し疑問を持ちながらアスランさんの話を聞いた

『ああ、そうだ。3機の内、2機は「GAT-01ストライクダガー」と「ZGMF-1017ジン」と言い、I S委員会で量産化を計画していたが実用には至らない機体で試作機が1機ずつとデータがあったのだが先日、委員会のデータベースからその2機の

データと発展機のデータ、それからロールアウトされたばかりの十機が奪取されてしまった。奪取した奴らは未だに分かつていないがどの機体もビーム兵器を搭載していて危険だ。装甲も実弾を通りやすくしてあり破壊しやすいのはそこに居る中でお前がお前の妹の「伐鐘星式」だけだ……お前には申し訳ないが引き受けてくれないだろうか？」

「……I S委員会からの奪取機ですか……分かりました！俺にしか出来ないならやります」

（I S委員会から奪取出来る組織はそんなに多くない……ビーム兵器を再現できるのは某国くらいか……）

『すまない。これにて通信を切る』

「了解……みんな聞いてくれ」

アスランさんからの電話を切ってから俺はみんなにアスランさんから聞いたことを話した

「と、言うことだからみんなは避難誘導をしてくれ、扉を破壊して構わない。一刻を争うみんな頼む。それから、チカ、簪は俺と一緒に侵入I Sを破壊してくれ」

「わかった」

「うん！任せて」

「分かりました」

「任せて〜」

「了解よ!」

「了解だ」

「うん」

俺、チカ、簪はAピットへ他のみんなはそれぞれ三つの扉に別れて行動を開始した

「はああああ!」

俺はAピットのに続く隔壁を武器展開した<ガーベラ・ストレート>で破壊しながら進んでいき俺、簪、チカはAピットに十分近くでたどり着けた

「それじゃあ、行くぞ」

「うん」

「ああ!」

俺の掛け声と共に俺達、三人は機体を展開させ、俺からカタパルトに合わせた

《ソウ・サラシキ”ストライク”行きます!》

俺は”ストライクF”の蒼い翼を広げアリーナに飛び出した

アリーナ

「ああ!もう、なんなのこいつら!」

蒼達が動き出して直ぐのアリーナ内ではピットに戻る事の出来ないで居る鈴が侵入してきた三機の攻撃を躲しそうてんがげつ双天牙月や龍砲で反撃していたが装甲を破壊できず決定打を決められないでいた……そして……

「ああ!どうして俺を攻撃してくるんだよお!」

先程の試合でエネルギー切れを起こし既に戦うことの出来ない織斑秋羅が乱入してきた三機のうち一機に襲われていた

「いいからアンタは早くピットに戻りなさい！アンタを守って戦う余裕なんて無いんだから！」

「つんなことお前に言われなくても分かってるんだよ!!頼むぞ “白式”！」

織斑秋羅は “白式” を使い無理矢理にCピットの方に退避した

鈴はそれをストライクダガーとジンのとの戦闘をしながら確認して軽く溜息を吐いてから片方の 非固定遊部 アンロツクユニットをもう1機に向けて龍砲を威嚇で放ち三機目をこちら側に引きつけた

「やれるか分からないけど時間稼ぎを出来るだけするしか無いわね……アタシが倒れる前に来なさいよ……」

一夏

鈴は援軍が来ることを願いながらストライクダガーとジン、灰色の機体との戦闘を再

開させた

「クツ！」

（まずは一体！ビーム兵器を積んでいるあの機体と実弾機でも装甲が厚いあつちの機体よりビームの質力が低くて装甲がそこまでじゃないあの灰色のをなんとか出来れば！）

鈴は双天牙月そくてんがげつを振り回し三機に接近されにくくするがビームライフルや実弾の嵐に晒される中、灰色の機体にターゲットを絞り行動しようとする

「っ!?なんてもん出してるのよ!？」

だが、鈴はジンが量子変換でミサイルを取り出して来たのを見て直ぐにジンへと対象に切り替える

「龍砲!きやつ!」

鈴はジンの発射したミサイルに龍砲の弾を当て爆発させるがミサイルの爆風で吹き飛ばされてしまう

「..はあ...はあ...はあ...はあ...うう!」

地面に倒れた鈴は立ち上がると同時に左手で右腕を押さえる...地面すれすれで戦っていた鈴は先程の爆風で吹き飛ばされて地面に倒れたときに右腕を強く強打してしまっていた

「ッー」

負傷してしまう鈴、だが三機は休む間もなく鈴に向かってライフルやアサルトライフルを連射してくる

鈴は左右へと旋回してライフルのビームや弾丸を回避していくが不意に伸びてきた機械の腕に捕まってしまう

「ウグッー」

機械の腕ら灰色の機体から伸びていて鈴の負傷している右腕を強く握り抑えてくる。

鈴は痛さのあまりに顔を歪ませてしまう

「……この……離しなさい……よーグッー」

灰色の機体に龍砲を放とうとするがストライクダガーとジンの銃撃により

「甲龍」のアンロツク非固定浮遊部位ユニットが破壊されい龍砲が撃てなくなってしまった

「……」

（アタシ……もう、死んじゃうんだ……切角一夏と再開出来たのに……もうお別れなんだ……ごめんねハル……ごめんね一夏……）

鈴は灰色の機体の片腕から発射されそうな光を見て涙を流し自分の死を覚悟していた

「……」

(和人、蒼……それから楯無さん……一夏の事お願いします……アタシは……)
発射寸前の光を見て目を瞑り涙を流す鈴、一人の少女の命の炎を刈り取る光が放たれるその瞬間……

「りりりりりりりり!!」

「い、一夏!!」

鈴は自分を呼ぶ声に目を開き声の主の名前を呼んだ

声の主、一夏は先にアリーナに出た蒼よりも速く動き鈴の傍まで来ていた
「汚い手で鈴に触れるなあ!!」

一夏は<桜雪>の一振りで灰色の機体の腕を切り落とし鈴を自由にさせた

「鈴、大丈夫か!」

「え、ええ……」

解放された鈴は座り込んでいると一夏が駆け寄ってきた

「……鈴音さん、大丈夫ですか?」

《遅れてすまないな》

鈴、一夏の下に蒼と簪も駆けつけると鈴はホツとしたのか軽く深呼吸をする
「蒼も簪もありがとう……助かったわ」

鈴は負傷した右腕を庇いながらゆっくりと立ち上がり蒼と簪に礼を言う

《気に入るな、俺達はもう、友達だ。友達なら助けるのは当たり前だ……それよりもだ……》

少しだけ冷たい蒼の声に鈴は不思議と自身が悲しくなったのを感じつつ蒼が向いた方向の三機を睨んだ

《鈴音……君はピットに戻れ、ここまで一人でよく頑張った》

「アタシも戦うわ！つて言いたいんだけど素直にピットに戻るわよ。正直体のあちこち痛くて限界なのよ」

鈴は右腕を押さえながら少し残念そうな顔をしていた

《ピットに戻るまで簪に着いていつてもらう。いいよな？》

「ええ、お願いするわね、簪」

「うん、お願いされた………《サバーニヤ》」

簪が《サバーニヤ》と呟くと、《伐鐵星式》の非固定浮遊部位のアンロックユニットが量子変換で仕舞

われ白と水色で連結された盾の様な浮遊物が片方七機計14機が

非固定浮遊部位アンロックユニットとして量子変換され《ノーマルシルエット》と比べると装甲が増量

され胸部・両肩・腰部装甲・両脚各部にミサイルポットが追加され頭部にはガンダムタ

イプのアンテナが装備された

「これが中遠距離型《サバーニヤシルエット》を装備した《伐鐵サバーニヤ》。鈴音さん

を送りながら援護するよ」

《これは頼もしいな……頼んだよ、簪》

「任せてお兄ちゃん。行くよ、鈴音さん」

「ええ」

簪はアンロックユニット非固定浮遊部位から<ピストル>を二丁取り出して鈴と一緒にAピットに

向かって飛んでいっ

この時、蒼と簪の兄妹の会話を聞いていた鈴は自身も分からないほどに心の中に小さな何かが芽を出し始めていた

続く

I S乱入戦 純白の輝き

2025年 4月24日 I S学園・第二アリーナAピット

簪side

「ここまで来れば大丈夫だと思っよ」

「ありがとう、簪」

私は乱入I S三機を相手に一人で戦っていた鈴音さんをAピットまで護衛もかねて連れてきました

「簪ちゃん！」

「かんちゃん〜りんりん〜」

私達を待っていたのはお姉ちゃんと本音、それからストレッチャーが置いてありストレッチャーの後ろに教師が二人待っていました

「お姉ちゃん、本音！」

「楯無さん……本音……りんりんは辞めて」

鈴音さんは酷く疲れた顔をしながら本音のあだ名呼びにツツコンでました

「……鈴音さん、大丈夫？」

「多少は痛いけど大丈夫よ……それにしても用意が早くない？ ストレッチャーを用意なんて連絡、私も簪もしていないわよね？」

ストレッチャーに横になる鈴音さんが用意周到のこの場の事を聞いてきた

私と鈴音さんはアリーナからピットに戻るまで通信をしていなかった

ストレッチャーを用意させて教員も準備させるなんてとてもじゃないけど簡単にはできないはず

「ソウ君が私にアリーナの状況と鈴ちゃんの容態を教えてくださいましたのよ。私は生徒会長としてストレッチャーと教員を手配しただけだからソウ君に感謝しないとね？」

「……はい、そうですね……簪……」

「何？ 鈴音さん」

私はお兄ちゃんを流石だと思います……既にアリーナでは戦闘音が聞こえて激しい戦闘が始まっています……その中でお姉ちゃんに連絡して状況を説明できるなんて私には出来ません

「貴方のお兄さん…… 凄いわね」

鈴音さんの顔はほんのり赤くさせて言ってきました

「うん、知ってる。私の自慢のお兄ちゃんだからね」

私は鈴音さんに言うのと微笑みました

「だけど…… この場に機械音と共に衝撃が走りました」

『テツキセツキン、テツキセツキン』

「「ツ!!」」

「伐鐵サバーニャ」から敵機接近の警戒音がながれゲートの方を向くと直ぐに鈴音さんを捕らえていた灰色の機体が下から現れた

「ホルスタービット!」

私はとっさに14機の<ホルスタービット>を展開し1機に1機をつなげてシールドとして使う<ビットシールド>を計7機をみんなを守るように展開させた

「…… クツ」

灰色の機はビームを連射して私達を襲うが<ホルスタービット>のシールドが私達を完璧に護ってくれていた

「今! 当たれ!」

私はビームの嵐がやんだ一瞬の隙を突いて手に持っているくピストルビット>二丁で灰色の機体に向かって連射した

連射したビームは全て灰色の機体に当たり爆発した

「ふう……お姉ちゃん達は早くここから退避して！私はお兄ちゃんの援護をするから危険だから離れて！」

「わ、わかったわ！みんな、早く！」

私がお姉ちゃん達に叫ぶとお姉ちゃんを筆頭にストレッチャーに乗せた鈴音さんを連れてAピットを離れていきました

「よし……くライフルビット>！」

私はくホルスタービット>にくピストルビット>を戻して新たに遠距離射撃型くライフルビット>を取り出しました

「『伐鐵サバーニャ』カンザシ・サラシキ……目標を狙い撃ちます!!」

私はお兄ちゃんの援護の為、ライフルビットの引き金を引こうとしました……が別のピットから白い機体が出て行くのが見えて中断しました

「はあああああ!!」

「…バカ」

私は別のピットから出て来た白い機体……織斑秋羅と『白式』に毒づいてからも

う一度狙いを定めた

アリーナ

蒼 side

「はああああああああああああああ!!」

「ツ!!」

俺とチカが「ストライクダガー」と「ジン」戦闘を開始させてから十分くらいが経った時………Aピットで爆発音が聞こえ簪が灰色の機体を破壊したのを確認した直後………反対のピットから白い機体………白式と世界初の男性I S操縦者の織斑秋羅が出て来てく雪片二型を一番近い「ストライクダガー」に目掛けて振るった

《チイ、邪魔な奴が………》

俺は毒づき、チカは少し殺気を漏らしていた

「ツークソがあ!俺の前に這い釣りくたばれ!」

ストライクダガーに剣を振るう織斑秋羅だが、ストライクダガーには傷すら付かず織

斑秋羅は直ぐに苛立ち「白式」の単一仕様ワンオフ・アビリティー《零落白夜》れいらくびやくやを発動させてストライクダガーに襲いかかるがシールドで防がれてカウンターの顔面パンチを食らい外壁にぶつかり倒れた

《邪魔為やがって……チカ、早く片付けるぞ》

「ああ……」

チカの様子が可笑しかったが今は気にすることが出来ずに俺はストライクダガーに向けてライフルの引き金を引いたがストライクダガーはシールドで防ぎライフルの引き金を引いてきた

《クソ!》

(俺の射撃じゃあ、当てることは出来ないのか……だったらー!)

俺はビームライフルを戻し二本の<ガーベラ・ストレート>を<コール>し構えた

《行くぜえ!》

二本の<ガーベラ・ストレート>を構えストライクダガーに接近しようとする

……

『秋羅ああああああああ!!』

いきなりアリーナ全体にスピーカーから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『男なら……男なら、その位の敵に勝てなくてなんとする!!』

ストライクダガーに注意しながら音の為た方に視線を向けると、放送室を占領してマイクを握る篠ノ之箒の姿が見えた。

放送室には審判と他にも数人いたはずだがどうなっているかはこちらからは見えないが良くないことは確かだろう

生徒の避難誘導を進めている中で行われた篠ノ之箒の行動は余りにも自分勝手の無謀で愚かな行為だ。これではカタナ姉さん達の避難誘導の意味がなくストライクダガー達が篠ノ之箒の方に行ってしまうと……と考えた時には既に遅く、直ぐ近くからビームの音が聞こえ白緑のビームが放送室に目掛けて進んでいた

《今から……クウ!》

(不味い……間に合わない!)

放送室に向かうビームを全力で止めに行こうとするがストライクダガーの攻撃によつて阻まれてしまい、いくらバーニアをふかしても間に合わない距離に到達していたビームが放送室に当たれば中にいる人は確実に死んでしまう……諦め掛けた瞬間……放送室とビームの間に何か割り込みビームを防いだ。

何かビームを防いだ事で黒煙が立ちこめていたが黒煙の中から織斑秋羅の“白式”と同じく白だが黒煙の中にもわかる程、輝いている白が基準で赤色の線が施してある機体で右手には刀身が輝いている日本刀を持っていた

『こちら、〃白夜〃春奈です』

《は、春萎さん!?!》

ビームを防いだ純白の機体に乗っていたのは春萎さんだった事に俺は驚きを隠せなかった

『微力ながらお手伝いさせていただきます』

《あ……ああ》

(春萎さんの様子が変だ)

春萎さんの口調が変わっていることに俺は少し戸惑いを感じていたが直ぐに意識をストライクダガーに向けた

『行きますー!』

《了解!》

俺は隣に降りてきた春萎さんと同時にストライクダガーに向かう

ストライクダガーはライフルで射撃をしてくるが狙いが定まって無く容易に躲していくことが出来た

「はああああああああああ!!」

春萎さんが先に出て左腕とライフルを切り落とした

「今ですー!」

《終わりだあ!!》

春萎さんの合図に合わせて二本のくダガーベラ・ストレートをクロスに振りストライクダガーを切り裂いた

俺と春萎さんがその場を離れるとストライクダガーは爆散した。

ストライクダガーの爆散と同じくチカがジンにとどめを刺してジンも爆散した

つづく

「……私だ」

真つ暗な部屋の中、一人の女性がスマホを片手に誰かと話し始めた

『久しぶりね、＼＼＼＼今日のパフォーマンスはどうだったかしら？』

「委員会から奪取した＼＼ストライクダガー」と＼＼ジン＼＼それから束から奪取した＼＼ゴレムI＼＼だったか？ダメだな、素人なら兎も角、熟練した操縦者には勝てないだろう」

電話相手は女性……双方の女性はIS学園の襲撃事件を事前に知っていた素振りでも話していた

『やっぱりそうよね〜わかったわ、主任にAI向上をさせておくわ』

「ああ、そうしてくれ。私も夏休み前には手土産を持って其方に合流する。それまでに私の専用機を仕上げおけ」

『わかってるわよ、それじゃあね。T』

電話相手の女性はそれだけ言うとお話を切った。

電話をした女性は部屋の中にある石化したISを見ていた

「お前にも私のために働いて貰うぞ」

女性は石化したISに向かってそれだけ言うとお部屋を出て行った

その場に残ったのは石化した状態のIS……現役時代の織斑千冬の専用器 くればくら 暮桜

だけだった

続
く

祝賀会

2025年 4月27日 IS学園・ソウの部屋

「えつーと、クラス代表戦、鈴音の優勝に乾杯!!」

「「「「カンパアーイ!!!」」」」

クラス代表戦と侵入者戦から四日……まずは侵入ISを破壊してからだ、俺、チカ、簪の三人と春萎さん……それから織斑秋羅は無断出撃の為に山田先生から注意を受け学園長の指示で反省文三十枚の罰を受けることになったが放送室を乗っ取り、放送室内にいた教師と生徒に暴行を行った篠ノ之箒は一ヶ月の自室謹慎と二週間の懲罰房逝き、百五十枚の反省文の重罰を喰らったらしい

それからクラス代表戦は中止にはならず、翌日に二回戦目と三回戦だけ行われて負傷が治つてないのに関わらず見事に鈴音が優勝をもぎ取った。

今日は、俺や簪、キリトにアスナ、刀奈姉さんにチカ、サクヤに本音、セシリアと春萎さんを含めた11人で細やかな祝賀会を俺と春萎さんの部屋で行うことになった

「鈴、身体大丈夫？無理して試合出たんだから心配したんだよ？」

「ハルってば心配しすぎよ？私の丈夫さはハルが一番知ってるでしょ？でも、心配してくれてありがとう」

俺やチカにアスナや春萎さんが簡単に作った料理を取っていると幼馴染みである春萎さんが鈴音の身体を心配しながら聞いているのが聞こえた

鈴音はクラス代表戦が続行されることになったのを聞くと無理して負傷した身体を推して試合に臨み優勝した……その時の春萎さんの心配している様子はSAO生還者の誰もが何度か経験した表情をしていたのを良く覚えている

「アンタ達に頼みがあるんだけどいいかしら？」

「？」

祝賀会の途中、鈴音と春萎さんから声を掛けられた

「アタシとハルでALOを買ってきたからやり方とか教えてくれない？」

「本当か？勿論いいぜ、な？みんな！」

「「「「ああ！（ええ）（うん）」」」」

みんな、快く引き受けるとみんな、新しい仲間が増えるのが嬉しいのかいつも以上に笑っていた

「あ、あの……わ、わたくしも通販で買ったのが漸く届きましたのでお願いいたします

わ」

少し緊張しているのかセシリア・オルコットの声は少しだけ震えていたが春萎さんと鈴音がセシリア・オルコットの手を握った

「これからが私達の仮想世界が始まるわね。お互い頑張りましょね！」

「え……ええ！よろしくお願ひしますわ！鈴さん、春萎さん！」

「こちらこそよろしくね？セシリアさん」

「こつちこそよ、セシリア！」

ALOをこれから始める3人は祝賀会の中で一層に仲良くなっていた。

「えつとそれで、始めるときに何をすればいいんですか？プレイヤーは妖精種族を選んでつて聞いてますが……」

「ああ、^{サラマンダー}火妖精族、^{ウンディーン}水妖精族、^{シルフ}風妖精族、^{ノール}土妖精族、^{イェン}闇妖精族、^{スプリガン}影妖精族、^{ケット}猫妖精族、

^{レブラコーン}工匠妖精族、^{プーカ}音楽妖精族の9つから決めるんだ。因みに俺は^{イェン}闇妖精族だ」

「私と本音、お姉ちゃんにアスナさんは^{ウンディーン}水妖精族だよ」

「俺は^{スプリガン}影妖精族だ」

「俺は^{シルフ}風妖精族だ」

「私は^{ケット}猫妖精族です」

「ここに居るメンバーだけで半分の五種族なんですわ……えつと、何か選ぶコツ……」

では無いですね、種族事に得意分野があるんですか？」

熱心に聞いてくる春萎さんにチカが苦笑いしていた

「水妖精族が一番明確だな。水妖精族は俗に言う『ヒーラー』で回復魔法が得意なサポート種族だな。火妖精族は簡単に戦闘民族でパワーが売りだな。風妖精族は機動力が高く幅広く戦える『万能型』。猫妖精族は眼が9つの種族で一番高くて索敵や弓などの遠距離が得意だな。それか9つの種族の中でモンスタータイムするのが一番に得意だ。影妖精族は宝物探しや幻影魔法が得意な『トレジャーハンター』だ。闇妖精族は月光りが無くても飛ぶことが出来る種族だ。工匠妖精族は名前の通りに鍛冶が得意で工匠妖精族が作り出す武器は性能はかなりいい。音楽妖精族は歌でいろんなサポートをする『サポーター』。最後に土妖精族は土魔法を得意として壁役を任せられるほどにタフだな。こんな所か？」

俺が話し終わるとキリト達は頷き、春萎さんはなんかメモを取っていて鈴音は何か吹き、セシリア・オルコットに至っては頭から煙を出していた。

「ソウさん、教えてくださりありがとうございます。私は兄さんと同じ風妖精族にします」

「アタシはサクヤと同じ猫妖精族にするわ」

「わ、わたくしは水妖精族をすることにいたしました。遠距離はわたくしの距離でしてよ」

「調子に乗らない……貴方が言うには私に勝ってから言つて」

「う、すみませんでした」

「あはは……」

セシリア・オルコットはIS戦でサクヤに一度も勝つたことがない……その事を言われセシリア・オルコットはシユンとなつてしまい、みんな笑っていた

続く

S A O 生還者の集まり

5月12日 I S 学園・食堂

俺達、六人はいつも通り朝食を取りに食堂に来ていた。

「一夏、蒼おはよう！」

「お姉ちゃん、お兄ちゃん、おはよう」

「ソウソウ、おはよう」

「みなさん、おはようございます」

「みなさん、おはようございます」

食堂に着くと俺達を待っていたのか簪と本音、クラス代表戦後からA L Oを始めたリ
ノこと春菱さん、スズこと鈴、シアことセシリアが待っていた

「おはようみんな」

「おはよう、かんざしちゃん！」

俺達六人も挨拶を交わしてから料理を選びに列に並んだ

「今日は和風Aセットしようかな……」

「じゃあわたしも♪」

「キリト君は、この『洋風朝食セット』でいいよね？」

「そうだな。アスナは？」

「わたしもキリト君と同じのでいいよ♪」

夫婦円満なこの光景。アイヌクラッドの頃から一切変わらない。だが……他の生徒達は……。

「おばちゃん!! 七味ある? 大量に欲しいんだけど!」

「きよ、今日はブラックコーヒーにしようかなあ……」

「ああ……。ならわたしも……」

と言った具合に、四人が甘い空気をだしているのど苦い物や辛い物を大量に摂取していた……だが、さらに夫婦円満では無いが甘いオーラを出しているのが……

「俺はいつもの《スペシャルトーストセット》で。サクヤは？」

「……私は『洋風朝食セット』で」

四人の隣で俺とサクヤが料理を頼んでいる……そこまでは普通だが、問題はここ最近、サクヤが俺の左手を握っているのだ。

「お姉ちゃんもお兄ちゃんも……少しは私のみにもなって……」

料理を持つて簪達の席に行くとき、簪に呆れながら言われてしまった。

「こればかりはね〜」

「そうだな……こればかりはどうしようも無いなあ〜」

俺とカタナ姉さんがそう言うとき、簪がため息を吐き呆れていた

「そうだ、鈴にセシリア、簪、本音、春萎さん……午後空いてるか？」

「まあ、空いてるわよ？」

「はい、空いてましてよ？」

「うん、空いてるよ？」

「私も空いてるよ〜」

「はい、空いてます」

食事中、俺が思い出したように五人に空いてるかと思くとみんな、空いてると言ってきた。

それから春萎さん達がALO始めた際にセシリアと鈴の呼び方を変えた……いや、変

えざるを得なかった……事は一週間近く前のことだ……その日は俺とゆうちゃん、ソウキとミノリちゃん、シアとスズでスキル上げをしにユグトラシル近くの森に行つたときにシアとスズにしつこく言われ更にはゆうちゃんにも『そうした方がいいんじゃない？仲間なんだしき！』と言われ呼び方を変えざるを得なかった

「今日の午後な、俺達六人とも出掛けるんだけど……良かったら一緒に来ないか？」
「いいんですの？」

俺の突然な話に五人とも少し戸惑っていた

「いいに決まってるから聞いてるんだ。もし、他にやりたいことがあるなら無理して来いとは言わない」

「あたしは別に良いけど……どこ行くのよ？」

鈴が少しだけ戸惑いながら聞いてきた。

「……SAO生還者の『オフ会』」

12日 港北総合病院

「あつ、ソー、ソウキ、美乃梨ちゃん！」

「ママ／お母さん!」

俺はキリト達より早くIS学園を出て小学校にソウキと美乃梨ちゃんを迎えに行つてからゆうちゃんの入院している港北総合病院に三人でゆうちゃんを迎えに来ていた。

ゆうちゃんはリハビリを続けていて今は松葉杖ありなら自分で歩けるまでに回復していた……だけど、今日は長時間立っていたりしないといけないので車椅子でゆうちゃんは行くことになっている

「ゆうちゃん……なかなか、会いに来れなくてごめんね?」

「うん、気にしないで? IS学園からかなり遠いんだし……ソーも男性IS操縦者だから忙しいでしょ? ボクはソウキや美乃梨ちゃんが毎日来てくれるから大丈夫だよ?」

俺がかがみながらゆうちゃんに謝るとゆうちゃんは優しく言ってきた。

「本当に? 俺に心配させたくないのはわかるけど……嘘は言つてほしくないよ?」

俺が言うとううちゃんは少し深呼吸して笑ってくる

「……やっぱ、ソーには嘘はつけないや………現本当は寂しいよ………実こつちに戻つてくれたのにまた、離れ離れだからさ………でも、ボクが弱音を吐いたらソーに心配かけるから……それだけは嫌だからさ………」

「ゆうちゃん………」

俺はゆうちゃんを抱きしめていた

「ごめんね、ゆうちゃん………これからはなるべく寂しい思いはさせないから………」

「ソーが謝ることじゃないよ………でもありがとう」

ゆうちゃんは俺の頭を撫でてきた

「パパ、ママ………イチャイチャするのはいいけど………そろそろ、行かないといけないよ？」

俺とゆうちゃんはソウキの言葉でハットしてお互い赤い顔をしていた

「そ、そ、そうだな！早く行かないとな！」

「う、うん！早く行かないとね！ソウキ、美乃梨ちゃん行くよ」

「うん！」

俺とゆうちゃんは少し動揺しながらも二人を連れて病院を後にする。

12日 ダイシーカフェ

「あつ、ユウキ！」

「あつ、アスナ！」

俺とゆうちゃん、ソウキに美乃梨ちゃんの四人が『オフ会』会場のダイシーカフェに

俺はこの場で説明をするのが面倒なのでとりあえず中はいること……

ダイシーカフェと表された看板の下には、『本日貸切』の掛札が掛けられていた。

キリトが先頭に立ち、入り口のドアを開ける。と、中には参加メンバー勢揃いでの出迎えが待っていた。

「おいおい……俺たち、遅刻はしてないぞ?」

「ふっふーん♪ 主役は最後に登場するものですからねえ。あんた達にはちよつと遅い時間を伝えていたのよ」

「さあ、みんな入って! それから、あんたはこつち!」

「とツ!? お、おい!」

リズベツトこと篠崎 里香に連れられ、キリトは壇上に上がる

そして……

「えー、それではみなさん! ご唱和ください!! セーのっ!!」

『『キリト! S A O クリア! おめでとうツ!!』』
!!!!!!!

里香の合図で、キリトを祝福する声と大量のクラッカーの音が、店内に鳴り響く。

そして、キリトの後方にある壁から垂幕が下がり、手書きで書かれた C o n g r a t

u l a t i o n s ! の文字。

「あ……ああ……」

「はい！ これ持つてええええかんぱあええええいッ！！」

『『かんぱあええええいッ！！』』

こうして、オフ会が始まり、アスナ、サクヤ、カタナ姉さんは簪達、ALOでの新たな仲間達をメンバー達に紹介するためにみんなの所に、ゆうちゃんとソウキ、美乃梨ちゃんはゆうちゃんのお姉さんのランさんこと藍子さんと仲良く話している。

そして俺達は……

「マスター。バーボン、ロックで」

「じゃあ、俺も同じので」

「俺も同じので」

カウンターに並んで座り、マスターであるエギルに注文する。

すると、俺達の目の前にロックグラスに入った茶色の液体が配られる。

差し出した本人を見てみると、「ふんっ…」と鼻で笑って見ている。

キリトとチカがそれを口にする……

「なんだウーロン茶か……」

「ですね……」

キリトとチカは少し驚きながら少し残念そうに言った

「それより、本当にソウはよかったのか？ 攻略組ギルドのリーダー……《西風の旅団》リーダーのお前があの場にたたなくて？」

「いいんだよ、ラスボスヒースクリフを倒したのはキリト……お前で俺は何もしてない。S A Oをクリアしたのは紛れもなくキリト、お前だよ」

俺がそう言うのとキリトは何処か悲しそうな顔をしていた

それからクラインが割り込んできたりシンカーさんが話しかけてきたりとわいわいしていた……そして、その様子を、眺める六人の姿。

「皆さん……とても楽しそうですわね……」

「ほんとねえ。あんな一夏も初めて見たし……」

「私も、お姉ちゃんとお兄ちゃんがあんなに笑ってるとこ、初めて見たかも……」

「そうだね。私も見たこと無いよ」

「……………」

「……………」

つい最近A L Oを始めた鈴やセシリア、春菱さん……旧A L Oからやっているキリト

の妹のリーファこと直葉さん、本音、簪の六人は、なんだか気まずさと言うものをい
いていた。

「正直来なかったほうがよかったって顔をしているな？」

「「「「ツ……」」」」

俺が六人の前に歩きながらそう言うと六人とも、少し驚いていた。

「お兄ちゃん……」

「まあ、そういう顔をするのは仕方ないよ……それでも、俺が声をかけたのは現実で見
ほしかったんだ……。デスゲームの二年間は俺達、生還者に仲間という大切な物を残して
くれた……。そして、俺達はある世界で死んでいった4000人の魂を背負って行かない
といけない誰が言おうとそれは変わらない……それが生還できた俺達の絆でありあの
世界の証なんだ」

「「「「……………」」」」

俺の話に六人とも黙り込んでしまう

「まあ、湿っぽいのは無しだ。せっかく来たんだからもっと楽しめよ」

俺はそう言って6人から離れみんなの居る方に歩いて行った

12日 アルヴヘイム・オンライン アルン上空・ユグドラシルシティ

俺とゆうちゃん、ソウキにミノリちゃんはみんなとは別にユグドラシルシティに来ていた

「ねえ、パパ。これからなにがあるの？二次会って事は聞いてただけど……」

「私も何も聞いてないんですけど？」

四人でテラスでのんびり過ごしているソウキとミノリちゃんが聞いてきた。

「ごめんな、まだ、秘密なんだ。でも、もう少しの辛抱だから我慢してな？」

「……うん」

二人は少し不安そうな顔を見るとゆうちゃんがソウキとミノリちゃんの頭を撫でる

「大丈夫だよ、ソウキ、ミノリちゃん」

ゆうちゃんが二人を安心させようと撫でながら話しかけた時に「ゴーンゴーン」と鐘の音がなりだした

「鳴ったか……三人とも飛ぶよ」

「そうだね！ソウキ、ミノリちゃん行くよ」

「うん」

俺たちは月に向かって飛んでいく……すると……月を覆い隠すように巨大な影が月の

上からゆつくりと降りてくる

「……え？……なんで……なんで……どうして……あれが？」

「とう……ソウキ知ってるの？」

俺とゆうちゃんの後ろを飛んでいるソウキが驚愕し恐怖で顔色を変えていた……それをミノリちゃんが少しおどけながら聞いた

その大きな影が月の前で止まり、全体の灯りが灯った。その輝かしい光はその影を払拭し、影の正体を暴く。そこにあつたものは、積円型の大きな構造物

下から上へと上がっていくごとに、その幅が大きくなり、やがては収束して途切れている。

そう、その建物こそが……

「あれが……浮遊城《アインクラッド》だよ」

「なんで……なんで……」

「ミノリちゃんの言いたいことはわかるよ……普通なら誰だつてそうなる……でもね……まだ、俺達の物語は終わってないんだ！」

「今度こそボクたちはあの城を100層攻略して落とすんだよ！」

俺とゆうちゃんが二人に手をさしのべる

「ソウキ、辛いかもしれない……怖いかも知れない……憎いかも知れない……だけど、俺達と

一緒にあの城を登らないか？俺達にはソウキが必要だ、来てくれないか？」

「ミノリちゃん……君の魔法は誰かを護るためにあるんだよ……怖いかもしれない……憎いかもしれない……だけど、ミノリちゃんは優しい力を持つてるんだよ……ボクたちと一緒に来てくれないかな？」

俺達がそう言うと二人は泣きながら手を取る

「うん、行くよ！怖いけど……まだ、辛いけど……行くよ！僕はどこまでもパパとママと一緒に！」

「私も！今度はソウキやお父さん、お母さんと一緒にこの城を登ります！そして、お父さん達を私の魔法で護ります！」

「よし！行くこう!!!」

俺達は飛んでいく何処までもいつまでも……

続く

金銀とトーナメント 金銀の転校生

2025年 5月14日 IS学園・《一年一組》

SAO生還者のオフ会……新ALOに浮遊城インクラットが導入された二日後のSHR……一組はざわめいていた…

「え、今日は皆さんに転校生を紹介します」

その原因は山田先生と織斑千冬と見たこと無い二人の生徒が入ってきたからだ……いや、正確には一人の「金髪男子生徒」が入ってきたからだ。

山田先生の言葉の後で一步前に出たのは少年の方だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、どうぞよろしく願いますね」

「お、と、こ………？」

「はい。こちらには僕と同じ境遇の方が四人がいて聞いていたので、フランス本国から転入を……」

「「きやあああああああツ!!!」
「ふえ?!」

シャルルが男だという事に、教室が割れるほどの歓声が湧いたのは、言うまでも無い。だが……歓声が湧いている一組で歓声の原因であるシャルル・デュノアを怪しんでいるのが二人……もちろんのことだが俺とカタナ姉さんだ

「静かにしてください！皆さん！　まだ、もう一人の自己紹介が終わってませんよ？」

そう言って、山田先生がもう一人の転校生に視線を向ける。

もう一人の転校生は銀髪で左目の眼帯で表情は堅い……どこか昔の……刹那だった頃の俺や那由多の雰囲気似ているものを出していた

「ドイツ軍I S部隊隊長謙ドイツ国家代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒだ。軍の階級は少佐。軍にいる期間が長かったのでこういう場での自己紹介が上手くできないし、話も合わせられないかもしれないが、よろしく頼む。」

そう言ってラウラ・ボーデヴィツヒはクラスを見渡し春萎さんを見つけるとほんの一

瞬表情が緩む

「それでは、1時限目は2組と合同でISの実習だ。着替えてグラウンドに集合しろ」

HRは終わり、俺達は急ぎ更衣室まで行かなければならない。

「織斑、桐ヶ谷、更識兄弟、デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だ」

命令口調なのがムカつくが元々そのつもりだったから無視しておこう。

そう思っていると、そのシャルル・デュノアの方から近づいてくる。

「君たちが桐ヶ谷くん、更識くん？ 初めまして、僕は……………」

「ああ、そう言うのは後でいいから！」

「急いでアリーナの更衣室に行くぞ！」

「ふえっ!？」

俺達に挨拶をしようとした時、いきなりそれをキリト、チカから遮られ、俺に手を取られて、引つ張られるシャルル・デュノア。

いきなりのことだったのか、あまりにも可愛らしい声を上げる、それにキリトとチカは少し驚いていた……………だが、手を握っている俺は直ぐに気がついた

……………それは……………

『シャルル・デュノアは男装した女の子』と言うこと

なぜ、そんな事が手を握っただけでわかるのか……それは、俺が更識家で元暗殺者だからだ。

俺は更識家の中でだと次期当主の座に座っている形になっている……カタナ姉さんに何かあった場合に俺が更識家を継ぐ形になっている……そのおかげで俺はカタナ姉さんが出席するパーティーなどに参加しなくてはならなかった……喧嘩をしていたときもずっと……それにはもちろん、ダンスパーティーなどのこともあっているんな女の子とダンスを踊らなくちゃならなかった……暗殺者だったころも暗殺ターゲットに近付くためにそんなことをしていた……それがなぜ、シャルル・デュノアが女の子だとわかったのかは至ってシンプルだ……シャルル・デュノアの手は男にしては「綺麗すぎ」で「軽い」のだ。

「い、いきなりどうしたの?」

「俺たちは、いつもアリーナの更衣室で着替えているんだよ。授業の度にこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「あ、う、うん。でも、まだ時間はあるよ? そんなに急がなくても……」

シャルル・デュノアの言葉の直ぐに他クラスの女子に囲まれる。俺とシャルル・デュノアは窓から、キリトとチカはその間に女子達を抜いて校舎内からアリーナに向かった

続く

元代表候補生と英と中の代表候補生タッグ

2025年 5月14日 I S学園・第二アリーナ

俺達はアリーナの前で合流して更衣室に入っていく

「なんとか巻いたな」

「ごめんね、僕の所為で……」

「気にすんなよ。俺達も最初はあるな感じだったしな。そう言えば自己紹介まだだったよな？俺は更識 一夏。一夏って呼んでくれ。ここに更識は四人も居るからな」

「じゃ、じゃあ俺も。桐ヶ谷 和人だ。俺の事も好きに呼んでくれ」

「次は俺だな。俺は更識蒼。蒼って呼んでくれて構わない」

「うん！ じゃあ一夏に和人に蒼！ これからよろしくね。僕の事もシャルルでいいよ」

自己紹介を終え、更衣室にあった時計を見てみると、集合時間まで殆どなかった

「うわ！ ヤバい、早く着替えないと！」

「もうこんな時間かよ……急がないとな」

「う、うわあ！」

時間が迫っている為、急いで制服を脱ぎ、裸になると、シャルル・デュノアが驚き顔を赤くして後ろを向いた。

何事かと思い、チカもキリトもシャルル・デュノアの方を見る。

「おい、シャルル。早くしないと間に合わないぞ？」

「う、うん……分かってる。着替えるから、その、向こうを向いたままで……ね？」

「いやまあ、別に裸をジロジロと見るつもりはないけど……」

そう言つて、俺達は再び着替え始める。と、言つても俺達三人はジャージなのだが……着替え終わった俺達はアリーナに出ると俺達以外の一組と二組が既に整列していて俺達も並ぶと織斑千冬が歩いてきた

「では、最初に実際にIS同士の模擬戦闘を見てもらおう。オルコット、凰」

「はい！！」

「専用機持ちならば直ぐに始められるな？ 前に出ろ！」

「はあー、面倒くさいなあ〜」

「こういうのは、見せ物みたいであんまり気が進みませんわね…」

選ばれたセシリアと鈴は嫌々と溜息を吐きながら前に出て行く

「それで？ お相手は誰ですか？ 鈴さんとですか？」

「ふん、上等じゃない。誰であろうと相手になるわよ」

お互い戦闘自体には切り替えでやる気を出し、お互いに牽制し合うが…

「慌てるな馬鹿者。相手なら…」

それを軽く止める織斑千冬は空を見上げた、特になんのことない澄み切った青空が広がっているだけなのだ…

「わあああああああああ!!! 退いて下さあああ!!!」

その青空から落ちてくる緑色の機影。

緑色のラファール・リヴァイヴに乗った山田先生が制御出来てないのか大声を上げながらこちらに落ちてきた

「はあ……」

俺は軽く溜息を吐くと「ストライクF」を展開して受け止めた

「あ、ありがとうございます。」

「山田先生、気をつけてください。俺が居なかったら、また面倒なことになっていたかもしれないから」

俺は山田先生にいいながらみんなと避けていたキリト、チカの方を向く

「ソウ……なんで俺達の方を見るんだ？」

「え？だって、面倒なことの理由は二人だからな」

「なんで、そうなるんだよ!？」

「いや、だって、お前ら女性と関わりとラツキースケベに発展するだろ？そうなるとカタナ姉さんとアスナが怒って面倒なことになる」

俺は笑いながらそう言うとかタナ姉さんとアスナが黒いオーラを放って睨んできていて怖かった。

「先生、もしかしてアタシたちの相手って…」

「山田先生ですの？」

「そうだ」

なんだかんだで俺達の話は無視されて授業は進んでいた

二人は若干だが2対1に抵抗を覚えるも、次の織斑千冬の言葉で闘志を燃やす事になる。

「安心しろ、今のお前達では直ぐに負ける」

「っ！ 上等ですわ！」

「やってやろうじゃない！」

そう言つて上昇しようとする二人を俺は近くに移動して二人の頭にチョップをかます。

「い、痛いですわよ、ソウさん！」

「なにすんのよ！」

二人は頭を抑えながら俺に怒鳴りつけてくる。

「お前等、こつちでもあつちでも散々俺が言つたこと忘れたのか！挑発に乗つて熱くなるなつて言つたはずだぞ！」

俺がそう言うのと二人は「あつ」と思い出した顔をする。

「しっかりしてくれよ？お前達は【西風の旅団】のメンバーなんだしその前に国家代表候補生なんだぞ？挑発に乗つて問題を起こしたら大問題になるぞ？わかったか？」

「……はい」

二人は返事をする上昇していく。

「更識兄……俺は自分が正しいと思っただけだ。授業時間が惜しかったら早く始めろ」……チィ……それでは、始め！」

織斑千冬が俺になんか言おうとしたがそんなのどうでも良いのでS A O時代から使っている殺気垂れ流しの命令口調で織斑千冬に言うと言と生徒相手に舌打ちして……模擬戦を始めさせる。

俺がセシリア達と会話しているときから織斑秋羅から睨まれていたがそんなことどうでもよかったので無視して戦闘を見守る

合図と共に相互が一旦距離を取る。

セシリアはビットを展開し、多方向からの波状攻撃を仕掛け、鈴は双天牙月で近距離からの攻撃をする

山田先生は、その攻撃を上手いこと躲したり、シールドで受け止めるなど、ことごとく防ぐ。

「デュノア、山田先生が乗っている機体について解説してみせる。」

「は、はい！」

織斑千冬にいきなりふられたシャルル・デュノアは驚きながらも山田先生のI Sにつ

いて説明をする

「山田先生が乗っている機体は、デユノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。

第二世代最後期の機体でありながら、第二世代でも第三世代に劣らないスペックを持っています。

現在配備されてる量産型ISの中でも世界第三位で、各種戦闘スタイルに合わせて装備の換装が可能です」

「そこまで言うとき空で爆発が起きてセシリアと鈴が落ちてきてアリーナの地面に一つの穴が空く。

「はあ……私達もまだまだですわね……」

「そうね……まだまだ強くないとね……」

二人は落ちてから直ぐにISを解除して髪についた塵などを払って負けて悔しいのか顔は少しくらいが少しスッキリした顔をしていた。

「山田先生はこう見えても『元代表候補生』だ。今くらいの戦闘なんて造作もない」

「昔の話ですよ。それに、代表候補止まりでしたし……」

「これで諸君も、教職員の実力を理解してもらったと思う。今後は、皆敬意をもって接するように。いいな?」

「「はいつ!!」」

織斑千冬が締めくくり、授業に入る。

今日はI Sの装着と歩行の訓練みたいでグループに分かれ、各グループを専用機持ち達がりードすると言う具合に進める事になった。

だが、用意された訓練機の数と専用機持ちの数が合わないため俺とラウラ・ボーデヴィツヒは各グループの補助として動くことと成ったのだが、ラウラ・ボーデヴィツヒは何もいわず直ぐに春菱さんの補助を始める

まあ、そんな事があつたが無事に午前の授業は終えてそれぞれ着替えるために動き出した。

俺も更衣室に行こうとするとカタナ姉さんが話しかけてきた。

「ソウくん……正直教えてちょうだい……ソウくんから見ても」シャルル・デュノア
「くんはどう？」

俺はやっぱりその事かと思いつながら周りに誰もいないことを確認すると俺達だけに聞こえるように言った。

「シャルル・デュノアは男装した女だな」

「ソウくんがそう言うならそうだと思っけど……理由は？」

「授業前の移動の時に故意に手を握って確認した。シャルル・デュノアの手は男にして

は「綺麗過ぎる」んだ。それから、男にしては教室を出るときや女子生徒に追いかけられた時、更衣室で着替えたりするときも変に驚いたり、分かってなかったりと初々しすぎる。隠す気ないレベルだよ」

俺の話を聞いてカタナ姉さんは少し考え込む

「ソウくん…シャルル・デュノアくんが女の子なら男装してまで入ってきた目的はなんだと思う？」

「確実に俺やキリト、チカの機体データだろうな。デュノア社は確か、第三世代 I S を創れないでいる…そこに俺達男の I S 操縦者だ…俺達の機体データを取ればデュノア社は第三世代 I S を作る事ができるだろうからな」

俺の話にカタナ姉さんは頷いてくる

「カタナ姉さん、今回のことは俺に任してくれ。どうせ俺とシャルル・デュノアは相部屋になるだろうからな」

「…生徒会長としても姉としても容認は出来ない…けど、わかったわ。ただし、デュノアくんの正体が分かったら私達を呼んでよね？」

「もちろん。それじゃあ、着替えてくるから屋上で集合な」

「ええ」

俺とカタナ姉さんは話し終わるとそれぞれ着替えに向かった。

続く

貴公子の女の子

2025年 5月14日 IS学園 ソウの部屋

刀奈姉さんと話した後、屋上でSAO・ALO組とシャルルのメンバーで昼食をとった……そこで言えたのはセシリアには料理は作らせない方がいいと言うことと鈴がチカの支えになるうとしていることだ

放課後は生徒会の刀奈姉さんと本音、リハビリを続けているアスナと付き添いのキリトを除いた七人で模擬戦を入れ替えながら途中、シャルル・デュノアと専用機《ラファール・リヴァイヴ・カスタムII》が加わり何回か模擬戦をして今日の訓練を終え、シャルを浴びて各部屋に戻った。

俺は元々チカの妹の春萎さんと1100室で暮らしていたが今日から部屋割りが変わって春萎さんと別々の部屋になった……そのかわり、今日転入してきたシャルル・

デュノアと相部屋になった。

「これから同じ部屋だね。よろしく蒼」

「ああ、よろしくな」

俺が部屋に戻ると先に戻ったシャルル・デュノアが声をかけてきた。

「(話を持ち出すならいまだな)なあ、シャルル」

「なに?」

「君は『何者だ?』」

俺は低い声でシャルル・デュノアに聞くとシャルル・デュノアは少し慌てていた

「……僕はシャルル・デュノアだよ?」

「違うはずだ。フランス政府、デュノア社のコンピューターにハックをかけたが『シャルル・デュノア』と言う人は存在していない。デュノア社で『シャルロット・デュノア』と言う女の子の名前を見つけた。お前じゃないのか?」

俺がそう言うのとシャルル・デュノアは軽くため息を吐いた

「まさか、転入初日で気づかれるなんてね……いつから、僕を怪しんでたの?」

「今朝からだ。確証を得たのはSHRの移動の時、俺が手を握っただろ?あの時、シャルルの手が男にしては『綺麗過ぎる』って思ってたな。俺は家の関係でお偉い方が集まる

パーティーに姉さんと出席する事が多いから自然と同い年の男女と手をつなぐことが多いしダンスパーティーなんて一日で10人の女の子と踊らないと行けなかったからな」

前半まじめに答えたが途中から少し笑いながら話す俺にシャルル・デュノアも少し笑う。

「蒼には適わないな……そうだよ、僕の本当の名はシャルロット・デュノア……「待つてくれ、シャルルがどうして、男装してまでIS学園に来たのかを話すのはみんなを呼んでからだ。いいよな？」う、うん」

俺はシャルルに確認をとるとIS学園に通っているSAO時代の《西風の旅団》メンバーに連絡を入れて部屋に集まってもらう。

「みんな、集まってもらって悪い。シャルルの事についてだが……「僕が話すよ」……わかった」

集まってもらったみんなに俺が話そうとするとシャルルが自分が話すと言ってきたので任せる。

シャルルは深呼吸をすると話し出した。

「僕の本当の名はシャルロット・デュノア。本当は女の子で本妻の子じゃないんだ。」

「『『『ツ！』』』」

ある程度はハツキングで知っていたが直に聞くと応える……他のみんなも驚いていた

「生まれてから、ずっと別々に暮らしていたんだ、その後、お母さんがなくなつてデュノア家の人が迎えに来て、父に引き取られたんだ。

そして、色々検査を受けた結果、僕のＩＳ適正が高いことが解つて、非公式だけど、デュノア社のテストパイロットを勤める事になったんだ。

でも、父に会ったのは２回きり。会話できたのは１時間にもならなかったんだ。」

「『『……』』」

「でも、なんでシャルル君はこの学園に男装してまで入ってきたの？」

皆が黙り込んでしまふなかアスナが男装してまで入ってきたことを聞いた。

「それは、俺から話す。シャルルのデュノア社は量産型ＩＳのリヴァイヴで世界三位なのは知つてると思うけど……でもな……」

「デュノア社は……今、経営危機なんだよ」

俺の言葉の後にシャルルが言うとキリト、アスナ、チカ、サクヤは驚いていた

「経営危機?!」でも、デュノア社は……」

「結局リヴァイヴは第二世代型なんだよ……。セシリアさんやラウラさんが、この学

園に来たのは、新型機、第三世代型 の稼働データを取るためなんだよ。そして、僕が男装してこの学園にきたのはあの人の命令…同じ男なら日本に現れたイレギュラーの四人と接触しやすく、もしかしたらデータをとれるかもしれないから…：僕はね和人、一夏、蒼、織斑秋羅のデータを盗ってこいと言われてるんだよ」

「「「「「……………」」」」」」

全員暗い顔で俯き、黙り込んでしまう。

「はあく……………本当のことを話したら楽になったよ……………。聞いてくれてありがとう。それならごめんね、みんな……………みんなを騙して……………一緒に生活しようとして」

「……………それでいいのか？」

「あなたはそれでいいんですか？」

「え？」

……………ここまで黙っていたサクヤとチカがシャルルに聞くように呟いた

「いいわけないだろツ!!」

「いいわけ無いです!」

そして、チカとめつたに怒鳴らないサクヤが怒鳴った。

「チカ落ち着いて」

「サクヤもな？」

「ツ！……悪い」

「ツ！……ごめんなさい」

「二人ともどうしたの？」

アスナが二人に聞くが二人ともそのまま続ける

「確かに……親がいなければ、子供は生まれない……。」

「ですが、親が子供の未来を好き勝手にしていい理由にはならないです！」

「一夏……サクヤさん……」

シャルルは二人がここまで怒るなんて思っているのか二人の顔を泣きそうな顔で見ている

「俺は……俺は、幼い頃に両親に捨てられ、最近には姉兄に捨てられた……」

「私も……八歳の時に双子の弟と共に父親に捨てられました」

「……ツ！……」

大分前に二人のことを聞いていた俺達と今日の前で告げられたシャルルは驚きと悲しみ、二人の辛そうな顔で顔を歪ませる

「俺のことはいい、会いたいとも思わない」

「私も会いたいとは思いません。ですが、あなたはどうするんです？」

サクヤの問いにシャルルは俯く

「どうって女だつて事が暴露だから、任務は失敗……本国に呼び戻されてよくて牢屋行きかな……」

「どうなるかじゃありません、あなたが……シャルロットさんがどうしたいかです。」

「そ、それは……それは……は……！」

チカとサクヤの話を聞いているうちに、シャルルは顔を暗くさせていた……。

そして、目元からは大粒の涙が見えていた。

「……僕だつて……僕だつて、みんなと一緒にいたいよ……！ みんなと一緒に勉強して、遊んで、仲良くなつて……いろいろな事がしたいよ……っ！でも、無理なんだよ……僕には何もできないんだよ……」

自身の思いをぶち撒けるように言うシャルル。

涙は絶え間なく流れ落ち、目は赤くなり、腫れている。

「ぐすっ……うう……」

「……シャルルは、今もそう願ってるじゃないか……なら、その願いすら叶わないのは嘘だ」

「そうだよ、シャルル君。シャルル君の思いは、決して無駄なんかじゃないんだよ？」

「そうだ。シャルルがしたい事、願っている事は……決して間違いなんかじゃない……そうだよな、カタナ」

「そうよ。それにシャルロットちゃん？なにか勘違いしていると思うけど、この学園に
いる間はそんな事されないわよ？」

「……」まで黙っていた現生徒会長の刀奈姉さんが言ってきた。

「そうか！その手があった！」

キリトとチカが刀奈姉さんの言葉を聞いて納得する。

「IS学園特記事項……本学園の生徒は、その在学中、あらゆる国家、組織、企業に属さない。」

「じゃあ、シャルル君は三年間は大丈夫ってことね！」

「そう言うこと……と、言いたいけど……あの特記事項には穴がある」

「……え？」

少し希望が見え部屋内に喜びが満ちようとした時、俺の言葉で静まり返った

「どういう事なのソウ君？あの特記事項に穴なんて……いえ、確かに大きな穴がある

わね」

「どういう事なんだカタナ？」

特記事項の穴に直ぐに刀奈姉さんだけが気がついた。他のみんなは分からないみたいだった

「確かにI S学園の特記事項には『本学園の生徒は、その在学中、あらゆる国家、組織、企業に属さない』とあるわ……だけど、それは干渉されにくいだけなのよ」

「それが……そういう事か」

「分かったの、キリト君？」

刀奈姉さんの言葉でキリトも『特記事項の穴』に気がついた

「ああ、ソウ達が言っているのは特記事項は国の命令や身内の話には効果が無いということだ。代表候補生のシャルルは特に……そうだろう？」

「ああ、国からの招集や身内……デュノア社の社長が倒れたり、死んだとかデマでも流せばシャルルは帰ざるをえない。更には夏休みなどの長期休みに帰ってこいと言えばそうするしかできない。後は空港で捕まえるなりしてI S学園を『自主退学』とでもすればシャルルは幽閉されてしまう」

俺の言った『特記事項の穴』にシャルルは顔を青ざめ、アスナとサクヤは手を口元に置き、キリトと刀奈姉さんは顔を俯かせ、チカは怒りで拳を握っていた

「一月月……」

「「「「え？」」」」」

こんな状態の中、俺は口から出た言葉にみんな戸惑いを隠せなかった

「二ヶ月で全てを終わらして、シャルル：いや、シャルロット・デュノア、君を助けてやる」

「……して……」

俺の言葉に何かの糸が切れたのかシャルルは涙を流して上手く聞こえなかったが何かを呟いた

「……どうして……どうして!?! どうして、僕を助けようとしてくれるの!?! 僕はソウを……みんなを騙そうとしたんだよ!?! どうして僕に……騙そうとした……騙した僕に優しくできるの!?!」

シャルルは呟いた後、直ぐに俺の胸ぐらを掴み泣きながら怒鳴ってきた。

みんなも怒鳴るシャルルに驚き目を丸くしたりと今のシャルルの行動について来られていなかった

「どうしてか……そうだな。俺はお前のように親に捨てられた奴らを最低でも4人……いや、5人は見てきたんだ」

「え？」

俺の言葉で頭に登っていた血が落ち着いたのかシャルルは手を離れた

「その中でも一人の女の子は赤ん坊とあるスラムに置き去りにされていた……その女の子は五歳の時に暗殺者が狙っていた男にぶつかり殺されそうになったときにその、暗殺者に助けられて暗殺者の知り合いの児童養護施設に預けられた……俺はたまにその養護施設に手伝いに行っていてな……その女の子とはそこで知り合ったんだ」

「ひ、酷い……」

俺の話にみんなはどう言えばいいのか分からずにシャルルだけは「酷い」と一言だけ口に出した

「ああ、酷いもんさ。でもな、その女の子は今はずいぶん働いてちよくちよく連絡やALOでも会えたりしている」

この場のシャルル以外はたまにALOでいなくなることがあることを知っていたのでなんとなくその時なんだろうと思っただけか何度か頷いていた

「まあ、その女の子の話はいい……俺が言いたいのは親の愛を知らない人を俺は助けたんだ。それだけじゃだめか？」

「……うん……ありがたう……ありがたう」

シャルルは泣き出し俺に抱きついてきた。俺はシャルルを泣き止むまで軽く抱きしめてやった

I S 学園・中庭

「いるんだろ？那由多」

シャルルが泣き止むとそのまま寝てしまい、その場を解散させた俺は一人、中庭に脚を運んでいた

「ふふ、ソウに適いませんわね」

真後ろから女性の声が聞こえ振り向くと黒ロングヘアで透き通った蒼い眼、黒と赤のドレスを着た女性……那由多が立っていた

「仕事の依頼だ。内容は『デュノア社の裏』一ヶ月で頼む」

「いいえ、2週間で十分ですわ。2週間でソウのお知りになりたいことをしらべますわ」

俺是那由多の言葉に口元が緩んだ。

「流石、俺の相棒だな。頼りになる、報酬はいつも通りに口座に入れておく」

「もう一つ、近いうちに私と出かけて欲しいのですわ……もちろん、いいですよわね？」

那由多はたまに見せる不適切な笑みをして聞いてきた

「……ああ、いいよ。俺も那由多とは一度出掛けたいと思っていたからな」

「ふふ、ソウは恋人を持つているのに私まで墮とすつもりですか？」

「まさか、那由多とは暫く会えなかつたから過去の気持ちも含めて色々とケジメを付けておきたいんだよ」

俺がそう言うと那由多は笑いだし、俺もつられて笑い出す

「そういう事にさせてもらいましょう。それでは私はこれにてお暇させていただきます。私がいけない間は気をつけて下さいませ」

「お前もな、那由多。それから、その口調……似合っていないぞ」

「ふふ……」

那由多は笑みを浮かべながらこの場を去った。

「酷いわよ、ソウ」

続く

白銀に輝く漆黒の剣

2025年 5月15日 IS学園・第三アリーナ

翌日の放課後、シャルルことシャルロットの秘密を知った俺達六人と本人のシャルル、ALO組のセシリア、鈴、簪、本音の四人。そして、春萎さんを合わせた12人は第三アリーナに集まっていた。

「それじゃあ、今日はどの順番で模擬戦をしようか？」

俺がみんなに聞くように言うとシャルルが手を挙げてきた。

「一夏か和人と模擬戦してみたい」

「じゃあ、俺とやろうぜ」

と、シャルルの申し出にチカが言いだしチカの彼女のカタナ姉さんは呆れながらため息をはく。

「また、チカの悪い癖がでたわね……」

「いいじゃない、カタナちゃん。それでこそ、チカ君なんだし……」

バトルジャンキーな恋人を持つアスナとカタナ姉さんはそんな話をし始める。

「じゃあ、チカとシャルルの模擬戦からでもいいな？ それじゃあ、二人とも準備ができれば始めてくれ」

「ああ／うん」

チカとシャルルはISを展開してゆっくりと上空に上がっていく。

「へえ／シャルル君の専用機はラファールなんだね」

「みたいだな。ラファールをシャルル用にカスタマイズして専用機にしたみたいだな。これはチカが苦戦しそうだな」

「どうしてですか？」

俺の言葉にセシリアが聞いてきた。

「ラファールの特徴としてはバスのスロットの容量が多くて多彩な武器をしまっておけるってことは知ってると思うけど、ラファールを使う時は遠距離武器……銃などの遠距離武器を多くしまっている場合が多い。シャルルはラファールを使っている代表候補生だから銃器を後付武装イコライザに多くしまっているだろうから、俺達みたいなSAO生還者は遠距離武器相手には経験不足なんだよ」

「ソウの言うとおりだな。SAOだと投剣スキルはあったがデュエルの時なんて使うこ

とは無い、ボスも投剣スキルは使っていないから経験不足はいなめないな……」

「そ、それでもわたくしや鈴さんの遠距離武器で散々してましてよ?」

「セシリアや鈴のは一種類での遠距離戦だ……でもな、山田先生みたいに二種類以上の遠距離武器を使用されたら苦戦はするよ」

「苦戦するだけで負けるとは言っていない」

サクヤが面白おかしく発言するとSAO生還者のみんなが笑い出す。

「そろそろ、始まるみたいだな」

俺が上空を見上げながらそう言うときみんな、上空を見上げる。

上空ではチカが片手剣《アヴェンジャー》をシャルルがアサルトライフルを二丁構える。

そして……

「はあああああああああああああ!!」

模擬戦が始まった。

ここでは結果だけ言っておくと俺が言ったとおり序盤はシャルルとラファールに翻弄されてチカが苦戦……だが、実戦経験の差でチカがシャルルの隙について接近しソドスキルを連続で叩き込んでシャルルの負けとなった。

「お疲れ、二人とも。」

「う、うん、ありがとう……」

「お、サンキュー」

二人が降りてきてISを解除すると俺は二人にスポーツドリンクを手渡すと二人ともキヤップをあけてゴクゴクと飲んでいく。

「ぶふあくありがとう、蒼。」

「気にすんな」

それからシャルル、カタナ姉さん、サクヤ三人の銃講座が始まりチカ、キリト、アスナは勉強になったことだろう……それよりも、サクヤが銃のことをやたら詳しいことに驚いた。

そして、銃講座が一段落したところで帰ろうとすると……

「おい。」

「ん？」

声をかけられた俺たちは後ろを振り向くと、Aピットアリーナ出入り口上に白式を纏った織斑秋羅となぜか打鉄を纏った今だ、謹慎処分中の篠ノ之箒がいた。

「何のようだ、織斑。」

「更識一夏と春菱に試合を申し込む」

織斑秋羅がそう言ってきた……………チカと春菱さんを指名してきたことは……………
「リベンジと言う名の復讐とそちら側に居るはずの春菱さんが此方側に居るから気に食わないから兄の立場を利用して潰すつもりか……………代表として言うておく……………貴様等とやり合うつもりはない！」

俺がそう言うのと織斑秋羅は舌打ちをして篠ノ之箒は予想通り話に割り込んできた
「貴様等に無くても私たちにはある！部外者は邪魔だだけ！」

「「その言葉、そっくりお返しするわ（しますわ）（するよ）！」」

篠ノ之箒の言葉に鈴、セシリア、シャルロット、簪がハモって言うてくる

また、篠ノ之箒が何か言おうとしたが織斑秋羅が手で止める

「春菱、俺は失望したよ。家族で、天才の僕を差し置いてそんな凡人の集まりに居るなんてね？」

「下らない……織斑秋羅！私はあなたを家族とは思ったことがありません！私の家族は兄さんだけです！私とは二度と関わらないでください！」

「…春…菱……一体、なにを……言ってるんだ？」

春菱さんの言葉に精神的にやられたのか織斑秋羅の声は震えていた

「気安く呼ばないでください！織斑一夏を殺した人殺し！」

「は、るな……」

春菱さんがそう言つて直ぐに織斑秋羅は膝をつき、篠ノ之箒は春菱さんを睨んだ後、

織斑秋羅の横に座った

「ハルナ、大丈夫ですか？」

そこに漆黒のISを纏つたラウラ・ボーデヴィツヒが現れ春菱さんの従者みたく、春

菱さんの後ろについた

「……さねえ…許さねえ……許さねえぞ！ハルナア！！！！」

何故か春菱さんにキレてく雪片式型を手に襲いかかつてきた織斑秋羅：その後ろには織斑秋羅を追いかけてきた篠ノ之箒が刀を手に来ていた

「俺の言いなりにならない奴なんてみんな、死ねばいい！！俺が……俺様が王様なんだ！！

凡人のてめえーらは俺様の言うことを聞いてればいいんだ
!!!!!!」

「……はあ」

織斑秋羅は発狂しながら俺達に迫ってきていた。

みんな、織斑秋羅の話を無視し戦闘用意をし迎え撃とうとすると春萎さんは軽く溜息を吐くと無言で片手を広げてきた。

俺達は一瞬、春萎さんの行動が分からなかったが……春萎さんの背中を見て言いたいことが分かった

——手を出すな、と

春萎さんは俺達に気迫でそれを伝えると白銀に輝く剣を構えた

「………黒雷一刀」

春萎さんは一言呟くと白銀に輝く剣を……いや、白銀に輝いていた剣は漆黒に変わり黒雷を纏っている剣を織斑秋羅に向かって振るった

「……黒炎一刀」

次に黒炎を剣に纏わせ織斑秋羅の後ろから来ていた篠ノ之箒を打鉄ごと斬り伏せた

続く

哀れな掃除道具と秋、タッグトーナメント

16日

織斑秋羅と篠ノ之箒との一悶着があつた翌日のホームルームでそれは起こつた

「本日は皆さんにお知らせがあります。一週間後に控えた学年別トーナメントですが、少々変更することに先生方で決定しました。」

山田先生が朝のホームルームでクラス全体に周知する。

俺達以外の生徒は咄嗟の出来事にざわめき出すが……

「静かにしろ！山田先生がまだ話しているだろう!!」

と織斑千冬が一喝し、クラス全体はすぐに静かになる。

「ええと、先日のクラス対抗戦での襲撃者の件がまた起こるとも限らないということ、急遽、タッグトーナメントに決定いたしました。ペアを申請したい方は、トーナメント開始の明日までに生徒会もしくは職員室にお伝えください。もし、ペアを作らない方はトーナメント当日に抽選がありますのでその際にペアが決定します」

山田先生がそう言うがもう一つの理由があると俺は思う……それは、昨日の事件……と、いうなの逆恨みからのフルボッコ……昨日、俺達にけしかけてきた織斑秋羅と謹慎中に抜け出してきた篠ノ之箒を春萎さんが一撃で沈めた……あの後、発覚したことだが篠ノ之箒と織斑秋羅は篠ノ之箒の監視教員に全治三ヶ月の怪我を負わせ、更に打鉄を使用しようとしていた生徒に全治2週間の怪我を負わせていたらしい

織斑秋羅と篠ノ之箒は春萎さんに斬られた後に気絶し、そのまま教員達に捕縛され停学……事実上の退学状態で学園の地下独房に入れられているらしい。それから織斑秋羅の姉の織斑千冬も監督不行きで減俸処分、来年以降は担任が持てなくなったとか

そんなこともあって生徒の身の安全のためにタッグトーナメントにしたのかも知れない

「「「桐ヶ谷くん！」」」」

「「「「更識くん！」」」」」

「「「「「デュノアくん！」」」」」」

授業が終わってお昼休み……俺達[!]が食堂に行こうとすると女子に囲まれた

「「「「「私達とタッグ組んで下さい!!」」」」」」

みんながみんな、同じ理由で集ま[!]りてきていたが……

「ごめんな、俺はサクヤと組むんだ」

「俺もカタナと組むことになってる」

「俺……も、明日奈と組むことになってる」

「えっと、僕も簪さんと組むことになってるからごめんね?」

俺達は既にタッグトーナメントになることをカタナ姉さんに聞いていた為、今朝早くに生徒会に申請しておいた。

女子生徒たちは物凄く残念そうにしていて、何人かは『専用機持ちズルい』とか言っていたが刀奈姉さんとアスナがニッコリ笑うと顔を青くして教室から飛び出ていった。

◇16日 放課後・夕方

サクヤとの連携を確認しながらの特訓をした帰り、俺は一人で歩いていた

『どうしてですか!?!』

「!!」

歩いていると大声が聞こえてとっさに声がする方に向かい木の裏に隠れた。

そこにいたのは春萎さんとラウラ・ボーデヴィツヒでラウラ・ボーデヴィツヒが春萎さんに詰め寄っていた

『どうして、ハルナはカドラを使わないのですか!?!カドラを使えばアナタは!』

『そこまでにしてラウラ』

「ッ!」

詰め寄っていたラウラ・ボーデヴィツヒと木に隠れていた俺は春萎さんの低いドスの利いた声に驚き身震いした。

『確かに私の本気を使えば私は誰にも負けるつもりは無い……だけど、それは政府が許さなかった織斑だからってね。だから私はカドラを使わないんじゃない、使えないの。それに私は一本だけでもいいんだよ。兄さんと一緒の一本でもね。話はそれだけだよ？ 察に戻って、私はもう暫くここににいるから』

『い、YES』

ラウラ・ボーデヴィツヒは春萎さんの気迫に負けトボトボとこの場を後にした

『それで……ソウさん、そこにいるのはわかってますよ』

「あ、あはは、い、いつから気がついてたのかな？」

「最初からです。私はこれでも目がいいのでソウさんがそこに隠れるのが見えたくて」

俺は気づかれていた事に気がついていなかった事に若干ショックを受けていた

「それよりも……ソウさん……私……私……」

「本気を出せる武器が欲しい……か？」

「ツ………はい。私はもう、後悔をしたくないんです……兄さんの為にも私のためにもお願いします！」

春萎さんは凶星を突かれて少し同様していたが目は本気で涙を流していた

「わかった……色々手を尽くしてみるよ。春菱さんの話が必要になったら春菱さんを呼ぶよ」

俺はそれだけ言うところの場を後にし寮に向かって歩いて行った

続く

新たな剣と要塞化学校

20日 I S学園・応接室

「後は本人の意見を聞くだけだな」

春萎さんから武器の話を受けてから四日後の放課後、俺はサクヤとの特訓を休みにしてI S学園内で割と警備が硬い応接室に一人で春萎さんを待っていた

『織斑春萎、入ります』

俺がここに来て数分後、春萎さんがノックして入ってきた

「お疲れさま、春萎さん。タッグトーナメント前なのに来て貰って悪いな」

「あ、いえ。謝らないでください。私こそすみません。タッグトーナメント前の大切な時間なのに時間を作ってくれて…」

俺が謝ると春萎さんも謝ってくる…お互い謝り終わると少し笑った

「もう少し待ってな。もう少しで連絡が…つと、来たな」

俺がそう言うのと応接室の壁に付けられているモニターが付き、黒髪ロングの女性が映

し出される

『こちらではお久しぶりになりますね。ソウさん。それから春萎さん』

「そうですね、ランさん」

「お久しぶりです、藍子さん」

モニターに映った女性が生還者学校に通いながらレクト・更識家合同I S開発チームに所属しているランさんこと、紺野こんの 藍子あいちさんだ

『それで、今回は春萎さん用の双剣双銃の武器が欲しいとの事でした筈ですが間違いございませんか?』

「はい。付け加えると春萎さんと春萎さんの専用機“白夜”を《倉持技研》から合同I S開発チームに所属を変えるもです」

『その件もありましたね。では、まずは武器のお話からしましょうか……』

ランさんはいつもとは違い専用機を受理した時のような緊迫感があった

『実のところを言いますと双剣双銃は以前に作ったプロトタイプがあるので其方を春萎さん用にチューンして見ましよう。此方がそのデータになります』

ランさんはそう言うともモニターに銃身が紫で黒い銃と白い剣、銃身が赤で白い銃と黒紫の剣が映し出された

『銃形態が黒紫で剣形態が白いのがく懐剣かいけんナナキ・夜天やてんで銃形態が赤白で剣形態が黒

紫のがく懐剣ナナキ・白楼《はくろう》>になりませす。』

「<戒剣ナナキ・夜天>に……<戒剣ナナキ・白楼《はくろう》>……戒めを断ち切る剣……どちらも私の運命を切り開く私好みの剣ですな……」

春萎さんは何処かりズに武器を作ってもらった時の俺達に似た笑みを浮かべていた
「ですが……いいんですか？その様な武器を私がいただいても……」

「ただ、春萎さんは戒剣ナナキを貰うことに少し戸惑っていた

「ええ、勿論ですよ。<戒剣ナナキ・夜天>も<戒剣ナナキ・白楼《はくろう》>もプロトタイプ。いわば試作品です。完成品を作るにも試作品でデータ収集を行わなければ作ること出来ませぬ。それに銃剣を作ってもISに乗れて使える学生は居ませんから、課題で作った、銃剣を埃を被せて置くのもアレなんで探していたんですよ。使用してくれる人を』

「そ、そうなんですか……（アレ？）」

「（ん？今、なんかおかしいなと言わなかったか？）」

ランさんの話の後半……俺と春萎さんはある違和感を感じていた。

話の後半で物凄いいことを言っていた様な気がした

「えっと、藍子さん？先程、『銃剣を作ってもISに乗れて使える学生は居ませんから、課題で作った』って言いましたよね？合同IS開発チームで作ったんじゃないんですか

「？」

『そう言えば、言ってませんでしたね。オフ会の次の週から生還者学校では希望者だけでＩＳの機体、武器の開発、ＩＳの整備などを学べるようになったんですよ。ＩＳ関係の教師に国際ＩＳ委員会でソフト面担当のキラ・ヤマトさん。ハード面担当のアスラ・ザラさん。機体整備担当のコジロー・マードックさんと整備担当兼設計担当でイオリ・セイさんにイアン・ヴァステイさん、リンダ・ヴァステイさん。ＩＳ操縦者育成担当でシン・アスカさん、ルナマリア・ホークさん、キラさんやザラさんもこちらを兼任担当してます。後は、生還者学校の理事長はＩＳ委員会委員長のラクス・クラインさん、学校長に委員会日本支部支部長のカガリ・ユラ・アスハさんとなっています』

「……………」

春萎さんは驚きの余りに、俺は生還者学校が要塞と化していたこととメンバーに頭が痛くなっていた

『ソウさん。大丈夫でしょうか？顔色が悪いようですが…………』

「いえ、大丈夫…………ただ、そのメンツは…………生還者学校を要塞にしちゃったんですね…………余り知られてませんがラクスさん、カガリさん、マードックさん、リンダさんにイアンさん除いて全員、ＩＳ操縦者で、キラさん、アスランさん、シンさんは一人で国一つを半日足らずでイオリさんは詳しくは知りませんが全員が揃えば世界征服なん

て3日以内に出来てしまう戦力なんです」

『「……………」』

俺のこの発言にランさんと春菱さんはかなりの驚きようなのか口を開けて黙り固まってしまう

『「こ、この話はこのくらいにして春菱さん。戒剣ナナキの二本を受け取ってもらえますか？」』

「あ、は、はい。私でよろしければぜひ、受け取らせて貰います！」

春菱さんは動揺から戻ってきて直ぐに武器のことを振られたせいかまた、少し動揺してからランさんに頭を下げた

続く

タッグトーナメント開戦

23日 I S 学園・第三アリーナ、男子更衣室

「いよいよだな。当たっても全力で行くからな?」

タッグトーナメント当日、織斑秋羅達の事件以降、表では何も無くこの日を迎えられるていた

「ああ、勿論、俺もだ。今日こそ、お前に勝つてやるからな」

「俺もだ」

俺、チカ、キリトの三人はそう言うのと拳を軽く合わせた

「僕も忘れないでよね?」

俺達、三人の中にシャルルも加わり四人で拳を軽く合わせた

「この3組と春萎さん・ラウラ・ボーデヴィツヒ組、鈴・セシリア組の計5組………悪

いが優勝は俺とサクヤが頂く、どの組にも渡さんからな？」

俺が口調を強めて三人に言うのと三人も目が鋭くなる、特にチカとキリトはSAOのフィールドボスやフロアボス戦の時の様な威圧感を感じた

「絶対、負けない!!」

俺が言うのとキリト達、三人も気合いを入れるように大声で叫んだ

「……クス」

「……はは」

四人で宣言するとシャルルが笑い、つられて俺達も少し笑う。

「お、対戦表が出てきた……え？」

「……!!??」

モニターに対戦表が映し出されて直ぐに俺達は一回戦の対戦に目を向けるとそこには既に出てこれない筈の二人の名前があった

一回戦 織斑春菱&ラウラ・ボーデヴィツヒペア VS 織斑秋羅&篠ノ之箒ペア

23日 第三アリーナ・Aピット

「春菱さんもラウラ・ボーデヴィツヒも頑張れよ」

「ハルナ頑張れ」

「はい、ありがとうございます。ソウさん、兄さん」

更衣室から出て俺達は春菱さん達がいるAピットに足を運んでいた

「……それにしても……どうしてアイツらがトーナメントにでてるんだ？」

「織斑先生……あの人が学園長に頼んだらしいわよ？なんでも最後のチャンスを上げて欲しいとかなんとか……はあ……」

刀奈姉さんが溜息を吐きながら言っているとタッグパートナーで彼氏でもあるチカが肩を叩いていた

「私にもある意味のですね……織斑を切り裂くチャンス……物にします……」

春菱さんの言葉はこの場の空気を冷たく塗りつぶした

「あんまり気負うなよ、ハルナ。いつも通りのお前で良いんだ」

「……クス。わかってますよ、兄さん」

チカのおかげかこの場の空気が元に戻り、チカと春萎さんをみんな、微笑みながら見ている

『各ペアは出撃してください』

そうしているとアナウンスが聞こえてきてそれから直ぐにアリーナはブーイングの嵐で響めいていた

「まあ、こうなるよな」

「当たり前ですね。あの人はそれ程のことをしたのでですから……」

俺が軽く溜息を吐きながら言っているが春萎さんは顔色一つ変えずに言い、専用機の白夜を展開しラウラ・ボーデヴィツヒも漆黒のISを展開する

「それでは、私達は行きますね」

「ああ、無理だけはするなよ」

春萎さんはそう言うってから俺達に背中を向けた

「兄さんには言われたくありませんよ」

春萎さんはそれだけ言うのとアリーナに飛び立っていき、それに続いてラウラ・ボーデヴィツヒも飛び出していった

アリーナ内

『わあああああああああ』

先程とは違い私達がアリーナに出ると大歓声が響きわたるが相手の白式を纏った織斑秋羅と打鉄を纏った篠ノ之箒が私の事を睨んできているのにお前だけ太陽のしたって

「よお、春菱？兄と幼馴染みが苦汁を舐めさせられているのにお前だけ太陽のしたって不公平だよなあ？」

「……その頭は飾りですか？いい加減に覚えてください。貴方達を兄や幼馴染みとは一度も思ったことはありません。それから私と関わらないでと言いましたよね？」

「お前!?千冬さんと秋羅の妹なのにその言い方はなんだ!？」

秋羅をきつちり、切り捨てる様に言うと篠ノ之がいつも通りに馬鹿馬鹿しく怒鳴ってきた

「五月蠅いです。その二人が私にとって汚点なんです。姉の所為で専用機に自分とは違う戦闘スタイルが乗せられますしどこに行っても『織斑』って事でちやほやされますし

学校では分からなくても「織斑」だからって勝手に出来ると思われる。秋羅が出来る所為で余計に私と兄さんは苦勞したんです。それに姉……あの人は家族を見ようともしないで自分の理想だけを押し付けてくるし秋羅と一緒に家事なんて何も出来ないダメ人間……はつきり言つて私は二人とも大嫌いです」

「!?!?!」

私がそう切り捨てる様に言つと織斑と篠ノ之が余りにも驚いた顔をしていた

『試合開始!!』

「いいぜ……いいぜ……いいぜ、いいぜ!!もう、いい!お前をぶつ潰して誰が兄なのか身体の随まで教えてやらああ!!」

織斑は試合開始のアナウンスが流れると発狂し私を妹に向けられないようなキチガイの目を向けてきた

「……其方がその変態な気なら勝手にどうぞ……ですが……」

私はソウさんと藍子さんのお陰で手に入れた新しい剣……<戒剣ナナキ・夜天>と<戒剣ナナキ・白楼>を展開して<夜天>の剣先を向けた

「日本国家代表候補生 “元最強” でカドラのハルナの異名を持つ私を貴方、如きが潰せると思わないことです」

私は少し低い声で言うとか<夜天>とか<白楼>を構え直しました

続く

タッグトーナメント一回戦 春・黒兎VS秋・箒

23日 第三アリーナ

「だあああああああああああ!!!」

「はあああああああああ!!!」

第三アリーナで始まった一年のタッグトーナメント初戦……私とラウラの相手は織斑と篠ノ之……

相手の二人はラウラには目をくれず私だけに一方的に剣を振るってきました。ですが、そんなことは想定内でこの試合はラウラは待機を頼んでありますから最初から私一人で相手にするつもりでしたので好都合です。

「デカイ口を叩いておいて防戦一方じゃないか!!弱くなつたな!!」

「貴方方に最初から本気を出すと思ってるのですか?最初から二刀流でもありがたいと

思ってください。」

「クツ！減らず口を！切り刻む！」

そう言つて篠ノ之は打鉄の刀を大振りで振るつてきましたが私は難なく後方に下がり回避しました

「避けるな卑怯者！」

「意味の分からない事を言ってるんじゃないです……ふっ！」

「カア！」

意味の分からない事を言っている篠ノ之に呆れていると織斑と篠ノ之が同時攻撃を仕掛けてきて織斑を蹴りとばし篠ノ之のを避けた

「ああ!!当たれよクソ！」

「当てたいなら、それなりの努力をしてください。無努力の塊の貴方達の剣が私に届く道理は無いです」

「黙れ!!」

篠ノ之と織斑は私に否定された事でキレたのか怒鳴り散らし私に向かつてきた

アリーナ観客席

「春菱ちゃん……一刀時より強いね」

「ああ。下手すれば俺より強いかも知れないな……」

観客席で試合を見ていた俺達、IS組《西風の旅団》の二刀流のキリトとその彼女……いや、妻のアスナが春菱さんを見て驚いていた

「あの動き……あの剣裁き……それに最初に言ってた言葉……間違いはない……」

「簪ちゃんどうかしたのかしら？」

「かんちゃんどうしたの？」

「……ここで春菱さんと同じく日本代表候補生の簪が何かを思い出し呟いていた

「……春菱さんが試合開始直後に言ってた『カドラのハルナ』と試合中の動きを見て……思いついた。代表候補生に双剣双銃のラファール使いがいた……名前は調べてなかったから私は知らなかったけど……皆、あるアニメを元にしてこう呼んでたカドラのハルナと……それからもう一つ……どうして、そう呼ばれるようになったかは分からないけど……こゝも呼ばれていた……白の魔王って」

「……白の魔王か……ハルナが嫌がりそうだな」

「うん。白の魔王は代表候補生の中でも禁句だったらしい……」

簪が話してくれた春菱さんの事に俺達は苦笑いするしか出来なかった

アリーナ内

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

試合開始から20分が経過した頃、相手の織斑と篠ノ之は息を荒くし物凄い汗を掻いていたが、私はこの20分、攻撃せずに全てを回避と防御をされていて軽く汗をかいた程度だった

「そんな程度で私と戦おうと思っていたのですか？ 甘いです、激甘です」

私が吐き捨てる用に言うのと織斑と篠ノ之は息を荒くしながら睨んできました

「ぜえ……ぜえ……ふ……不公平……だろ……ぜえ……兄妹……ぜえ……で……ここまぜえ……差がぜえ……あるぜえ……なんてぜえ……よ（なんで、どいつもこいつも俺の言うことを気かねんだよ！！）」

「ハア……ハア……きハア……貴様ハア……イカ……サマ……を……ガア！」

私は篠ノ之の途切れ途切れの言葉に一瞬、ムツとして反射的にかいけん戒剣ナナキ・夜天やてん>の引き金を引き、光の槍は篠ノ之の体を掠めた

「あんまり、巫山戯たことを言わないでくださいね？今度は本当に風穴を開けますよ？」
「ッ!!」

織斑と篠ノ之は私のほんの少しの殺気に当てられて顔色を悪くしていた

「箒!こうなったら挟み撃ちだ!」

「分かった!」

織斑の指示で私を挟み撃ちするように二人が動きだし私を中心に直線になると……

「はああああああああ!!!」

「だああああああああ!!!」

二人とも《イグニツシヨ瞬ン・ブ加ースト速》で急接近し剣を振るってきた

「……挟み撃ちは……相手が逃げようとしている時に使う物ですよ……それに……」

私はそう言い二人が止められない距離に到達すると《イグニツシヨ瞬ン・ブ加ースト速》で上空に移動しました

当然の如く織斑と篠ノ之は壮大に激突キスを行い地面にうつ伏せで倒れてました

「SEも意識もあるみたいですね?なら……私から最初で最後の一撃と屈辱を差し上げます」

私は試合終了のアナウンスが聞こえない事と相手のIS2機ともSEが切れてないのを確認してからく戒かいけん剣ナナキ・夜や天てん>とく戒かいけん剣ナナキ・白はくろう楼ろう>を二人に向かって構え

ました

すると、＜戒劍ナナキ・夜天＞と＜戒劍ナナキ・白楼＞から二本ずつの薬莖……計四発の弾丸が弾き出され、＜夜天＞と＜白楼＞の銃身の先からピンク色の球体が現れ大きくなつていく

「……シユート」

私が引き金を引くと＜夜天＞と＜白楼＞の銃身の先から出ていたピンク色の球体から極大ビームが放たれ織斑と篠ノ之を呑み込んだ

続く

歌姫な委員長と暴君な冬

第三アリーナ・Aピット

「お疲れ、ハルナ」

「お疲れさま」

「ありがとうございます。兄さん、ソウさん」

観客席から見ていた俺達は試合終了後、開始前と同じくAピットに脚を運んでいた

「それにしても春萎さんが二刀流を使うなんてびっくりしたよ」

「ああ。俺も最初は驚いた。身近に二刀流を使う人が二人もいたなんてな」

「えつと、和人さんも二刀流を使うのですか？」

話の中でキリトの事が気になったのか春萎さんはキリトも二刀流を使うのかと聞いていた

「ん？ああ。SAOにはエクストラスキルの上位、一人しか習得できないスキル：ユ

二刀流スキルが10個あつてな」

「キリト君、その中の一つ、《二刀流》の習得者なんだよ」

「そうなんですか……」

二刀流のキリト、その妻のアスナが春菱さんの間に答えるように話すと春菱さんは何処か嬉しそうな顔をしていた

「春菱さん、どうかしたの？」

「あ、いえ、二刀流使用者がソウさん以外に居て少し嬉しかったんです。代表候補生にも二刀流使用者が要るにはいるんですが……ソウさん並の使い手は殆どいなくて……真面な二刀流使用者との戦いがしたくて少しだけウズウズしていたんですよ」

「アハハハ……春菱さんも一夏君と並ぶくらいのバトルジャンキーなんだね」

春菱さんの話にあすなは苦笑いしていて兄のチカも少しだけ顔を引きつらせていた

「織斑妹ここにいたか……むっ？お前達がどうしてここにいる？」

「こんな感じに話しているとこの場に全くと言うほどに相応しくない織斑千冬が入ってきた」

「友達の勝利を分かち合うために来てはいけないのですか？」

「チイ織斑妹には私と織斑兄が居れば良い、お前等など邪魔だ」

生徒向かって平然と舌打ちをし春萎さんを物扱いしている目の前の此奴に誰もが嫌な顔をした

「ご冗談を、織斑先生？私は貴方と秋羅の物でも何でも無いです。私は私です。貴方方が私を縛ろうとするのでしたら私は織斑を捨てきります」

春萎さんが強めの口調で織斑千冬に言う。織斑千冬は何時よりもより強く春萎さんを睨んでいた

「織斑妹、何を分かんことを言っている？」

「意味が分からないことを言っているのは其方です。まあ、この話をしに来たのでは無いのでしょうか？そろそろ、本題に入ってください。その前に……ソウさん、兄さん、鈴以外の皆さんは少し離れていてくれませんか？」

「ええ、分かったわ。ほら、皆、行きましょう」

春萎さんに言われ刀奈姉さんに連れられて俺、チカ、鈴以外の皆はピットを出て行った

「ンンツ。織斑妹、お前がさっきの試合で使っていた武器を没収する。威力が高すぎる、それにお前は剣、一本だったはずだろ？」

やはりその事かとこの場にいる俺達四人はそう思った

「お断りします。威力自体はラウラのレールガンと変わりません。それに、ラウラの

レールガンとは違い、彼処までの威力を出すのにエネルギーチャージで30分は必要なので。それから私は元々、双剣双銃使いです。何処かの姉の所為で専用機に剣一本しか積まれなかっただけです」

「これは決定事項だ。異論は認めん、良いから渡せ」

「まただ、と鈴以外の俺達三人は思った。

此奴は自分なら何でもして良いとでも思っているのだろうか？俺達の専用機のこといい、今回の事といい、此奴にそんな権限があるはずも無いのに無理矢理にねじ曲げて自分だから良いと思っていやがる

「……あんまり調子に乗るなよ。クソ教師？」

「「ッ!!」」

「教師に向かつてなんだ、その口は、更識兄？」

俺はどうとう溜まりに溜まっていた怒りが爆発してしまった

「意味の分からねえ暴君教師に敬意もクソもあるか。お前、入学直ぐにラクスさん…… I S 委員会委員長に言われたこと何にも身に染みてないようだな？」

「ふん！小娘にどう言われようと私には関係ない」

ガリイ！

歯を削った音が俺の口から出たが俺はそんなことを構わずに叫ぼうとすると……

「やはり、貴方にはわたくしの言葉は届いていなかったのですね」

「「「「?????
!!」」」」

ピイトの入口から声が聞こえ其方を見ると茶髪の青年……キラ・ヤマトさんとキラさんの前をピンク髪の女性がピイトの入口から歩いてきていた

「…キラさんに…ラクスさん?」

「お久しぶりですわ、蒼。それから、織斑千冬さん」

「ここは、関係者以外、立ち入り禁止だ。委員会の者でも……」学園長から許可は貰って下りますわ」チィ」

I S 委員会の委員長に向かって舌打ちする織斑千冬を見て春菱さん、鈴、チカは呆れ顔していたが俺はある意味の心配をしていた。

「織斑さん。委員会からの最後通告です。貴方が今まで通りの暴君を貫くのでしたら私達、I S 委員会とI S 学園上層部は貴方のI S 学園からの除名を致す事になります」

「ツ!!どうして私が辞めさせられなければならないのですか?!?!」

「うんなのも分かんねえのかよ?」

ラクスさんの言葉に怒鳴る織斑千冬に俺は冷たく呟いた

「お前の教育やお前自身が間違ってるんだよ!自分なら……ブリュンヒルデの自分なら何

でもやって良いとも思ってるのか!? 人の I S を勝手に用意しようとしたり人の I S の武器を勝手に没収しようとなんてして良いのか!?!」

「それは……わ、私には生徒の安全を……」

「何が安全だ!! 安全のためになら暴君しても良いってのか!?! 人の I S を勝手に用意しようとしたり人の I S の武器を勝手に没収しようとなんてしていいのか!?! 安全の為だったらお前の弟と腰巾着の二人を試合だとても解放してる方が危ないんじゃないか!?!」

「……」

俺の怒りの声に織斑千冬は黙ってしまふ。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

「ソウ、もう、その辺で良いからね? 後は僕達、委員会の仕事だから」

「あ、はい」

キラさんの声で漸く冷静になれた俺は呼吸を整えながら少し後ろに下がった

「蒼の言うとおりですよ。織斑さん。貴方は『ブリュンヒルデ』と言う称号を『権力』と間違えて見ておりませんか? 以前にも言いましたが『ブリュンヒルデ』は称号であり名譽であり『権力』や『力』ではありませんわ。その事を間違わないで下さい。そして、行動する前に考えてください、周りへの影響を……貴女が動いた事による未来を考えてください。それではわたくしたちはこれで」

ラクスさんはそれだけ言っているとピットから出て行った

続く

姉ができるから妹が絶対できるなんてことはありえないしそれを決めつけるなんてあっちゃいけないだよ

2025年 5月23日 ソウ・シャルルの部屋

一回戦、春萎さん・ラウラ・ボーデヴィツヒペアは圧勝で終わり、そしてタッグトーナメントはその一回戦で始まり、二回戦・三回戦と続いていく……もちろん、俺達S A O生還者組、A L O組のペアはいとも簡単に勝利を収めて全ペアで四回戦目を迎えることができた。

四回戦からは明日に行うってことになり俺は夕食を食べた後自室でサクヤと明日からの作戦をシミュレーションをしていたのだが……

「すう……すう……すう……すう……」

「寝ちゃったか……」

シミュレーションをしていき大体9時位になるとサクヤが俺のベットで寝てしまっ
た。

「疲れたんだろうな……今日は頑張ってたから……」

『うん、そうだと思うよ』

どこからか声が聞こえて、俺は左手薬指にはめている指輪、まだ、仮初めの指輪だが
俺とゆうちゃんの大切で思い出が詰まっている指輪《エンジンライト》を見るとアメジ
ストの方だけが点滅していた……俺は投射型ディスプレイを起動させると病室の
ベットから上半身を上げているゆうちゃんの姿が映る

「やあ、ゆうちゃん……今日の試合見てたの？」

『うん……指輪越しから見たよ、春菱の試合から《西風》のメンバーの全部ね。一番す
ごかったのは春菱が二刀流使ったことかな？ボク本当に驚いちゃったよ。』

ゆうちゃんもやつぱり、春菱さんのことに驚いていたみたいだった

「俺も最初聞いて、昔の春菱さんの戦闘記録を見たときは驚いたよ。」

『でも、どうしてカドラを使わなかったの？』

「代表候補生になった初期はラファールでのカドラで候補生最強の座に着いたけど、専
用機に自分のスタイルとは違う……自分の姉のスタイルの剣一本しか搭載されてなく
てさらに、政府から『姉ができたんだから妹もできる』とかで武器の申請は通らなかつ

たらしいよ」

『それ酷いよ……春菱は春菱でしょ？人の戦闘スタイルを他人が勝手に変えて言い訳ないじゃん！それに、春菱の姉……千冬だっけ？その人も何も言っていない感じだよね？』

ゆうちゃんは怒っているのかほつぺたを膨らませて滅多に年上の名前を呼び捨てにしないが織斑千冬には普通に呼び捨てにしていた

「うん……織斑千冬も『私の妹ならそのくらいできて当然だ』って言ったらしい……織斑家って本当に家族を何だと思ってるんだよ……」

『ボクもそう思うよ。家族はクローンみたいな同じ人で構成された集まりじゃないよ……家族は血がつながっている全く別人との集まり……姉が出来て妹が出来るとして限らないし、妹が出来て姉が出来ないこともたくさんあるはずだよ……だから、姉ができるから妹が絶対できるなんてことはありもしないしそれを決めつけるなんてあつちやいけないんだよ兄弟だって同じことだよ……』

「ああ、ゆうちゃんの言うとおりで……家族の形はそれぞれ違うかもしれないけど基礎はゆうちゃんの言うとおりで変わらない……基礎すらできてない家族なんて家族でも何でもないよ……」

俺達はそんな話をして両方とも暗くなってしまう

「あつと、暗くなつちやダメだな」

「そうだね。あつ！そう言えば今日ね、ボク、松葉杖無しでも歩けるようになったよ！」
「ほんと!?よかつたね、ゆうちゃん!じゃあ、もう少しで退院できるね!」

俺はゆうちゃんの現状がうれしくて仕方がなつた……松葉杖無しで歩けるようになつたつてことは、もう少しで退院出来と言うことだ……うれしくないわけ無い

「うん!ありがとうソー! それで、退院予定日が6月20日なんだけど……」

「なにがなんでもその日、ソウキと美乃梨ちゃん、連れて迎えに行くよ!」

俺はサクヤが寝ていることも忘れてハイテンションでゆうちゃんと話していた

「ほんと!?ありがとう!あつ、サクヤ起きちゃうかもしれないから今日はここまでかな

?おやすみ、ソー!」

「うん!おやすみ、ゆうちゃん!」

俺たちはお互いにそう言つて通信を切つた

「ようやくゆうちゃんも退院か……うれしいな……よし、明日も頑張ろう!」

俺はそう呟いて寝間着に着替えてサクヤを起こさないように布団に入り込み、寝た

……

一方、ソウの大声で起きていたサクヤは……

「(ソウさんの声で起きちゃいましたけど……出るに出来ませんし……それにソウさんの顔が近いですし……うう……恥ずかしいです……)」

顔を赤くして恥ずかしかった

続く

ソウさんは卑怯です

2025年 5月24日

タッグトーナメント二日目の朝、食堂……そこはかなり気まずい空気が流れていた
なぜなら……

「……………」

ある一つのペア……俺とサクヤのペアのサクヤが赤い顔をして同じ席にいるが少し距離を置いて食べているのだ……

『ねえ、シャルルくん、昨日お兄ちゃん達に何かあつた？』

『う、うん……僕が簪さんの部屋から帰った後なんだけど……二人とも蒼のベットで寝ていたんだ……………』

『なるほど……そう言うこと……全くお兄ちゃんは……』

『ねえ、簪さん……蒼つてサクヤさんと付き合っているのかな？ たまに、《ゆうちゃん》つて人と連絡取り合ってるみたいだけど……』

『うん、サクヤさんとは“友達以上恋人未満”な関係でお兄ちゃんの本命は連絡しているゆうちゃん……ユウキさんだよ』

2つ位離れた席から簪とシャルロットの話が聞こえてきてその話でサクヤはもつと顔を赤くしていた

同時刻 サクヤ side

私、サクヤは朝から顔を赤くしていた……それは、昨夜……ソウさんが言った言葉……

『サクヤ、好きだよ……』

と、呟いた……私はその言葉を聞いてからドキドキして寝れませんでした……私は昔……暗殺者をしていた頃は寝ることが極端に少ない時もありましたから睡眠不足になることは無いのですが……寝言ですが、好きな人から《好き》言われますとSAOの時とは違ってドキドキして心臓がバクバクで張り裂けそうで……どうにかなりそうで朝、ソウさんが起きてからどうすればいいのかわからなくて少し距離を置いてしまっている

食堂でも、同じテーブルに着くけど……少し距離を空けてしまっている……さらに、簪さんとシャルロットさんの話が聞こえてきて簪さんの“友達以上恋人未満”の言葉にさらに、顔を赤くしてしまってます

ソウ side Aピット

四回戦……俺とサクヤペアは四回戦初戦で相手は春菱さん、ラウラ・ボーデヴィツヒペアなのだが、結局俺とサクヤはほとんど会話できていなかった……

「サクヤ……」

「は、はい……」

俺がサクヤを呼ぶとサクヤは返事をするがどこかぎこちなかった

「……………ごめん」

俺はもう、考えるのを止めて謝った

「……………ソウさん？」

「サクヤがどうして距離を置いてて顔を赤くしているのかは俺にはわからない……………だけど、俺が何かを……………サクヤがそうなることをしたのはなんとなくわかる……………だからごめん……………」

俺がそう言って謝るとサクヤは俯く

「……………ソウさんは……………卑怯です」

「サクヤ？」

俺がサクヤの名前を呟くとサクヤは顔を上げてくるが……………サクヤは涙を流していて顔がクシヤクシヤになっていた

「ソウさんは卑怯です……………ソウさんが悪い訳じゃないのに……………謝って……………本当は……………私が悪いのに……………いつも……………先に謝ってきて……………私が……………色々、悩んできたことが……………どうでもよくなつて……………それで……………それで……………」

「……………サクヤ」

俺はもう、見てられなくてサクヤを優しく抱きしめる

「ごめん……………サクヤ……………確かに俺は卑怯だ……………どうしようもないくらいに卑怯さ。みんなの……………《西風の旅団》の闇を一人で抱えて自分が悪いように見せて仲間を守ろうとして……………なんでもかんでも謝っている卑怯さ……………」

「本当です……………なんでもかんでも一人で無茶して抱えて……………謝ってる……………卑怯すぎる程に優しい人です……………だから、私は……………ソウさんのことが好きになつたんです……………」

俺はサクヤの『好き』って言葉にドキツとした……………すると、サクヤは涙を拭きながら少し離れる

「ソウさん……………この試合が終わったら……………私……………話したいことがあります……………」

「……………わかった……………この試合、終わったら聞くよ……………だから……………」

「わかってます……………この試合……………」

「勝とう（勝ちます）！」

俺たちは二人で宣言して大空に羽ばたいた

続く

タッグトーナメント4回戦 蒼・夜VS春・黒兎

2025年 5月24日

「待っていましたよ」

俺とサクヤがアリーナに出ると既にISを纏った春萎さんとラウラ・ボーデヴィツヒが待っていた

《待たせてすまない》

「待たせてすみません」

俺達が謝ると春萎さんは『クス』と笑う

「いいですよ、待つのはもうなれましたから……それに……」

春萎さんは言いながら俺達に……いや、俺にかいけん戒剣ナナキ・白楼はくろうを向けてくる

「私の本当の力……《カドラ》で蒼さんに勝ちたかったですから……私も相当な負けず嫌いですから……蒼さんともなども、模擬戦して……何度も思いました……カドラな

らもつと良い試合を……もつと食らいつけると……だから！蒼さんと藍子さんに
＜戒劍ナナキ・夜天＞と＜戒劍ナナキ・白楼＞を貫って本当にうれしかった！この恩は
私の全力戦闘で……私の戦いで返します！」

春萎さんは高々と俺に宣言してきた……

《いいだろう……その挑戦……乗った！春萎さんの……お前の全力をこの二双の死
神に見せて見ろ！俺は逃げも隠れもしない！とくと見せて見ろ！お前の劍舞を！戦い
を！》

俺はそう言いながら二本の＜ガーベラ・ストレート＞を抜刀し構える

《俺も全力で答えよう！》

俺は右手の＜ガーベラ・ストレート＞を春萎さんに向ける

「ふふつ、そうでなければ面白くありません！さあ、始めましょう！私達の戦いを！」

《ああ、来い！サクヤはラウラ・ボーデヴィツヒを頼む！》

「はい！」

「ラウラもサクヤさんをお願い！」

「YES」

俺と春萎さんはお互いのペア……俺はサクヤに、春萎さんはラウラ・ボーデヴィツヒ
に指示を出してお互い武器を構える……そして……

『試合開始!』

《はあああああああああああああああああああああ
「やあああああああああああああああああああああ
!!!」!!!

開始の合図と共に俺と春菱さんが武器を構えて同時に飛び出します。

《はあああああああああああああああああああああ
「やあああああああああああああああああああああ
!!!」!!!

俺と春菱さんは同時に剣を振るう

《グッ!》

「クッ!」

お互いの剣がぶつかりあってお互いに一度距離を取る……だが、直ぐに立て直して俺は再度突っ込む………だけど……

「甘いです!」

《グッ!》

俺が突っ込んでいくことを読んで春菱さんは銃モードに切り替えて連射してくる……俺は避けきれずに何発かあたってしまう

《まだまだ！》

今度は俺だと言わんばかりに急接近して二本の〈ガーベラ・ストレート〉で切り裂く「きゃあー！」

春菱さんは二本の〈ガーベラ・ストレート〉の衝撃でたじろぐ……さらに、俺は春菱さんの後ろを取って追撃する

「きゃあー！」

春菱さんはまた、たじろいだので再度追撃しようとするが……

「そう簡単にやられません！」

春菱さんは瞬時に体制を直して弾丸を二発発射する……俺が避けようとすると、弾丸は目の前で爆発……中からスモークが溢れて俺の視界を遮った

《（なるほど……良い手だ……だけどな……）》

俺はスツと目を閉じる

《（下からは爆発音……これはサクヤとラウラ・ボーデヴィツヒだな……春菱さんは……右！）》

俺は音と気配で周りの状況を着かんで春菱さんの場所を見つけ出す

《そこだ!》

「え!?……………クツ!」

右側にくガーベラ・ストレート>を振るうと突っ込んできていた春萎さんが驚いたような顔をして少し遅れるが<戒剣かいけんナナキ・白楼はくろう>で防ぐ

《やっぱり、強いな……………《カドラのハルナ》は伊達じやないってことか……………》

「知ってたんですね……………私の二つ名《カドラのハルナ》を……………」

俺がそう言うとき春萎さんは少し暗くなって呟いた

《ああ、武器を頼まれた時に調べてな……………戦闘記録を見たときは本当に強いと思った……………でも……………》

「専用機……………白夜には剣一本しか装備させて貰えなかった……………政府に聞いたですと『日本代表は剣で戦うのは当たり前で銃火器など要らない!それに、君はあのブリュンヒルデの妹だ、姉が出来るのだから君も出来るだろう?』と言われて……………織斑先生にも『おまえは私の妹だ。私に出来たんだお前も出来るだろう』って、言われました……………兄さんが起きる半年前のことです……………」

春萎さんは俺と戦いながらそのときの事を話してくれた

「半年後……………私は兄さんが起きてくれて嬉しかった……………だけど、私じゃあ、兄さんの心の傷……………織斑先生と秋羅から捨てられた傷は癒せなかった……………だから、兄さんは居な

くなつてしまった……《カドラのハルナ》だった私……その頃の私だったら一緒に
ついで行くことをしたかも……いや、したはずです……でも、私には……なにも守るこ
とができない一本の刀しかなかった……」

《春萎さん……》

剣を打ち合いながら話していると春萎さんの剣から悔しさや悲しさの感情が流れて
くる

「ですが、今は違います！今の私には真の《白夜》とく戒剣かいけんナナキ・夜天やてんとく戒剣かいけんナ
キ・白楼はくろうが！兄さんや蒼さん……みんなとの絆が！《カドラ》がある！だから、私
は次に進みます！今日この試合が私の新たな旅立ちです！」

春萎さんはそう高々に声を上げた……だけど……一つの叫びがこの試合を大
きく変えてしまう

「来るな来るな来るな来るな来るなあああああああああああああ……!!!」
サクヤと戦っていたラウラ・ボーデヴィツヒが叫びだして……シユヴァルツェア・
レーゲンが黒い液体になってラウラ・ボーデヴィツヒを包み……ある一人の女性を形
どった……それは……

「……………織斑……………先生？」

春菱さんの姉（一応）である織斑千冬と第2回モンド・グロツソまで使用していた彼女の専用機暮桜だった

続く

VS過去の亡霊I

2025年 5月24日

学年別タッグトーナメント四回戦……私……ラウラは更識蒼と神無月サクヤペアの神無月サクヤと戦っていると何者かが囁きかけてきた

『(汝、力を求めるか?)』

「力……?何の事だ?!」

『(何者にも負けない力を求めるか?)』

自らの変革を望むか?より強い力を欲するか?』』

謎の声は私に力を授けようとしている。だが、私にはそれを絶対に受け入れられない理由がある

「断る!力は自分の鍛錬で得るもの!まして強大すぎる力はただの暴力にすぎん!与えられた力などまがい物だ!」

か研究も許されていないシステムなんだが……………」

「ドイツは……………研究してボーデヴィツヒさんの機体に搭載したんですね……………相変わらず汚い国ですね……………」

サクヤは一応の祖国のドイツについて毒づく

《春萎さん……………春萎さんはどうしたい?》

俺は春萎さんに問いかける……………春萎さんは少しラウラ・ボーデヴィツヒだった織斑千冬を睨みつけると言ってきた

「私が……………ラウラを助けて……………過去を断ち切ります!」

俺はそう言った春萎さんの肩に手を置く

《私じゃない……………私達だ……………一人でやろうとしなくていい……………俺が……………俺達が一緒に手伝ってやる》

「でも……………」

《でも、じゃない……………仲間の手伝いをするのは当たり前だ……………だから頼れ、【西風の旅団】の仲間であり家族の俺達をな》

「蒼さん……………」

俺がそう言うのと春萎さんの反対の肩にサクヤが手を置く

「ソウさんの言うとおりでですよ、春萎さん……………私達は仲間です……………家族の手伝う

のは当たり前です……」

「サクヤさん………お願ひします」

《ああ!!》

「はー」

春菱さんが眩き、俺とサクヤは大きく頷いた

「さて……手助けするとは言ったが………どうやって助けたものか………」

俺は春菱さんにラウラ・ボーデヴィツヒを助ける手伝いをするとは言ったものの、助ける方法を見つけれないで居た………そのかわり、偽織斑千冬と暮桜は雪片を構えているだけで一向に動こうとしない………そのはずだった………

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

「はあああああああああああああ!!!!」

二人のバカがCピットから飛び出してきた!!!!暮桜擬きに剣を振るう……教師の無許可

で入ってきて直ぐに相手に向かうバカは……ただ二人……拘束されている筈の織斑織斑（秋羅）之（箒）の悪兄と掃除道具だ

「あの……ばか……」

《…仕方ない…あの織斑秋羅らにはしばらく囿になって貰うか…アキ……みんなに……『みんな、もう動いてるよ〜後はソウの指示で出撃できるよ〜』……わかっただ……じゃあ、アキみんなに出撃の指示を頼む『わかったよ〜』》

俺とアキがそんな会話をして直ぐにAピットからキリト、チカ、アスナの三人がそれぞれのISを纏ってアリーナに出てきた

「ソウ！」

「ソウ君！」

三人は俺達の後ろに降り立つ。

目の前ではバカ織斑秋羅と篠ノ之箒がボロボロな白式と訓練機の打鉄で暮桜擬きになんとか、食らいついていた

《三人とも来てくれてありがとう……状況はわかってる通りなのだが……》

俺が最後口ごもってしまふ

「ソウ君にも助ける方法がわからないんだね？」

《ああ……アスナの言うとおり、方法がわからない……いや、あるにはある……一

瞬でSEをかき消す一撃を放つことができれば救い出せる……そのはずなんだが……

「俺達のソードスキルならできるが………ボーデヴィツヒを殺しかねない……白式の零落白夜も使い手によってはボーデヴィツヒを殺しかねないか……」

キリトがそう呟く………その通りでキリト達のソードスキルや織斑秋羅の零落白夜ではラウラ・ボーデヴィツヒを殺しかねない………だけど、それ以外に助けるすが思いつかない………

「………私に考えがあります……」

俺たち五人がどうしようかと考えていると春萎さんが呟く

「本当か？」

「はい………私ならラウラを助けることができます………みなさん………私に力を貸して下さい？ 私の考えでは心許ないと思いますが………お願いします？ ラウラを………私の大切な友達を助ける力を貸して下さい！」

春萎さんは俺たちに頭を下げてくる………そんな、春萎さんの両肩にサクヤとチカが手を置く

「春萎の気持ちはわかった………力を貸す、助けよう、ラウラ・ボーデヴィツヒをな！」

「私もです。元祖国に良いように扱われてしまっている人を………春萎さんの大事な友達

を見捨てることはできません！」

春萎さんの双子の兄のチカと元祖国にいいように扱われているラウラ・ボーデヴィツヒに思うところがあるサクヤが春萎さんに力強く言った、アスナとキリトも同じ気持ちだった

《…元々俺も答えは決まっている…助けよう、ラウラ・ボーデヴィツヒを春萎さんの大事な友達をね……だけど、俺は先に奴らを叩きのめす》

俺がそう言うときアリーナで一人無駄に頑張っている織斑秋羅と篠ノ之箒を遠目に見る

《その間、俺は指示とかは出せない……その間は……『私がパパやママに指示を出せばいいんですね、にいにい』その通り、お願いねユイちゃん。『任せて下さい！』》
俺が話しているとキリト・アスナの愛娘ユイちゃんがキリトの専用機《キリト》から声をだしてくれる

《指示はユイちゃんに一任するからそちらは任せる……俺は織斑秋羅らを叩きのめしてくるから……みんなに一つだけ……無茶はしないでくれ……いいな？》

「ああ！」

「うん！」

「はい！」

俺が一言言うとみんな力強く頷いた

続く

VS過去の亡霊Ⅱ

2025年 5月24日

「クソガアアアアアアアアアア
「クソガアアアアアアアアアア」

俺はみんなと別れて一人戦って………
である織斑秋羅と腰巾着の篠ノ之箒の方に近づいていた………
たいに（本当にバカ）ラウラ・ボーデヴィツヒだった、織斑千冬と暮桜擬きにボロボロの白式と単一装備、雪片式型と打鉄を持って向かつてはたたき落とされていた。

《……無意味な奴らだ》

「なあ!？」

俺は右の〈ガーベラ・ストレート〉をしまい、左の〈ガーベラ・ストレート〉を構えて無策で突っ込んでいく織斑秋羅と篠ノ之箒の剣を受け止める

《……邪魔アだあ!》

<ガーベラ・ストレート>で薙ぎ払い、二人を回し蹴りで地面に落とす

「……おま……え……おれ……さまの……じやま……を、する……な」

《ほお? まだ、意識があるんだな? クラス代表決定戦の時に比べて成長したな? ええ?》

「ク……ソ、が」

意識があることに内心、少し驚いたが所詮、それだけで大した成長とは言えないが俺は織斑秋羅を煽った

《まあ、いい……俺は、お前とそこに転がってる雑魚の処分をしにきただけだ……》
俺はそれだけ言うと織斑秋羅の顔を掴んだ

「お、おい……や、や……めろ」

《次、目を覚ます時は病院だろうが仕方ねえよな? アデュー!!》

俺は織斑秋羅の静止を聞かずに一番近いピットに投げ込み、同じく篠ノ之箒も投げ込んだ

《さて……後は任せるよ……頑張つて春萎さん》

同時刻 春萎side

「春萎ちゃん、私達はなにをすればいいの？」

蒼さんが秋羅の方に行つて直ぐに明日奈さんが聞いてきました

「はい……みなさんには……私の……<戒剣ナナキ・夜天>と<戒剣ナナキ・白楼>のフルバーストを発動するまでの時間稼ぎをお願いします……最短でも10分はかかります……それに……発動までのチャージ中……私は無防備になつてしまいますので……その……壁役をお願いします」

「わかった！」

「うん、任せて！」

そう言つて明日奈さん、和人さん、兄さんは武器を構えて暮桜擬きの方に飛んでいつてしまいました

「……皆さん……優しすぎますよ……」

「それが、皆さんですから……ソウさんや皆が優しいから私はここに入れるんです……私は

…私を受け入れてくれた皆さんが私は…好きです」

「…サクヤさん…そうですね…そう思います…」

私はサクヤさんと同じ思いを感じて居ました…そして、皆さんの気持ちに応えたいと心の底から思いました

「力を貸してください…<夜天やてん>、<白楼はくろう>…和人さんや明日奈さん…ソウさんやサクヤさん…兄さんの思いに応えたいんです…だから、お願い！」

〈ああ!!分かつてるぜ!!見せてやれ!〉

〈私達が力を貸すわ!!〉

〈だから、頑張つて!!〉

〈ウチらが応援しとる!!〉

私の声が…想いが届いたのか、男性の声と三人の女性の声が聞こえると光が私を包み込んだ

春菱に変化が起こる少し前

『薙ぎ払い攻撃…3、2、1、来ます!』

ユイの攻撃カウントで暮桜擬きの薙ぎ払いを避ける和人達、三人だったが攻めあぐねていた

「…最強の称号は伊達じゃないな…」

「うん、そうだね。動きに無駄が少ないし切り返しが早いから攻めきれない」

「俺が隙を作ります」

「分かった…頼むぞ、チカ!」

「お願いね、チカ君」

「はい!」

二人に任せられた、一夏は返事をするに居合の構えで暮桜擬きに突っ込んでいく

暮桜擬きは雪片を一夏に向かって振るうが一夏はそれを待っていたのか雪片に合わせて抜刀して雪片を弾いた

「スイツチ!!」

「せやあああああああ!!!」

「はあああああああ!!!」

一夏の掛け声で一夏と入れ替わりで細剣<ランベントライト>を持った明日奈と片手剣<エリユシデータ>を持った和人が暮桜擬きの懐に入り込み、細剣ソードスキル

《リニア》と片手剣ソードスキル《スラント》を叩きこんだ

『左薙ぎ払い攻撃、来ます!』

「はああああああああ!!!」

「チカ（君）!?!」

ユイの声で和人と明日奈は防御の態勢を取ると暮桜擬きの雪片と和人、明日奈の間に一夏が割り込み、再び雪片を弾いた

「ツ!はああああああ!!!」

和人は一瞬の戸惑いから直ぐ立て直し暮桜擬きに片手剣水平四連撃ソードスキル《ホリゾンタル・スクエア》を放ち、後退する

「チカ、大丈夫か!?!」

「あ、はい。俺は大丈夫なんですけど雪片を弾いた時に《バリア無効化攻撃》の剣先に掠つてもう、エネルギーが底をつきかけてます」

「もう、無茶はダメだよ、チカ君?」

「そうだと、チカ?」

「……はい、すみません、軽率でした」

和人、明日奈の心配の声に一夏は軽率だったと謝ると彼が纏っていた《チカ》が粒子とかして消えてしまった

「……エネルギー切れ……すみません、俺……」

「大丈夫だよ、チカ君。後は私達に任せてね、キリト君?」

「ああ!」

戦えなくなった一夏を護るように和人と明日奈が一夏の正面に立ち、武器を構えようとすると……

「!?!?!」

春菱とサクヤがいる筈の一夏達と反対の場所で光があふれ出した

「春菱!!」

「おい!チカ!ツ!」

「キリト君!!きやあ!」

春菱を心配した一夏が走り出し、それを止めようとした和人だったが暮桜擬きの斬撃に阻まれ、隣の明日奈ごと、アリーナの壁まで吹き飛ばされてしまった

「キリトさん!アスナさん!」

和人と明日奈が吹き飛ばされたのを見た、一夏は脚を止め、心配して叫ぶ

「…クソ!」

叫んだ事で暮桜擬きに察知され、一夏は暮桜擬きに狙われてしまう

「ツ!……不味い!」

狙われた一夏は逃げようとするが暮桜擬きは剣を一夏に向かって振り下ろした……が、一夏に当たる前に何者かに阻まれた

「……全く、兄さんは後先、考え無しで行動するからこうなるんです」

それは、漆黒の3対3の翼、ISスーツの上から着てるような白が基調で黄色のインナーに外が白銀と金色で内が黒のジャケットを着て左手に刀身が白銀でそれ以外が桃色基調で銀色のく懐剣ナナキ>と同型の剣、右手には刀身が黒紫でそれ以外が赤基調で白のく懐剣ナナキ>の同型の剣が握っていた、一夏の妹の春萎だった

続く

VS過去の亡霊Ⅲ 星々の輝き

2025年 5月24日

「兄さん、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

新しい姿をした春萎に一夏は戸惑いを隠せずに行った

「春萎、そんなコスプレしてどうしたんだ？ “白夜”はどうした？ ツ!!」

春萎は一夏の間「クスツ」と笑った後、左手の＜戒剣かいけんナナキ＞と同型の剣の剣先を一夏の喉に突きつけた

「兄さん、次にコスプレといいましたら斬りますよ？」

「ご、ごめんなさい」

「クスツ、別に怒ってないのでいいですよ」

一夏は許してくれた春菱の顔を見て冷や汗を掻き、身震いしていた、そして、同時に一夏は「春菱を本気で怒らせたらダメだ」と思い知らされた

「「《春菱(さん)(ちゃん)!!》」」

春菱、一夏の所に蒼、和人、明日奈、サクヤの四人が合流した

「皆さん!!和人さん、明日奈さん、蒼さんは大丈夫ですか?」

《ああ、俺は問題ない。少し憂さ晴らしが出来たからな》

「うん。私達も大丈夫だよ。春菱ちゃんの方は大丈夫?その……服?はどうしたの?」

「アスナさん……信じては貰えないかも知れませんが……春菱さんが着ているのは『白夜

』なんです」

「「《ええ!?》」」

春菱が姿が変わった所を一番間近で見ていたサクヤの言葉に蒼達、四人は驚きの声を上げた。

春菱は春菱で「クスツ」と笑うと五人の前でヒラリと一回転した

「サクヤさんが仰つてゐることはことは本当のことですよ。これが私の新たな『白夜』の

姿です!新しい名前は『夜天の白双騎士』になります」

《『夜天の白双騎士』か……良い名前だ……な、皆?》

春菱の新しい機体と名前に蒼に続いて皆、頷いた

「これ以上の話は後でですね……早く、ラウラを助けないと行けませんから……」

「あ、ああ。分かってる……春菱、俺達はどうすればいいんだ？」

一夏が春菱に聞くと春菱は首を縦に振った

「皆さんは私の後ろにいてください。既に準備は出来てますから……後は、私がやります！」

春菱はそう言うのとゆつくりと上昇し暮桜擬きより少し高い程度の高さで止まった

「このくらいなら……最小の被害で抑えられますね……皆さん！何があっても私の前に出ないでください！巻き添えにしたりありませんから!!」

「!!」《ああ!! (うん) (はい)》「!!!」

春菱の忠告に春菱の後ろに待機している五人とも頷くと春菱は両手のく戒剣ナナキかいけんを暮桜擬きに向けた

「ッ————!!!」

春菱の行動に気が付いた暮桜擬きは剣を構え、春菱に振るおうとする

「……バインドー！」

春菱が呟きと共にく右手の戒剣ナナキかいけんの引き金を引き、エネルギー散弾が発射されあたりに散らばる

「————!!!」

エネルギー散弾が散らばり当たった箇所から白い鎖が形成され暮桜擬きの身動きを止めた

「……ラウラ……直ぐに助けるから……」

春菱がそう言うのと両手のく戒剣ナナキから七発ずつ……計14発の薬莖が弾き出され、銃口に桃色の巨大なエネルギーの球体が形成されて行く……そして……

「……我が敵を穿て、星々の輝き……我が友を護れ……破滅の閃光……
スターライト・ブレイカー
 《星 光 破》」

春菱のく戒剣ナナキから眩い閃光が放たれ暮桜擬きを呑み込んだ

「……………」

私は目を覚ました。外がオレンジ色に染まっていることから夕方なのはわかり

……消毒液の臭いから、自分は保健室にいると言う事を察した。

「気が付いたか？」

ふと声を掛けられ、声の方に向くと、そこにはドイツ時代の教官……織斑千冬がいた。

「織斑先生……」

織斑先生は私がこの学園に来たとき、少しだけ話した時と同じく、睨みつけてきた

「……お前はなぜ、力を拒んだ？」

「……前にも言いましたが、私はハルナのそばに要れば良いだけです。そこには……織斑先生の言う絶対の力は必要ありません……ましてや、与えられた力など必要ありません！」

「愚かになつたなラウラ！なら、貴様はあの、落ち零れのラウラ・ボーデヴィツヒに戻るというのだな！」

「それは……」

「そんなことありません！」

私が織斑先生の言葉に口ごもると……隣のベッドからハルナの怒鳴り声が聞こえてきて振り向くとベッドに横たわつてるハルナが目に入った

「織斑妹、今は……」

パシイイイイイ

織斑先生がハルナに何かを言おうとすると……ベッドから降りてきたハルナが、実の姉である織斑先生の頬を叩いた

「ラウラは……私の大切な友達は落ち零れではありません！たとえ、織斑先生が言う、絶対の力が無くてもラウラは私の最高の友達です！」

ハルナはそう言うと言いつを量子変換させてハルナはツインテールの髪の毛を切り落としてショートヘアになってしまう

「千冬姉さん……私があなたの妹……織斑春菱として、会話をするのは今日……この会話だけです……私は兄さんの所に行きます。もう、あなたと秋羅とは赤の他人になります」

「……何を……言つて……いるんだ？」

ハルナの言葉と行動に動揺を隠せない織斑先生が掠れた声でハルナに聞いた

「サヨナラ、千冬姉さんここから出て行ってください」

ハルナは最後にそう言うと言いつ織斑先生は訳も分からない顔をしていたがハルナの言うとおり医務室を出て行った

続
く

金の貴公子と夏、春の新たな旅立ち

5月24日　I S学園　寮　蒼・シャルルの部屋

「おかえり、蒼」

俺はラウラ・ボーデヴィツヒが暴走した事件後、皆と別れ、ある人物と連絡を取りあつてから部屋に戻つた

「ああ」

部屋には既にシャルルが戻っており、俺達はそんな言葉を交わすと俺は自分のベッドに倒れ込むように横になる

「あのね、蒼……一夏達には先に言つただけど、僕ね……女としてI S学園に入り直すことにしたんだ……」

「そうか……その方が良いだろうな……それも含めて俺からも話しておかなくちやなら

ないことがある」

「ど、どうかしたの?」

ベットから起き上がり、シャルルの目を見て低めのドーンで言うと、少し驚いたのかシャルルの声は少しびくついていた

「結論から言うとデュノア社は社長、アルベール・デュノアの妻……シャルルにしたら義母だな。社長夫人、ロゼ・デュノアに乗っ取られていた」

「!？」

俺の話しにシャルルは驚きを隠せず声も出せなかった

「ほ、本当なの?」

「ああ、本当だ。俺の相棒の那由多が調べたから確実だ。那由多からの調査報告書もあるから見てくれ」

「う、うん………!!??」

俺がテーブルの引き出しから取り出したファイルをシャルルを見ると目を見開いていた

「そこに書いてある通り、デュノア社、倒産の危機の理由は会社のお金や製造したラファールや装備、部品、パーツを不正に“ある組織”に流しているからで、デュノア社社長のアルベール・デュノアは社長室で監禁状態、二人の息子のロベルト・デュノアは

人当たりはよく見えるが、自分好みの女を無理矢理に自分の物にするクソツ振りでロゼ・デュノアの協力者でもある……」

「うん。ロベルトの周りにはいつも女性がいるし……それに、ぼ、僕もやられかけた……」

シャルル……いや、シャルロットはロベルトの事を思い出したのが体を震わせた

「……痛……」

それを見かねた俺はシャルルのおでこに軽くデコピンして落ち着かせた

「落ち着け、シャルル……いや、シャルロット。ここには、お前の怖い物は無いし、お前に危害を与える物は無い。それに、ロベルトは既に死んだ」

「え？し、死んだの？」

俺の話に掠れた声でシャルルが聞いてきて俺は小さく頷いた

「ああ。今回の事件後に相棒に聞いたんだが……俺が知る中でも最高の暗殺者……コードネーム【桜】に手を出したらしい。偶然にしては運がなかったな」

「……」

平然と話す俺にシャルルは黙り込んでしまう

「さて……ここからが聞かなくちゃ行けないんだが……」どうして、平然としてられるの!? ……」

「僕もロベルトは嫌いだけど、人が死んでるんだよ!?!?どうして、蒼は平然としてられるの!?!」

戸籍上の兄、ロベルトの死……人の死を聞いていても平然としている俺にシャルルが怒鳴ってきた

「……そんなの当たり前じゃ無いか……人はいずれ死ぬ……それだけだ。それに俺はずっと【裏世界】で生きてきたからな。赤の他人が一人死んだくらいでどうもしないしどうでもいい」

「……そ、蒼って酷い人なんだね……始めて知ったよ」

「だろうな。俺は自分と関わった人以外ははどうでもいい……と、言うよりは自分と関わった人……友達や仲間以外は見ないようにしている……俺、一人で助けることができないのはこの手に収まる人くらいで俺には全てを護る力なんて無い」

「じゃ、じゃあ、蒼は仲間が助けを求めているなら助けるの?」

「ああ。勿論、自分に出来るやり方で俺の命に代えても【西風】のメンバーは助けるしそれ以外の仲間や友達も助けてやるさ。勿論、お前の事もな、シャルル」

シャルルの目の前に拳を突きつけながら俺が言うのとシャルルは涙を流し始めた

「おいおい、ここに泣くか?」

「だ、だって、ずっとお母さん以外に優しくしてくれた人が居なかつたから……蒼達に出会

わなかつたら僕……僕……」

泣くシャルルの頭を俺は軽く撫でた

「泣きたいときに泣けばいい、この場には俺しかいないしここには、優しい仲間が沢山いる……お前が助けを求めたら助けてくれる仲間が側にいてくれる」

「う、うん。ありがとう」

「気にするな。それから……いや、何でも無い」

涙を吹き微笑んでくるシャルルに素っ気なく返しあることを言おうとするが思いとどまった

「……そろそろ、話を戻すな？シャルル、お前に聞いておかなくちや行けないことが一つ、お前は父親を助けたいか？」

「……正直、分からない。男装させて、ここに入れたのはあの人だし、あの人と話したのは1時間にも満たない……でも、そうだね。助けたい……かな。僕の唯一の家族でもあるし……僕のお父さん……なんだよね……僕ってまだ、幸せ者なんだよね……」

「そうだな、俺の知り合いは家族に捨てられた者や家族を亡くした者もいる……今もどこにいるか分かるしやり直せるかも知れないお前は幸せ者だろうな……他の者からすれば俺もだな……」

お互いに顔を俯かせて俺とシャルルは話し、途中から涙を流してしまふ

「おっと、しみりしちやったな……それで、シャルルは父親を助けたんだよな？」

「あ、う、うん。僕の唯一の家族ではあるから……助けてちゃんと話がしたいかな」

「わかった。勿論、俺も力を貸す。そもそも俺が言い出したことだからな」

「あ、ありがとう。蒼」

そう話していると部屋のドアがノックされた

『更識くん、デュノアくんいらつしやいますか？』

「あ、はい。すぐ開けますね」

ノックしたのは山田先生だった。

「どうしたんですか？」

「えつとですね、桐ヶ谷くん、更識くん達、デュノアくんに伝えとかないといけないことがありました……」

「男子のみですか？」

「はい！ つつというのですね、朗報です！ 曜日と時間が限られますが男子の大浴場の使用が解禁されました！」

「本当ですか!？」

「はい、本当です!」

俺はずっと、お風呂(湯船)!!に入ってた所為か舞い上がってしまった

「やったああああああああ!!!山田先生、ありがとうございます!」

「いいいえ、そんな……そこまぢ喜んでくれるとは……桐ヶ谷くんと一夏くんには先に伝えておきましたので私はこれで失礼しますね」

「はい!ありがとうございます」

山田先生はそう言うってから行ってしまった。

25日 IS学園・大浴場

「ふにゃ〜」

俺は一人、風呂に入って久々の湯船で変な声を出してしまう。

あの後、シャルルは流石に誘うわけにはいかなないのでキリト、チカを誘ったのだが妻の相手をしていたために断られてしまい一人で入ることになった

「最近、性格少し変わったかもな……」

旧ALOの須郷と対面してから今までSAOの頃に比べるとトゲトゲしている

……ゆうちゃんに会う時間が少ないからかもしれないが……織斑秋羅とかにあたってしまっている……ゆうちゃんが学園に入れば変わるかもしれないが……正直、ゆうちゃんの前では今のままだと何かをやらかしてしまいかもしれない……

ガラガラガラ

そう考えていると扉が開く音が聞こえる

(誰だろう？湯煙でうまく気づけないな……いや、気配を消すのがうまい……)

ポチャン

俺が誰なのか考えていると誰かがお風呂に入ってきた。

「……………ソウさん」

「……………さ、サクヤ？」

俺の前にタオルで前を隠しているサクヤが現れる……そう、入ってきたのはサクヤだったのだ

「お隣失礼しますね」

そう言つてサクヤは俺の右隣に来て湯に浸かり出す

「……………サクヤどうしたんだ？」

「……すみません……迷惑なのは分かっています……だけど、臨海学習の頃にはユウキさん

がIS学園に来れるかもって前にソウさんが言ってたので……こうして隣に入れることが少なくなると思うと……すみません……迷惑ですよね……」

サクヤはそう言うとおようと立ち上がろうとする……俺はサクヤの後ろから手を回して少し強引だったが俺の方に引つ張り密着する

「サクヤ……お前を迷惑なんて思わない……隣にいたければ居ればいいさ……」
「でも……ソウさんにはユウキさんが……」

「確かに俺はゆうちゃん……ユウキのことが好きだし大切だ……だけどな、《西風の旅団》のみんなも大切なんだ……サクヤやシリカが俺に好意を向けてくるなら俺はそれに答える……だから、サクヤの好きにしてくれ」

「……はい……ソウさん……」

俺がそう言うとおくとサクヤは泣き出し俺に抱きついてくる……

俺は理性的にやばかったがなんとか抑えながら泣きやむのを待った。

5月30日 一年一組

タッグトーナメントから約一週間、タッグトーナメントは中止となり、俺達、IS学園の生徒は日常に戻っていた。

あの日から織斑秋羅、篠ノ之箒の姿を見た者はいなく、織斑千冬も教室に顔を出して居なかった

そして、タッグトーナメントでのラウラ暴走事件でドイツは一切の関与を否定し全ての責任をラウラ・ボーデヴィツヒになすりつけ軍からの除名と国外追放させたらしいが学園はラウラ・ボーデヴィツヒの機体に「VTシステム」が組み込まれていたことを国際IS委員会に報告、IS委員会はドイツの軍、研究施設の立ち入り調査を行い、言い逃れの出来ない証拠を見付け出し、ドイツは信用をどん底にまで落とし更にはラウラ・ボーデヴィツヒの部隊、黒兔隊がドイツ軍からISを持つて離脱したとニュース＋キラさんに聞いた。

そして、当の本人であるラウラ・ボーデヴィツヒは事件の翌日に1組の皆の前で謝罪した……

まあ、そんなことは置いて置き、今日はシャルル……いや、シャルロットが女の子として、春萎さんが新たな自分としてIS学園に転校してくる日だ

朝のSHRの時間になり山田先生が入ってくる

「ええつと……今日は言い知らせと悪い知らせがあります、まずは転校生を……紹介します……。つて言いますか、転校生っていうのかしら……？　これ」

悪い知らせと転校生の言葉でクラスがざわめき出す

それはそうだが、つい最近ラウラとシシャルロットの二人が着たばかりなので、昨日にはあんなことがあったのだざわめくのは当たり前だ。

「えつと……とりあえず、入ってきて貰いましょう……どうぞ」

教室の扉が開く。

そこから入ってきたのは、女子の制服を着たシシャルル・デュノアと銀髪ショートヘアの春萎さん、更には春萎さんの兄チカこと、一夏だった

「シシャルロット・デュノアです！ みなさん、改めてよろしくお願いします」

「神薙・S・ハルナです。改めてよろしく申し上げます」

「同じく神薙・S・イチカだ。改めてよろしく願います」

『『『』』』』』

沈黙が、その教室内を支配した。

「ええつと、デュノアくんは、デュノアさん……つという事でした……」

『『『』』』』』

女装のことを知っていた俺達以外の生徒の声が重なり合う。

「えっ？ と言う事は、デュノアくんって女？」

「美少年じゃなくて、美少女だったて訊ね！」

「って蒼くん！ 同居してて知らなかったわけじゃ……………！」

「そ、そうよね！ って言うか、一週間前位から男子が大浴場、使えるようになったよね!?」

一人の女子生徒（俺達三人以外は女子生徒なのだが）の一言によつて俺達三人に視線が集まる

「言つておくが、シャルロットは一週間前、大浴場を使つていない。同居人の俺が証言する……………それで、山田先生…悪い知らせは何なんでしょう？」

俺はそう言つてみんなを静かにしてから山田先生に聞いた

「あつ、はい。残念なことに織斑先生が諸事情で一組の担任をお止めになりました。今日からは私が担任となり、副担任は一応織斑先生が受け持つことになりました」

山田先生の言葉に女子生徒たちが叫んだのは言うまでもない

続く

臨海前日常回

木綿季の日 1

6月20日 港北総合病院

「……うん。朝……」

一人部屋の病室のベッドで紫髪の少女が目を覚ました。

少女はまだ眠そうに目を手でこすりながら上半身を起き上がらせる

「ふあく……よく寝れた……かな？」

少女は大きな欠伸をするとカーテンを開けるボタンを押してカーテンが開くと雲一つ無い青空が広がっていた

「良い天気だなく。こういう日に退院出来るなんて嬉しいなく」

「木綿季くん。おはようございます」

少女は嬉しそうに青空を見上げていると部屋の扉が開いて白衣を着た眼鏡の男性が入ってきた

「あー倉橋先生。おはようございます!!」

男性の名前は倉橋……少女……木綿季の主治医であり彼女がこの病院ですつとお世話になっていた先生だった

「木綿季くん。長い入院生活、お疲れさまでした」

「先生も長い間、ボクやお姉ちゃんを看てくれてありがとう!!何度も辛い時があつたけど……ボク、先生が居たから何度も乗り越えることが出来たんだよ!本当にありがとう、先生!!」

「……木綿季くん。こちらこそありがとうございます。私も木綿季くんから何度も元気を貰いました。ありがとう木綿季くん。そして、お疲れさまでした」

木綿季がベットから立ち上がり深々と一礼すると倉橋は涙を流し木綿季さんに「お疲れさまでした」と言い一礼した

「今日は彼が迎えに来るのですか?」

「うん!ソーとソウ…初夜と美乃梨ちゃん、それから姉ちゃんが来てくれることになってる!!」

木綿季は倉橋の話に元気よく嬉しそうに答え、その姿に倉橋は微笑んでいた

「やあ、ゆうちゃん」

「ソー！迎えに来てくれたんだよね？ありがとう！」

正午、少女……木綿季が待ちに待っていた退院の迎えにソーこと、更識蒼が木綿季の病室を訪れた

「どういたしまして、ゆうちゃん。何か持つ物はあるかな？持つてくよ？」

「ありがとう、ソー！でも、大丈夫だよ。今、着ている服以外はなーんにも無いから!!」
木綿季が着ていたのは和人や一夏達と行ったトリプルデートの時に着ていた紫のシャツに紺色のジーンパンと言う男性の方がよく着てそうな服装だった

「わかった。それじゃあ、行こうかゆうちゃん？」

「うん。そうだね！あ！少し待って」

木綿季は蒼にそう言うのと病室に深々と無言でお辞儀する。

数秒、お辞儀し顔を上げ、蒼の方に向くと木綿季は微笑んだ

「もう一つ、寄りたいところあるんだけどいいかな？」

「ああ。もちろんいいよ」

蒼は木綿季の行きたい場所に思い当たる節があり即、頷き木綿季の行きたい場所に行

くことになった

「パパ、ママ遅いよ!!」

木綿季が行きたかった場所によってから待合所に行くと二人の子、初夜と美乃梨、それから木綿季の姉、紺野こんの 藍子あいこが待っていて、二人に初夜が大きな声で怒ってきた

「ごめんね、ソウキ。ボクがどうしても寄っておきたい場所があつたからソーと一緒に寄ってきたんだ」

「うん。ゆうちゃんゆうちゃんの病室からの方が近かつたし先に済ませておきたかつたんだ。ソウキ達と合流して直ぐに帰れるようにね」

「……そういう事にしておくれよ」

自分も連れて行って欲しかった初夜は不満そうにそっぽを向いた

すると、初夜の姉で蒼たちの長女の美乃梨が初夜の頭を軽く叩いた

「お父さんとお母さんを困らせちゃダメだよ、初夜?」

「ううくでも……」

「でも、じゃない。お母さんは長い間ここに入院してたんだよ? 今日で退院なのだから、寄りたい所だつてあると思うよ? お母さん、そうですよね?」

「え? あ、う、うん」

自分に振られるとは思っていなかった木綿季は慌てて頷いた

「それじゃあ、行こっか？」

「ええ、そうですね」

4人の話に入ってこなかった紺野こんの 藍子あいのこが蒼の言葉に頷いた

「ソー？これからどうするの？予定とか決まってるの？」

病院を出て直ぐに木綿季が蒼にこの後の予定を聞くと蒼は軽く頷いた

「うん。この後は家で昼食、それから家の案内、夜は皆で食事を予定しているよ」

「ソーの家かく楽しみだなく。でも、お昼ご飯の前に寄っていきたい場所あるんだけどいいかな？どうしても最初に行っておきたい場所なんだ…」

「私からもお願いします。木綿季が退院したら一緒に行こうと決めていた場所があるんです」

「…：わかった。ソウキも美乃梨ちゃんもいいかな？」

「うん」

「はい」

藍子と木綿季の姉妹に頼まれた蒼は簡単に頷き、初夜と美乃梨にも確認を取った。

「待っていたよ、蒼」

5人が駐車場を少し歩き1台のリムジンの前を過ぎようとするど誰かから声をかけられた

「待たせてすみませんでした。ルクスさん」

「気にしないで、今の僕は更識家の執事なんだからね。えっと、紺野木綿季さん、ですぬ？初めまして、更識家の執事、ルクス・アーカディアといひます。よろしくお願ひします」

「あ、はい。知ってるみたいですがど紺野木綿季です。こちらこそよろしくお願ひします」

声をかけてきたのは銀髪的青年……ルクス・アーカディアと普通に離す蒼といきなり名前を呼ばれ自分のことを知っていたことに驚いて動揺しながらも木綿季はルクスと挨拶を交わした

「これから家に向こうでいいのかな？」

「予定ではそうだったんですけどゆうちゃんとランさ……藍子さんの2人が先に寄つていきたい場所があるみたいなんですけど大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。何処かさえ行つて貰えれば何処だつて行きますよ。それで、何処に行けばいいのかな？」

ルクスは蒼の頼みを笑顔で引き受け木綿季と藍子に行きたい場所を尋ねた

「えっと、………です」

続く

木綿季の日 2

横浜市保土ヶ谷区 教会

「はいは……」

港北総合病院からリムジンに揺られ30分位して付いた先……木綿季と藍子が来たかった場所……それは、静寂に包まれた教会だった

「ボク達のお母さんはクリスマスチャンで何度かここに連れてきて貰ってるんだ。懐かしいや」

「ええ、そうね。ここに、私と木綿季……それから、母の三人で何回も来ました……」

リムジンから降りた2人は母と教会の思い出に浸っていた

「それじゃあ、場所聞きに行かないとね」

木綿季はそう言うのと近くの花屋で買った白いユリの花を持って教会の方へ歩き出した

「久しぶり、お父さん、お母さん」

教会に来てから約五分、木綿季が神父にお墓の位置を教えてもらった為、5人は直ぐにお墓に辿り着くことが出来た

「ボクと姉ちゃんとは病気をソーに治してもらって元気になりました。お父さん、お母さん、ソーの覚えてるかな？ボクが小学校の時に友達になってボクが病気だつて事がバレてもずっと、仲良くしてくれてた男の子だよ」

木綿季は墓石にゆっくりと話しかけ始めた。キリスト教では『死んだ人を拝まない』となるが木綿季も藍子もクリスチャンでは（一応）無かった

「お母さん、お父さん、お久しぶりです。私もこの命、蒼さんに助けて貰い元気にしてます」

蒼達の話の前に藍子がユリの花を置き、優しく墓石に話しかけた

「お久しぶりですね、覚えてるでしょうか？更識蒼です。僕とゆうちゃん…木綿季と藍子さんとは2年前に偶然、ゲームの中で会うことが出来たんです。本当に偶然で最初は気が付きませんが…ゲームから脱出するのに2年、それから別の事件に僕が巻き込まれてしまいましたね。木綿季と藍子さんを助けるのに時間が掛かってしまいました」

藍子の次に紺野家と付き合いが合った蒼が墓石にS A OとA L Oの二つの事件と木綿季と藍子さんと再開した事を簡潔に話した

「もう一つ……お伝えし無ければならない事があります。僕は木綿季と結婚を前提でお付き合いさせて頂いてます。ずっと、木綿季には励まされ、ずっと僕の事を照らしてくれている木綿季の事が大好きでした。何があっても木綿季と子供達を護ります」

蒼は涙を流すも力強く墓石に誓っていた

「お父さん、お母さん。ボクも伝えておかないと行けない事があるだ……ソーと再開した事件の時に親を亡くした姉弟をボクとソーで引き取ることになったんだ。紹介するね」

木綿季がそう言うのと後ろに居た、初夜と美乃梨が木綿季の両隣に立った

「女の子がお姉さんの美乃梨ちゃんで男の子が弟の初夜だよ」

「……初めまして、美乃梨と言います。お母さんには今年からですけど……お世話になってます」

「初夜です。僕はママとパパとはゲームの中で一人ぼっちのところを助けてもらいました。ママは本当に強い人です……」

初夜と美乃梨は両親の葬式を思い出してしまったのか涙を流し墓石に挨拶をしていた。

その姿を見た、木綿季は地面に膝をつけて両腕で抱きしめ、蒼は二人の頭を撫でる。「お父さん、お母さん。ボクは……ボク達は頑張つて生きていきます。お父さんとお母さんが与えてくれたこの命を大切に……そして、この子達の為にもボク達は生きていこうと思います。だから、見守っていてね」

木綿季がそう言い立ち上がると静に風が吹いた

まるで、木綿季の言葉に風が応えたかのように……

木綿季の日 3

20日 更識家・夜

「「「「木綿季（さん）（ちゃん）!!!退院おめでとうおおおおお!!!」」」」
更識家の一角、金持ちが集まるどでかいパーティが行われるような大きなパーティ会場
でS A O・旧A L Oでの仲間たち……「西風の旅団」メンバーが集まっていた。!!!」

そこには、ハルナの姿もありこの場に居ないのはI S組のセシリア、鈴、シャルロツトとラウラ、それから遠い所に住んでいるマカとソウル、A Iのユイちゃんの7人だけだった

「みんな、ありがとう!!」

お祝いされている当の本人、木綿季は紫のドレスに身を包み笑顔でみんなに御礼を言っていた

「ゆうちゃん。改めて退院おめでとう」

「うん！ありがとう、ソー！」

木綿季の隣には水色基調のスーツ姿で手にはジンジャエールが入ったワイングラスを持つ蒼が立っていた

「ソーのお家は本当にデカいね！ボク、驚いちゃったよ!!」

「はは、家に来た人達はみんな、そう言うよ……おっと、ごめん、ちよつと席を外すよ。直ぐに戻るからみんなと楽しんで」

「あ、うん」

蒼は木綿季にそう言うのと会場の隅の方に歩いて行ってしまった

「……」

「そんな顔してどうしたのユウキ？」

「アスナ……キリト……」

そんなとき、木綿季の親友、白と赤のドレスを着たアスナこと結城明日奈と黒のスーツを着たキリトこと桐ヶ谷和人の2人が木綿季に話しかけてきた

「ずっと、一緒に入れなかつたからなんだとは思うけど……ソーが何処か行くだけでもなんか……不安になっちゃうんだ……」

「ユウキ……」

「はは、ごめんね。折角のパーティーなのに弱いところ見せちゃって」

木綿季は涙を拭き微笑んで2人に謝った

「そんなこと無いよ、ユウキ」

「ああ、誰にだつて弱いところはある。俺にもチ力達にもだつてな。弱いところを見せられるのも仲間だろ？」

「アスナ…キリト…：うん。そうだね、ありがとう」

「ソウ君なら大丈夫よ、ユウキちゃん」

「カタナさん…：」

2人と話している木綿季の所に藍色のドレスに身を包んだ蒼の姉の刀奈が数種の料理が乗っているお皿を二つ持って歩いてきた

「ごめんなさい、盗み聞きするつもりは無かったんのけれど話が聞こえてきたから聞いてしまったわ」

「い、いえ、それに聞かれたらまずい話ではありませんし…：」

木綿季は家の主でもある刀奈に慣れない敬語を使うと刀奈は「クスツ」と笑う

「ふふ、いつも通りでいいのよ、ユウキちゃん。それから、もう一度言うわね、ソウ君は大丈夫よ。多分、席を外したのもある物のシステム起動だと思おうわ」

「ああ〜！学園で今日の為にとって作つてた物だよね？」

「ええ、私もなんの物なのかは分からないのだけど今日の為って頑張っていたわね」

「そうなんですわね……………」

「みんな！パーティ中にすまない！少しいいか！」

木綿季と刀奈がこの場にいるみんなに聞こえるように大きな声で叫んだ

「今回、『西風の旅団』メンバーで残念ながら来ることが出来なかった2人がいる……………更には2人の所は電話が無くゆうちゃんのお祝いが出来ないと手紙に書いてあった……………だから、俺はこのシステムを今日の為に用意した！」

蒼の隣には大きな円形の機械が置いてあり、みんな首を傾げていた

「こいつは……………まあ、説明するよりは使った方が良いな」

蒼はそう言うのと機械を起動される。

機械が起動すると四角いディスプレイが投射される

『ヤッホー。みんな、見えてる？聞こえてる？S A O βテストプレイヤーとS A O《西風の旅団》のみんなは久しぶり！新しい人は初めまして！』

映像が映し出され映像内では黒と赤のドレスを着た緑の瞳とアッシュブロンドの長髪で、髪型はツインテールの少女が手を振り、赤い瞳と銀髪で赤いワイシャツに黒いスーツ、黒いネクタイの少年がソファアーに座りこちらを見ていた。

『私の名前はマカールバーン、16歳。ソウルと一緒にS A O βテストからソウルと一緒に活動をしていた者です』

『俺はソウル”イーター”エヴァンス。年は16。マカとは学校の同級でルームシェアしてる。マカと同じでβテストからソウと一緒に活動していた。よろしくな。それから……………』

少女…………マカと少年…………ソウルは自己紹介すると軽く深呼吸をする。

『ユウキ(ちゃん)、退院おめでとう!』

マカとソウルは映像越しではあるが大声で木綿季の退院を祝った

「…マカ、ソウル。2人ともありがとう…………ボク、本当に嬉しいよ!!」

祝ってもらった木綿季は涙を流して喜びマカ達二人に微笑んだ

「さて! S A O 《西風の旅団》メンバーが揃ったところでみんなでもう一度乾杯しよう!

ほら、ゆうちゃん」

いつの間にか木綿季の隣に戻っていた蒼が木綿季の肩に手を置いた

「うん! みんな! 今日には本当にありがとう!! カンパーイ!!!」

「『『『『乾杯!!』』』』」

木綿季の声に合わせ、映像越しのマカやソウルも含めたみんなが手に持っていたワイングラスで乾杯した

続く

木綿季の日 4

20日 更識家・夜

「あ、お兄ちゃんにソウ君にユウキさん!!」

蒼と木綿季、和人の三人は明日奈と刀奈と別行動で料理を食べながら集まった人の所に行く。と黄緑色のドレスに身を包んだ少女、リーファこと和人の妹の桐ヶ谷直葉に呼び止められた

「やあ、直葉さん」

「こんにちは、直葉!」

「スグ楽しんでるか?」

「こんにちは、ユウキさん。ドレスだから、少し恥ずかしいですけど楽しませてもらってるよ」

「そうか、それは良かった」

「楽しんでいてくれて良かったよ」

直葉の言葉に兄である和人と主権者側でもある蒼は嬉しそだった

「改めて、ユウキさん。退院おめでとうございます」

「うん！ありがとうございます直葉！直葉も来てくれてありがとうございます」

「いえ！こちらこそお誘いありがとうございます。少し憧れていたんです、こういうドレスを着るのって」

直葉はくるりと回り自分のドレス姿を見せた

「聞いてなかったよね？似合ってるかな？お兄ちゃん、ソウ君」

「あ、ああ、良く似合ってるぞ」

「似合ってると思うよ」

「ありがとう、お兄ちゃん、ソウ君」

「……」

蒼が直葉にそう言っていると木綿季が蒼に対して冷たい視線を送ってきた

「あ！ソウさん、キリトさん、ユウキさん、直葉さん！」

「アンタ達、ここにいたのね」

直葉と話していると黄色いドレスを着た少女、シリカこと綾野珪子が走り珪子の後ろから桃色のドレスを着た女性、リズベツトこと篠崎里香が歩いてきた

「やあ、瑠子、里香。パーティーは楽しんで貰えてるかな？」

「はい！こう言うのは初めてだったので最初は少し、緊張しましたがけどソウさんが近くにいたのが分かってるので……その……」

「この子、アンタを見つけるまでずっと、ガチガチだったのよ」

「あ！里香さん、その事は言わないでくださいよー！」

「……アハハハ」

「みなさんも笑わないで下さいよー！」

蒼の前で里香に言われたくない事を言われ、和人達に笑われて瑠子はむくれていた
「いつ見ても二人とも本当の姉妹に見えるよ」

「え？」

突然の蒼の言葉に里香と瑠子の二人は驚いてしまう

「い、いきなり何を言い出すのよ？アタシとシリカが姉妹に見える？そ、そんなわけ無いわよね？」

「……」

突然の蒼の言葉に里香は動揺し瑠子は顔をほんのり赤くしていた

「確かにリズとシリカはずっとSAOの時から一緒に居るし仲もいいから姉妹に見えるな。スグもそう思うよな？」

「うん！里香さんと珪子さん、本当に仲良いですから姉妹だつて言われても信じちゃうと思いますよ」

「ボクもシリカとリズは姉妹に見えるかな？何処つて言われると上手く言えないけど……リズが《西風の旅団》に入ってからずっと一緒に行動していたからかな？」

「……」

和人、直葉、木綿季の三人からも同じく「姉妹に見える」と言われた珪子と里香は顔を赤くして黙り込んでしまう

「あ、アタシ、アスナ達の所に、い、行くから！」

「あ！里香さん、置いてかないで下さいよー！」

「あ、二人とも……行っちゃった」

里香が先にこの場を離れその後を珪子が追いかけてこの場を離れていった

「からかい過ぎましたね……」

「うん。少しやり過ぎたかな？」

「そうみたいだな」

走って行く二人の背中を見ながら蒼達、四人はやり過ぎたと思っていた

「キリト、ソウ、久しぶり」

「久しぶりだね、二人とも」

そんな時に空色のドレスを着た黒髪のセミロングの少女と茶スーツを着た茶髪の少年が和人と蒼に話しかけてきた

「あ……ああ、久しぶり、ケイタ、サチ」

「……ひ、久しぶり」

少女……サチと少年……ケイタの二人に話しかけられた蒼と和人は何処か遣りきれない顔をしていた

「……直葉、ちよつと付いてきてくれない？」

「あ、はい」

木綿季は何かを思ったのか直葉を連れて蒼と和人を残してその場を後にした。

「えつと、ユウキさん？いきなりどうしたんですか？」

外のテラスまで連れてこられた直葉が目の前で星を眺めている木綿季に聞いた
「いきなりごめんね。あの場は四人だけにしたほうが良いかなって思ったんだ……」

直葉の方に顔を向けた木綿季の顔は少し悲しそうだった

「お兄ちゃんとソウ君に何かあったんですか？」

「うん。本当はこういう場で話すべきじゃ無いんだと思うんだけどね……直葉には話しておいたほうが良いと思うから……」

木綿季は一度直葉から目をそらしてから直葉の目をしっかりと見つめた

「キリトがケイタとサチに会ったのはSAOが始まってから数カ月がたった頃……二人が前に所属していたギルドを助けたからだだったんだ」

「え？サチさんやケイタさんは別のギルドだったんですか？」

SAOの話の詳細は知らなかった直葉はケイタとサチが前は別ギルドに所属していた事に驚いていた

「うん。ギルドネームは《月夜の黒猫団》。ケイタがリーダーでケイタとサチを含めた友達五人で設立したギルドなんだ」

木綿季は自分の知っていることを語り始めた……キリトがケイタ達……サチのコーチをすることになったこと、約二ヶ月後、ケイタを除いた27層迷宮区に挑み、サチとケイタ以外の《月夜の黒猫団》メンバー、三人が死んでしまったこと、そして、ケイタ達が《西風の旅団》に入ったこと……全てを語った

「それで……お兄ちゃんとソウ君はサチさん達に話しかけられたとき、何処か遣りきれない顔をしていたんですね……」

「うん。二人とも……特にソーは《月夜の黒猫団》を壊滅させたのは自分だって思い込ん

「あるイベント……?」

「クリスマスの日……25日の0時丁度、ある樅ノ木の下に『還魂の聖晶石』と言うレアアイテムをドロップする『背教者ニコラス』が現れる。ソーは『還魂の聖晶石』に最後の望みをかけたんだよ……」

「どうしてソウ君はそのレアアイテムを取りに行つたんですか?」

「『還魂の聖晶石』は蘇生アイテムって噂が流れたんだ……」

「!?!?!」

「直葉は『還魂の聖晶石』の事を聞いて直ぐに気が付いた。」

蒼は『月夜の黒猫団』の三人を蘇生しようと考えていたのだと

「ソーの異変に気が付いていたボクはキリトに頼んでクラインにソーを監視してもらっていたんだ。ソーは一人でニコラスを倒すために誰も見つけてい無かったニコラスの出現場所を見つけていたんだ。その時が始めてかな?ソーを本気で怒ったの」

「……ユウキさんもソウ君を怒ったことあるんですね」

木綿季は蒼を本気で怒つた事に笑い、直葉はいつも仲が良い木綿季と蒼にもそんな時があるんだと苦笑いしていた

「ボク達も人間だからね、喧嘩し合う事だって、怒ることだってあるよ?でも、そうだね。」

ボクがソーを本気で怒ったのはあの時が初めて最後かな？あれからはボクがソーを怒ることは無かったよ……何度も心配させられたけどね」

「…あの、因みになんですが、ソウ君を本気で怒った時、なんて言っただんですか？」

自分達も人間だからと笑いながら話す木綿季に直葉は本気で怒ったときになんて言っただのかと気になり木綿季に聞いた

「えつーと、『ぎげんな！さつきからなに!?黒猫団の三人が死んだのは自分の所為にしてくよくよしてさ！誰の所為でも無いでしょ!?勝手に思い込んで一人で行こうとしないでよ！相談してよ！何のためのギルドなの！何のためにボクは一層から着いてきたのさ！ソウ、ボクは一層の時に言っただよね？』ボクは何があつてもソウの側にいるからね』ってソウは一緒に行こうって言っただよね？でもなんで、感じんな時にはボクを置いて行こうとするの！ボクがお荷物ならそう言っただよ！』だったかな？」

「うわあく、ソウ君かなり堪えたんじゃないんですか？」

「あの時のボク達は友達以上恋人未満……ソーとは相棒って関係だったからどうかはボクにも分からないけど……でも、ニコラス戦の前まで目を合わせてくれなくてどうしてって聞いたら『接し方に困ってる』って言っていたから堪えてたのかな？」

普段通りに話す木綿季に直葉は冷や汗を掻きながら苦笑いしていた

「あ！お母さんに直葉お姉ちゃん。ここに居たんですわ！探してたんですよ。何かあつ

「たんですか?」

「美乃梨ちゃん! うん。何でも無いよ。少し直葉と話してただけだよ」

木綿季と直葉の下に白基調の所々赤があるドレスを着た木綿季と蒼の愛娘の美乃梨が室内からテラスに出てきた

「お母さんが主役なんですから途中で居なくならないで下さい」

「アハハハ、ごめんね。美乃梨ちゃん。それから探しに来てくれてありがとう。直葉、戻つか?」

「あ、はい」

木綿季と直葉、それから美乃梨は室内に戻っていった

続く

木綿季の日 5

20日 更識家・夜

「久しぶりです、木綿季さん、美乃梨ちゃん」

「お久しぶりです。木綿季さん、美乃梨ちゃん」

「あ！チカ、ハルナ！二人とも久しぶり!!」

「チカさん、ハルナさん、お久しぶりです」

あの後、直葉と別れた木綿季と美乃梨は料理を食べながら会場内を歩いていると純白のスーツに黒いネクタイを身につけたチカこと神薙・S・イチカとイチカの妹、月白のドレスを身につけた神薙・S・ハルナに声をかけられた。

「二人とも色々大変だっけ聞いたけど大丈夫？」

「ああ、苗字の変更の手続きがややこしかったただけで後はカタナがやってくれましたから」

「はい。私達は書類に目を通しただけです……殆ど楯無さんにやっていただきましたまし

「たから……」

「あら？チカは自分で苗字を決めたじゃない？」

「みなさん、こんにちは」

チカとハルナがそう言っていると刀奈と刀奈と蒼の妹の簪が空色のドレスを着て一緒に歩いてきた

「こんにちはは、簪。でも苗字を決めたときだってカタナや簪にも手伝ってもらったから俺一人では何も出来なかつたよ」

「それでも、イチカさんが苗字と意味を考えたことには変わらない」

「簪ちゃんの言う通りよ、チカ？私達は貴方の後押しをさせていただき、貴方がそれを掴んだのよ」

「でも俺は……「苗字の神薙に意味があるの？」まあ……はい」

「でも」とイチカが言うとその先を言わせないようにしたのか木綿季が苗字の意味をイチカに聞いた

「この手で守れる者は何があっても……例えば神が相手でも薙ぎ払って守る……それが、神薙に決めた時の俺の気持ちです」

「……守る者の為に神でも薙ぎ払う……うん！チカらしいよ……だから、聞くよ？チカ……イチカにとって守りたい者ってなに？」

軽く呟いた木綿季は大きく頷いてから目鏡くしてイチカに「守りたい者は何か」と聞いた

「…俺の守りたい者は……この手で守れる人達……西風の人達や鈴……でも、俺には西風の人達や鈴達、全員を守る強さはありませんから……まずは……」

イチカは一度言葉を切り妹のハルナと彼女でもある刀奈の顔を見る

「ハルナやカタナ……それから、鈴を守るほどに強くなりたい……それが今の俺の目標です。」

イチカの言葉にハルナと刀奈は顔をほんのり赤くして俯き、木綿季はイチカの言葉を聞いて微笑む

「そ、今のイチカの思いなら大丈夫だね。もし、イチカが「皆を守る」ってだけの答えだったら怒ったところだったよ。」

「……アハハハ（よ、良かった……）」

木綿季の口から出た言葉にイチカは苦笑いするしか無かった。なぜなら、イチカは木綿季が怒るところをSAO時代に何度も見ており、その中でも特に酷かった激怒り状態で暗殺ギルド《ラフィンコフィン》の小隊を一人で壊滅させた所を目のまで見ていたのだから……

「何かあったら相談に乗るからね？一応、ボクは《西風の旅団》サブギルドマスターでも

あるからギルドメンバーで友達の相談には乗るよ」

「あ、はい。その時はお願いします。木綿季さん」

「うん！お願いされたよ！」

軽く拳をぶつけ合う、二人を少し嫉ましそうに刀奈とハルナが見ていたが二人は全く気づかないでいた。

「木綿季、ここに居たのね」

「ママ〜」

そうしているとこの場の五人とは違う声が2つ聞こえ、木綿季が振り向くと紫苑色のドレスを着た木綿季の姉のランこと紺野こんの藍子あいこと小さな天色のスーツを着た木綿季と蒼の息子、ソウキこと初夜が歩いてきた

「姉ちゃんに、ソウキ！どうかしたの？」

「初夜君が眠そうだったから連れてきたのよ。ソウさんはサチさん達と話してる途中だったから」

藍子がそう言うのと初夜が大きな欠伸をかき、木綿季は時計を見ると既に九時を回っていた

「もう、こんな時間だったんだ……」

「この時間帯はソウキ君や美乃梨ちゃんが眠くなるのは仕方ないわね」

「私も少し眠いです…」

九時を回っていたことに少し驚く木綿季と呟く刀奈、そして、ずっと我慢していたのか美乃梨も眠そうに目を軽く擦っていた

「これ以上、二人を起こしているのは可哀想ね。ユウキちゃん、ソウキ君と美乃梨ちゃんを寝かしてきなさい。ソウ君に……いえ、チカついて行つてくれないかしら？」

「うん。分かった」

「ああ、わかった」

今日、来たばかりの木綿季を一人で部屋に行かせるのが心配な刀奈は部屋への案内に木綿季の彼氏でもある蒼に頼もうとするがサチ達と話している蒼の顔色を見て、数カ月だったが更識家の一員で家の中もある程度は分かっているイチカに頼むことにしイチカは快く引き受けた

「チカ、案内ありがとうね」

「気にしないでください。俺は頼まれたことをしたまでです」

初夜と美乃梨の二人を寝かしつけた木綿季とイチカは会場に戻るため、廊下を歩いて
いた

「ねえチカ？ボク達、同い年なんだし、敬語辞めない？」

「いやいや！俺達をずっと前で引っ張ってくれた木綿季さんにタメは使えませんよ！」

「ボクは特にやった事なんて無いと思うんだけど？」

引っ張ってきたことに身に覚えが無い木綿季は首を傾げていた

「いやいや！ずっと俺達を支えてきてくれたじゃ無いですか？主に精神面やアスナさんと一緒に料理などと生活面でずっと、支えられてきたんですよ」

「……まあ、確かにそう言われればボクが支えになってたのかな？でも、出来ればタメで話してくれない？同い年に語で話されのは慣れないからさ」

「……わかった、ユウキ」

「うん！」

木綿季の言葉でイチカは敬語を辞め、普段通りの話し方に変えた。

「二人とも待ってたよ」

「ソウ!!」

二人をパーティー会場に続く扉の前で蒼が待っていた。

蒼の顔色はサチ達と話しているときと比べ良くはなっていた

「どうしたの？」

「うん。パーティーをお開きにするから最後に皆でダンスを踊るんだよ」

「え!?ボク、ダンスなんてしたこと無いよ!」

「俺も出来ませんよ?」

一般人だった、木綿季とイチカ、それから《西風の旅団》のメンバーほぼ全員がダンスの経験など無く、あるとしたら更識家の刀奈、蒼、簪に元、暗殺者のサクヤ、コタの五人くらいになるだろう

「大丈夫。俺とゆうちゃん、チカに刀奈姉さんで踊ることになるだろうから俺と刀奈姉さんでリードするよ」

「なら、大丈夫だと思うけど……ダンスから始めて踊るから緊張するな」

「俺も……」

「大丈夫さ。最初は誰でも初心者なんだから楽しく行こう」

初めてのダンスに緊張する木綿季とイチカに蒼は優しく声を掛ける

「それじゃあ、皆待ってるから行こうか」

「え!?あ、う、うん」

「ああ」

急に扉を開けられ心の準備が出来てなかった木綿季は一瞬焦ったが直ぐに落ち着きを取り戻した

『待ってたわよ!ユウキちゃん!チカ!』

蒼が扉を開けると会場内に刀奈の声が響いた

「ゆうちゃん、俺と一曲、踊ってくれないか？」

「よ、よろこんで」

木綿季をダンスに誘う蒼、当の本人の木綿季は顔をほんのり赤くし差し出された蒼の手に自分の手を重ね置いた

「俺は、カタナの所に行きます」

イチカはそう言うのと会場内に消えていった

『それじゃあ？みんな、良いわね？ミュージックスタート!!』

刀奈の合図と共に1曲目が流れ始め、各々踊り始めた

「さて、俺達も踊ろうか」

「う、うん」

歩き出す二人、会場内は紅、白、青……様々な色がクルクルと回り輝く虹を作り出していた

続く

デート 蒼と音 二人の距離

22日

「少し早く着いたか？」

俺は青いシャツに紺色のジーンズの私服姿で駅近くの公園にある人との待ち合わせで着ていた

「アイツとプライベートで出かけるのも久しぶりだな……」

俺はこの日のある意味、楽しみにしていた。

今日の待ち合わせの相手……一ヶ月前と少し前に出かけることを約束していた相手……俺の暗殺者時代の相棒だった那由多。

那由多と再会したのは五ヶ月くらい前、ゆうちゃんのお見舞いに病院に行ったときに実に7年近くぶりの再会だった

その後は俺の専属傭兵としてたまに「今の俺」では出来ない仕事を頼んでいる

「待たせてしまいましたか？」

少し考え事をしてしていると隣から声を掛けられ顔を向けると濃い紺色のブレザーに白いワイシャツ、赤いリボンで赤いチエックのミニスカートを着て手にはピンク色の小さなバツクを持った那由多が立っていた

「いや、俺も今、来たところだよ。那由多」

「それでしたら良かったです」

俺の言葉にそう返事すると那由多は腕時計を少しだけ見た

「ここに居るのもなんだし、何処か別の場所に行かないか？」

「そうですね。それでは、近くのシヨップピングモールに行きませんか？」

「ああ、それじゃあレゾナンスに行くか。…その前に那由多。その…その服似合ってる」

「あ、ありがとうございます」

俺ははつきり言うのと服とかにこだわりが無く、人の服もそこまで気にしていない…：…のだった。ALO事件後に『彼女が居るのだからその辺りも身に着けなさい』とカタナ姉さんに言われて短時間でかなりの量を学ばされた…：…その為、デート定番ではあるがこう言った事を意識して言うようにはなった。

こう言うことには慣れてなかったのか那由多らしくない笑みを浮かべて顔をほんの

り赤くしていた

「珍しいな、那由多が赤くするなんて」

「はあ……」

俺の言葉が失言だったのか那由多は溜息を吐いた

「ソウは乙女心が少しは分かるようになったみたいだけどまだまだだね……ソウさん、確かに私は那由多でソウさんの前で那由多として顔を赤くするのはありませんでしたが……今の私はソウさんに……刹那さんに助けられて、刹那さんに憧れた夕風ユウナギ音桜ネオなんです。憧れた人に褒められたら誰だって赤くなるのは当然ですよ？」

「そう……か、ごめんな、那由多……いや、音桜」

「いいえ、気にしてませんよ」

那由多……音桜の話で『まだだな』と自分の女性関連の知識不足を痛感していた

「まあ、こう言う話は無しで行きましょう!!」

「ああ、そうだな」

そんなこんながあつたが俺と音桜はレゾナンスに向けて歩き出した

「音桜は買う物とか決まってるのか？」

「はい。実は……私、こうやって出歩く服が殆ど無くてですね……だから今日、ソウさんに私

の私服や水着を選んで欲しくて…」

「…分かった。だけど、俺もまだまだ女性関連の知識は少ないから色々教えてくれないか?」

「はい!私で好ければ喜んで!」

顔を赤くしたり目をキラキラさせて喜んだりとこんな那由多を見たこと無く俺は新鮮に感じた

「大きいですね」

「ああ、そうだな」

公園から歩いて数分、俺達はこの辺で最大級の駅前ショッピングモール「レゾナンス」に着ていた

「音桜はレゾナンスは初めてなのか?」

「あ、はい。今、通っている学校も通信制で私、一人で出歩くことも無くてこの辺は殆ど来たこと無いんですが前に見た雑誌にここにショッピングモールがあつてレゾナンスって名前だつてことだけしか知らなかったんです」

「そうだったんだな。近くは何度か通つたことあるけど俺もレゾナンスに入るのは初めてなんだよ」

「え!? 本当ですか!」

「あ、ああ…」

「そうなんですか、ソウさんも初めてなんですか」

なぜか嬉しそうにしている音桜……大型ショッピングモール“レゾナンス”、音桜に言ったとおり俺もここに来るのは初めてだったりする……基本的に必要な物は家の者に買ってきてもらったりするため、こうやって“日本”で買い物に出ることなんてほぼ無かった

「女性物の洋服店はここじゃ無いか？」

「あ、そうですね」

レゾナンス内を歩いて直ぐに新しめの洋服店を見つげ中に入った

「……」

入った途端に店内にいたほぼ全員の女性に一瞬睨まれたが直ぐに買い物に戻った者も居れば何人かは未だに気づかれないようにだが睨んで来ていた

「ソウさん？」

「いや、何でも無いよ。音桜に合いそうな服を選んでみるよ」

「はい。お願いします」

心配したのか声を掛けてきた音桜に微笑みで返して昔の知識と服のタグ、音桜にも聞

いたり試着してもらったりして服を選んで行った

「お、ここのスパゲッティ、美味しいな」

「そうですね」

音桜の服や水着を買い終えた俺達は近くのイタリアンレストランで昼食を取っていた

「でも、良かったんですか？こんなに買ってもらって……」

「良いんだよ。那由多に日頃の御礼もあるけど音桜に買って上げたかったからね」

「あ、ありがとうございます」

顔をほんのり赤くする音桜：俺と音桜の隣には午前中に買い込んだ服や水着などが入った袋が各四つ、計8つの袋が置いてあった

「この後はどうしますか？」

「うーん、俺は特に決まってるけど音桜は何処か行きたい場所でもあるか？」

「えっと、私も特には無いんですけど……強いて言いますとI S関連の物を見て回りたくなって……」

俺のことを気にしてなのかIS関連って所から顔をほんのり赤くしながら徐々に声が小さくなっていった

「いいよ。俺もIS関連の物には興味があつたし、それにIS委員会に頼つてばっかりじゃダメだと思つていたからね。でも、その前に……」

「お待たせしました、特大パフェになります」

お昼後の予定をある程度決まったところで俺の前に特大パフェが置かれた

「あの、ミックスベリーを二つお願いします……」

夕方、買い物を終えた俺達は近くの公園にある、幸せが訪れると評判のクレープ屋に着いていた来ていた。

「ごめんね、お嬢ちゃん。ミックスベリーは売り切れちゃったんだ」

「そうなんですか……」

クレープ屋の店員の言葉に音桜は顔を俯かせてしまう。

「じゃあ、ストロベリーとブルーベリーを一つずつください。」

俯いていた、音桜とクレープ屋の店員が俺の発言に驚いたような顔をする。

「はい、ありがとうございます」

店員は笑顔で受けてストロベリーとブルーベリーを一つずつ作り俺達に手渡してくれる。

「まいど、ありがとうございます」

お金を払って俺達は目の前が海のベンチに腰を掛けた

「今日は凄く楽しかったですけど…少し…残念です…」

「幸せのミックスベリーが食べれなくて？」

「はい。今日最後のソウさんとの思い出にしたかったんですけど…」

海を眺めクレープを食べる音桜の顔は少しだけ残念そうにしていた

「ですけど、ソウさんと食べるクレープは美味しいのでこれで満足です」

「そうか…なら、もう一つの思い出を作ってあげる」

「え？」

俺はそう言い俺のブルーベリーのクレープを差しだすと音桜は訳が分からないみたくいでクレープと俺の顔を何度も見えてきた

「はい、あーん」

「あ、あーん」

俺の行動で漸く理解できた音桜は顔を真っ赤にして差し出したクレープを食べた

「……お、美味しかったです」

「それなら、良かった」

赤いままの音桜に俺は微笑みクレープを食べる

「ソウさん、今日一日、ありがとうございます」

「いや、こちらこそありがとうございます。今日一日、楽しかったよ」

「クスツ」

お互いに笑いだし、笑い終わると音桜が立ち上がる

「憧れた刹那さん……いえ、ソウさんと一日こうしてデートが出来て良かったです。これ……」

「私の初恋を終わらせることが出来ます」

「え？」

俺は一瞬、笑みを浮かべている音桜の言っていることが分からなかった

「どういふことって思っている顔ですね？」

「ああ」

音桜に聞かれたとおり俺は音桜の言いたいことが分からないでいた

「私は刹那さんに助けられた時に刹那さんに一目惚れしてたんです。那由多として暗殺者になったのも刹那さんの相棒になったのも刹那さん……アナタの側にいたくてアナタの伴侶になりたかったからなんです……でも、ソウさんにはもう心に決めた人がいて……仲間がいて……私の初恋はもう、実らない……だから、こうして初恋のソウさんとの最初で最後のデートで私の初恋を終わらせようって決めてたんです」

「そう………だったんだな」

俺は音桜の話の黙って聞いた……いや、何も言えなかった。

話し終え、涙を流す音桜に俺は立ち上がりゆっくりと歩き出す

「音桜、お前の気持ちも考えも分かった。だから、俺も1つ言っておきたいことがある……俺の

初恋もお前なんだよ、音桜」

「え？」

微笑み、音桜の優しく頭を撫でる俺と今度は音桜が分からないような顔をしていた

「音桜、俺はなお前と那由多として出会ったときに自分でも気づかないうちにお前に恋をしていったんだ。恋に気が付いたのはお前を無くしたあの任務……お前に篠ノ之束と脱出口ケツトに乗っけられたあの時……俺はお前が好きだつてことに気がついたんだ」

「ソウさん……」

「遅かった……本当に遅かった……もつと早くに気が付いていれば良かったのにな……お前の言うとおり、俺には心に決めたゆうちゃんがいる。だから、お前とそういう関係にはなれない。それでも俺は、好きであるお前をこの手から離したく無い……お前をもう、離したくないんだ……だからさ、音桜、最低な奴つて思うだろうけど……」

「これからも俺の側にいてくれないか？」

もう、俺は那由多を……音桜の手を離したくない……あの時のような後悔をしたく無い

……

「良いんです……か？アナタの側にいて？」

「ああ。居て欲しいんだ」

「捨てないですか?」

「勿論。お前を捨てるなんて事は絶対にしない」

俺は答えながら涙を流す音桜を抱きしめる。

「嫉妬……深いですよ?」

「知ってる」

「世間……知らず……ですよ?」

「俺も同じさ」

「うう……うわあああああああ」

ついに音桜は声を出して泣き始め、俺は音桜を抱きしめながら優しく頭を撫でた

続く

蒼と夜 二人の気持ち 1

6月28日

「ソウさん、おはようございます」

「おはよう、サクヤ」

臨海学習前の休日、俺は私服姿でI S学園のモノレール改札前で今日を一緒にするサクヤを待っている。と白いワンピース姿で肩から小さな肩下げバッグを下げたサクヤが歩いてきた。

「その服よく似合ってる。かわいいよ、サクヤ。」

俺がそう言うのとサクヤはほんのり顔を赤くしていた

「…ソウさん…そう言ってくれるのは嬉しいですが、ほどほどにしないと美乃梨ちゃんにまた、怒られますよ?」

「……善処するよ」

俺の言葉を聞くとサクヤは軽く溜息を吐いた

「…ソウさんは私や珪子さんの思いに気が付いている為だと知っているつもりですが……あんまり美乃梨ちゃんと木綿季さんを困らせないであげて下さいね？」

「分かってるつもりではあるんだけどね…」

以前に一度、美乃梨ちゃんから「お母さんのことを考えてください!!」と怒られた俺はサクヤに言われたことは適当には返せないでいた。

「今日はこの話はこの辺にして、行きませんか？」

「あ、ああ、そうだな」

話を辞め、俺達はモノレールの改札口を通りモノレールに乗り込んだ。

「よし、それじゃあどこに行こうか？」

モノレールを数個先の駅で降りると、俺はサクヤに何処から行くかと尋ねた

「えっと、私…このあたりは初めてで良くわからないんですけど…その、もうすぐの臨海学習用の水着を買いたいんですけど…」

サクヤが申しわけなさそうに言ってきた俺はそんなサクヤの頭を優しく撫でる

「気にしなくていいよ。それじゃあ、大型ショッピングモールのレゾナンスに行くか…」

あそこなら、水着も売ってるはずだからね。それでいいかな？」

「あつ、はい」

サクヤが頷いた所で俺たちは歩き出す。

「あの……ソウさん？」

「ん？」

歩き出してすぐに、サクヤが声をかけてきた

「どうして、私を誘ったんですか？」

サクヤは今回、俺が誘ったことに気になったみたいだ。

「理由は簡単にサクヤとどこかに行きたかったからかな？」

「え？」

サクヤは俺が言った理由に少し驚いて居るみたいだった

「クラス代表対抗戦での約束を果たせられなかったから……それに、タツグトーナメントの後俺が話を聞ける状態じゃなかったから、お詫びにどこか行こうかなって思ってたさ

……これじゃあダメだったかな？」

「……いえ、そんなことありません。ありがとうございます」

俺がそう言うのとサクヤは顔を少しだけ赤くしていた。

「大きい…ですネ…」

「ここいらで最大級のショッピングモールだからな」

俺とサクヤは以前に俺と音桜でも来た大型ショッピングモール “レゾナンス” に来ていた

「いろいろ見て回りながら水着売り場に行くか？」

「良いんですか？」

「もちろん。今日一日、サクヤと一緒に居るつもりだから俺のことは気にしなくていいよ。それに、サクヤが物珍しそうに見てるのに水着売り場に直行はサクヤが楽しめないからね」

「えっと…その、ありがとうございます」

サクヤは遠慮がちだったが嬉しそうに微笑んでいた。

そうして俺とサクヤは “レゾナンス” 内の店を周り水着売り場に辿り着いた
「…やっぱり、どのお店も女性物の方が多かったですね」

「仕方がないさ。今の世界は『女尊男卑』。女性が優遇され、女性だから許される。I S を使っている女性が凄いだけで女性だから偉いと思っっている女性が男を見下している…そんな世界だから男性物より女性物が多く取りそろえられてるんだよ」

「…ソウさん……」

俺が世界のことを話すとサクヤが、何処か悲しそうな顔で俺の名前を呼んだ

「おっと、デート中にこんなこと言つてごめんな？」

「あ、いえ…話を振つたのは私ですから…ソウさんが謝ることではありません。謝るのでしたら私です…すみません」

「分かつた。じゃあ……」

自分の間違いだと思つたサクヤが落ち込みながら謝ってくる…俺はサクヤの頭を軽く撫でた

「俺も謝らないからサクヤも謝らないでいいからな？今のはサクヤが悪いわけじゃないから謝らなくていいから…な？」

「…はい」

「うん、よし！」

サクヤの小さな返事を聞いた俺は撫でていた手をサクヤの前に差し出した

「さあ、デートの続きと行こうか、サクヤ？」

「…はい！」

サクヤは笑顔で手を取り俺はサクヤの手を握り水着売り場に歩いて行つた。

続
く

蒼と夜 二人の気持ち2

「……本当にいいんですか？こんなに多いのに……」

「ああ平気さ」

水着を選んだ後、俺達は水着売り場近くの「ムラシマ」と言う服屋で買い物をしており、現在はカゴの中にカットソー（タグに書いてあった）やブラウス（こちらもタグに書いてあった）など下着も含めて2、30着近くあり、それを俺が買ってあげることにはサクヤは抵抗を感じていた。

「それじゃあ、買ってくるから外で待ってて」

「あ、はい……」

俺はそう言って外でサクヤを待たせてレジに向かう。

「いらっしやいませ、商品をお預かりいたします」

レジは運良く並んでおらず、すぐに会計ができるはずだったのだが、レジの店員が一

着、一着袋に入れてみると、俺のカゴの隣に後ろから来た、女性がいきなりカゴを置いてくる。

「あなた、これも払いなさい」

女性を見なくてもこの一言で女性が女尊男卑派の人間だとわかった

「悪いな、生憎、財布に金は無いんだ。自分で買ってくれ」

俺がそう言うのと女性は俺に怒鳴ってきた

「なら、すぐそのATMでおろしてきなさいよ！どうして、男はそんなこともわからな
いのかしら!?!」

「あつそ、じゃあな」

俺は女性が文句言っている間にカードで会計を済ませてその場を立ち去ろうとする
…が、後ろから女性が怒鳴りちらしてきた

「なに、帰ろうとしているのよ！あんた、男でしょう！男が女の服を買いのは当たり前よ！
義務なのよ！早くしないと警備員呼ぶわよ！」

義務もへったくれもないのだがな、と思いつながら俺は……

「ISに乗れないゴミが。少し黙れ」

「ツ!!」

普段通り、温厚な感じで話していた俺が急に変貌したのを目の当たりにした絡んでき

た女性は少し青い顔をした

「お前は言ったな? 『男が女に服を買うのは当たり前』と…義務とも言ったな? ふざけたこと言ってるじゃねえぞ?」

「ふ、ふざけたことですてえ!? 男の癖に……誰が喋っていいと言った?」ツツツツツ!!!
「ブチギレ状態の俺に女が何かを言おうとしていたがほんの少し出した殺気で女は黙り込んだ」

「確かに今の世界は女≪偉いとかふざけた思想が広まっている……だけどな? お前も知っているだろうが、数カ月前に四人の男性 I S 操縦者が見つかったよな? その時点で女≪偉いなんてことは無くなってんだ」

「…」

「更によえば、今は女の I S 操縦者より男性 I S 操縦者の方が数十倍価値がある。そして、お前はただの男で餓鬼だと思ってるだろうが……」

「あ、ああ……」

俺が表紙に『 I S 学園生徒手帳』と書いてある手帳を見せると絡んできた女は顔を真っ青にして崩れた

「お前は男性 I S 操縦者、四人の顔を覚えてなかったみたいだな? まあ、そんなのはどうでもいい。さて、俺が手を下す前に失せろ」

俺が殺気を込めて言うのと絡んできた女は逃げるように走り去った

「はあ…」

俺は溜息を吐いてからサクヤが待つている方に戻ると私服姿のキリトとアスナがサクヤと話していた

「二人も来てたんだ。サクヤ、待たせてごめんな」

「よお、ソウ」

「あつ、ソウ君」

「いえ、アスナさん達と話していたので大丈夫でしたけど…何かありましたか？先程、レジあたりが騒がしかったようですが…」

サクヤは心配そうに聞いてきて俺はサクヤの頭をなでた

「大丈夫だよ、少し女尊男卑派の女に絡まれただけだから、心配しなくてもいい…でも…」

「でも…」

「…心配してくれてありがとう、サクヤ」

「…はい！」

俺が笑顔で「心配してくれてありがとう」と言うとサクヤは顔を真っ赤にしアスナとキリトは微笑んでいた

「そうだ、キリト。アスナとのデート中に悪いんだけど、少しでもサクヤと一緒にいてくれないか？」

「いきなり、どうしたんだ？」

「少しな……」

俺はそう言うのとキリトとアスナにだけ見えるようにスマホの画面を見せた

「……わかった。明日奈いいよな？」

「うん。分かってるよ」

「ごめん。サクヤ、少しでもキリトと待っていてくれないか？」

「……分かりました」

サクヤは少し不満そうだったがゆっくりと頷いてくれた

「それじゃあ、キリト。なるべく早く戻る」

「ああ、分かった」

「ごめんね、サクヤちゃん。直ぐに戻るから」

「……はい」

俺とアスナは二人にそう言うとその場を離れエスカレーターを降り、あるお店に向かう

「アスナ、付き合わせちゃってごめん」

「サクヤちゃんの為だもん、仕方ないよー。えっと、それでサクヤちゃんに何を買うのかな？」

エスカレーターを降り、道を歩いて居る中、俺はアスナに謝った

「取り敢えずはアクセサリーとは決めてるけど他は全く。だから、アスナに付いてきてもらったんだ。女性としての意見をもらうためにな」

「私もアクセサリーに関してには疎いけどサクヤちゃんの為に頑張るよ」

そう言いアスナは意気込むが直ぐに顔を俯かせてしまう

「あの事、まだ気にしてるのか？」

「気にしないなんて、出来ないよ……私の所為でサクヤちゃんに辛い思いさせちゃったんだから……」

あの事……SAO内で起きた事件……アスナは一時期、攻略組最小最強の俺達《西風の旅団》の次に最強を誇っていたギルド、団長のヒースクリフと副団長ランさん率いる《血盟騎士団》に教導官として出向いていた時期があった。

そんな、ある日、74層のフロアボスを俺とゆうちゃん、キリトにアスナ、そしてラ

ンさんの五人でトラブルがあつたが討伐してしまつた。

その際に俺はユニークスキルの《統制》、キリトも同じくユニークスキルの《二刀流》を表舞台で初めて使用し次の日の新聞にデカデカと載り、キリトは隠れ家だつた家に沢山の情報屋とプレイヤーが押しかけてきたのだつた。

そんな時、ヒースクリフがキリトにデュエルを申し込み、負けた方が勝者の言うことを聞くことに……結果はキリトの負けで終わり、キリトは一日だけ《血盟騎士団》の預かりとなつた……それで終われば良かったんだが……キリトは《血盟騎士団》メンバーの二人とクラディールの計三人と任務と言う名の訓練に出ることになつた。

事件が起こつたのはこの後、訓練途中の昼食でキリトとメンバー二人はクラディールに麻痺毒を盛られ、メンバー二人のクラディールに殺され、キリトもHPを数ドットまで削られたがパーティーのままだったアスナが異変に気が付き、俺とアスナ、コタにサクヤ、ランさんの五人がギリギリで間に合いキリトを助けることが出来た……それからアスナとランさんの連撃フルボッコでHPをギリギリ減らされたクラディールの「死にたくない」と言う言葉を引き金に自分を見ているようで嫌な、サクヤが激怒した……それで終われば良かったのだが、何とかサクヤを静めることが出来た途端にクラディールが両手剣を持ち目の前のアスナとランさんを襲つた……その時に静まつたはずだつたサクヤが再び激怒しクラディールに向かつていつてしまつた……その途中で俺が大声で静止さ

せたのだがその場の誰もが予想して無いこと…サクヤが間違つて武器をクラディールに向けて投げてしまいその一撃がトドメとなりクラディールは死んだ。

サクヤはその事で一度はギルドを抜けようとしたしアスナはずっとこの事を引きずっているのだった

「あまり、気負うな。あれは、誰の所為でも無い。強いて言えばあれは、俺の所為さ…キリトからメッセをもらったときに俺が気が付くべきだった」

「ソウ君…」

「おっと、こんな話は止めだ。それに、お店の前に着いたしな」
「うん。そうだね」

過去の話を辞めた俺達はアクセサリーショップの中に入った

続く

蒼と夜 二人の気持ち3

「……………（気まずい）」

和人とサクヤナが蒼と明日奈を近くのベンチで待っていたが二人の間には重苦しい空気が流れていた

「えつと、キリ…和人さん…今日は明日奈さんと水着を？」

「あ、ああ。もうすぐ臨海学習だからな…サクヤ達もだろ？」

「いえ、水着はソウさんに買って頂きましたけど…今回、ソウさんは私と出かけることが目的みたいですよ…」

サクヤナはそう言うとは何処か暗い顔で俯いていた

「ソウとのデートは楽しく無いのか？それとも…」

「そんなことはありません、それに和人さんと一緒に居るのも嫌ではありません」

「なら、どうして暗い顔をしているんだ？」

「暗い顔…私、してましたか？」

「ソウと明日奈が心配してたぞ」

「……」

和人の言葉にサクヤナは黙って俯いていた

「話したく無いなら話さなくていい……だけど、ソウにだけは話してやれ……もし、ソウに話せないなら、俺や明日奈が相談にのる」

「和人さん……その時はよろしくお願いします」

「ああ」

和人はサクヤナの言葉に軽く頷いた。蒼と明日奈が戻ってきたのはそれから10分位してからだった

「サクヤ、キリト待たせた」

「今、戻ったよー」

俺とアスナは買い物を終え、サクヤとキリトの待っている場所に行くと二人の間だけ空気が重かった

「ソウさん、アスナさん。お疲れさまです」

「二人ともお疲れ」

二人は俺達が声を掛けると二人から漂っていた重い空気は無くなり普段の二人の顔だった

「キリト、アスナ、デート中だったのに本当にごめんな…それから、ありがとう」

「ソウ君。気にしなくていいよ」

「アスナの言うとおりだぞ、ソウ。」

キリトとアスナは普段通りの微笑みでそう言ってくれて、隣のサクヤも同じく微笑んでいた

「それじゃあ、俺達は行くよ。また、学園でな」

「ああ、またな」

「うん。またね、ソウ君、サクヤちゃん」

「はい。また、学校で、キリトさん、アスナさん」

俺とサクヤ、キリトとアスナはお互いのデートを再開するべく二手に別れてその場を後にした

「ここからの、景色はいいですね…少し怖い気もしますけど…」

「うん、そうだね…少し高いかも」

キリト、アスナと別れた俺とサクヤは“レゾナンス”から少し歩いた場所にある10階建てのビルの最上階に入っているレストランで食事をしていた

「ですが、鈴さんから聞いたとおり、ここの料理は美味しいですね…鈴さんには感謝です」

「鈴が教えてくれたんだな…俺からも鈴には御礼を言わないとな。サクヤとこんな美味しい昼食を食べれたんだからね」

「ソウさんにそう言っただけで貰えると私も嬉しいですよ」

サクヤは嬉しそうだった…昼食をこのレストランに決めたのは会話の内容通り、サクヤでメニューが出てくるまで少し不安そうな顔をしていたが今は嬉しそうに頼んだペペロンチーノを食べていた…因みに俺が頼んだのはナポリタンだ

「この後はどうする？何処か行ってみたい場所とかあるか？」

「えつと…先程、見かけたゲームセンターに行ってみたいです」

「ゲームセンターだな。少しゆっくりしてから行くか」

「はい。そうですね」

俺とサクヤはこの後の予定を決めて少し時間を掛けたが昼食をすませて近くのゲームセンターに向かった

「ここが、ゲームセンターなんですね…」

「うん。ここがゲームセンター…通称ゲーセンだよ。いろいろなゲーム…音楽ゲームやレースゲームなどの家庭用ゲーム機を大きくしたようなやつや今、左右にあるような景品を取るゲームなどが多く並んでるんだよ…：若干五月蠅いけどね」

ゲームセンター着いた俺達は辺りを見渡しながら歩いて居たがサクヤの方を見ると五月蠅いのが苦手なのか片耳を軽く抑えていた

「外に出ようか？」

「いえ…大丈夫です…：初めてでしたので少し驚いてしまっただけです」

「それなら良いけど、無理しないでな？」

「分かっています…それに、少しはなれましたので大丈夫です」

サクヤは何処か無理しているような笑顔を浮かべていたが俺は無理にその事に触れないようにしてサクヤの手を取り繋いだ

「ソウさん？」

「…：確か、さっきの所に」

俺はサクヤの手を引っ張り来た道を戻り入り口近くのUFOキャッチー前に止まった

「少し待ってて」

俺はサクヤにそう呟き、サクヤの返事を待たずにUFOキャッチーを始め一発でUFOキャッチーの景品を手に入れた

「はい、これ。防音性は良いはずだから少しは楽になるよ」

俺は景品……箱に入った赤と黒のヘッドホンをサクヤに手渡すとサクヤは少し驚いていたが嬉しそうに微笑んでいた

「…ありがとうございます」

「どういたしまして。早速着けてみなよ」

「あ、はい」

サクヤは俺の言葉に頷いてから箱からヘッドホンを取り出し着けてくれた

「うん。よく似合ってるよ」

「そ、そうですか？そうでしたら、嬉しいですよ」

サクヤは顔を少し赤くしていたが先程の無理しているような笑顔では無く、本当に嬉しそうに笑顔を浮かべていた

「ソウさん、私もやりたいです！やり方を教えて下さりますか？」

「ああ、もちろん！何でも教えてやる！まずはどれからやるうか？」

「歩いていたら時に見かけたのがあったのでそれをやりたいです」

「分かった。その場所に行ってみよう」

「はい！」

俺とサクヤは自然と手を握り合いサクヤのやりたいゲームの方に歩いて行った

「ソウさん、今日はありがとう御座いましたの」

ゲームセンターでかなりの時間遊んだ俺達は俺が良く行く公園のベンチに座っていた

「気にするな、俺も久々に楽しかったよ」

「私も楽しかったです。特にあの……ホラーゲームでしたか？」

「サバイバルホラーゲーム『ヴァイオ4』。確かにアレは楽しかったな」

サバイバルホラーゲーム『ヴァイオ』：ゾンビなどのモンスターを銃で倒していくホラーゲーム：家庭用ゲームとして発売されて今では超が付くほどの大人気で実写映画化やアニメなど様々な商品展開されている。

俺は少し驚いたがこのアーケードゲームをやるうと言い出したのはサクヤでこのゲーム中、サクヤは銃を使っていたからかいつも以上に楽しげだった

「サクヤ、一つ聞いていいかな？」

「なんですか？」

俺は軽く深呼吸をしてサクヤの手を軽く握った

「……IS学園から居なくならないよな？」

「ツ!!」

サクヤの顔を見ると嬉しそうな顔から一転、現実に戻されたような暗い顔をした

「ど、どうしてそんなことを聞くのですか？」

「……正直俺にも分からない……でも、あの日……タッグトーナメント戦で約束してからずっと、サクヤが俺の目の前から居なくなってしまう……そんな感じがしていた」

「ソウさん……」

「ツ!!」

サクヤの顔を見ることが怖くなった俺はずっと、夕焼けを見ていると俺の頬に柔らかい何かが当たり、眼だけを横に向けるとサクヤの真っ赤な顔が目の前にあり何が当たったか理解できた

「ソ、ソウさん。私は何処にも行きません。確かに私はあの時、IS学園から生還者学校に移ろうと考えていました……ですが、今日一日ソウさんと一緒に出かけて決心出来ました……私はソウさんの近くに居たいです！例え、この気持ち……この思いが実らな

くてもソウさんの近くでソウさんを見ていたいです！」

サクヤの顔が離れるとサクヤは顔を真っ赤にし笑顔でそう言ってくれて俺は何も言わずにサクヤを抱きしめた

続く

蒼と風 暴風の夜明け 一

7月1日 喫茶アンジュリーゼ I S 学園支店

「ごめんね、ソウ。呼び出したの僕なのに遅れちゃって」

「気にするな。会社からの緊急連絡だったんだろ？」

「うん。でも、恩人で友達との約束に遅れたのは僕だから、ごめんね」

「……その気持ちは受け取っておくよ」

臨海学習間近に迫ったこの日、俺はシャルに呼ばれ I S 学園唯一の憩いの場所、〃喫茶アンジュリーゼの個室にいて、待ち合わせから少し経ってからシャルが入ってきた。「それから……今日は御礼も兼ねてるから僕が全て持つから好きなの食べていいよ」「大丈夫なのか？六月入ってからフランスと日本を行ったり来たりしてるんだろ？」

シャルは六月になってから直ぐにフランスのデュノア社と日本を一週間置きに行き来して昨日一週間ぶりに帰ってきたばかりだった

「行ったり来たりはしてるけど、全てデユノア社……父さんが全て出してるからお金のことに關しては大丈夫だよ。それに……僕は一応代表候補生”だった”から国からの手当《給料》が貯まるに貯まつてるんだよ」

「……ごめん、代表候補生から降りなきゃ行けない形にして」

シャルはフランス代表候補生の座を降りた……いや、正確には今回の事件の発覚ででシャルはフランス代表候補生の座を降ろされたのだ

「ソウが謝る事じゃ無いよ。今回の事で代表候補生を降りる事になるのは覚悟してたから……それに、代表候補生降りてからあれやこれやで表舞台では社長にされちゃったしね」

「それは、三日前のニュースで見たよ。社長就任おめでとう、デユノア社長殿？」

俺がからかうとシャルは少し怒ったような顔をしていた

「ソウ、からかうのは辞めて欲しいな。僕は表舞台での社長で僕がIS学園を卒業するまでは父さんがこれまで通り社長を務めてくれることになってるから僕は第3世代ISのテストパイロットで」

「あまり、自分の事を悪く言うなよ。でも、一昨日発表されたデユノア社の第3世代型IS、”ミストラル・オーブ”は凄かったよ」

「それも、これも、全てはソウの御陰だよ。ソウが居なかったらデユノア社は倒産して僕

と父さんや社員たちは路頭に迷うことになっていたんだから……だから、改めてソウ、ありがとう」

「俺は少し背中を押したただけだ。それに、全てを終わらしたのは俺じゃ無い、【桜】だ」

「ソウ……彼女と知り合いみたいだったけど、知り合いなの？」

「まあ、少しな……」

シャルがデュノア社の社長になった今回の事の終わりにはいろいろな人の策略や思いが交差し、それを知るのはこの場の俺とシャル、その場にいた那由多、シャルの父親……そして、コードネーム【桜】だけだった。

その話は六月初めに遡る……

六月

「うーん。はあ……久々の飛行機は疲れたあ」

「だね。僕も少し疲れたよ」

この日、俺とシャルは日本から遠く離れたフランスの首都、パリの空港にいた

「さてと、観光したいのは山々なんだが……」

「うん。今はここでは6時半……日本では深夜一時位かな。明日は朝一であの人と会わないと行けないから、早めにホテルで休まないかね」

学園には一週間の外泊届を出しては居るが善は急げと言うことで俺とシャルはフランスに着いた翌日の一番でアポイントメント…アポをとっていた。

「それじゃあ、迎えが来てはるはずだから行くか」

「? ソウはフランスに知り合いが居るの?」

「いや、フランスの知り合いはシャルぐらいだよ。今回の迎えは俺の仲間以前に相棒だよ」

「以前と言われるのは心外ね。私は今もアナタの事を相棒と想っているのにね」

女性の声が聞こえ、振り向くと黒髪ロングで透き通った蒼い眼、いつも着ている赤と黒のドレスを着た那由多が少し怒ったような顔をして歩いてきた

「久しぶり那由多」

「ええ、久しぶりね。それで、先程の言い訳を聞かせてくれるかしら?」

「言い訳も何も、本当の事だろ? お前は『仕事上の相棒』で俺はもう、其方には戻れない。だから、お前は俺の『以前の相棒』なんだよ」

「そういう事なのね、納得はしないけど、今はそういう事しておくわ」

那由多はそう言う俺の隣のシャルの方を向いた

「初めまして、シャル様。私は那由多、ソウが言いましたとおり元相棒で、今はソウの従者になります」

「は、はい。よ、よろしくお願ひします」

シャルは緊張しているのか声のトーンなどが若干高く、それを見かねた、那由多は少し笑う

「ふふ、そんなに緊張しなくてもいいですわよ？それはそうと、車にご案内しますわ。話はホテルでごゆっくりと」

「ああ、よろしく頼む。シャル行くぞ」

「うん」

俺とシャルは那由多に連れられ那由多が用意したりムジンに乗り、これまた那由多に用意して貰ったホテルに向かった

続く

蒼と風 暴風の夜明け 二

「おはよう、シャル。那由多」

「うん。おはよう、ソウ」

「おはよう御座います、ソウ」

フランスに着いた翌日の朝、俺が部屋を出るとほぼ同時に那由多とシャルが隣の部屋から出てきた

「那由多、シャルが居るからって常時仕事口調じゃなくていいぞ？な、シャル？」
「う、うん。僕も普通に話して欲しいな」

「はあ……分かったわ。デュノア社以外では普段通り話すわ。それでいいわね？」

那由多は仕事時の口調を……と、言うより俺と2人っきりの時にしか普段の砕けた口調を使わないのだが……

「さて、早くレストランに行かないかしら？デュノア社長との会談は十時からだから、早くしないと時間なくなるわよ？」

「移動も考えないとだから早くしないといけないな」

「うん。そうだね」

そう言つて俺達、三人はホテル内のレストランに今後の予定を話しながら向かつた

「ソウはやつぱり、その服が似合うわね」

「ありがとう、那由多。あの頃のは小さくなつたから違うのだけど、この服はオーダーメイドで全く同じ物にしてもらった。いろいろな物や思い出が詰まつてるからな……」

「そうね。ソウはずつとその服で作業してきたものね」

パリ中心を離れパリから少し離れた場所にあるデュノア社に向かうリムジンの中、俺は食事後に「暗殺者時代」に使つていた水色のフード付きマント服を着ていると那由多が昔を思い出したのか懐かしんでいた

「えつと、ソウと那由多さんは何処で何時、知り合つたの？空港では「仕事上」って聞いたけど……」

「ごめん、シャル。全てを話すにはまだ、俺達の関係は浅すぎる……それに、もし話したらお前と俺は今のようにならなく出来なだらう。そして、俺の仲間……キリトやサクヤ達のことを嫌いになるかも知れない……そう言う話なんだ……」

「ご、ごめん。軽率だったみたい…」

シャルは俺の過去を聞こうとしてきたが俺の言葉で何かに気が付いたのか俯き、謝ってきた

「気にしなくてもいいわ。私とソウの出会いが少し特殊すぎなだけよ」

「ああ、那由多の言うとおりで気にしなくていい。それに、近いうちに話さなければならぬかも知れないからな……その時まで待っていてくれ」

「う、うん。その時まで待つてることにするよ」

俺と那由多がそう言うと言ふとシャルは少し顔を赤くしていたが何処か嬉しそうだった

「それから分かってると思うけど……ッ!!伏せろ!!」

俺はシャルに「このことは言わないように」と言おうとすると車の後方から殺気を感じとつさに怒鳴り目の前に座るシャルを床に引き倒しするとリアガラスが割れ無数の銃弾が頭上を通り過ぎた

「強化ガラスを撃ち抜くってどんな弾を使ってるのかしらね!!」

「多分、各国で試作されている対IS用試作特殊弾丸だろうな。弾丸の直径は7・84 mmのだから銃器はフランス製のAA―52だな。チツ、ここまでして何が望みなんだか……」

「ソ、ソウ…」

毒づいていると下から震えた声が聞こえて下を向くとシャルが目から涙を零していた

「安心しろ。言つたら？俺は仲間なんとしても護るって。だから、安心しろ、お前のことは護つてやる」

「ソ、ソウ……うん」

未だ、震えていたがシャルは笑顔で頷いた

「那由多、こういうときの想定はしてあつたんだろ？」

「私を誰だと想っているのかしら？もちろんしてあるわよ。座っていた椅子を開けてみなさい」

「……凄いな」

俺は言われたとおり、銃弾が飛んでくる中、椅子を開けると中にはハンドガン、アサルトライフル、スナイパーライフル、マシンガン、サブマシン、ロケットランチャー、グレネードランチャーなどいろいろと入っていた。

そして、どれもこれも見たことや触れたことがある物だった

「此奴らは……」

「気が付いたみたいね。そうよ、今回積んでいるのはほぼ、私達が使ってきた銃火器よ。流石に痛んだのは取り替えてパーツは最新物にしてあるわよ」

「…十分だ」

俺は一言そう言うのと二丁のベレッタM92とマガジンポーチを取り出し、ポーチはベルトに取り付ける

「さて、殺ろうか」

「言葉が違うわよ。まあ、私達を相手にするにはそっちの方が合ってるかも知れないわね」

那由多は素晴らしい愛銃の対物ライフルのウルティマラティオ・ヘカートIIを構えた
「…待ってろ、シャル。直ぐに終わらせる」

「う、うん（アレ？何処か違う）」

シャルロットはソウの変化に気が付いたがシャルロットはソウの言葉に頷くしか無かった

続く

蒼と風 暴風の夜明け 三

「あの時は本当に怖かった……それと、こう言うのは酷いかもしれないけどあの時、同時に僕はソウに恐怖を抱いたんだ……」

「気にするな。あんなのを見たら普通そうなる。酷いなんて想わないさ」

あの時、六月の初めにフランスに行きデュノア社に向かう最中の出来事……車両二台が俺とシャル、那由多が乗るリムジンを、機関銃AA—52で襲ってきた

それを、俺と那由多で迎え撃ち、車両二台に乗っていた8人の内、機関銃を使用していた二人と運転手の二人の計四人を撃ち殺し、残りの四人は運転手が居なくなった車が暴走して衝突し爆発で亡くなった

「でも、ソウは僕と父さん……それから、デュノア社を救ってくれたのに……僕は今でもソウの事を恐ろしいと思ってる……だから、ソウ、聞かせてソウと那由多さんは何者なの？」

「ごめん、シャル。今、俺と那由多が何者かは言えない……でも、これだけは言えるのか

な…俺と那由多はあの時のような経験を長い間してきた。勿論、ゲームじゃない現実の世界でな」

「それって、ソウと那由多は何度もあんなことをしてきたってこと？」

「ああ、そういう事だ。どうしてかはまだ言えない……でも、夏休みには話せると思う」
「本当に話してくれる？」

シャルの顔色は少し青く、俺の視線を気にしておるようだった

「ああ、必ず話す」

「お待たせ」

俺がそう言うのと個室のドアが開いてエプロン姿の茶髪の男性が入ってきてテーブルのシャルの方に紅茶、俺の方にアイスコーヒーにパフェ、二人の真ん中にドーナツが複数個置いてある皿を置いてきた

「ありがとう、タスクさん」

「気にしないで」

そう言つて男性……タスクさんは部屋を出て行った

「初めまして、デュノア社長。知っているとは思いますが私が3番目の男性IS操縦者の更識蒼です」

「勿論知っている、君は有名人だからね。改めて、私はアルベール・デュノア。君の隣にいるシャルロットの父親でデュノア社、社長だ」

襲撃があつた後、俺とシャル、那由多はデュノア社に到着しシャルの父親でデュノア社の社長であるアルベール・デュノアとの面会が適つた

「早速ですがアナタはシャルのことをどう思っているのでしょうか？ああ、この部屋に仕掛けられている盗聴器と監視カメラは潰してあるので本心の言葉をどうぞ」

「何処まで君は知ってるのかね？」

「何処までと言われましたら全てですよ、デュノア社長」

デュノア社長は俺の言葉を聞き顔をしかめ、シャルは俺の隣ですつと暗い顔で俯いていた

「すまなかつた、シャルロット」

「え？」

デュノア社長は頭を下げシャルに謝ってきた。

突然のことでシャルは呆気にとられていた

「こうなったのも全てはロゼンダがロゼに殺されたことから始まったのだ」
「?!」

「やっぱりそうでしたか…」

呆気にとられていたシャルは今度は驚きを隠せずに目を見開いていた

「ソ、ソウは知っていたの?」

「ああ、言つたろ?全てを知つてゐるつて。ロゼンダ・デュノア、社長の元妻で二年前にロゼ・デュノアに殺された」

「君の言うとおりでだよ。ロゼはロゼンダを殺し、シャルロットを半ば人質に取られ私はあの女と結婚させられたのだ」

「ぼ、僕を人質に?」

デュノア社の真実の一端を聞いたシャルは動揺を隠せきれずに目が泳いでいた

「本当なら君の母、メガーヌとの約束で君は元の家で静に暮らして貰うはずだったのだ
が…何処から嗅ぎつけたのかデュノア・グループの内部で君を暗殺しようとする者が現れたのだ」

「そして、それに便乗してロゼはシャルロットを養子に入れて身の安全を保証する代わりに結婚を迫ってきて…」

「結婚しなければシャルを殺すと脅されて仕方なく結婚したと」

「その通りだ」

「……」

俺とデュノア社長の会話をシャルは暗い顔で黙って聞いていた

「じゃ、じゃあ、僕と話をしなかったのは……」

「あの女に言われ仕方なくやっていたのが半分、デュノアの親戚から護るため、私はお前に冷たく当たっていた……代表候補生にしたのも I S 学園に男として入学させたのもデュノアの親戚とあの女からお前を護るためだった」

「……どうして、言ってくれなかったの？」

話の中、隣のシャルの顔を見ると目には大粒の涙が溢れていた

「私の行動はほぼ全てあの女に監視されいた。だから、真実を知っているのは会社を立ち上げた時からの友とここに居る三人だけだ」

『私あいるわよ、屑共』

「「「!?!?」」」

この場にいない声が聞こえ、聞こえたのと同時に扉が破壊され、扉の奥から赤い粒子をまき散らしたピンク色の全身装甲の I S が現れた

《貴方、本当に余計なことを話してくれたわね。折角私が、愛してあげたのに残念よ

》

「何が愛だ！お前は私の会社を好き勝手に使い今では倒産の危機じゃないか！」

扉から離れると全身装甲のI Sから女性の声が聞こえ、デュノア社長が怒鳴っていることからI Sの中身はロゼ・デュノアだと確信できた

《もう、潮時ね。貴方たちはここで始末してデュノア社は私が頂くわ!!》

「シャル、那由多はデュノア社長を護れ！俺がこいつの相手をする!!」

「う、うん」

「了解」

俺は二人に叫ぶと俺はストライクFを展開して二本のガーベラ・ストレートを構えた

《いいか、二人とも！決してこいつの攻撃を生身で受けるな！シールド越しでもだ！

》

「了解!!」

俺は2人に叫ぶと相手に振り返る

《いいわ、まずは貴方から始末してあげる》

《できるもんなら、やって見やがれ!!》

ここに、俺が知る限り世界初のガンダムタイプ同士の死闘が始まろうとしていた

続
く

蒼と風 暴風の夜明け 四

《クツ!!》

《アハハハハッ!! さっきの威勢はどうしたのかしらあ!!!》

ソウはロゼ・デユノアの操る、ピンク色の全身装甲のISの背部右側に折り畳まれた1門装備されている高出力粒子ビーム砲と手に持つビームライフルからなるビームの嵐にくガーベラ・ストレート>二本で何も無い上空に逸らすので精一杯だった

《クツ!! (避けるとデユノア社に当たる…あの粒子の攻撃だけはダメだ!!)》

ソウは赤い粒子の存在とその危険性を委員会のイアンさんから聞かされていて、デユノア社…その内部の人間が粒子を含む攻撃に当たることを恐れて攻められずにいた

《やっぱり、男は所詮そんなものよ!! 動かしただけで調子にのって!! 男は全員私達、女の奴隷になればいいのよ!!》

《…黙れ!! その機体の危険性をロクに知らずに使って安全地帯から馬鹿スカ撃つか芸が無い奴があ!!》

ソウが怒鳴るように言うのとロゼ・デュノアが操るISの動きが止まった

《危険性？だから、なんだって言うのかしら？他人がどうなろうと私には関係ないわ。それに……》

ロゼ・デュノアは話を途中で切るとビームライフルから赤いビームサーベルに持ち替えて接近してきた

《私はこう言うことも出来るのよ!!》

《ッ!!……》

ロゼ・デュノアは半分挑発でソウが言ったことに乗せられソウの間合いでサーベルを振るい鍔迫り合いとなった

《安全地帯からしか何も出来ないとしても思っていたのかしら?!!!それだったら残念ね

!!》

《ああ、全くだ。……全く、俺の挑発に乗ってくれるとはな!》

ソウはそう言うところ「ストライクF」の背部の両翼に一門ずつ装備されているバラエーナプラズマ収束ビーム砲をこの近距離で放った

《グウツ!!》

《悪いな、俺は射撃が苦手分野でな!!こうして至近距離に来て貰えたのは良かったよ

!!》

ソウは二本のくガーベラ・ストレート>を構え直して追撃に移る

《だらあ!!》

《ツ!!》

右、左、上、下とソウの振るうくガーベラ・ストレート>の斬撃はバラエーナプラズマ収束ビーム砲で絶対防御を抜きかけたことに動揺し、痛みで動きが鈍っているロゼ・デュノアの操るISに当たり、地面に落下していった

《これでお終いと言いたいところなんだが……他の2機はどうした?》

《…2機?何を言ってるのかしら?》

ソウはロゼ・デュノアを追うように地上に降り、ロゼ・デュノアの喉にくガーベラ・ストレート>の刃先を向けて話を聞こうとするがロゼ・デュノアはソウの言葉の意味を理解していなかった

《とぼけるなよ?その機体名は『ガンダムスローネ・アイン』。スローネはアイン、ツヴァイ、ドライの3機編成で真価を発揮する機体と聞いている。もう一度聞く、ツヴァイとドライはどこに居る?》

《…そういうことか……男のアンタ、なんかに教えるわけないじゃない!!アイツらが来てくれたら直ぐに貴様等を八つ裂きにしてやる!!》

ロゼ・デュノアは怒鳴り散らす。ソウはロゼ・デュノアの「アイツら」と言う言葉に

周囲にへの警戒を強めつつ、全身装甲内から睨み付ける

《ああ、そうか。なら、ロベルトの下に送ってやる》

ソウはそういい、＜ガーベラ・ストレート＞の刃先で喉を貫こうとした……その時……

“ストライクF”の緊急アラートが鳴り出した

《ッ!!》

ソウは急いでその場から離れると、“ストライクF”の心臓部分を丁度、通り抜けるようにビームサーベルのビットが1機、飛んでいった

《今のはビット……か？。いや、そんな優しい物なんかじゃ無いよな!!》

ソウが思考を巡らせていると襲ってきたビットが3機に増え、再度、ソウに襲いかかってきた

《遠隔操作機の対処方法はミツチリ鍛えられてんだよ!!》

ソウはそう言うのと片手にビームライフル、もう片方に＜ガーベラ・ストレート＞を構える

《3機じゃあ、俺には届かねえよ!!こちとら、36基。計93門のドラグーンとの連日の模擬戦を繰り返してんだあ!!》

ソウは“ストライクF”を受け取った時からのキラ等、数名との模擬戦を思い出しつつ、ビットのビームを避け、3機のビットを破壊した

《チィ、逃がしたか……いや！奴はまだ、近くに居るな…》

ビットを破壊したソウはロゼ・デュノアが倒れているはずの方に目をやるとそこにはスローネ・アインの姿は無く、一瞬逃げたと思ったソウだったが、ロゼ・デュノアがこのまま逃げるとは思えず、もう一度周囲を警戒し始めた

《ッ!!》

ソウが警戒を強めていると再び“ストライクF”の緊急アラートが鳴り出し、慌ててソウは左に避けたがソウの目の前を赤い極大ビームが通り過ぎた。

《今のを避けたのは驚きね》

《ロゼ・デュノア!!》

ソウにオープンチャンネルが開き、チャンネルからロゼ・デュノアの声が聞こえ、先程の砲撃はロゼ・デュノアが放ったことが分かり、スローネ・アインは既に到着していたツヴァイとドライと合体していた

《運良く、待っててくれたわ。もう一度言うわ!! 貴様等を八つ裂きにしてあげるわ!!》

《クウ!!》

ロゼ・デュノアが嬉しそうにソウに向かって怒鳴ると先程のビットが今度は13機飛んできた

《行きなさい!!ファング!!》

ビット…ファング13機はソウに向かってビームやビームサーベルで一斉に襲いかかってきた

《ほらほらほら!!逃げ切れ物ならにげてみなさいよ!!キャハハ》

『…ソウ…』

ソウの状況を見て高らかに笑う、ロゼ・デユノア。

そして、今なお何も出来ず、見ていることしか出来ないでいる2人の少女たち…

《これで終わりよ!!》

《グウ!!》

『ソウ!!』

スローネから先程の極大ビームが放たれ、少女たちの声は届かず、ソウと「ストライクF」は呑み込まれてしまった

続く

蒼と風 暴風の夜明け 五

『ソウ!!』

スローネから先程の極大ビームが放たれ、少女たちの声は届かず、ソウと「ストライクF」は呑み込まれてしまった

「ソウ！返事してよ!!ねえ、ソウってば!!」

「……」

《キャハハハハハハ!!これで一人目!!忌ま忌ましい男を殺すことができたわ、キャハハハハハ……ハ?》

シャルロット・デュノアはソウの死に動揺しプライベートチャンネルで何度も呼びかけ、那由多は無言で下を向き、ロゼ・デュノアは男性IS操縦者の一人、ソウを殺せたいと思いき、爆煙の中から思い高らかに笑っていた。だが、ソウが居た場所の爆煙が薄れていき、爆煙の中から

出てきた物を見るとロゼ・デュノアの笑いは止まった

《…うう…?!これは、GNフィールド?》

爆煙が晴れるとソウの「ストライクF」が両肩、両膝に二門ずつ、計四門のキャノン砲、両手にはバズーカを二つ、更に両翼はキャノンの合計八門を装備し、両肩と背部の円錐形の中から白っぽい緑色の粒子が排出されている赤みかかったストライクの後ろにあり、ソウの前のストライクが出しているであろうGNフィールドで護られていた

《大丈夫ですか?ソウさん》

《…助けてくれたことには感謝する。だが、お前は?》

ソウは少し状況をつかめていなかったが目の前のストライクからの通信で状況を把握した

《私を忘れてしまいましたか? ですが、この姿では致し方ありませんね…ではこの様に言えば私が誰か分かると思います

お久しぶりです、刹那さん》

《ツ!! 俺の正体を知っているってことは…お前、【桜】か?》

【桜】：暗殺者時代の時、ソウと一度だけ仕事を共にしただけでそれ以外では一度も顔を合わせることは無く、ソウは暗殺者を辞めてしまった。

【桜】と言うのも本名では無く、暗殺者ではよくあることだったが、【桜】が暗殺した後には桜の花びらが一枚、死体につけられていて、それに因んで暗殺者の間で呼ばれ、本人も【桜】を好み、ずっとコードネームとして使っていたのだった

《やっぱり、貴方は凄いい人です。今の一言で私が誰かを当ててしまうのですから》

《俺の正体を生きて知っているのは二十は居ない。その中で今、フランスにいるのは那由多とお前だけだからな……それよりも……》

《ええ、分かっています。もう少しお話ししたいところですが、少し五月蠅いハエの始末ですね》

ソウと【桜】が話している間、ずっと、二人に向かって砲撃が行われていたが【桜】のストライクのGNフィールドにて完全に遮断され、二人には全くダメージは届いていなかったが、漸く二人は砲撃している相手が鬱陶しくなった為、話を辞めたのだった

《では、ソウさん。私がロゼ・デユノアの相手をしますので下がっていただいてもよろしいでしょうか？》

《…分かっている、誰がクライアントかは知らないが仕事なんだろう？》

《はい、その通りです》

ソウの言った仕事に【桜】は軽く頷いた

《後は、頼む》

《はい。直ぐに終わらせます》

【桜】はそう言うとうとGNフィールドを自分の周りだけに狭め、ソウをGNフィールドからだし、ソウは「ストライクF」を動かして那由多とシャルロット、デュノア社長の下に降りた

《貴方は女でしょ!?!どうして、男を助けたりするの!?!》

《くだらないですね。私は、今の世界が：女尊男卑の風潮が嫌いです。ISが使えるから女が偉い?男は女の奴隷?実にくだらない。本当の意味でISを操れる女性はごく僅か、更に言えば本当の意味でISを操れる人は女性より男性の方が多いですよ。尚も男性IS操縦者三人以外は極秘ですがね》

《そんなの、嘘よ!!》

【桜】の言葉にロゼ・デュノアは動揺を隠せず、それを見た【桜】は「ふふ」と笑っていた

《そんな些細なことはどうだって良いんですよ。さて、ソウさんともう少し話したいのがありますしクライアントとの契約期限もあまりありませんから直ぐに終わらせてさしあげます》

《来るなアアアアアアア!!》

【桜】に恐怖したロゼ・デュノアは合体したスローネのキャノン砲を発射しキャノン砲は【桜】を呑み込んだ……だが

《…その威力では私の“ストライクエリクトロン”のGNフィールドを抜くのは無理なのです。最もまだシステムが未完成なので、全力では無いんですがね》

《ふざけないでよ!!私はこんなところで死んで良い女では無いのよ!!》

ロゼ・デュノアはそう、発狂するとスローネを反転させ逃げようとするが、

《いえ、貴方はここで死ぬのですよ。私の手でね》

【桜】は手持ちのバズーカを上下で連結して砲口を展開しチャージを始めた

《GNドライブ、シングルからツインドライブに移行。両肩GNドライブ同調開始…同調率80%で安定、ダブルバズーカチャージ終了。バースト!!》

“ストライクエリクトロン”のバズーカから極大ビームが放たれ無残にもロゼ・デュノアのスローネを呑み込んだ

「ロゼ・デュノアは死に、デュノア社は貴方の物に戻りました。これから貴方はどうするのですか？」

「ふむ……私は社長の座をシャルロットに明け渡す」

「え!？」

ロゼ・デュノアとの戦闘が終わり、壊された社長室では無く、会議室で再びデュノア社長と話をするとんでもない発言で俺とシャルは驚いて声を上げてしまった

「直ぐにと言うわけでは無い。まず、私は表舞台の社長の座をシャルロットに明け渡す。だが、お前がI S学園を卒業するまでは私が会社を運営しお前がもし、I S学園を卒業しても社長をしたくないのなら、私がもう一度社長となり、お前は自由に生きること構わない」

「お父さん……で、でも、私が社長になっても今の危機的状況はどうするの?」

「それは……」

シャルの言葉に言葉を詰まらせるデュノア社長……少し静かな間が開く

「今の危機的状況を解決する手段はあります」

「え?」

「本当なのかね?」

俺の言葉にシャルは不思議そうな顔をし、デュノア社長は一瞬驚いていた

「はい。勿論、ロゼ・デュノアを倒した後のことも考えてあります。このデータをご覧下さい」

「……!!」

シャルとデュノア社長は俺が出した投射型ディスプレイのデータを見て驚愕していた

「これは……I Sの設計図?」

「その通りです。デュノア社のラファールをベースに何人かの手を借りてこのデータを作り上げました。更にI S委員会の整備担当兼設計担当のイオリ・セイさんがこちらに一時的に出向して貰うことを確約してあります。最も其方が承諾するのであればの話です」

「す、凄いやソウ!!このデータもI S委員会の人との確約も全部凄いや!!」

喜んでるシャルと声を出していなかったがデュノア社長は驚き涙を流していた

「これがあれば会社を建て直す事が出来る!!ありがとう、本当にありがとう!!」

涙を流す、デュノア社長…それに、つられるかのように隣のシャルも涙を流していた

「もう行くのか、【桜】？」

「はい。次の依頼もありますので」

フランスの夕焼け、パリから次の街への一本道、俺は【桜】とその場所にいた

「シャルロットさんの側にいなくてもよろしいのでしょうか？」

「シャルは大丈夫だ。それに今は那由多が見てくれているからな。1度だけだったけど一緒に戦ったからな見送りぐらいはしたいしな」

「そうなのですか……」

【桜】少し微笑んでいた

「ここまででいいですよ、ソウさん。」

「分かった。また、何処かで会えたら会おうな。【桜】」

「……ツバサって呼んでください……ツバサ・クロニクル。それが私の本当の名前です」

「……ツバサ・クロニクル……いい名前だな。それじゃあ、ツバサ、また会おうな」

「はい。ソウさん」

俺と【桜】……いや、ツバサは別れを告げ俺はパリに、ツバサはパリとは反対方向に共に歩いていった

続
く

蒼と風 暴風の夜明け 六

「あの時、僕は砲撃でソウが死んだって思って凄く怖かった…僕がソウに頼んだからソウが死んだって…」

「自分を責めるな。今回は俺が好きでやったことだからな。まあ、【桜】が来なかったらどうなっているかなんて想像はしたくないけどな…：：：たがら、もう一度いう、お前の所為じゃない、自分を責めるな。俺がやりたくてシャルを助けただけだ」

「う…うん。ありがとう、ソウ。助けてくれて」

涙ぐむも礼を言うシャルに俺は軽く微笑む

「あ、フランスで砲撃に呑み込まれたことは内緒な？サクヤや簪には特に言わないでな？」

「…クスツ…：：：うん、分かった」

俺がそう言うのとシャルは笑顔で頷いた

「それにしてもさ、ソウ？『ミストラル・オーブ』の元のデータ作りと委員会のイオリ・

セイさんの出向の確約をいつの間にしてたの？」

「シャルを助けると言ったあの日から2週間くらいしてからだな。どちらも出来たのはフランスに行く三日前だったけどな」

「そ、そうなんだ……ソウってやつぱり凄いな……」

「俺が凄いわけじゃ無いよ、本当に凄いののはキリトや簪、セイさんやアスランさん、キラさん、それから委員長のラクスさんにアジア支部長のカガリさんだよ」

「ねえ、ソウ？あまりの卑下は人を怒らせるんだよ……確かにイオリさんやキラさんたち、それから、和人や簪さんも凄いなと思うよ、でも、その人達との縁を築いたのはソウなんだよ。」

「あ、ああ……ごめん」

シャルは笑ってはいいたが普段の彼女とは違い……ゆうちゃんが俺を怒る一歩手前の……そう、笑顔で物騒な事を言うような顔をしていた

「ねえ、ソウ？前にも聞いたけど『ミストラル・オーブ』のホルスタービットとピストルビット、ライフルビットⅡは本当にイギリスのBT兵器じゃ無いんだよね？」

「ああ、趣旨は同じだが、全くの別物だ。それに、BT兵器には無駄がありすぎる……セシリアが偏向射撃^{フレキシブル}出来ないのもその無駄の所為だが、ホルスタービットは高性能補助A Iハ口を搭載しビットの制御はハ口が行うから搭乗者はビットの操作をしなくてすむ。

それでも、搭乗者の技量が高くなければ操れないけどな」

「うん、ハ口は凄いや。以前よりもラビットスイッチでのラグが無くなっただし機体制御がかなり楽になったからね」

「ミストラル・オーブ」の話になり、シャルは俺にホルスタービットなどのビット兵器について聞いてきた

「そう言えば、ミストラル・オーブの意味は暴風の夜明けなんだよな?」

「うん。正確には『嵐による暴風は夜明けと共に静寂に変わる』なんだけど、少し長過ぎたから父さんと話して『暴風の夜明け』ってことにしたんだ」

「なるほどな。もう一つ、デユノア社の願いだろ?」

「うん。いままで、デユノア社はロゼ・デユノアによって混沌の暴風の中にあつた……今回のことでデユノア社は嵐を……暴風を抜け出すことが出来た。これからは、静寂の中でデユノア社を1から造り直す。それがミストラル・オーブのもう一つの意味で由来だよ」

真剣な眼差しでそう話す、シャル。俺はそんな、シャルの頭を軽く撫でる

「これから、もつと忙しくなると思うけど何かあつたら何でも言ってくれよ?俺が手伝えることなら何だって手伝ってやる」

「うん。ありがとう、ソウ。なら、2つお願い聞いてくれないかな?」

嬉しそうに微笑む、シャルは早速、お願いを言ってきた

「うん、何でも言ってくれよ」

「ありがとう。一つ目は……もう少し、会社が落ち着いてからになるだろうけど、会社が落ち着いてきたら、僕にALOを教えて欲しい」

「勿論、大歓迎だよ。何時でも言ってくれよ。もう一つは？」

「もう一つは……僕に剣を教えてほしいんだ」

「剣を？」

俺は少し疑問に思った。確かにALOなら俺や他の皆に言えば教えることができ、今日俺に話したのもタイミングが良かったのだろう……だが、剣なら俺よりもキリトやチカの方が適役だと思う……それに……

「剣なら俺よりも適役が他にもいるんじゃないか？それに、シャルは中距離距離型だろ？」
「うん。僕は銃などの中距離やシールドでの援護だよ。でもね、それは僕の弱点でもあるんだよ。特に和人や一夏、ソウ達のような近接のエキスパート相手に攻め来られたら直ぐにやられちゃうから近接のエキスパートがいる今のうちに近接を鍛えておきたいんだ。それに、ミストラル・オーブにも父さんに頼んで剣を何本か積んで貰ってるんだ」

「まあ、理由は分かったけどどうして俺なんだ？剣なら、独学のキリトやチカ、流派とし

でも簪が俺より強いぞ？」

俺自身、剣に關してはそんなに強くないと思つて居たのだが…俺の発言はシャルを怒らせたみたいで……

「また、卑下するのかな？」

「ウグウ……べ、別にそういうつもりじゃ無い。俺はそこまで剣を磨いてきてない、ゲームでもずっと剣を使っているキリトやチカ、長い間現実の世界でも剣を習つてきた簪に比べて俺の剣の練度はかなり低い。今も戦つてこれたのは相手がそこまで強くない相手だったからだからな……それでも俺で良いか？」

「うん。ソウとがいいんだ」

シャルは即答で答えてきた

「……はあ……わかった。でも、俺は人に物を教えるのは得意じゃ無いから実践で教えることになるが良いな？」

「うん！」

シャルは嬉しそうに笑顔で頷いてきた

続く

臨海学習

絶剣来る!!

「それでは、旅館に入る前に皆さんに一組の新しいお友達をご紹介します。更識くん、お願いします」

臨海学習当日、I S 学園の臨海学習で使わせて貰っている旅館に到着して直ぐに転入生のゆうちゃんとかこれから寮にすむことになるソウキ達の紹介になった

「はいー」

俺は山田先生に言われるとゆうちゃん達を連れて全員の前に立つ

「僕の方から紹介をさせて頂きます。最初に僕の隣にいるのは紺野木綿季さんで体の関係上……この時期に転入することになりました。付け加えるとユウキさんは僕と同じS A O 生還者です。……ほら、ゆうちゃん」

俺があらかた説明するとゆうちゃんに小声でつぶやく

「えっと、紺野木綿季です。趣味はA L O と料理………す、好きなことはソーの寝顔

を見ること……よ、よろしく願います!」

ゆうちゃん最後の所で顔を真っ赤にして自己紹介を終わらせる。女子達が黄色い声を上げた

「静かにしてくれ、次にこの子たちの紹介なんです。正直に言いますと俺とユウキの子供です。……あまり、言いたくはありませんが二人はSAOの被害者です。それから、二人に手を出そうとするのであれば容赦はしませんので、…美乃梨ちゃんからお願い!」

俺が深刻な顔で言うのとみんな静かに頷く。

俺はそれを見てから美乃梨ちゃんにつぶやく

「えっと、更識美乃梨と言います。普段は学校に通ってるので朝と夜くらいしか居ません。がよろしく願います!」

「更識初夜です。僕もお姉ちゃんと同じで学校に通ってるのであんまり居ませんがよろしく願います!」

可愛らしい二人にまたもや女子が叫ぶ、その光景をソウキ達は苦笑いで見ていた

その後、山田先生に怒られて静かになった後に一組の生徒から順番に旅館に入っていくことになった

「うわあ〜綺麗〜」

旅館で少し休憩してから水着に着替えて砂浜に出るとゆうちゃんとミノリちゃんが目を輝かしていた。

「そうだね…………でも、ゆうちゃんの方が綺麗だよ？」

「…………あ、ありがとう／＼／＼」

俺がそう言うのと紺と白の水着を着たゆうちゃんは顔を真っ赤にしながら呟く

そこに…………

「あら、ソウくん。ユウキちゃんも早いわね」

「よお、ソウ、ユウキ」

後ろから声が聞こえ振り向くと濡れても大丈夫な白のパーカーを羽織ったチカと俺と同じ水色のパーカーを羽織ったカタナ姉さんが歩いてきた

「あ！チカ、カタナ！」

「そうかな？これでも少し休憩してから来たんだけどな」

「私達ももっと早くに来るつもりだったのだけど、ちよつとね…チカ?」

「ああ……ソウには言っておいた方がいいかもな。実は……」

チカと刀奈姉さんは遅れてきた事の発端を話してくれた

なんでも、設けられた更衣室に行こうと旅館内を歩いていると機械のウサ耳が地面に刺さっていて、それを引っ張り抜くと人参ロケットでウサ耳を地面に刺した張本人の I S の母こと篠ノ之束が現れたらしい。今は近くに居るらしいが嵐のように何処かに行ってしまったようだ

「……やっぱり、凄い人だな…あの人は……」

「?ソウは束姉とあったことあるのか?」

俺は口が滑ってしまい言わなくてもいいようなことを言ってしまった

「いや……まあ、な。会ったことがあるか無いかって言われれば一応はある。経緯はこういう所で話すような事じゃ無いから………また、な?」

「……分かった」

チカは俺の雰囲気で察したのか軽く頷いてきた

「チカ、オイル塗って欲しいから日陰に行きましょう?」

「あ、ああ。ソウ、ユウキ、また後で一緒に遊ぼう」

「ああ、そうだな」

「うん!!」

そう言つてチカは刀奈姉さんに連れられ日陰の方に行つてしまった

「さて、遊ぶ前にゆうちゃんはおイルは塗らなくていいの?」

「うん、本当なら塗つた方がいいんだとは思うけど、ソウキやミノリちゃんが遊ぶのウズウズしてるし……」

隣の2人を見ると確かに、早く遊びたそうにソワソワしていた

「俺が2人を見てるからゆうちゃんはアスナや刀奈姉さん達に塗つて貰つてきなよ。

そ、それに……」

「それに?」

「な、何でも無い!うん、何でも無い!」

ゆうちゃんの肌が変に焼けてほしく無いと思い、目をそらすとゆうちゃんが顔を覗いてきて少し動揺して顔を赤くしてしまった

「ふうん、ま!そういう事しておくよ!じゃあ、ボクはおイルを塗つて来るから2人のこと、よろしく!!」

「分かつてるよ」

ゆうちゃんはそう言つたとチカと刀奈姉さんが向かつていった方に歩いて行つた

「それじゃあ、ゆうちゃんが戻ってくるまで三人で遊ぼうか?」

「うん! パパ!」

「はい!」

俺がそう言うと2人は待っていたかのように海の方に走っていった

続く

蒼紫の夏

「うお〜」

「パパ、どうかな?」

「お父さん、どうでしょか?」

ゆうちゃんがオイルを塗りに行ってから三人で砂浜で遊んでいると、ミノリちゃんとソウキの2人がアインクラッドで使っていた《西風の旅団》ギルドホームを砂で作り上げていた

「2人とも上手にできてるよ!!ソウキが教えたのかな?」

「うん!!そうだよ!」

「えへへへ。そ、そうです……ところで、お父さんは何を作ったのですか?」

「……何も出来て……ないです」

元氣よく頷くソウキと嬉しそうに笑うミノリちゃんの2人から俺は目をそらした

「ソーはインドアだから、あまり砂遊びは得意じゃ無いんだよ」

俺が目をそらしソウキとミノリちゃんが残念そうな顔をしていることに気が付くと、後ろからゆうちゃんの声が聞こえた

「ママー！」

「お母さんー！」

「…ゆうちゃん」

俺が後ろを振り向くと、紺と白色のストライプビキニを着たゆうちゃんが歩いてきた
「みんな、お待たせ!!何して遊ぶ?」

「海!!」

ゆうちゃんが来て早々にミノリちゃんとソウキは海に向かって走り出した

「あっ!!2人も待ってよ!!ほら、ソーも早く行こうよ!!」

「あ、ああ、分かってる」

俺はゆうちゃんに見とれてしまっていて反応が遅れてゆうちゃんに手を引っ張られてから漸く正気に戻った

「パパ、ママ早く〜」

「お父さん、お母さん、冷たくて気持ちいいですよ〜」

「直ぐ行くよ!!」

俺はゆうちゃんに連れられてソウキ、ミノリちゃんがいる方に向かった……………ずっと

と、感じているサクヤの視線を感じながら…

同時刻 春菱 side

私は家族団欒を満喫しているソウさん達と隣でビーチバレーをしている2つのバカップル、和人とアスナさん、兄さんに刀奈さんを横目にセシリアさん、鈴、簪さん、ラウラ、シャルさん、サクヤさんとビーチバレーをしていました。

だけど、海に来てからサクヤさんが度々ソウさんの方を見てぼけっとしていました

「サクヤさん、気になるのですら行ってもいいですよ？ソウさんもユウキさんも喜ぶと思いますよ？」

「……うん、私はこうして見ているだけでいい…それが、私の今の幸せだから」
サクヤさんはそう言うてましたがどこか表情は暗かったです。

大広間

「「「頂きます!!」」」」

臨海学校一日目は夕方まで自由時間となっていて、俺達、生徒達は目一杯海で遊んでリフレッシュした。

夕方には風呂に入っただけのんびりとしたあと、夜の夕食で大宴会場に集まって座敷席とテーブル席に分かれて用意された豪華な食事が振舞われていた

「ボク、こんな豪華な料理、こ現こ実っちではじめて食べるよ!」

「僕達も始めて食べたよ!ね、お姉ちゃん!」

「うん!私も始めて食べました」

俺達家族四人はテーブル席に座って食べていた……と、言うのも座敷だと四人で直列に並んでしまうので四人で囲めるテーブル席にしたのだ。

それと、ソウキと美乃梨ちゃんの料理だが、俺らと何ら変わらない料理で違うのは少し量が少なくなっていてみたらし団子が追加されていた

「ソー」

「ん？」

「はい、あゝん」

「ゆ、ゆうちゃん……周りに人いるけど？」

「いいじゃん……それに……ほら、あっちでも……」

差し出された刺身を前に、俺は少し戸惑った。そして、ゆうちゃんが指さす方を向くと……

「キリト君、はい、あゝん」

「あ、あゝん」

「美味しい？」

「ああ、美味しいよ。アスナに食べさせて貰ったから余計にな」

「もう、キリト君っ」

座敷の方でキリトとアスナのバカップルが同じことをしていた……さらには……

「チカ、はい、あゝん」

「お、おい、カタナ……みんなが見てるぞ？」

「見せつけてるのよ、チカは私の物だってね。チカってば……女の子にモテるんだから浮気しないか心配なのよ」

「カタナ……大丈夫、俺はカタナだけの物だから浮気なんてしないからな？」

「もう、チカったら」

カタナ姉さんとチカも二人に負けず劣らないバカップルオーラを出していたが……その隣で鈴が途轍もないオーラを放っていたのは気にしないでおう

「まあ……あの四人がやつてるならいいか……それに、俺達家族四人でこ現つち実での初お泊まりで初ご飯だから、これくらいはいいか!」

「そうだよ!これくらいは文句言われぬよ!はい、あくん」

枷をはずした俺は口を開けてゆうちゃんんが差し出す刺身を頬張り、噛み締めて飲み込んだ

「美味しい?」

「ああ、美味しいよ。ゆうちゃんに食べさせて貰ったからね」

「もう、ソー／＼」

俺がそう言つてゆうちゃんがほんのり赤くなるのを見て俺が少し笑うと俺の隣に座っている美乃梨ちゃんが俺の服のを引っ張つてきた

「どうしたの、美乃梨ちゃん?」

「えつと……その……」

俺が聞くと美乃梨ちゃんが顔を赤くしながら俯く……俺は何なのか気づいてゆうちゃんがしてくれただよように美乃梨ちゃんに刺身を差し出す

「美乃梨ちゃん、はい、あ〜ん」

俺が差し出すと美乃梨ちゃんは顔を赤くしながら頬張り、飲み込んだ。

「あ、ありがとう、お父さん。」

「どういたしまして」

美乃梨ちゃんが顔を赤くしたままお礼を言ってきた。

それから、何度か食べさせあつたりして夕食を終えた。

因みに、バカツプル三組の光景を見た他生徒は刺身醤油にワサビを追加したり料理についているワサビを一気に飲み込んだりしていたらしい。

続く

不思議な国の罪の天才

海岸

臨海学校二日目、この日は各種装備の実習訓練と専用機持ちは本国より送られてきたパツケージのテストが行われる事になっている。もちろんのことだがSAO生還者の中で委員会のカスタム機を使っている俺を除いたキリト達とゆうちゃんの4人のISには後付装備イコライザが存在しない。

更に言えば、刀奈姉さんのミスティアス・レイディや簪の伐鐘聖式とハルナさんのやてんのはくそうきし夜天の白双騎士、シャルのミストラル・オーブにも後付装備イコライザが無いので8人はセシリア達の手伝いをする事になっている。

「山田先生も来たみたいだな」

「ですわね、それはそうと一夏さん？一夏さんたちはパツケージがありますの？」

「いや、俺やキリトさん達のは無いからセシリア達の手伝いになりそうだ。ソウはある

「みただけだな」

「僕のも無いから何でも言つてね!!」

「なら手伝わせてあげるわ、人手欲しいしね。ソウのは確か委員会のカスタム機なのよね?」

「ああ、俺の専用機は調整に時間が掛かつてるらしいからずっと、委員会のカスタム機を借りている。今日には届くつて聞いてはいるが……俺も詳しくはわからない」

俺やゆうちゃん達、十人が海岸に着到着すると、既に来ていたセシリア達、各国の代表候補生とシャルと合流する。そして、その後すぐに山田先生がきた。

「専用機持ちは揃いましたね。専用気持ちのみなさんには各国が用意したパッケージのテストを行つて頂きます。パッケージの無い桐ヶ谷くんや神籬君達は他の方のお手伝いをお願いしますね。それから……」

「僕の機体についてですね?」

「は、」

『いっくううううん!!はるちややややややん!!』

山田先生が頷くと何処からかチカとハルナさんと呼ぶ声が聞こえてきて、崖の上を見ると不思議の国のアリスのような服を着た女性が崖を走つて来ていた

「やあやあ!!久しぶりだね!2人とも!!何年ぶりかな!!あ、いっくんには昨日あったか、

アハハハツ!!」

「「「「……………」」」」

テンションの高いウサ耳女性はチカとハルナさんに抱きつき、笑う。

抱きつかれている本人達のチカとハルナさんは馴れているのか苦笑いしていた

「東姉、う、後ろ…」

「うん? どうしたのいっくん? 後ろにはだれ、も……」

女性はチカに言われ不思議そうに後ろを向くとそこにはドス黒いオーラを放っている金髪ショートで菖蒲色あやめいろメインの白い服に水色のスカート姿の女性が立っていた

「勝手なこと…ダメだよ? 昨日も言った、よね?」

「は、はい! 昨日も言われてました!!」

チカとハルナさんに抱きついていた女性は見事な土下座で後ろの女性に謝り、ここにいる俺を含めた全員が2人の女性に唾然としていた

「ステラ、タバネ技術副主任、2人ともそこまでに。みんな、困ってるぞ」

そうしていると聞き覚えのある男性の声が聞こえ、海岸の方を見ると以前、専用機を受理した時に来て下さったシンさんが歩いてきた

「ごめん、シン」

ステラと呼ばれた女性はシンさんが来るとタバネと呼ばれた女性からシンさんの方

く。いつくんとはるちゃんとの友達だからみんな、タバネさんでいいよ」

軽いノリで話す篠ノ之束……いや、タバネ・アマルティア博士に国家代表候補生の鈴達と候補生だったシャルは首を横にふり、生還者組の俺やゆうちゃん、刀奈姉さんやサクヤ、キリトやアスナは苦笑いしチカとハルナさんは何故か驚いた顔をしていた

「束姉！今、篠ノ之から籍を抜いたって……」

「あ、いつくん気が付いた？うん、そうだよ。私は篠ノ之から籍を抜いたんだよ。世界を壊しているんな人達の人生を壊した責任として……ダメ姉として、妹の箒ちゃんが今よりもっと墜ちないように、篠ノ之束の妹だからって何でもかんでも刑が軽くならないようにするために……アマルティア、意味は罪。私の罪を私が忘れないようにって付けたんだ……箒ちゃんに関しては逃げてるような物なだけだね……」

軽いノリだったタバネ・アマルティア博士は俯き、少し暗めに話してくれた

「篠ノ之に関しては束姉は何も悪くない」

「そうですね、束姉さん。あれは全て秋羅の所為です。秋羅が篠ノ之を変えたんです。自分の扱いやすい傀儡に……」

「それはそうだけど、私がちやんと箒ちゃんを見てあげてれば、あんな奴と仲良くならなかつたしいつくんとはるちゃんが辛い思いをすることは無かつたのは確かだよ。私に気が付いた時にはもう、手遅れの状態……」

「「「「……」」」」

チカとハルナさん、タバネ・アマルティアの三人の話にこの場の空気が重くなり静になつてしまった

「え、えつくと、積もる話もあるとは思いますが……」

「そうですね、山田先生。チカもハルナさん、それからタバネ博士でいいかしら？ 話したいことも沢山あると思うのだけど今は……」

「わかつてるよ、カタナ。今はパッケージの運用テストが優先だからな」

「はい。わかつてます」

「そうだったね」

今日の実習に戻そうとした山田先生と刀奈姉さんの一声で軽いノリに戻ったタバネ・アマルティア博士は先程の暗い顔とは最初の明るい顔に戻った

「ソウ、今日渡す予定になつていた機体なんだが、未だに完成してなく、完成時期も未定だそうだ」

「…そんなに俺用に作るのが大変つて事ですか……わかりました。専用機制作は止めてもらつていいです。俺の機体にかかりつきりもご迷惑だとおもいますので」

「ソウ君!?!?」

「お兄ちゃん!?!」

「！！！！？」

俺の言葉に驚き、姉で国家代表の刀奈姉さんと妹で代表候補生の簪が声を漏らした
「？みんな、どうかしたか？」

「どうかした？じゃないよ、ソウ!!専用機だよ!!何処かの企業の代表や国家代表候補生
にならないと本来は貰えない物なんだよ!!」

「シヤルの言いたいことは分かるぞ?でもな、完成が未定ならずと俺の専用機にかか
りつきりになるだろ?それなら、俺はこれまで通り “ストライク” を使った方がランさ
んや他の人達も楽が出来るだろ?」

「確かにソウの言っていることは一理あるとは思いますが…」

「ソウは自分の…多分、イチカや和人さん達と同じなら “ソードアートオンライン”
の服装になると思うけど、それで戦いたくは無いわけ?」

「そう言う分けじゃ無い、勿論SAOの装備で戦えるならみんなと一緒に戦いたいと思
い入れはある。だけど…何となく分かるんだ、SAOでの “ソウ” の役目は終わった
…そんな感じがな…俺がそう感じてる限り、SAOの武装の専用機は完成しない…
と、思う」

「……俺も、そう感じた事がある」

俺の話にキリトも頷いた

「ソーは…多分だけど、ソーはSAO生還者の中でも特にSAOにのめり込んでいた……いや、ソーは誰よりもあの世界で生を燃やしてたんじゃ無いかな、キリトやアスナ、ボクよりも…だから、現実に戻ったソーの専用機になる“SAOのソー”は完成しないんじゃないかな……”SAOのソー”は死んでるから…」

「ゆうちゃん…」

少し悲しそうに、だけど何処か嬉しそうに呟く、ゆうちゃんの話でまた、この場が静になった

「……ソウの考えはわかった。俺から制作中止の事は伝えておく」

「お願いします」

シンさんの言葉に俺が頷き、俺の専用機制作は中止になることが決定した

続く

赤き二翼と青き翼

「それから、もう一つ。今回、俺とステラが来たのは、ソウの“ストライク”に追加武装を持つてきたんだ」

「追加武装です……か？」

「うん、そうだよ！君、専用にカスタムしてるよ！」

シンさんの隣で元気に話す、ステラさん。

ステラさんがそう言うのと赤いコンテナと青のコンテナが運ばれてきて、中身は“ストライクF”のプロトフリーダムストライカーの同型の青い翼と赤がメイン色のリフターだった

「見て通り、片方は“ストライクF”のプロトフリーダムストライカーの完成形、フリーダムストライカー。次に赤いリフターの名はファトゥム00、委員長直属第一部隊隊長、アスラン・ザラの専用機“ジャステイス”のバックパックを元に作られ、ストライカー名はジャステイスストライカー。ソウは近接メインだから、ジャステイスの方が

合っていると思いいフリーダムストライカーと共に持ってきた。ソウ、*“ストライク”*を展開してくれ」

「はぐ」

俺は軽く返事をする *“ストライク”* を展開する

「タバネ副主任」

「りよ〜かい」

軽い返事をするタバネ・アマルティア博士は *“ストライク”* の前で投射型ディスプレイを展開してキーボードを打ち始める

「タバネ副主任の作業が終わるまで武装の説明をする。フリーダムストライカーの武装はプロトフリーダムストライカーの武装が幾つか増設され、新武装も追加されている。まずは追加されたM A—M 20 ルプスビームライフル。これは、*“ストライク”* の57mm高エネルギービームライフルの発展強化型になる。次に同じく追加されたM M I—M I 5 クスイファイアスレール砲×2。これは電磁レールガンでドイツのI Sが良く装備している物だが、あちらより火力が高い。

増設されたのはM A—M O I ラケルタビームサーベル×2とM I O O バラエーナプラズマ収束ビーム砲×2が一つずつになる。次にジャステイスストライカーの武装の説明に移る。

最初はジャスティスストライカー時のみに両肩にマウンドされるビームブーメランのRQM51バツセル　ビームブーメラン×2

フリーダムストライカーと同型のMA-M01ラケルタ　ビームサーベル×2とMA-M20ルプス　ビームライフル、ラケルタビームサーベルは柄を連結させ「アンビデクストラス・ハルバード」と呼ばれる両刃としても使える

バックパックのファトウム-00にはGAU5フォルクリス　機関砲×4

M9M9ケルルス　旋回砲塔機関砲×2

MA-4Bフォルティス　ビーム砲×2の三種の武装が装備してある。どちらのストライカーの武装もSEの消費が激しく数回使用しただけで活動時間が極端に減ってしまうため、「ストライク」にとあるエンジンを組み込むことになった。それは……「機体の改修とチェック終わったよ」

シンさんが話してくれているとタバネ・アマルティア博士の声が聞こえ、振り向くと博士とその後ろに新品のように輝く「ストライク」が静止していた

「関節などの消耗しやすい部分や、ガーベラ・ストレートの交換をしておいたよ」

「ありがとうございます。アマルティア博士」

「どういたしまして。それから、さつきも言ったけどタバネさんでいいよ（君は私の恩人だから、特にね）」

「…ツ！（は、はい……）」

「ソー、どうかした？」

「うん、何でも無い」

タバネ・アマルティア：タバネさんの「私の恩人」で俺が刹那だったことを知っている事に気がつき、少しだけ警戒してしまった

「あ、そつくん？ “ストライク” を装着してフリーダムストライカーとジャステイスストライカーを装備して少し飛んでみてくれない？ 今の君に合わせて微調整しておきたいからさ」

「は、はい。わかりました」

俺はタバネさんに頼まれ、あだ名呼びに少し驚き動揺してしまったが “ストライク” を装着しフリーダムストライカーでいつもの速度で飛行してみた

《（ツ!! 以前より、性能が格段に上がっている）》

ストライカーもだったが機体の操作性性能が格段に上がっていることに驚きを隠せなかった

『うんうん！フリーダムの方は問題無いね！それじゃあ、ジャステイスの方で軽く飛んでから武装のチェックをしてみようか』

《わかりました。ジャステイスストライカーに切り替えます》

俺は言われた通り、フリーダムからジャステイスに切り替えてフリーダムと同じ速度で飛行した
 ！！

『うんうんうん!!!いいねいいねいいね!!!すっごく良いよ!微調整するつもりだったけど、まったくする必要ないね!!それじゃあ、これから、ミサイルを何発かそっくんに向かって撃つからジャステイスストライカーの武装で破壊してみて』

《わかりました》

俺が返事をして直ぐに、ミサイルが六発向かってきた

《先ずは!!》

俺はバツセル ビームブーメランを投げ、瞬時にルプスビームライフを展開してミサイル二発に引き金を引き、ミサイルを破壊し、残りのミサイル四発はビームブーメランが破壊した

『うんうん!!いいねいいね!!それじゃあもつと行くよ!!』

タバネさんはそう言うのと更にミサイルが十二発飛んできた

《ファトウム!!フォルクリス 機関砲、ケルフス 旋回砲塔機関砲、フォルティス
 ビーム砲!!》

俺はファトウム00を切り離しファトウムにソウビシテアルフォルクリス 機関砲、

ケルルス 旋回砲塔機関砲、フォルティス ビーム砲を発射させ、一気にミサイルを破壊した

『うんうん！予想よりも射撃スキルが高いね！！そこはこれから調整だね。うん！OKだよ、降りてきて』

《わかりました》

タバネさんに言われるがまま、俺はみんながいる海岸に戻った

「ふう〜」

「ソー、お疲れ！！はい、これ」

「ありがとう、ゆうちゃん」

海岸に降りて “ストライク” を待機状態に戻すとゆうちゃんがスポドリを持ってきてくれた

「うんうん！！仲良きことは美しきかなだね！！なははははは！！！！」

“ストライク” のテスト中からずっとテンションの高いタバネさんは笑い出し、タバネさんをよく知るチカやハルナさんは少し戸惑いを見せていた

「私の仕事はこれでお終い……て、言うのは味気ない気がするから、折角だから、ここにいるみんなのISを見てあげるよ！！」

「[[[[[[[?]]]]]]」

帰る雰囲気醸しだしていたタバネさんは急にISを見ると言い出し、ここにいるみんなが驚きの顔を見せた

「し、篠ノ之……いえ、あのタバネ博士直々にISを見て下さるなんて?!?!」

「本当よ!!イチカ、タバネ博士?はこう言う人だったの?」

「いや、俺達の知る束姉は俺やハルナ以外にはあまり興味を示さなかった」

「うん、束姉さんは秋羅や実の妹の筈、それから織斑……先生にも最初は溺愛レベルだったけど秋羅や織斑先生が本性を露わにしてから筈も含めてまったく興味を示さない『赤の他人』になっていったんだ。私や兄さんは今まで通りだったけど……」

そう、少し離れたチカとハルナさん、鈴が話しているのが聞こえて今のタバネさんを見るが180度、性格が変わっているのがわかった

「さあくて、誰から……「姉さん!!」」

タバネさんが誰からISを見ようか考えていると崖の方からここにいる殆どが聞きたくも無い声が聞こえてきた。それはこれから起きる嵐の前触れでしか無かったこと

は俺達はまだだれも知らなかった

続く

絶望の始まり

「さあ、誰から……姉さん!!」

タバネさんが誰からI Sを見ようか考えていると崖の方からここにいる殆どが聞きたくも無い声が聞こえてきた。それはこれから起きる嵐の前触れでしか無かったことは俺達はまだだれも知らなかった

「おや、おやおや？私を姉さんと呼ぶのは誰かな？」

「私です!!」

篠ノ之は崖から降りてきてタバネさんに叫ぶ。よく見れば崖の上には篠ノ之と同じ

く宿の駐車場に止めてあつたワゴン車（と、言うなの牢屋）に閉じ込められていた織斑秋羅が立っていた

この2人が臨海学習に着いてきたのは何でも一応一組の副担の織斑千冬が臨海学習に出ないのはつて話になり、もしも、織斑千冬が不在の時に織斑と篠ノ之が学園から逃げ出すことになったらと言うまた、謎めいた話になり、ワゴン車に閉じ込め連れてきたそう。

いや、なんでそうだったのは俺は分からず刀奈姉さんから聞いたところ、馬鹿な教師共が無理矢理にそうしたらしい

「ん？おお！箒ちゃんじゃん、久しぶりだね〜」

「久しぶりです、姉さん……私が頼んでいた物を持ってきてくれたんですね？」

誰もが言わずにいたがどうやって出てきたのか気になっていたが、それよりもタバネさんが物凄い嫌そうな顔をしているのが気になった

「？ああ専用機の話？それなら……」

篠ノ之の顔は待ちに待った物が手に入ると喜びに満ちていたがタバネさんの次の言葉は喜びの顔を絶望に変えた

「なんで、君に専用機を作らなきゃ行けないの？」

「え……」

タバネさんの言葉に篠ノ之の顔は絶望と怒りに変わっていく

「どうしてですか!？」

「どうしても何も、ただの『小娘』に専用機を作らなきゃ行けないの？ 私の妹だったからって私なんも努力してない人に専用機を作るわけ無いじゃん」

「こ、小娘!?!わ、私は今日、誕生日ですよ!?!」

「だからなに？ 誕生日だからって専用機を贈ると思ってるの？ 少し考えれば分かることだと思うよ？ それにさ……」

「ッ!?!」

タバネさんから急に放たれるプレッシャーで篠ノ之は驚き少し後ろに引いた

「私の子供達を暴力娘のお前、何かに渡せるわけねえーだろ？ あんま調子にのるなよ?！」

!!!
「タバネさんのドスの利いた声にタバネさんをよく知るチカやハルナさん、シンさんやステラさん、篠ノ之も含めこの場の全員が驚き、俺やゆうちゃんやんは怖がって後ろに隠れてしまったミノリちゃんとソウキの手を優しく握り安心させる

「タバネさん。ミノリちゃんとソウキが怖がってるので辞めてもらってもいいですか?！」

「……ごめんね、その子達には怖い思いをさせちゃったね」

そう、謝ってくるタバネさんの顔は少し悲しそうだった

「あ、そうだいっくん、一つ頼んでも良いかな？」

「はい？」

タバネさんはそう言うのと木刀二本を量子化するとチカに向けて一本の木刀を投げ渡す

「ごめんね、いっくん。一撃だけで良いから立ち会ってくれるかな？」

「えっと……？」

「今の君を、《ソードアート・オンライン》というゲームで、《アインクラッド》という世界で磨き上げた剣士としての君の全てを、一撃に込めて見せて」

「……わかりました」

チカはほんの少し悩むとタバネさんの正面に立ち、木刀を腰に腰帯に差すように構え、姿勢を少し低くした。これはチカの《抜刀術》の本気の構えだった

「行きます」

「うん」

「両者そう言うのと静かになる……そして……」

「やあああああああああああああ

!!!」

チカが一気にタバネさんに迫って腰の木刀を一気に抜刀して振り抜く………本来よ
り速度も威力も何もかもが劣っているがそれでもチカの《飛天一刀》は速く鋭い……

飛天一刀は純白の侍チカの代名詞のソードスキルでチカが《西風の旅団》……アインク
ラットで最も愛用していた《抜刀術》ソードスキルで攻略組の窮地を何度も救ってくれ
たソードスキルでもある。

その一撃は下に避けたタバネさんの頭のウサ耳を破壊したが、避けたタバネさんが木
刀の切っ先をチカの鼻先に突き付けた事で勝負が着いた。

「うん、良い一撃だったね」

「簡単に避けてたのに何言ってるんですか」

「うん、避けれてないよ……だって、ほら……」

そう言うタバネさんは左前髪を上げると少し赤くなっていた。そのことに昔から
の知り合いのチカやハルナさん、篠ノ之の三人が驚いていた

「いっくん………本当に強くなったね……」

「……東姉……俺は強くなってる無いです……」

「うん、いっくんは強いよ。自分の弱さを分かっているそれを支えてくれる人を見つ
けることができたんだから……」

「……ありがとう東姉」

チカはタバネさんと握手する……二人の目には涙が溜まっていた
 だが、この場にはこの光景をよく思わないのが一人だけ居た

「ふ、……………ふざけるなああああああああ!!!」

篠ノ之箒が怒鳴りながら二人……自分の姉……タバネさんに何故か持っている木刀を
 持つて突っ込んで行く……だが……

「ガハア」

誰もが動こうとしたとき、既にタバネさんと篠ノ之との間に茶髪ツインテール……鈴
 がおり、気がついた時には篠ノ之が血を吐き倒れた

「……………り、鈴?」

「今のは【浸透勁】。相手に触れている掌から、練り上げた気の衝撃を叩き付ける打撃法
 よ。そして、【震脚】。八極拳独特の、攻撃の命中する瞬間に、地面を強く踏みつける発
 勁の用法から【活歩】。『震脚』を踏んだ後、地面を氷の上を滑走するように滑りながら
 移動、一瞬で間合いを詰める特殊な歩法で間合いを詰めたのよ。一応、手加減したから
 死にはしないわ」

「そ、そうなんですわね……………」

今の光景に顔を引きつらせる山田先生。

崖の上を見ると織斑秋羅が教師数人に抑えられていた

「織斑秋羅も捕まったみたいだな……刀奈姉さん？こいつとアイツ、更にアイツの姉はこれからどうしていくことになる？」

「どうやって出てきたか分かり次第、篠ノ之及び織斑は退学及び孤島のカウンセリングセンターにあの腐った人間性が治るまで強制入所、織斑先生は教員免許停止及び二年間の再研修、三年間の再教育になることが事前に決まっているの、これは三人にも通達済みで臨海学習で問題を起こせば臨海学習後、刑が執行される事になっていたわ……今の段階でさせることになるわね」

更生の機会が与えられた事は当たり前だが、今までの様子を見ると更生はされない気がするが……それは俺達が考える事では無いだろう……

「山田先生!!」

「はい!直ぐに伝えます」

教師が一人慌てて走ってきて、シンさんは誰かと連絡を取っていたがシンさんは何処か慌てていた

「テストは中止!!専用気持ちは私に着いてきてください!!他生徒は片付け後、自室待機を命じます!!」

大声で叫ぶ山田先生からは何処か緊迫感が感じられた

続く

あわてふためI S学園生徒を遠い目でみる一人黒髪の女性がいた

『クククツアハハハハハハ!!私が開戦を花火を上げてやろう!!さあ、ショータイムだ!!』
女性は高らかに笑い姿を消した

また、とある施設の中、黒髪の男性と金髪の青年がいた

『そろそろ、我々が出る頃か……○○、○○に○○○○の最終チェックをさせておいてくれ』

『分かりました○○』

男性は青年に頼むと青年は軽く頭を下げその場を後にした
『君も一緒に来るだろ？』

マ・ド・カ

男性がそう言うのと男性の後ろから織斑千冬似の少女が目を光らせていた

続く

V S 福音 作戦会議

「今から2時間前、ハワイ沖にて試験稼働中だったアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型軍用IS、銀の福音シルバリオ・ゴスペル：通称「福音」が突如暴走を始め、試験場を爆破して逃亡。その後は米軍の追撃を振り切って領海から離脱したとのことです。

そして、衛星からの監視によれば10分程度消息が不明になりましたが約50分後にここから2Kの海域を通過することがわかりました」

「実習が中止になって直ぐ、俺達専用機持ちは旅館に用意された一室に連れてこられた。」

「部屋内には既に機材が運び込まれており、俺達は大型ディスプレイを囲むように座り、山田先生が今回の事について状況説明をしてくれた」

「なお、ソウキとミノリちゃんは別室でタバネさんが面倒を見てくれている」

「本来でしたら、教師の我々や自衛隊のIS部隊が出動する事態ですが、我々教師部隊の

所有しているISは出力リミッターがかけられた訓練機のみ、自衛隊には出動要請が出されていますが到着までに早くても2時間がかかるとの事です」

「俺やステラも大つぴらに動くことが出来ないのだから今作戦は専用機持ちに行つて貰うことになった。これは、委員会アジア支部支部長とIS学園理事長の決定だ………本当なら俺やステラが出て対処したいところなんだか……」

「わかつてます。お二人の立場については」

「この中でも委員長直属IS部隊の事情を深く知る俺がそう言うのと、シンさんは申し訳なさそうな顔をしてきた」

「それから、アジア支部支部長から直接、連絡を頂いている……う・げてくれ」

「はい」

シンさんがそう言い、通信担当の教師に告げると大型ディスプレイに金髪の女性と女性の両脇にたたずむ二人の男性が映し出された

俺は、立ちあはしなかったが正座して敬礼する

『初めまして、私は国際IS委員会アジア支部支部長、カガリ・ユラ・アスハだ。まず、今回のことに君達を出撃させてしまうことを許して欲しい』

「俺は……いえ、自分にはその様な言葉は不要です。何もしいままでいるのは性にありませんし自分が出ることなら進んで承ります」

俺がそう言うと、画面上のカガリさん、キラさん、アスランさん以外のこの場にいるみんなが驚いた顔で俺を見てきた

『お前はそう言う奴だったな……。それよりもだ、山田教諭とシンから話を聞いているとは思うが銀シルバリオ・ゴスベルの福音が其方の海域近くを通過する……。銀シルバリオ・ゴスベルの福音の詳細スペックはこれだ……。なおこのデータを外部に漏らした場合2年の監視がつく事になるので漏らさないように』

カガリさんがそう言うと俺達の囲んでいる大型ディスプレイに銀シルバリオ・ゴスベルの福音の姿と詳細スペックが映し出された

「私のブルーティアーズと同じオールレンジが可能な射撃型ですわね……」

「攻撃と機動力を特化した機体ね……厄介だわ」

「この特殊武装がくせ者つて気がするよ、連続しての防御は難しいかな」

「シャルロットさんの言ったとおり、この特殊武装は連続の防御も破壊も難しいですわね……」

シャルも含めた代表候補生の四人が銀の福音のデータを見ながら分析していく……俺達SAO生還者・旧ALOメンバーも黙ってはいるが戦闘シミュレーションを頭で組み立てていく

「アスナはどう見る?」

「うくん、本当なら一回くらいは偵察したいけど、でもこの速度ならアプローチ出来るのは一回が限度かな?となるとぶっつけ本番になるから、確実性のある手段っていうのが思いつかない」

「俺もそうだな……」

アプローチ出来るのは一回限り、その一回の迎撃で何とか仕留めなければアウトだ。この場合、二重三重に作戦を練るのがベストだ…元インクラット…S A O時代の《西風の旅団》では何重にも会議で作戦を考えていたので前線メンバーはある程度の作戦なら立てられるようになっていて……だが、みんな確実性のある作戦を思いつけないでいた

「ソーは何か閃いた?」

「問題があるけど確実性があるのが1つ、問題が少なく確実性があるのが1つ、没のが1つ」

三つ…いや、2つプランができあがって、問題点を洗っているとゆうちゃんに聞かれ、考えながら答えるとシヤルを含めた代表候補生五人が俺の方をなぜか見てきた

「?どうしたんだ?」

「どうしたんだって……短時間の間に3つも考えついていたなんて……」

「ソウさん、凄いですわね……」

「別にたいしたことは無いぞ?」

「それがたいしたこと無いならアンタの中では何がたいしたことあるのよ……」

軽くデイスられていて気がしなくとも無いが今は気にしないで置くことにしよう

「更識くん、内容を聞いてもいいでしょうか?」

「わかりました。一つ目のプランは織斑秋羅の専用機 “白式” の単一仕様能力の零落白夜をこの場の誰かが使い、それ以外のメンバーで陽動をかけるです。このプランには幾つかの問題があります。一つ目は “白式” を使用すること。二つ目は “白式” の機体状況。三つ目は福音の情報不足、四つ目は織斑姉弟並びに篠ノ之の妨害が入る可能性が高いことです」

『……………』

俺が一つ目のプランを説明するとみんな、黙り込んだが、これまでの織斑姉弟と篠ノ之を知っているこの場のIS学園専用機持ちは納得しているようだった

「二つ目のプランはこの場のメンバーで福音を鹵獲することです。このプランの問題点ですが、これは一つ目のプランにもありましたが福音の情報不足。二つ目は全員での連携不足。三つ目は自分やシャルの乗り換えたまたは、追加武装などでの戦闘経験不足になります。三つ目の没プランですが、織斑秋羅にやって貰うことです……ですが、このプランは確実に失敗すると思いますので、没プランです」

「他の作戦を考えている時間は無いわね……山田先生。私はソウ君の二つ目の作戦に賛成します」

「私もです。これ以上考えていても時間の無駄です」

俺が全てを説明し終わると刀奈姉さんと簪が俺の二つ目のプランを推してきた

「ボクも賛成!!」

「私もです」

刀奈姉さんと簪に続き、ゆうちゃんもサクヤも賛成するとキリト、アスナも続いて賛成してきた

「更識くんのプラン2で進めていきます。そして、現場の指揮は更識くん。お願いします」

「わかりました」

「それでは、みなさん、出撃の準備をして下さい。」

【了解!!】

山田先生の一声で、俺とゆうちゃんを除いたみんなは作戦室を後にした

続く

VS福音 浜辺の喧嘩

『ダメって言ったらダメだ!!』

「ん?」

作戦開始まで数分となり、俺（イチカ）やキリトさん達は作戦開始場所でもある浜辺に歩いていると、指定の浜辺からソウとユウキの怒鳴り声が聞こえてきた

『ソウキ達の事が心配なのはボクだつて分かるよ!?!でも、何もしないで待っているのは嫌だよ!?!ボクだつて戦えるんだよ!?!』

『ISに今日初めてしかも、いきなり実戦はダメだつて言ってるだろ!?!もしも、ゆうちゃんや墜とされてもしたら、ミノリちゃんやソウキ達はどうするのさ!?!二人に悲しい思いをさせるのか!?!』

俺達が急いで行つてみると浜辺でほぼ見ない光景……ソウとユウキが言い争つていて、その近くで二人の子供のソウキと美乃梨ちゃんがオドオドしていた

「ソウキ君、美乃梨ちゃん？ユウキ達、一体どうしたの？」

「アスナさん……そ、それが……」

「お母さんが今回の戦闘に参加するって言ってる聞いて聞かないんです……最初はお父さんとの普通に口論だったんですが……次第に悪化して……」

「お互いに怒鳴ってるわけね……」

「はい……」

美乃梨ちゃん達にアスナさんが声をかけると今の状況について話してくれた

「どうやら、ISに殆ど乗ったことの無いユウキが今回の作戦に出ると言ってるソウが拒否。それでも出ると言い張るユウキにソウが本気で怒ったらしい、それで今に至ると……」

「二人とも作戦前でしかも珍しいのに喧嘩しなくても……」

「ねえ、イチカ？あの二人が喧嘩するのそんなに珍しいわけ？」

少しの驚きと呆れていると鈴がソウ達の事を聞いてきた

「そうだな。二人が喧嘩するのは俺も見たことないな」

「いつも、ソウ君が無茶するのがユウキが怒って止めてるんだよ。二人で言い争っているのは私も殆ど見たことないよ」

「俺もだな……」

俺達よりもソウとの付き合いが長いキリトさんやアスナさんですら、ソウとユウキの

喧嘩を見たことなく、少し引き気味だった

「作戦まで時間が無いんだ、ソウキ達と旅館で待つてろー！いいな!!」

「ソー！まだ、話は終わってな…」

ソウは俺達に気がついたのか、それとも、時間だと気がついてたのか、どちらかは分からないが無理矢理に話を終わらせてこちらに歩いてくる。

話を無理に終わらせられたユウキも何かを言おうとしたが、俺達を見たのか、それともソウキ達を見たのかは分からなかったが言葉を途中で切り、俯いていた

「みんな、待たせてごめん。これから、みんなの分担を説明する」

ソウはそう言うのと俺達を3つの部隊に分けた

第一部隊 キリトさん、アスナさん、カタナ、俺

第二部隊 ハルナ、鈴、簪、シャル

第三部隊 ラウラ、セシリア、サクヤ、ソウ

更に音速飛行中の福音を捕らえる為の作戦として、この中でも最速のアスナさんと次に速い俺が先行して福音の足止め、それに続いてキリトさんとカタナ、簪、足にストライクガンナー装備のブルーティアーズとセシリアそれからシャルとミストラル・オーブ。

その後に残りのみんなが到着し攻撃を仕掛け福音を倒す流れだ

「ここままで質問はあるか？」

「えっと、質問じゃないんだけど……ユウキはいいのかなって……」

「……いきなり実戦なのは荷が重い……と思ってる。だから、今回の作戦から抜いたんだ……でも、ユウキなら大丈夫だと思う。ユウキは俺以上に心が強いからな。俺の気持ちも分かっているはずさ」

「……………」

ユウキの事を心配したユウキの親友のアスナさんがユウキに聞かれないようにソウに聞くと少しノロケが入っていたが心配なさそうだった

「それじゃあ、時間だ。みんな、勝とうぜ!!」

【おう!!】

俺達は福音に向かって動き出した

この時、俺達は無事に全てが終わると信じていた
誰もがそう思っていたはずだった……

この時にこの胸に刺さるトゲを知ることが出来たのなら……

続く

VS福音 ラウラの新機体

「浜辺でも気になってただけど、ラウラ。機体変えたわよね？」

先行隊のチカやキリト達を追いかけて飛行していた後続部隊の俺や鈴、ラウラやサクヤ、ハルナさん。

その途中、鈴がラウラの纏う見たことの無い黒い機体に聞き始めた

「ん？ああ、みんなには話してなかったな。私の専用機だったシュヴァルツエア・レーゲンはドイツの機体だったからな、国際問題になる前に機体の運用データとパーツを送り返してやったんだ。その代わりとI S委員会からこの機体、私用にカスタムされた。クロスボーンガンダムX2”を受理したんだ。ソウ、すまない。お前にはもつと速く言うべきだった」

「いや、いいさ。見た感じ前と同じでレールガンは搭載されているみたいだからな。戦

力の上方向修正されただけだ」

「アクティブ・イナードナル・キャンセラ」

「A I C もついでるのでレーゲンとほぼ同じ様に扱えるらしいですよ」

「アクティブ・イナードナル・キャンセラ」

「A I C っつて……ドイツが開発したものでしょ？それをそのまま搭載して

いるって事はそれはそれで国際問題にならないのかしら？」

鈴の言うとおりに A I C

「アクティブ・イナードナル・キャンセラ」

「A I C はドイツの第三世代型機の為にドイツが作り出し

た機能だ……それを持ち出したってことはそれはそれで大問題ではある

「普通ならそうなるだろうが私を実験台にしてたんだ、このくらいはしても問題ないだろ？それに、一応は他者に漏洩しないと云ってある」

「今のラウラは自由国籍で I S 委員会のテストパイロットっつて肩書きもありますから何処からも干渉されることは無いんですよ」

「いずれはハルナと同じ日本の国籍を取ろうと思ってる」

ラウラとハルナさんが話してくれたが A I C

「アクティブ・イナードナル・キャンセラ」

「A I C については問題ないとの事

だった

「ならいいんだけど……それにしてもホント、アンタ達仲良いわよね？」

「私は……ハルナに救われたから……ハルナがいなければ私は間違った力に溺れ、人を見下していたかも知れない」

「そう言うこと……私と似た感じなのね」

「え？」

鈴の言葉にラウラは不思議そうな顔をした

「私もハル……イチカとハルに助けられたのよ。転入して直ぐだった私は外国人と言う理由で虐めを受けていたのよ。そこをアイツ……秋羅に助けられたの……でも、本当は違った……助けに来た秋羅が虐めをしてきた奴らの親玉で自分をいい奴に見せて女遊びしてただけ……それに気がつかせてくれたのがイチカとハルなの」

「……………」

「秋羅と縁を切った私は秋羅やその取り巻きに腹いせとばかりに虐めてきたわ……もちろん、秋羅本人は手を出さずにその取り巻きだけだったけど、私は一度、其奴らが秋羅と一緒に居るのを見ていたから自然と秋羅からの嫌がらせだと分かったのよ……その時、イチカとハルの親友の弾に……いえ、これ以上の話は後にしましょう……見えてきたわ」

《ああ、そうだな。みんな、気を引き締めて行こう》

「了解!!」

俺がそう言うのと四人の声から安らぎが消え緊張感が生まれた

続
く

VS福音 戦闘開始

《戦闘はどうなっている?》

「お兄ちゃん!!」

『私が説明します!!。パパ達第一部隊先遣隊が戦闘を開始して10分が経過、今までの攻防では近接武器は見られません。福音のSE四分の1を削りました』

戦闘空域に到達すると簪に声をかけてきて直ぐにキリト&アスナの愛娘ユイちゃんが妖精の姿でプライベートチャンネルに映りでて戦況を教えてくれた

《ユイちゃん、ありがとう》

『はいです!!。いいにいい!!』

ユイちゃんはそう言うのとプライベートチャンネルが閉じる。俺は直ぐにみんなにチャンネルを繋げる

《これから指示をだす：第一部隊はDPSを上げる!!。第二、何時でも近距離戦が出来るように準備しつつ波状攻撃!!。第三も同じく波状攻撃!!。》

【了解!!】

俺はそう指示を出すとガーベラ・ストレットを二本展開させファトウム―00のフォルクリス 機関砲に炸裂弾を装填して何時でも発射できるようにする

「はああああああ!!!」

「やああああああ!!!」

SAO最強コンビの一つ、二刀流のキリトと細剣のアスナが先陣を切るように動き出しキリトは二刀流突撃ソードスキル《ダブル・サーキュラー》をその後直ぐにアスナの細剣8連撃ソードスキル《スター・スプラッシュ》がたたき込まれた

「スイツチ!!」

「はい!!」

キリト達下がると二人と入れ替わるようにカタナ姉さんとチカの二つ目のSAO最強コンビが福音の前でるとキリトとアスナの連撃を防いだ福音の動きが止まった
「喰らいなさい!!」

動きが止まった福音にカタナ姉さんは槍ソードスキル《フェイタル・スラスト》を直撃させ、福音の体制を崩した

「だらああああああ!!!」

体制が崩れた福音に今度はチカがカタナ姉さんと入れ替わり刀を居合斬りのように

構えて力を溜め、振り抜く技……刀ソードスキル《辻風》を放つが福音は腕をクロスしてなんとか防いだみただった

「ツ!!全員退避!!鐘が来るぞ!!シャル、簪、ラウラはシールドとファイールドで他を護れ!!三人に近いやつは三人に集まれ!!」

【了解!!】

《辻風》を防いだ福音は俺達の上空に移動すると回転しエネルギー弾を全方面に飛ばしてきた

「私を舐めないでよね!!」

遠くで刀奈姉さんが叫ぶと全員と福音の間に水柱が吹き上げ、銀の鐘を完全にシャットアウトした

「アクア・ナノマシンを強化して付近の水を操作できるようにして良かったわ〜」

《…刀奈姉さん、それはもうチート過ぎ》

「うん。お兄ちゃんに同意。水上戦ならもう、誰も勝てないよ」

「ソウ君と簪ちゃんも酷い!!チカもそう思うでしょう!？」

「アハハハ……そ、そんなことよりも三人ともまだ、戦闘は終わってないみたいだ」

「チカも酷い!!」

俺と簪にこう言われ、恋人のチカに助けを求めるが「そんなこと」で切り捨てられて

しまい、カタナ姉さんは軽く泣いていた

《ツ!!だらあ!!》

話をしていると俺達に向かって福音が突進してきて俺は咄嗟に二本のガーベラ・ストレートをクロスさせて福音の突撃を防いだ

《チィ!!速すぎて防ぐのが精一杯だ……仕方ない!!簪!》

「うん!!任せて、お兄ちゃん!!」

簪は俺の意図が理解できたのか、シルエツトをノーマルからサバーニヤに切り替えた
「狙いは……付いた!!こっ!!」

簪はビットを展開して福音の周りに水柱を立つようにビームの雨を降らした

《今だ、サクヤ!!》

「はい!!」

俺がそう言うだけでサクヤはライフルの引き金を引き、乱れ撃った。

サクヤは狙撃手だが、セリシアや那由多などとは違い乱れ撃ちを得意とする乱撃手だ
……サクヤの命中率は……

《100%だ》

サクヤの撃った弾は未来が見えているように水柱を避け一発、また一発と全弾、福音に直撃した

《チカ、カタナ姉さん、決めろ!!》

「任せろ!!」

「ええ!!チカ、使いなさい!!」

カタナ姉さんはアクア・ナノマシンで精製された水をチカの日本刀に纏わせ、刃が大太刀ぐらいまで広がった

ブレイヴ・オリジナルソードスキル

「合 技 アクアマリン・エクセリオン!!」

ブレイヴ・オリジナルソードスキル

合 技 アクアマリン・エクセリオン……ALOにて、チカとカタナ姉さんが

編み出した合体OSSSなのだが、ALOには合体技のシステムは無く、チカの本来のオリジナルソードスキル

O S S 十一連撃、みなかたのつるぎ 兪崇之劔にカタナ姉さんが水属性を付与する魔法で水属性を付

与したのがアクアマリン・エクセリオンなのだ

「これで終わりだ!!」

アクアマリン・エクセリオン、最後の六回転を終えたチカが大声で叫び、オマケで上段から振り下ろすと福音は海に墜落した

「はあ……はあ……はあ……」

「お疲れ、チカ。みんなも、お疲れさま」

「ソウ君もお疲れさま」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、お疲れ」

「兄さん、鈴木もお疲れさまです」

「ハルもお疲れ」

「キリト君もお疲れさま」

「ああ、アスナもな」

戦闘が終了しみんなが一カ所に集まり各々に労いの言葉をかけていた

「お兄ちゃん、これで終わりなんだよね？」

《終わり……のはずなんだけどな……どうも嫌な予感が収まらないんだよな》

「やっぱり、お兄ちゃん……も？私もなんか、嫌な予感がする……こんな感覚……βテスト以来だよ」

俺と簪はお互いに同じ感覚に襲われていた……簪の言ったβテスト以来……βテストでここまでの嫌な感覚に襲われたのは………ツ!!そうか!!

《全員、臨戦態勢!!まだ、終わりじゃない!!》

【!!】

俺は全員に叫ぶとみんな、驚いていたが、俺と簪は武器を展開して何時でも戦えるようににした

「ソウ君も簪ちゃんも一体どうしたの？福音は今さつき倒したのよ？」

《ごめん、カタナ姉さん。うまく言えないけどまだ、終わってない。この感覚はβテ

ストのノウアスファイアの開墾、ラストボス…深遠なる闇が出て来るまでの感覚に似ているんだ……」

「ノウアスファイアの開墾?!? ソウ君達がβテストでクリアして、私やシリカちゃん達には絶対に西風以外では受けるなって言っていた大規模戦闘クエストの!!?」

「うん…お兄ちゃんが西風以外で絶対に受けるなって言った理由…それは、βテスト時【放蕩者の茶会】デボーチェリ・ティーパーティーで全滅五回、全員二回以上死亡…これが理由。死に戻り出来ない正式サービスではまず超高難度クエストに分類されると思う」

「【放蕩者の茶会】デボーチェリ・ティーパーティーで全滅五回?!? 全員二回以上死亡?!?」

簪の言葉に【放蕩者の茶会】デボーチェリ・ティーパーティーを知っているカタナ姉さん、アスナ、チカは非情に驚き、知らないメンバーも三人ほどでは無いが驚いていた「ソウと簪がそう言うなら…第二形態か福音とは別の敵の出現…ユイ、何か無いかな?」

『パパの機体とのリンクで広域レーダーで確認してますが……パパ達以外に付近を飛行する物体はありません。いえ、待って下さい!!福音が落ちた海底から高エネルギー反応

です!!注意して下さい!!』

ユイちゃんがそう言った途端、福音の落ちた場所とほぼ同じ地点で水柱が立ち…水柱の中から赤い粒子を背中のコーンから排出する福音の姿が現れた。

戦いはまだ終わらない……

続く

VS福音 赤い粒子

《ツ!!あれは!?!?》

「どうして、あれが!?!?」

海中から現れた福音：シルバリオ・ゴスベル銀の福音は赤色の粒子を放つコーン：擬似太陽炉を背中に装備し色は白基調から黒と赤に変わり、背部の飛行ユニットはチカと刀奈姉さんのアクアマリン・エクセリオンで破損したスラスターの代わりに赤色六枚羽のエナジーウイングが追加されていた

《全員、即時撤退!!殿は俺が務める!!》

「ちよつと、ソウ君!?!いきなりどうしたのよ!?!?」

《ごめん、刀奈姉さん。説明している時間が無い!!簪とシャルにあれの事は話してあげる……みんな、急げ!!》

「ソウさんが残るのなら遠距離の私も……」

「!????」
 《いい加減にしろ!! 言うことを聞け!!》

「銀シルバリオ・ゴスベルの福音が動かない今の内に全員を撤退させようとするがサクヤや簪が残ろうとしてきたので俺は大声で怒鳴った。

俺が怒鳴るとみんな、驚いて静になった

《以降は刀奈姉さんの指示に従うように!! みんな、生きて帰れ!! これは、指示じゃない……命令だ!!》

【ツ!!……了解】

俺は最後の指示を出すと二本の〈ガーベラ・ストレート〉を構えて福音に向かった

《だらあ!!》

《La》

福音はストライクのトップスピードからの斬撃を少しの上昇で簡単に避け、シルバリオ銀の鐘よりも速い赤いエネルギー弾を何発も俺に向かって放って放ってきた

《その程度の速度は見慣れてるんだよ!!》

俺は福音のエネルギー弾を回避、時には〈ガーベラ・ストレート〉で弾いたり斬り伏せ、全弾のエネルギー弾を撃ち落とした

一方・旅館 山田 side

「更識君!! 応答して下さい!! 更識君!!」

高エネルギー反応（福音の第二形態移行）が戦闘海域であつてから、戦闘海域をモニターしていたカメラ、通信機、レーダー等の機会が突然通信障害を起こし、戦闘状況が分からなくなり、教師の半数を導入して戦闘海域に要るはずの専用機持ちに通信を?げようと試みていたが通信障害で一切連絡が取れていなかった

「桐ヶ谷くん、結城さん、オルコットさん、デユノアさん、連絡取れません!!」

「こちらにもボーデヴィツヒさん、鳳さん、神薙兄妹、更識姉妹も駄目です!! 連絡取れませんか!!」

「……仕方ありません。直ぐにタバネ博士を呼んでください!! 博士なら通信の回復が出るかも知れません!!」

「は、はい!!」

以前の暴君的振る舞いの結果、指揮権が永久凍結された織斑千冬の代わりに I S 学園防衛部隊の指揮を任された山田真耶が他の教師を動かし状況確認を進めていた

「呼ばなくていいよ、もう来てるから」

「!??!」

一人の教師が襖を開けてタバネ博士を呼びに行こうとすると既に待機していたかのようにタバネ博士が銀髪で目を瞑った女性と木綿季と蒼の子供達の初夜と美乃梨を連れて作戦室に入ってきた

「タバネ博士と……誰ですか？」

「この子はクーちゃん。私の娘でタバネさんの助手をしてもらってるんだよ」

「タバネ様、渾名での紹介では分かりません。初めまして、クロエ・クロニクルです。先程のタバネ様の紹介の通りタバネ様の助手をしています。作業を始めたいのでそちらの席を空けて下さい」

「え、あ、はい」

クロエと言う女性に言われるがまま、パソコンの前にいた山田麻那はパソコンの席をクロエに譲るとクロエはキーボードを打ち始めた

「GNタンクによるGN粒子散布開始……システムをGN粒子による粒子システムに変更……全システム回復。伐鐘聖式からの通信、繋がります」

クロエはものの数分で教師が数人がかりでも回復しなかった全システムを回復させた。

そして、回復した途端に更識簪の専用機伐鐘聖式から通信が入った

通信が回復する前

「こちら、ラウラ・ボーデヴィツヒ!! 山田教諭、聞こえますか!! 繰り返す、こちら、ラウラ・ボーデヴィツヒ!! 教諭聞こえますか!! 聞こえているのなら返事をして下さい!!」

「こちらもこちらで離脱を始めてから山田麻那達、教師陣に連絡を取ろうとしていたがこちらも全く繋がる気配がしていなかった

「ええい!! どうしてつながらないんだ!!」

「ラウラちゃん、少し落ち着きなさい。たぶん、通信がつかない理由を知っている人から話を聞きましょう」

「カタナちゃん、それってどういうこと?」

「これはラウラちゃんにも言えることだけどソウ君以外に私やチカ、キリトやアスナちゃん達よりもIS委員会と深く関係を持っている人が2人いる……………話してくれるわよね?」

シャルちゃん、簪ちゃん」

「!!??」
「!!??」

刀奈の言葉によりみんなの視線がシャルロットと簪に移った

「お兄ちゃんが言ってたし…：勿論、話すよ。あれはイアンさんが作ったオリジナル太陽炉のプロトタイプ…：通称《擬似太陽炉》。私のやオリジナルの太陽炉…：GNドライブとは違って外部からの電力で粒子を加速したり粒子を精製する為に長時間の運用は不可能。オリジナルと違う点として粒子の色が赤で毒性が色濃く残っている。オリジナルと同じ点は粒子の散布された地点から数キロメートルのレーダーや通信を使用不能にすること…：私の伐鐘聖式なら山田先生達と通信することが出来た…：…：と思っただけど、何度呼び出しても駄目だった…：…：多分、向こうの通信が駄目になってる」

「アハハハ、全部簪さんに言われちゃったよ。付け加えると擬似太陽炉はIS学園クラス代表戦の少し前に委員会から盗まれたものってソウが言ってた」

シャルロットと簪の話に全員が哑然としていた

「と、言うことは今回の銀シルバリオ・ゴスベルの福音の暴走は委員会からデータを盗み出した何者か…：…：いえ、何処かの組織によるものって事になるわね」

「そうですね…：こんな大掛かりの事を一人で言うなんて無理ですわ」

「だけど、擬似太陽炉? をクラス代表戦からの短時間で実用化できる国なんてあるの?」
どの国でも第3世代機を作るだけで精一杯じゃないの?」

明日奈の疑問はもつともで完璧なデータがあってもそう簡単に実用化させる…ましてや、クラス代表戦からの数カ月で完成させるのはどの国でもそう簡単には

「二つだけ…可能性があるわ…それは…」お姉ちゃんまって、山田先生との通信が復活した!! 本当!? それなら、今すぐに状況説明をお願い! 「うん!!」

短時間で擬似太陽炉を実用化させる事が出来る可能性を刀奈が知っていたがそれを言う前に教師陣達との連絡が回復した

続く

V S 福音 擬似太陽炉

『山田麻那です!!更識さん、みなさんは無事でしょうか!!』

通信が復活して山田先生達と繋がった第一声が山田先生の焦りと心配が詰まったこれでした

「はい。お兄ちゃんの御陰で全員無事です……状況説明をしたいのですが大丈夫でしょうか?」

『ああツ!!、すみません。お願いします』

少しパニックっていた山田先生はなんとか落ち着きを取り戻すと私は福音が第二形態移行したこと、お兄ちゃんの命令でお兄ちゃんを残して離脱したこと、それから……

「タバネ博士に伝えて下さい、福音に『擬似太陽炉』が搭載されました」
『残念、もう既にいるんだよね』

山田先生にタバネ博士に伝言を頼むと、タバネ博士の声が聞こえ、映像にタバネ博士

がひよっこり顔を出した

『予想はしてたけど本当に福音に《擬似太陽炉》が搭載されていたか』

「あの……博士は福音に《擬似太陽》が搭載されていたのを知っていたんですか？」

タバネ博士がもし、福音に《擬似太陽炉》が搭載されていたのを知っていたら……：…だけど、タバネ博士は……

『うん、知らなかったよ。アメリカとイスラエルのデータベースに侵入して福音のことは調べたけど《擬似太陽炉》は何処にも搭載された記録は無かった……：…だけどね、福音が暴走したのを聞いてから今回の暴走に“あの組織”が関わってるのなら《擬似太陽炉》が福音に搭載されていても可笑しくないとは思ってた……：…なら、どうして、私達を行かせたんですか!!』……

私は自分を抑えきれずにタバネ博士に怒鳴ってしまった

『……うん。それに関してはい言訳するつもりは無いよ……可能性があるとおもったら君達やシン君達に伝えるべきだった……：…と思ってる……：…だけど、君達と通信が繋がらなくなつて直ぐにシン君とステラちゃんに頼んでIS委員会・独立IS部隊を動かして貰つてる。独立部隊なら気にせず動くことが出来るし《擬似太陽炉》相手なら彼らが最適だからね……戦闘海域には20分で到着するって連絡が来てるから』

「……お兄ちゃんにもしもの事があつたら、私はタバネ博士を許すことは出来ません

……たぶん、木綿季さんやサクヤさんも……」

『……分かつてるよ……その時は私を焼くなり煮るなりしても構わない……』

タバネ博士は顔を俯かせて謝ってきたが、私はお兄ちゃんにもしもの事があつたら……タバネ博士を許せない

『みなさん、帰還しましたら、次の作戦を立てますので帰還しだい作戦室に来て下さい……』『山田先生。簪さん達と話したいので少し良いですか?』……はい。大丈夫ですよ、紺野さん』

『簪さん、聞こえてるよね?』

「はい。聞こえてますよ、木綿季さん」

通信を切ろうとすると山田先生の声を遮って木綿季さんの声が聞こえた

『ボクはこれからソウの所に向かう。ここで何もしないで待つのはもう、嫌だから』

『!!?』

木綿季さんの言葉に私や明日奈さん達、それから山田先生達も驚きを隠せなかった……が、

「駄目です」

『もう、誰に言われてもボクは行くよ。さつきも言ったけど、待つのは嫌……貴方はお兄ちゃんのお荷物になりたいんですか?!?』 ツ?!?!!』

「!!??」

木綿季さんの話を私の怒声が遮った。

木綿季さんの驚いた顔を見ているとお姉ちゃんやキリトや明日奈さん達も驚いていると思う

「絶対に旅館からでないで下さい!!もしも、木綿季さんが亡くなったら、お兄ちゃんやソウキ君、美乃梨ちゃんが悲しむので……だから、絶対に出てきては駄目ですから!!その代わり……」

私がお兄ちゃんを助けに行きますから……」

「!!!!!!」

私の言葉にみんな、おどろいてるだろうけど、どんな顔をしてるのかな?

「簪ちゃん!?!それは、駄目よ!?!」

『そうだよ!?!ソウはそんなこと、望んでない!!』

お姉ちゃんと、木綿季さんが必死に止めようとしてくれる……だけど……

「ごめん、お姉ちゃん。木綿季さんもありがとう……でも、この場で《擬似太陽炉》に耐性を持つ機体は私の……伐鐘聖式だけだから……それに、私はお兄ちゃんの……更識蒼の妹

で、S A O βテストで「ソウ」の相棒だったんだよ……助けに行かなくて……出来ることをしなくて、何が相棒だ。なんの為に伐鐘聖式を作って貰ったんだ……こういう時のために……お兄ちゃんを助けるために私はこの機体を作って貰ったんだ……《ダブルオー》……

私はそう言うと、伐鐘聖式で唯一のGNドライブ「F型」が二つ付いているシルエット、《ダブルオー・シルエット》を装着した

「私はお兄ちゃんを助けに行つて来る……誰も、付いてこないで……特に鈴さんやセリシア達の装甲が少なめな人は……」

「……なら、私も行くわ。弟と妹が頑張ってるのに自分だけ、安全な場所にいるなんて出来ないわ!!……それに、私は生徒会長よ?ここで、引いたら生徒会長としての示しがないわ!!」

お姉ちゃんの目は本気だった……お姉ちゃんもかなりの頑固者だから、本気の目をしたお姉ちゃんに駄目は通用しない……

「分かった……お姉ちゃん。でも、お姉ちゃんの装甲はこの全員の機体の中で一番低い……だから、無茶だけはしないで……お姉ちゃんがいなくなるとイチカさんやキリト達……私やお兄ちゃんも悲しいから……」

「分かってるわよ、簪ちゃん。後退メンバーの指揮はシャルちゃんと明日奈ちゃんの2人をお願いするわ。2人なら間違うことは無いだろうから……それじゃあ、後はお願いするわ」

「カタナちゃんも簪ちゃんも待つてよ!!もう……言っちゃった……」

明日奈さんの声が聞こえた気がしますが私とお姉ちゃんは気にせずに来た空域を戻っていききました

続く

VS福音 敗北と二つの水色

「はあ……はあ……はあ……ち、ちくしょう……」

福音が第2次移行セカンド・シフトしてから戦いだしてまだ、20分も経ってないはずだったが、第2次移行前よりも速くなった福音の速度に高速戦闘で追いつけず、ダメージを与える所か防戦一方になってしまい俺のIS“ストライクF”は右膝から下、左腕、頭部、胸装甲半壊などの大破状態で武装もほとんどが使い物にならなくなり、残っている武装は罫がはいっているガーベラ・ストレート二本のみとなっていた

『La…La』

「ツ!!速度上がり過ぎだつちゆうーの!!」

第2次移行セカンド・シフトで倍近く速くなった福音のビーム兵器を機能不全のスラスターでなんとか避けたが…

「アグウ!!」

ビーム兵器を避けたまでは良かったが、福音のどこぞのライダーキックを躲せずに鳩

尾に直撃してしまい、近くの島の海岸近くまで叩き落とされてしまった

「ゲホオ…ゲホオ!!」

痛む体を無理矢理動かして海岸まで這いずり仰向けで咳き込む…吐血し口の中は鉄の味が広がっていた

「(やべ…みんなにはああ言っただけ、この差はどう頑張っても埋められねえな)」

福音と俺の絶対的な差…機体性能とかでは無く超えられない壁…それは、生身か無人機か…、人間の本能で身体に異常なまでの負荷をかけないようにリミッターがかかるが、無人機ではそんなことは無い…機体にある程度の負荷はかかるがAIはそんなことをお構いなしに素早い動きを見せる。

この短時間の戦闘で良くわかる…普通なら当たるはずの予測からの攻撃全てを、計算外の速度上昇、軌道修正などでことごとく攻撃が外れ、逆にカウンターをもろに喰らってしまった

「ゲホオ…ゲホオ!!…ウゲエ!!」

動くことも出来ず、空を見上げているしか出来ない状態の俺に福音はトドメをささんとはかりにゆっくりと降りてくるが俺まであと、少しの所で降りてくる速度を上げたのか、急に腹に激痛が走る…ぼやけ始めていた目で見ると福音の片足が俺の腹部を踏み潰すかのように押しつぶしていた

「これは流石に無理だな……ゆうちゃんにあんなこと言っておいて、俺が逝っちゃうなんてな……ゆうちゃんと喧嘩したことが悪かったのか？それとも、暗殺者だった俺への世界からの報復か？まあ、でも……もつと、生きたかったな……」

福音は俺に片腕を向けトドメを刺そうとし、俺はもう助からないと死を覚悟していた……が、

バシューーン!!!

「……………え？」

遠くから何かの音が聞こえ、俺に向けられていた福音の腕が横から飛んできたピンク色のビームにより破壊された

ビームが直撃した腕が爆散し爆煙に俺と福音は包まれたが、爆煙に包まれて直ぐに腹部の痛みが和らいだ感じがしてよく見ると福音の足が離れていて福音が爆煙から出ていた

「……………ん!!」

「……………ん!!」

再び、何かの音……いや、誰かの声が遠くでなんと言っているか聞こえないが確かに聞こえてきた

「お兄ちゃんから離れろ!!」

「ソウ君から離れなさい!!」

「ッ!!」

今度ははつきり2人の声が聞こえ、2人は福音に高速のドロップキックを決め、福音は水面に叩き着けられ、海の中に沈んでしまった

「お兄ちゃん、凄いい傷……無茶すぎだよ」

「簪ちゃんの言う通りよ、ソウ君……無茶すぎよ……」

「……2人に……言われたくない……かな」

俺の前に降り立ち、手を差し伸べてきた2人……俺の自慢の妹でS A O βテスト時の相棒、流星の剣聖の二つ名を持つ更識簪……、もう1人は無限槍の二つ名を持つ俺達の姉……更識楯無こと、刀奈姉さんだった

つづく

V S 福音

刀奈と簪が戦闘空域まで辿り着く少し前…

「ダブルオーの最大速度出してるとけど、お姉ちゃん、大丈夫？」

「このくらい問題ないわ。ソウ君が一人で戦っているのよ？このくらいソウ君に比べたら平気よ……それよりも、簪ちゃんの方こそ大丈夫なのかしら？簪ちゃんにも相当なGが掛かっているはずだと思うのだけど？」

「私もこのくらい平気。木綿季さんにあんなこと言ったんだから……こんなことでへこたれたりほしくないよ」

お互いに心配し合う刀奈と簪…簪の専用機「伐鐘聖式」のシルエットの中で「ハルート」に続き2番目に速く、直線のトップスピードなら「ハルート」を超えるとも言われている《ツインドライブ》を積んでいるのが簪が使用している「ダブルオー」だった

「…見えた……お兄ちゃんは…見つけた!!直ぐ近くの島の海岸に落とされた!!」

「このままじゃ、間に合わないわよ!!ソウ君が……」

「大丈夫!!、私と伐鐘聖式なら!!」サバーニャ!!」

戦闘空域に迫り着いた簪と刀奈……簪が一人残った兄、蒼と福音を近くの島で見つけると「ダブルオー」から遠距離型の「サバーニャ」に切り替え、飛行したまま、ライフルビットIIを取り出し構えた

「この飛行速度じゃ無理よ!!」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。このくらいの苦難、βテストで何度も乗り越えてきた!!それに、射撃テストでお姉ちゃんやセシリアさんより成績良いんだから!!………狙い撃つ!!」

バシューーン!!

ライフルビットIIの銃口からビームが放たれ、今まさに蒼にトドメを刺そうとしていた福音の腕のみを破壊した

「お姉ちゃん、しっかり掴まって!!」ハルルト!!そして、トランザム!!」
「す……って、速すぎるわよ!!」

「サバーニャ」、ダブルオー」に続く第三のシルエット「ハルルト」。

「ハルルト」は可変機構持ちの高機動機、そして、トランザムシステム……機体内部に

蓄積された高濃度の圧縮粒子を全面開放する事により、機体スペックを3倍以上に引き上げる。トランザム起動時にはGN粒子が赤くなり、それに伴ってか機体自身も赤く発光するようになってる。このシステムは本来では《オリジナル太陽炉》にしか使用不可ではあったが簪の願いにより、臨海学習前に搭載されていた

「お兄ちゃん!!」

「ソウ君!!」

二人は舌を噛むのも気にせず、兄で弟でもある蒼の名前を叫んだが、福音の腕の破壊による爆煙により蒼のことは確認できていなかった

「お兄ちゃんから離れろ!!」

「ソウ君から離れなさい!!」

簪は直前でトランザムを終了し「ハルト」から「ダブルオー」にシルエットを戻して、刀奈と同時に福音に高速のドロップキックを決めた。

福音は水面に叩き着けられ、海の中に沈んでしまった

「お兄ちゃん、凄いい傷……無茶しすぎだよ」

「簪ちゃんの言う通りよ、ソウ君……無茶しすぎよ……」

「……2人に……言われたくない……かな」

簪と刀奈はポロポロのソウの前に手を差し伸べながら、浜辺に降りた

「ゆるさない……」

私：簪はみんなを逃がすために一人、銀の福音と戦い：目の前でボロボロの姿で仰向けに倒れているお兄ちゃんに心配すると同時にこんな姿にした福音とお兄ちゃんを置いていくしか無かった無力な自分自身に怒りを感じていた

「お兄ちゃん、ごめんなさい……一人で戦わせて……」

「なに、泣いてるんだよ……元々、俺が一人……で、みんなを、逃がそうとしたんだから……ゲホッゲホッ！」

「もう!!喋ったら駄目よ!!」

涙を流していた私を慰めようと、お兄ちゃんは微笑んでくるが、咳き込むと一緒に血を吐き出してしまう

「「ッ!!」」

お兄ちゃんの心配をしていると海の水が一部で噴き上げられ、水柱から福音が現れ私達を殲滅する対象として見ているのかバイザーが赤く光っていた

「お姉ちゃんはお兄ちゃんをお願い……福音は……私が殺るから」

「ちよつと、待ちなさい簪ちゃん!!??」

私はお姉ちゃんの静止を聞かずに福音のいる高さまで上昇した。

私が福音のと同じ高さまで上昇するまで福音は動かず私を見ているだけだった

「許さない!!お兄ちゃんを彼処まで傷付けた貴方を!!…貴方は…お前は私が倒す!!」

「……La」

私が「ダブルオー」の基本武装、両腕のGNソードIIを展開し構えるとここで漸く福音が戦闘態勢を取り、ウイングを輝かせた

続く

VS福音 終わりと戦艦

「ハアア!!」

右のGNソードII、上段からの斬撃を福音は後方へバックステップで回避すると私の後ろに回り込んできた。

「タアア!!」

『……!!』

そうしてくると読んでいた私は左のGNソードIIで薙ぎ払う。

福音は少し動揺した感じだったが、薙ぎ払いをも躲し私と距離を取ろうとしてきた……が、

「距離は取らせない!!」

『……!!』

私は距離を取ろうとする福音に接近すると福音は回し蹴りをしてきたが……

「ムダア!!」

私は回し蹴りをしてきた足を切り飛ばしてお返しの手裏剣をサマーソルトキックをお見舞いした。

「簪……強くなったな……」

「ええ、本当にね……これも全て、ソウ君が居たからよ」

「……俺？」

妹の簪が1人、福音と戦っているのを見ている刀奈と蒼……2人は妹の簪の成長に喜びを感じていた。

「ええ、簪ちゃんは今ソウ君に隠れて自分を鍛えていたのよ……それも、自分の好きな動画を見る間も惜しんで……今回だってユウキちゃんを怒鳴りつけてまで助けに行こうとしたんだから……」

「簪……やっぱり、ダメだな……」

蒼は腕で目を隠していたが涙が流れていた。

「ソウ……君？」

「簪やみんなを護ろうとして……1人で残ったのに……何も出来ずに妹に助けられて……
ああ、クソ……!!」

「ソウ君……」

弟のこんな姿を見たことが無かった刀奈は一瞬どうすれば分からなくなつたが、刀奈は蒼の頬を引っぱらいた。

「カタナ……姉さん？」

「めそめそしてるんじゃ無いわよ、バカソウ!!」

「ッ!!」

ソウは姉が自分を叩いてまで怒った顔を見たことが無かったので啞然としていた。

「ソウ君は本当に馬鹿よ！いつもいつも勝手に背負い込んで、メンタル脆いのにな何でもやろうとして！少しは私や簪ちゃんを……みんなを頼りなさいよ!!」

「……」

「簪ちゃんを見なさい」

刀奈は1人、福音と戦っている簪を蒼に見させる。

「簪ちゃんはソウ君と一緒に戦いたくて努力していたの……虚ちゃんから聞いたことだけど、簪ちゃんが旧ALOをやっていたのは、ゲームが好きだからよりも兄のソウ君が戻ってきたら一緒に戦えるようになって……ISだって、ソウ君を守れるようになりたいか

らって必死に二年間勉強していたそうよ……貴方がいたから簪ちゃんは強くなれた、勿論私や他の西風のメンバーも……ソウ君、貴方は一人じゃ無いわ、みんなが……ユウキちゃんや簪ちゃん、サクヤちゃんがいるの。すぐに頼れとは言わないわ……でも、ソウ君の一声を待っている人が居ることだけは忘れないで」

「……」

蒼は何も言えなかった。自分の姉は……喧嘩していた時にも簪のことをよく見ていた……護ろうとして必死だった自分以上に簪のことを理解していた。

「……福音の切り返しが速くなってきてる、早くケリをつけないとヤバイ……けど、無理に攻めるのはダメ、私がやられる」

蒼が姉の刀奈に叩かれて怒られている最中、簪は福音との戦闘に焦りを感じていた。
「クッ!!」

最初は躲すことができた福音の攻撃が少しずつ簪に掠り始めていたのだ。

「そっ!!」

簪はGNソードIIをライフルモードに切り替え、射撃するが福音には当たらず、水面

に当たってしまふ。

「射撃がダメなら!!」

射撃を諦め、ソードに切り替えて接近戦を試みる…が、

「ツ!! (当たらない?!?!?)」

簪の近接戦闘の成績は遠距離戦よりも劣るがそれでも好成績を収めており、並の操縦者及びAIでは相手にならないはずだった。

「ガハア!!」

エネルギー弾の雨、銀の鐘をGNシールドで防ぐが、その直後シールドを超えて福音が簪に腹パンを決め、簪は蹠踉けてしまふ。

「(やられた…銀の鐘は匣でシールドで視界が狭まっている所を狙われるなんて…切り替えなくちゃ…ん?切り替える?そうだ!!)」

簪は体勢を立て直すと何かを閃き、深呼吸をした。

「スウ〜ハア〜…行く!!」

『…!!』

深呼吸をすると簪は福音に向かって突進する、福音は何かを感じたのか、エネルギー弾をばらまくと簪から逃げるように距離を稼ごうとする。

「ホルスタービット、シザービット!!ハロ、制御任せた!!」

『リョウカイ！、リョウカイ！』

簪は「サバーニヤ」のホルスタービット、〃ハルト〃のシザービットを展開しハ口に制御を任せ、福音をエネルギー弾を避けながら追う。

『……………!!!』

「遅い!!」

二つのビット展開に驚いたのか、マズいと感じたのか、福音は上昇し再びエネルギー弾をばらまくが、簪はホルスタービットから取り出したGNピストルビット二丁、シザービットで全弾撃ち落とした。

「これで……………終わり!!」

そういい、エネルギー弾を撃ち落として福音に次の行動をさせまいと全速力で福音の懐に入り込んでいた簪はGNソードIIで切り上げた。

『……………』

福音は機能を停止し静かに落下……………は、せずに簪が支えると待機状態の小さな鐘になつてしまう。

「……………お姉ちゃん、お兄ちゃん、聞こえる?」

『…ええ、聞こえているわ。ソウ君もなんとか、無事よ』

「なら、よかった。福音は倒したから、今からそっちに向かうよ……………ごめん、お姉ちゃん。

委員会の人から連絡来たから後で連絡する」

簪はプライベートチャンネルを開き姉の刀奈に連絡を取っているとIS委員会からの専用チャンネルが開き簪は刀奈とのチャンネルを閉じた。

『私は国際IS委員会委員長直属IS部隊・第十七独立部隊所属プトレマイオスII艦長で戦術予報士のスメラギ・李・ノリエガよ』

「IS学園一年、日本代表候補生更識簪です。わざわざ救援の為に御越しくださつてありがとうございます」

日本代表候補生でもある簪はIS委員会のスメラギに対して敬語を使い、御礼を言う
とスメラギは軽く微笑んだ。

『お互いにこういう言葉遣いは慣れないみたいね。普段通りでいいわよ……私もこういうのは慣れないしね♪』

「……ふふつ、そうですね。私もお兄ちゃんやお姉ちゃんと違って敬語は苦手です」

『みたいね……さて、私達は現在、救援の為、其方に向かっているわ。念のためにマイスターの一人を先行させているのだけど……』

「あ、はい。今、視認できました。私の『ダブルオー』のオリジナルですよね?」

簪は通信中に風を切る音が聞こえ、其方を振り向くと伐鐘聖式のシルエツト『ダブルオー』と良く似た白と蒼の機体が簪の元に向かつてきており、その少し後ろに戦艦が付

いてきていた。

『ええ、そうよ。今、私達も視認したわ。貴方を回収次第、お姉さんとお兄さんを回収するわね』

「すみませんが、よろしくお願いします」

委員会の独立部隊が到着し今回戦闘が終わったと思われたが……

「ところがぎつちよん！まだ、終わらないんだなア！これが!!」

赤い粒子を放つ真つ赤な機体が簪達に迫っていた。

続く

一時の安らぎ1

《ところがぎつちよん！まだ、終わらないんだなア！これが！！》

「ツ！！」

I S 委員会の方が到着して全てが終わると安心した直後、男の叫び声が聞こえ、辺りを見渡すと福音と同じ赤い粒子を放つ赤いI Sが高速でこちらに向かってきていました。

『更識さん！！直ぐに逃げなさい！！あの機体は危険よ！！』

「ツ！！は、はい！！」

私はスメラギさんの言うとおりにスメラギさんが乗る、戦艦に向かって全速力で移動し始めましたが……

《甘えんだよな！！》

男の声ができる赤い機体に直ぐに追いつかれてしまい、赤い機体は大剣を私に向かって振り下ろそうとしてきました

『スクラップ…フイストオオオオオ!!』

「ひでぶ?!」

赤い機体が大剣を振り下ろそうとしたとき、誰かが赤い機体を殴り飛ばしました……その誰かの背中を見た私は驚きと一緒に緊張の糸が戯け落下しそうになりますが……

「簪ちゃん、大丈夫かしら?」

「お姉ちゃん……うん、大丈夫。それから、ありがとう」

「ふふっ、どういたしまして」

お姉ちゃんが私を支えているってことは……やつぱり、あの機体を殴ったのは……

「大丈夫か、簪?」

「……うん。大丈夫だよ、お兄ちゃん……じゃ、無くて!お兄ちゃんこそ、大丈夫なの!?それに、どうして生身で浮いてるの!」

近くの島で倒れていたはずのお兄ちゃんが「ストライク」だったであろうガンレットを片腕に装着して生身で私の目の前を浮いてました

「使えそうに無かった装甲をパージして、ISの必須機能を残して後は飛行能力に全振りして使えそうな装甲はこのガンレットにしてたら時間が掛かっちゃってな……まあ、間に合ったから良かったよ……頑張ったな」

「……うん、ありがとうお兄ちゃん」

お兄ちゃんに頭を撫でられ顔をほんのり赤くすると同時に褒められて嬉しかった

《俺がいることを忘れてるんじゃないやねあよな!?》

「あ……忘れてた」

「……」

《おいこら、忘れてたのか!?目をそらすんじゃないやねえぞ!?》

敵が目の前にいることを忘れていた私達が目を逸らすと赤い機体の操縦者は怒ってきた

《たく……調子狂うじゃねえかよ!!そう思わねえかあ、クルジスのガキイ!?》

《五月蠅い!アリー・アル・サーシエス》

赤い機体が再び襲いかかろうとしたとき、私の「ダブルオー」と同一の機体がそれを阻む。

『今よー刹那が抑えている内に着艦しなさい!』

「了解」

「はい」

「はい、分かりました」

私達はスメラギさんの指示の下、近付いてきた水色と白の戦艦のデッキに降り立つ、すると……

「お兄ちゃん!!」

「ソウ君!!」

お兄ちゃんが「ストライクF」のガントレットを量子変換してしまうと、フラつき倒れだした

「お兄ちゃん、しつかりして!？」

「ソウ君!!」

倒れきる前に支えることが出来たが、私の手にはお兄ちゃんの血がべつとりとこびりついていた

「ストレッツチャーを!!」

「早く、お願い!!お兄ちゃんを助けて!!」

格納庫に私とお兄ちゃんの声が響きわたると直ぐに格納庫の扉が開いた音が聞こえた

「酷い怪我だ。直ぐに医務室に運ばないといけない。サジは僕と一緒に彼を医務室に運ぶのを手伝ってくれ。ルイスは彼女達を見てやってくれ」

「うん」

「わかったわ」

声が聞こえ振り向くとそこには紫髪で眼鏡を掛け、紫色を基調にした服を着た男性、

茶髪で紫髪の男性と同じで紫色では無く青色の服を着た男性、最後に金髪ロングで男性達と同じで色が桃色の服を着た女性が立っていた

「安心してくれ、彼は必ず助かる……いや、僕たちが助ける」

「だから、安心して君達はまずは手当を受けて」

「大丈夫よ。この船は委員会内でも最高の医療施設を完備してるんだからね」

三人は私達を安心させようと優しく話しかけてきてくれた

私とお姉ちゃんはお兄ちゃんを男性2人に任せると女性と一緒に医務室で手当を受けた

「はい。これで2人とも大丈夫よ」

「はい。ありがとうございます……えっと、」

「そう言えば自己紹介がまだだったわね。私はルイス、ルイス・ハレヴィよ。コードネームは「ルビー・ハイス」、ルイスでかまわないわ。それから、一応、ガンダムアストレアのガンダムマイスターでもあるわ。予備だけ」

「そうですか……私は更識簪です」

「更識楯無よ」

私とお姉ちゃんを手当てしてくれた女性……ルイスさんに御礼を言うと私は顔を俯かせる

「……お兄さんのところに案内するわ」

「ツ!!…お願います」

「……お願するわ」

私の考えていることに気が付いたのかルイスさんはお兄ちゃんの居るのとは別の医務室に案内してくれましたが、どことなくお姉ちゃんはルイスさんの事を警戒していました

「治療中だから、中には入れないのだけど…」

「お兄ちゃん!」

「ソウ君!!」

医務室の中を窓越しで見ると酸素マスクを着けられポットの中にお兄ちゃんが寝かされていた

「出血は止まったからあとはあの中で寝ていれば3日もあれば完治するよ」

私達がお兄ちゃんの医務室前に到着して直ぐに格納庫でお兄ちゃんを運んでくれた茶髪の男性が医務室から出てきた

「沙慈!!」

ルイスさんが男性の名前を呼びながら抱きつく、男性はルイスさんの頭を軽く撫でる
「ルイス、彼女達の前だから後でね」

「……そう、ね。時と場合をわきまえるべきだったわ」

「初めまして、沙慈・クロスロードです。コードネームはマルク・レンヤ。この部隊の整備士をしているよ」

男性……沙慈さんはルイスさんに優しくささやくと、自己紹介をしてくれた。

「この艦はIS学園が臨海学習で泊まっている宿に向かっているよ。到着までもう少し掛かるから少し横になって休んだらどうかかな？」

「……ここに居てもいいですか？」

「……わかった。楯無さんはどうします？」

「……艦長に会わせて貰ってもいいきしから？生徒会長として更識として、今回起きた事についてできる限り情報が欲しいので」

お姉ちゃんはお兄ちゃんを私に任せると遠回しに言い、沙慈さんと一緒にスメラギさんに会いに行きました。

続く

一時の安らぎ2

「ソー……」

浜辺でボクは1人銀の福音を押さえるために残ったソーが帰ってくるのを今か今かと待っていた

「ユウキ!!」

「アスナ……」

待っていると福音と戦い、ソーの命令で宿に戻ってきた親友のアスナが声を掛けてきた

「委員会の人がソウ君達を救助して、今ここに向かってるって、タバネさんに連絡が来たみたい……」

「ッ!!……ソーは無事……な、訳はないよね」

「う、うん。重傷だって……でも大丈夫だよ、きつと……だってソウ君だよ? 重傷でも直ぐに怪我を直してくれるよ」

「そう……だね」

少しでもボクを安心させようとしてくれるアスナ…ボクはアスナの気持ちは分かっているが不安がどうしても顔に出てしまう

「ユウキ、宿に戻らない？あの人達がまた、脱走するか分からないし休まないと体が持たないよ？」

「あの人達って……アスナ、彼らのこと嫌いな？ボクは話を聞いたただだから良くわからないうけど…」

ボクは《彼ら》の事を嫌そうな顔をしながら話すアスナに少し疑問になった

「良い印象は無いかな？自分が王とか、一番上だと思いついて自分の気に入らない事があると周りに当たるとなるような人だから……うう、似たような人思い出したよ」

アスナは話していると似たような人を思い出して体を擦りだした

「そ、そうだね……アレと同じタイプかも……う、思い出しただけで寒気がしてきた……」

「私もだよ……宿に戻って暖かい飲み物飲もうよ」

「うん……そうだね」

ボクも数カ月前に起きた事件の犯人を思い出して寒気がしてきて、アスナと一緒に宿に戻り暖かいココアを頂いた

「アマルティア博士、大きな戦艦がこちらに！」

「うん、来たみたいだね。専用機持ちを浜辺に集めて！でも、数人で固まって来させてね！」

「はい！」

ユウキとアスナが浜辺から宿に戻りココアを頂いている最中、作戦室ではリーダーに蒼と白の戦艦を捉えていた。

それに気がついた教師の一人がタバネに連絡を入れると浜辺に専用機持ちを集めるようにと指示を受け、数人の教師がユウキ達、1年の専用機持ちを集めるべく作戦室から出て行った。

「…何発かは覚悟かな？」

タバネは一人、兄を慕う一人の少女に約束した事を思い出し呟いていた

「この戦艦が博士の言っていた委員会のですか？」

「その通りだよ、セツちゃん。これが第十七独立部隊の戦艦、プトレマイオスⅡだよ!!」
 浜辺に集められた専用機持ちの前には青と白の戦艦……プトレマイオスⅡが着陸していた

「大きいわね……」

「そうだよね、元々IS誕生前に作られていた二足歩行兵器運用用に作られた物なんだってさ。それに、委員長直属部隊は全部隊、このくらいの大きさの戦艦持つてるんだよ」

「……!!?!?」

目の前の戦艦と同じくらいの大きさの戦艦を国際IS委員会、委員長直属部隊が全部隊が持っていることに専用機持ち全員は驚きを隠せず、セシリアや鈴は一緒に来たIS委員会委員長直属第一部隊のシンとステラの方を向いた

「ああ、本当だ」

「うん、本当だよ」

「……」

シンとステラの言葉に何人かが啞然とするなか、一人の少年を想う二人の少女は何処かソワソワして落ちていっているようで落ちついていなかった

「待たせてしまつてごめんなさいね。私は国際 I S 委員会 委員長直属 I S 部隊・第七独立部隊所属プロトレマイオス II 艦長で戦術予報士のスメラギ・李・ノリエガよ、よろしくね」

プロトレマイオス II の出入り口が開き、リフトが降りてきて、完全に降りると一人の女性が下りてきた

「I S 学園一年二組担任謙防衛部隊指揮官山田真耶です。本日は更識蒼、更識楯無、更識簪、三名の救助して下さりありがとうございます」

「気にしないでいいわよ。救助って言っても怪我の手当をしたくらいだしね…えつと、そちらのソワソワしている二人が紺野木綿季さんに神無月サクヤナさんね？彼の所に案内するわ。簪さんもいるはずだからね」

「……ツ!!」

集まっていた全員が山田先生に驚きを隠せなかったがスメラギの言葉によりソワソワしている二人、木綿季とサクヤナに視線が行き、二人は少しだけ顔を赤らめていた。「フェルト、マリーさん。二人を先に案内してあげて、他は私とシン君達、楯無さんと話ながら案内するわ」

「はい」

「分かりました」

ピンク色を基調にした服にピンク髪の女性、フェルトと同じく黄色を基調にした服に銀髪ロングの女性、マリーはスメラギの指示で木綿季とサクヤを連れて先に艦内に入ってしまった。

「それじゃあ、私達も行きましょ。歩きながらも、今回の事の全てを話すわ」

「私は先に聞いたのだけど、更識家として得ている情報も含めて私からも話すわ」

スメラギと楯無、二人を筆頭に集められたメンバーは歩き出した。

「今回、銀の福音暴走にはある組織が関わっているわ」

「組織ですか？」

木綿季とサクヤを除いた一年の専用機持ちと山田真耶はスメラギに連れられプロレマイオスⅡの中を歩いているとスメラギが口を開いた

「ええ、組織名は亡国機業ぼうこくきぎよう。またの名をファントム・タスク」

「ファントム・タスクですか!？」

ファントム・タスクと聞き、この中で山田真耶が声を荒げる

「山田先生、知っているのですか？」

「はい、オルコットさん。ファントム・タスク、亡国機業は表向きはISメーカーとして

「[[[[!?!?]]]]」

「気がついていたの?」

イチカの誘拐事件……ここにいるSAO組と当人、そしてハルナしかこの事は知らず、IS学園入学で知り合ったシャル、ラウラ、セシリア、それから幼馴染みの鈴すらこの事は知らなかった

「ハル、イチカ、誘拐事件ってどういう事よ、私聞いてないわよ?!」

幼馴染みの鈴は自分だけ知らされていないことに怒り、ハルナとイチカに詰め寄った
「お前には話したくなかったんだよ……心配性のお前に……第二回モンド・グロツソ決勝……俺はアイツの優勝妨害の為に誘拐されたんだ……」

「会場で胸騒ぎを感じた私は兄さんに電話をしたんですが……繋がらず、探しに行こうとした時に……水色のフードに赤目で同い年くらいの男の子にぶつかって……その男の子が自分が助けに行くといい、私は会場内で待つことになったんです……」

「[[[[……うん?水色フードに赤目の男の子?]]]]」

ハルナの話の中に出て来たワード、水色のフードに赤目の男の子に楯無、アスナ、キリトは引っかけかりを覚えた

「ああ、ハルナの言うとおり……俺は水色のフードに赤目の少年に助けられた……助けられた時に少年にこう言われた『今回の事件を経験して守れる強さを持つとうとするなら、

けして闇に踏み込むな。本当に大事な物を失うぞ……俺みたいにな” って……今にしてみるとソウに近い気もするんだよな……」

「(チカもこう言ってるし、調べてみようかしら?)」

恋人のイチカの話聞いた楯無は密かにその事件に弟のソウが関わっているかを調べてみることにした

続く

一時の安らぎ3

「ソー!!」

「ソウさん!!」

ボクとサクヤが連れてこられたのは部屋の中に5個近くのポットがある部屋でその中の一番手前に酸素マスクを着けられているソーが寝かされていた

「木綿季さん…サクヤさん…」

部屋の前にはソーの妹でソーを助けに行つた簪が椅子に座りながらガラス越しにソーをずっと見ていた

「……………めんなさい。あんなこと言ったのに…お兄ちゃんにここまで大怪我させて…」

簪さんはボクとサクヤに気がつくくなり涙を流して謝ってきた

「うん、簪さんの所為じゃ無いよ。誰の所為でも無い……今回の原因はボクも含めて全員がソーに頼り切つてた…これが原因……もしかしたら誰も大怪我はしなくても福音を倒せる方法があつたかも…」

「ユウキさんの言うとおりです……あの時、無理矢理にでもソウさんと一緒に戦っていたらソウさんがここまでの大怪我をすることは無かったかもです……でも私はソウさんに怒鳴られた時に心の中でソウさんなら一人でなんとかできるかも……私達が邪魔になつてるんじゃないかって……そう思つてしまい……」

「私もです……太陽炉を搭載した機体は私だけなのに……なのに、残らなかった……あの時、残っていたら……戦闘が終わつてからずっと……うん、大怪我をしていたお兄ちゃんをお姉ちゃんと助けてから今までずっと……」

ボクとサクヤは簪さんを慰めていたが、ボク達二人も涙を流してしまふ

「三人のお気持ちわかります……私も大切な人をなんども無くしかけましたから……時には敵同士で好きな人と、時には私を養子に……言つてくださった人を助けられず……」

そんなボク達を見てマリーさんが優しく声を掛けてきて、軽く抱きしめてくれた

「マリーさん……ありがとうございます……」

「ありがとうございます……少し楽になりました」

「いえ、私にはこう言うことしか出来ませんから……まだ、自己紹介してませんでしたね、私はマリー、マリー・パーファシーです。ガンダムキュリオスのガンダムマイスターです。それから……」

「フェルト・グレイスです。トレミー、プトレマイオスⅡの戦況オペレーターを務めてま

す」

そう言えば、スメラギさんが名前言ってただけで名前、聞いてなかった

「知っているとは思うけど、紺野木綿季です」

「神無月サクヤナです」

「更識簪です」

「ふふ、よろしくお願いしますね」

ボク達はマリーさん達と挨拶を交わし、5人でソーを見守りながらたわいも無い話を始めた……すると、

「簪ちゃん、ユウキちゃん、サクヤちゃん」

「ユウキ、簪ちゃん、サクヤちゃん」

「お姉ちゃん……みなさん……」

カタナとアスナの声が聞こえ振り向くとボク達より後に連れて行くと言われていたみんなが居た

「ソウ君は……」

「酷い怪我でしたけど……ここで三日寝ていれば大丈夫だそうです……東さん、あの時はすみませんでした」

「え……う、うん!! かんざしちゃんは何も悪くないから謝る必要は無いよ?」

東さんを見つけると簪さんが謝りだした……突然に謝られた東さんは動揺を隠せず
にいた、周りに居るボク達も……

「いえ、私はあの時……東さんは悪くないのは分かってました……分かっていましたけ
ど……何も出来ずにお兄ちゃんに言われて逃げた自分自身に苛立っていました……それを
東さんの所為にしてみました……あの時の八つ当たりなんです……木綿季さんにも強
く当たった……」

東さんの次にボクにも謝ってきた……だけど、

「謝らなくていいよ、簪さん。ボクもあの時は冷静に考えられて無かったから、簪さん
の御陰で頭を冷やせましたしソウキと、美乃梨ちゃんに悲しい思いをさせなくてすんだか
ら」

「私もちゃんと言っておかなければ行けなかったのに言っただけからかんざしちや
んの所為じゃ無いから謝らなくていいよ。それでも……殴られる覚悟はしてただけ
どな」

無駄になっちゃったよ」

「えっと、その……すみません／＼／＼」

そう言えば簪さんは東さんにそんなこと言っただけ……簪さんははずかしそうに
顔をほんのり赤くして俯かせてる……でも、今回は喧嘩両成敗だから別にいいよね？

「東さん、二つお願いしてもいいかな？」

「ん？何かな？この東さんに何でも言つてよ!!」

「えー、こんなのなんですけど……」

ボクは考えついたことをみんなの居る前で東さんに一つずつ説明した、東さんは何度か頷き、最後に目を輝かせていた

「うん！うんうん!!それはいい案だよ!!二つとも凄くいい!!それなら、私も君達の近くに居た方がいいから、出向できるよ!!分かった、その提案を引き受けるよ!!」

「ほんとですか!?!良かつた？みんな、どうしたの？」

ボクのお願いと言うなの提案を東さんは快く引き受けてくれる中、他のみんなが不思議そうにボクを見ていた

「ユウキって時々、凄いことを平然とやってのけるよね」

「そうですね……でも、それがユウキさんらしいですけど……」

「私もそう思います……でも、だからこそ、お兄ちゃんが惚れたんだと思います」

「私も簪ちゃんに賛成かしらね。ユウキさんが居たからこそこうしてみんな、ソウ君の元にあつまつたんだと思うわ。（それにもし、ユウキさんがいなかったらソウ君は今のようになんて笑えていたのかしら……）」

アスナやサクヤ達に色々と言われたが……ボクが居たからこうして集まれたってこ

とかな？

あまり、難しいことは分からないからいいや!!

みんなと笑いあっている時……この時のボク達はこの後にあんなことが起こるとは
知らなかった

続く

宣戦布告 1

「みなさん、色々大変なことがありましたがお疲れさまでした。簪さんと楯無さんはメデイカルチェックを受けてください。他のみなさんは既に受けていますので休んでもらって構いません」

「私達は念のために明後日までこちらで待機してるから何かあれば連絡するし連絡してね♪」

「明後日って、どういう事ですか？臨海は明日までですよね？」

「プロトレマイオスⅡから外に出た専用機持ち、山田教諭達の内、山田教諭の指示で更識姉妹はメデイカルチェックを受けることになる中、スメラギの一言に鈴音が疑問を持つていた

「ああ!!みなさんには言っていないませんでした!!学園長と協議をした結果、こちらにもう一泊することになりました」

「それってつまり……」

「はい、みなさんも明日はおやすみです!!」

「!?!?!?!?!」

明日丸一日休みになった専用機持ちの何人かの顔は嬉しそうに微笑み、また、何人かはあまり嬉しそうにはなかった

「イチカも楯無さん達もどうしたのよ?あまり嬉しそうには見えないわよ?」

「まあな……ソウがあんな状態で素直に遊べるかって言うとな……」

「……それもそうだね。ごめん」

「[[[[……]]]]」

チカの言葉で明日の休みを喜んだ、鈴達、IS組は表情が暗くなり、IS組でソウと一番仲が良いシャルロットが謝った

「謝らなくて良いよ。休みになったことは素直に喜べば良いんだからね。多分ソウも

「俺のことは気にしないで遊べ」って言うと思うよ」

「クス、ソウさんなら言うと思います……ね、簪さん」

「う、うん。お兄ちゃんなら言うと思う……」

まだ、どことなく暗い簪を他のメンバーが心配し明るい話題を持ち出そうとした……

その時、宿の方で爆発が起きた

「ば、爆発!?!あの…えっと…」

「落ちつきなさい。貴方が一年の総責任者よ? 貴方がパニックつてたら他の人達がどうすればいいのかわからなくなるのよ?」

突然の爆発に動揺した山田真耶をスメラギが冷静に落ちつかせる中、もう一人、今すぐにも走り出そうとしていた

「アスナ、みんな離して!!宿にはソウキと美乃梨ちゃんがいるんだよ!」

「わかってるよ、ユウキ。でも、ユウキ一人で行かせられないからみんなで抑えているんだよ。大丈夫。宿にはみんなで行くから…ね?」

「そうよ、ユウキちゃん。一旦、落ちつきなさい。山田先生、私達は宿に向かいます。現場を確認しなくてはなりませんしソウキ君達や他の生徒達の安全を確認しなくてはなりませんから」

「…:…わかりました。私も教師です、他生徒、教師の安全確認は私が行いますからみなさんはソウキ君達の安全確認をお願いします」

「「「了解!!」」」」

「私もマイスター達を連れて向かうから何があっても無理だけはしないで」

スメラギの言葉を聞いた専用機持ちは急ぎ、宿の方に向かった

「……………これは…」

ボク達の目の前には無残にも破壊された車の残骸が散らばっていた

「彼奴らの乗っていた車のはずだ……………誰かに解放されたのか?……………そうだとしたら、ユウキ、カタナ。二人を速く探した方がいいかもしれない」

「そうね。私とユウキちゃん、簪ちゃんの三人で……………探す必要は無いわね。あまり良くない状況みたい」

「ママ……………」

「お母さん……………」

カタナさんの言葉、そして、ソウキと美乃梨ちゃんの弱々しい声が聞こえ、振り向くとそこには二人の男女に捕まってるソウキと美乃梨ちゃんの姿があった

「ソウキ、美乃梨ちゃん!!」

「動くんじゃない!!」

ソウキと美乃梨ちゃんを捕まえている男女の一人……………織斑秋羅が片手にナイフを持ち大声で叫んできた

「秋……………そこまで墜ちるなんて思いもしませんでしたよ。残念です」

「なにが、残念なんだよ春菱? 全てはお前等が俺の思い通りにならなかったせいだろう

があ!？」

「そうだ!! 全て貴様等の所為だ!!」

うわあ、ハルナの対応や彼らの聞くも耐えない怒声で直ぐにわかったよ。この人達はダメだ。

自分がこの世界の王で他の人達を駒としか扱ってない、都合が悪くなると全てを他人に押し付けて自分は悪くないと思いついてこの感じ……それよりも……

「二人から離れろ!!」

「何度も言わせんじゃねえ!! 動くな!! 此奴らの命がねえぞ!!」

クッ……ソウキと美乃梨ちゃんが捕まっている以上、みんな動けない……どうすれば

……

「貴方達は何が望みなんです?」

「決まっているだろ!! 此奴らを八つ裂きにして、あの忌まわしき野郎に復讐してやるんだよ!! どんな、顔をしてくれるんだらうなあ!!」

そういう高らかに笑う、織斑秋羅。

今すぐにも此奴らからソウキと美乃梨ちゃんを助けてこの手で抱きしめたいのに

!!

「簪……さん?」

「大丈夫だよ、木綿季さん。彼らに二人は殺せない」

ボクの手を優しく握ってきた簪さんの目は確信を持っていた

「貴方達は最大のミスをしてる。貴方達はソウキ君と美乃梨ちゃんがを捕まえているから優位にたっているだけ……もし、二人を殺そうとするのならここにいる全員が容赦しないし、貴方達の優位は無くなる」

「だったら、試してやる。秋羅!!」

「ああ!!後悔しても遅いからな!!」

え? まっ、待つてよ!?! なに、挑発してるのさ!?! これじゃあ……彼奴らナイフを振り上げてるよ!?!

「それが、最大の油断! シールドビット!!。お兄ちゃん、那由多さん!!」

「があ!?!」

簪さんが挑発し彼奴らがナイフを振り上げると簪さんが叫ぶと彼奴らが何かに後ろから頭を突かれ、前かがみに倒れそうになる。それと同時にボク達を何かが飛び越えた「ツ……ソウキ、美乃梨ちゃん!! 目を瞑って!!」

ボクは飛び越えてきた者に嫌な予感がして2人に目を瞑らせた。

案の定だったのか、ボク達を飛び越えて着地したのは大怪我しているはずのソーと暗殺者時のソーの相棒の那由多だった

「那由多、美乃梨ちゃんを任せる!!」

「任されたわ!!」

ソーと那由多はそれだけ言い合うとソウキと美乃梨ちゃんの下に走る。

「刹那、これを使いなさい」

「ああ、助かる!!」

那由多が二本の日本刀を量子変換して呼び出すとその内の一本をソーに投げ渡す。

そして、ボクの嫌な予感的中して那由多とソーは彼奴らのナイフを持つている腕を刀で切り落とし美乃梨ちゃんとソウキを血がつかないように彼奴らから救出した

「ああああああああ……ああああああああ!!!」

「ゆうちゃん、ソウキと美乃梨ちゃんを!!」

「ツ……う、うん!!わかった!!」

彼奴らのもがき苦しむ声を無視しソーはそう言うのと那由多とソーが美乃梨ちゃんとソウキをボクに預けに来て、ボクが2人を抱きしめるのを確認するとまた、彼奴らの方へと走り出した……ソーと那由多の背中には彼奴らの血がべっとりついていて、IS学園の制服は真っ赤になっていた

「ママ……」

「お母さん……」

ソウキと美乃梨ちゃんはボクが抱きしめると泣き出してしまふ

「大丈夫、もう大丈夫だよ。ソーが助けてくれたからもう大丈夫。」

「ね、ねえ……ソウは……何者なの？人の腕を平然と斬るなんて……いい、異常よ……」

「そ、そうですねよ……」

「話してくれないか？……私達には聞く権利があると思うのだが？」

「……」

鈴達、IS学園で知り合った三人は顔を青くしてソーのことをよく知るボク達に聞いてきた……が、シャルロットだけは今の光景を見ても顔色を変えていたかった

「……わかった……ソーはね……ッ!!ソー、那由多危ない!!」

鈴達にソーのことを話そうとしたとき、ボクの目にソーと那由多に向かう黒い影が見え、咄嗟に叫んでしまった

「ぐう!!」

ソーと那由多は黒い影……黒いISからの斬撃を刀で防ぐが、ISと生身の所為で力負けしたけど、後ろに下がってきた

「やっぱり、アンタたつたんだな。IS学園のスパイ……織斑千冬!!」

ソーがそう言うのと黒いISが解除され、黒いISの中からボクは顔だけ見たことがある織斑千冬が立っていた

続
く

宣戦布告2

「更識兄……私の弟と篠ノ之の腕をよくも斬ってくれたな？」

「ふん！お前が焚き付けたんだろ？大方、怪我で俺が動けない内に美乃梨ちゃんとソウキを人質にみんなを潰そうとしたんだらうがそうはいかない。これでも俺は今回の怪我ぐらい何度も味わってきたんだからな。今更、このくらいで動けなくなるなんてことはないんだよ。まあ、久方ぶりで気を失っちまったがな……」

織斑千冬にこうは言ったが、実際、昔の「アレ」が残ってなければ回復が間に合わなかったかもしれないが……そんなことを言っている暇は無いな

「やはり、お前が我々の最大の脅威になりかねんな。ここで全員始末してやりたいところだが……」

織斑千冬は一度、言葉を切り後ろに倒れている織斑秋羅と篠ノ之箒へと目をやる

「はあ!!……クツ!!」

「その程度で私を倒せると思っただか？」

織斑秋羅と篠ノ之箒に目をやった隙を狙ったがさすがは元ブリュンヒルデ。大剣を展開されて防がれた

「此奴らにはまだ、利用価値がある。ここで死なれるのは困るからな。サーシエス、フリード、彼奴らの始末は任せる。私は此奴らを組織に連れ帰る」

「あいよ、姐さん」

「アツヒヤヤヤヤヤ、好みの女は好きにしてもいいんですかねええ？」

「好きにしろ」

「アツヒヤヤヤヤヤ!!そりゃあ、ヤリがいがありますねええ!!」

織斑千冬の一言で何処からか茶髪のおっさんと変な笑い声の銀髪青年が現れ、銀髪青年の目はサクヤに向いていて、先の言葉通りだと銀髪青年の好みはサクヤになる……

「薄汚れた、目をサクヤに向けてんじやねえぞ、腐ったゴミ屑」

「アツヒヤヤヤヤヤ、怒った?怒っちゃいましたか!?アツヒヤヤヤヤヤ、もしかして、てめえのコレすつか?アツヒヤヤヤヤヤ、そりゃあだつたら楽しみが増えたじゃないですか」

銀髪青年の口調と笑い声にこの場にいる女性陣、那由多ですら、気持ち悪がついていた「戻る前に、挨拶してやろう。……私の名は織斑千冬!!コードネーム、Tだ!!私……否!

我々、フアントム・タスク 宣戦機業は全世界に宣戦布告する!!」

「「「「「!?」」」」」

織斑千冬……いや、コードネームTの宣戦布告に俺達全員に衝撃が走る

「我々はテロリストでは無い!我々は断罪者!醜い人間を断罪する者だ!!この醜い世界に住む全ての人間を断罪し我々がこの世界を支配する!!」

宣戦布告をした織斑千冬は黒いISを展開して織斑秋羅と篠ノ之箒を連れて行ってしまう。連れて行かれる前に織斑秋羅と篠ノ之箒に睨まれた気がするが気にしなくてもいいだろ

「アイツは逃がすしか無いが……お前等は……聞く必要は無いよな……。那由多、あの茶髪のおっさんを頼む。スメラギさん達が来るまで耐えるだけでもいい……」

「了解よ……貴方は……言うまでも無いわね」

「ああ……俺はあの野郎を葬る」

俺は那由多にそう言うのとフリードと呼ばれた男に殺意を向ける

「アツヒヤヤヤヤヤヤヤヤ!!!」

「チイ!!一々気持ち悪いんだよ!!(此奴……戦闘慣れしてやがる!!)」

俺は刀、銀髪青年はナイフで戦闘を始めたが、銀髪青年の動きが奇抜で更には戦闘慣れしてる所為か有効打をなかなか与えられないでいた

「ウグツ!! (傷口が……)」

完治していない状態で無理な動きをした所為か傷口が開いてしまい、ほんの一瞬動きを止めてしまった……

「ソー!!」

「(しまった?!)」

「アツヒヤヤヤヤヤヤヤヤヤ!!!!おしめえーだ!!」

戦闘慣れした相手はその隙を見逃すことは無く……、銀髪青年が俺の目の前で高らかに笑いながらナイフを刺して……

は、来なかった

「本当にソーは無理するんだから……ボクの気持ちも考えてよね!!」

「ゆう……ちゃん?」

銀髪青年のナイフをゆうちゃんが愛刀剣のマクアファイテルで弾いていた

「ソー、立てる?」

「ああ…なんとか」

ゆうちゃんの前を借りて立ち上がり、銀髪青年の方を見るとかなりイラついていた
「何邪魔してくれてんだ!? 俺様の楽しみをクソ女!」

「邪魔するに決まってるよ! 君がどんな人だろうとソーを傷つけるのは許さない!!」

ゆうちゃんは銀髪青年にそう言うと言くとマクアファイテルの剣先を向けた

「ソー……ボクはソーみたいな覚悟は無い……でも、ソーの手助けはできると思う……。だから、ボクも一緒に戦わせて!」

「ゆうちゃん……わかった、頼む」

「うん!!」

ゆうちゃんの言う覚悟……多分それは、【殺す覚悟】……勿論、ゆうちゃんにそんな覚悟は持つて欲しくない

「ゆうちゃんはアイツの攻撃を躲すか弾いて……後は俺がやる」

「うん! 任せて!!」

ゆうちゃんとの話が纏まり視線を銀髪青年の方に向けるが先程より苛立っているように見えた

「何見せつけてくれてんですかねえ!? 俺様、本当に怒ったからなあ!」

「一々叫ぶな。鬱陶しい、そもそもお前等がこんなことをしなければ見なくてすんだん
だろ?」

「アツヒヤヤヤヤ!!ごもつともなことを言ってくれるじゃねえか!」

相も変わらぬ気持ち悪い笑いだ、ゆうちゃんが隣にいるからか先程以上に冷静な
自分がいた

「アツヒヤヤヤヤ!!」

銀髪青年は我慢の限界なのかナイフを片手に襲いかかってくる

「ゆうちゃん!!」

「任せて!!」

「アツヒヤヤヤヤ!!!オラア!!」

迫ってくる銀髪青年!ゆうちゃんが先行して攻撃を弾いてくれた

「スイツチ!!」

「はあああ!!」

ゆうちゃんがナイフを弾くとゆうちゃんの影から俺が飛び出し刀を振るう

「アツヒヤヤヤヤ、一人の時よりやるじゃねえか!」

「今のを弾くとかお前、本当に人間か!」

完全に意表を突き更にはゆうちゃんの影で死角になっているはずの場所から刀を振

るったにも関わらず完璧に防ぎきって来た

「おい、増援が来た見てえだ!! 離脱すんぞ!!」

「……分かってますよつと!!」

「みんな、眼を瞑れ! 閃光弾だ!!」

茶髪のおっさんが大慌てで銀髪青年に大声で叫んでくると銀髪青年は手榴弾を投げ、破裂すると同時に目の前で光が弾けた

「逃げられたか……」

眼を開けると茶髪のおっさんと銀髪青年の姿は無く代わりに四機のISが上空から降りてきた

《みんな、大丈夫か?》

「はい、怪我人はいません。ティエリアさん」

黒と白の機体から声が聞こえ簪が受け答えをしているなか、白と青の機体が俺の方を見ていた

《……》

《おい、刹那!!》

「!?!」

白と青の機体は何も言わずに飛び立ってしまう中、緑と白の機体の操縦者が白と青の

機体に刹那と言ったことに驚愕していた

「ソー?」

「うん、何でもない」

ゆうちゃんが心配そうに顔を覗かせてきたが横に振った

続く

一学期の終わり

「ねえ、ソー？これってどういう事？」

「ン？ああ、それは……」

あのハチャメチャな臨海学習から1週間後、俺たちは学園に戻り平穏な生活に戻りつつあった……が、直ぐそばに学生としての最大最悪のイベントが近付いていた

「あの事件からまだ、1週間って……」【期末テスト】がもうすぐなんて……

「まあ、仕方ないさ。そういうスケジュールなんだしさ。それに、一つでも赤点なんて取ったら折角の夏休みが無くなっちゃうぞ？」

「それだけはイヤだよ」

そう、学生であるなら誰もが通る年何回かの最大のイベント……【期末テスト】だ。

それは勿論、IS学園の生徒……専用機持ちも例外なく受けることになり、一つでも赤点を取れば夏休みの半分近くは補習となる為、IS学園組の西風の旅団メンバーもAL0へのイン率が下がってきている。

「ソーは大丈夫なの?」

「うん、俺の方は大丈夫。I S 関連の知識は刀奈姉さんと簪に入学前にたたき込まれたから引っかけが来ない限りは大丈夫」

「……そうじゃない」

「え?」

俺は勉強のことだと思いいゆうちゃんに「大丈夫」と答えるといきなり両肩をつかまれた

「ボクが言いたいことはそうじゃない!!ソーは平気なのかってこと!」

「!?……その事なら俺は平気さ。あんなの見せられて距離を取られるのは当たり前だと思っからな」

臨海学習の二日目……あの事件から俺はセシリア、鈴、ラウラから距離を置かれている
ハルナさんは普段通り話してくれるが無理をしているのが分かってる。

驚いたのがシャルで普段と全く同じで一切無理していないのだった

「ソーって他人には甘く優しいのに自分のことにはとことん厳しくて鈍いよね……無理に割り切らなくても良いんだよ?」

「自分を甘やかして何度も痛い目にあってるから……割り切るのも二度も割り切れなくてみんなを傷つけたから……本当のことを話すまではこんな感じだろうな」

「そうだろうね……夏休みには話すってシャルロットから聞いてるけどいつ話すの?」
「……夏休み後半になるだろうな」

シャル達、四人は夏休み前半は国に帰ると以前聞いていたので話すのは必然的に夏休み後半になるだろうな

「もし……もしだよ?五人がソーのことを怖がって絶交してきたらどうするの?前みたいになくなるうとしんないよね?」

「……正直分らない。五人が顔も見たくないって言うなら俺はこの学園を去ろうとも考えてる……けど、今の状況でこの学園を去るのはゆうちゃん達を危険な場所に置いといて自分だけ安全な場所にいると同じになる……それだけは嫌だからね。」

今のIS学園……いや、この世界は亡国企業……ファントム・タスクと戦争状態にある……元ブリュンヒルデこと織斑千冬が臨海学習時に宣戦布告したことによって各国で小競り合いが起き始めており、IS委員会の支部は対応に追われてるらしい

「暗くなっても仕方ないから勉強だよ、勉強。分からないところは教えてあげるから」
「さ」

「うう〜」

ゆうちゃんは唸っていたが折角の夏休みに追試を受けたくないからと遅れているIS関連の勉強を必死にやっていた

「ねえ、アンタ達はソウのことどう思ってるの？」

ソウと木綿季が勉強している同時刻、シャルロットとラウラの部屋に部屋の主の二人、鈴音、セシリア、ハルナの五人が勉強の為に集まっている中、鈴音が他の四人にソウの事を聞いてきた

「どう……と言われましても……」

「悪人では無いのは確かだ……しかし……」

「あんなことがあったからね……兄さんは何か知ってるみたいだけど「アイツが話すまでは待つてろ」って」

「そうね……アタシもイチカに聞いたら同じ事を言われたわ。他のみんなも本人が話すまでは話せないって……アンタは何か知ってるわけ？」

「どうして、そう思うのかな？」

四人が話している中、四人の会話を気にせずに勉強しているシャルロットに鈴音が話をふった

「アンタ、アタシ達の話の気にもしなかったじゃない？何かしら知ってるんじゃないよ」

「……そうだね。ソウが臨海学習の時に見せた光景には驚いてる……けど、似たような光景を僕は見たことあるんだよ。僕がソウとフランスに行った時……武装集団に襲われてね。その時にソウと臨海学習の時にいた那由多って人が撃退したんだ。それも、車のタイヤを狙ったりしないで相手の人を殺してね」

「!??!?!?!」

「シヤ!」
シヤ! ルロットの話に四人は耳を疑い顔色を変えた

「こつちに戻ってから少ししてソウに僕は何者なのかって聞いた……ソウは「夏休みまで待ってくれ」って言った。それから「俺と那由多は今回のような経験を何度もしてきた。勿論、ゲームの世界では無く現実世界の話だ」とも……ソウは僕たちが知らない大きな何かを……大きな闇を抱えてるんじゃないかな……。でも、ソウが居なければ僕もお父さんも死んでいたかもしれない……僕には感謝しても感謝しきれない恩があるから……僕は目の前にいるソウを信じることにしているよ」

「「「……」」」

その日は重い空気のまま解散することになった

それから1週間後、期末テストが終わり、IS学園組西風の旅団のメンバー全員、追試を逃れることができた……それから数日後、IS学園の一学期が幕を閉じた

続
く

夏休み

蒼の過去

「みんな、呼び出してすまないな」

IS学園の夏休みが始まってもう数週間前が経過した頃、俺はそれぞれの国から戻ってきたシャル、鈴、セシリア、ラウラ、それから話していなかったハルナさんと簪に集まってもらっていた

部屋には俺も含めた7人とカタナ姉さん、チカ、ユウキの計十人がいる

「それで、話ってなに？アンタの昔話でも聞かせてくれるのかしら？」

「一言で言えばそうなるな。ただし、ここから話すのは気分のいい話じゃあ無い。それでも聞くか？」

「……」

「勿論、聞くよ。話してくるって約束だからね」

「私もだよ、お兄ちゃん。お姉ちゃんだけ知ってるなんてズルイもん」

ハルナさん達、四人が答えられない中、シャルと簪だけが即答で答えてきた。

「……お前等二人は即答してくると思ってたよ。それで、お前達は どうする？ まだ、ここで聞かないって選択もできるぞ？」

「……私は聞きたいです。そして、今回の話で私の中にある疑問についても知ることが出来ると思いますから……」

「私も聞くわ。今日までずっと考えてきてもアンタの話を聞かなければどうしようも無いからね」

「わたくしも聞きますわ」

「勿論私もな。ここで一人聞かないなどできないだろ」

「……少し足りないが……まあいいな。それじゃあ、お前達は数年前に話題になった蒼い死神を知ってるか？」

みんなの返事を聞くと俺は話し始めたが「蒼い死神」と言う単語にみんな、頭を悩ませた。

「ボクは聞いたことあるよ……8年前、フランスで騒がれてた暗殺者の通り名だよね？」
「それなら私も聞き覚えがあるぞ、ドイツでも同じ名前の暗殺者が軍でも話題になっていた」

シャルとラウラが思い出したかのように話すが鈴とセシリア、簪、ハルナさんは知らないみたいだった。

「その蒼い死神がどうしたのよ……まさか、そんな訳……」

「鈴の考えているとおりの。俺がその世間を騒がせた暗殺者、蒼い死神だ」

「！！！！！！」

俺の告白に六人は驚愕したのと同時に俺を見る目が変わった。

「じゃあ、僕に言ってたことは……」

「ああ、俺と那由多はコンビで暗殺者として二年近く苦楽を共に過ごした。シャルに言ったことは暗殺者として過ごした経験だ」

それから俺は六人にこれまで行ってきた暗殺者だった頃の事を全て包み隠さず話した。

「やっぱりあの時、兄さんを助けて下さったのはソウさん……なんですね」

「あの時は簪の護衛として偶然ドイツにいたうえに拉致された瞬間を見たからな。織斑千冬の優勝がかかった試合前に身内が拉致されたと知ったら普通試合を放り投げてでも探す……だから、日本政府は拉致された事を秘密にして終わってから伝える事にしてしまったのだが……そもそも、織斑千冬はチカが拉致されようと気にしないだろうな」

「！！！！（うん、それは間違いない）！！！！」

織斑千冬に関してここにいる全員の意見が一致していた。

「さて……俺が行ってきた闇はこんな所だ……。お前達はこれからどうする?」

「どうするってなによ?」

「今まで通り仲間として友達としてやっていくのかどうかって事だ」

「!!!」

「!!!」で、みんなの顔が強張った。

「今すぐに決めろとは言わない。決めろって言っても直ぐに決まるような話では無いからな。二学期が始まる前にもう一度、話を聞くからその時までには答えを決めておいてくれ。俺はこの後、シリカとの約束があるから潜る、ゆうちゃんみんなのメンタルケアをお願いするよ」

「うん。わかったよ」

「それじゃあ、ゆっくり考えろな。《リンク・スタート》」

俺はそれだけ言ううと仮想世界に意識を潜らせた。

「ソーはどうして、ボクにみんなのメンタルケアを任せようとするかな!?」

ソーがALLOにダイブしてから10分弱、重々しい空気の中ボクは心の中でソーに叫んでいた。

「木綿季さんやみなさんはその……蒼さんのことを聞いていらっしやっただけですわよね……」

「うん。SAO事件の間に少しトラブルがあつてね。その時にSAOの《西風の旅団》メンバーは全員聞いている……その時にみんな、ソーはソーで昔何をやっていてもボク達を助けてくれたのはソーだから、ソーを信じることにしてるんだよ……それにね」

ボクは軽く深呼吸をしてから青さめている六人の顔を見る。

「ソーって、ああ見えてかなり繊細なんだよ。誰よりもどんな人よりも繊細……少しのことでもみんなが危険になるって分かると全部自分で背負い込んでしまうんだ……。そう言うところもあつてボクは昔からほっとけなくてね……」

「あの……木綿季さんって、アイツと何処で知り合ったんですか?昔ながらの知り合いみたいなこと言つてたりしますけど……」

「ボクとソー、それから簪は小学校が一緒にクラスもボクが病気で入院するまで一緒だったんだよ。簪とは違うクラスだったけどね」

「はい。言われるまで木綿季さんだったことは忘れてましたけど……お兄ちゃんの隣に

いつも一人の女の子がいたのを覚えてました……私では照らすことすら出来なかったお兄ちゃんのことを照らした女の子が……」

簪はあの時期のソーを思い出したのか手を握りしめて顔を俯かせていた。

「ソーが暗殺者を辞めたって話しはさっきソーがしてたよね？」

「ええ、相棒だった那由多さんが犠牲になったからでしたよね？」

「でも、それって可笑しくない？ 那由多さんはボクも会ってるから亡くなって……」

「うん。那由多さんは本当は生きてたけど、それをソーが知ったのはS A O事件が終わってA L O事件の途中だったんだよ。その間の事は分からないけど那由多さんを亡くしたソーは抜け殻だね。多分、あのままだったら今のソーは何処にも存在しないしS A O事件での被害は増えたかもしれない……それにボクや姉ちゃんと生きてなかった……」「ユウキちゃん？」……うん、最後のは忘れて」

危ない、危ない。カタナに止められなかったらボクのことまで話さないといけないようになってた!! もう少し考えて話さないと、ややこしくなるよね」

「まあ、こんな感じ。みんなは十分に考えて決めてね。ソーはみんなの気持ちを尊重するって言ってたから……それじゃあ……解散!!」

ボクが解散を言い放つと暗い顔のままリン、ティア、ラウ、シャル、ハルナ、簪が部屋を出て行き、カタナとチカも部屋を後にした。

続く

不思議な国の出鱈目旅行1-1

「東姉、話があるって言うからカタナ達を連れてきたぞ」

「あつー待ってたよ、いっくん」

ソウの過去語りから数日後、俺は臨海学習後からIS学園に留まっている東姉に呼ばれカタナ、ハルナ、簪、鈴、シャル、セシリア、ラウラの6人を連れて東姉が改築した学園の一面にあるラボに来ていた

「ねえ、いっくん？彼は連れてこなかったの？」

「少し前に色々あつて今は、ハルナや鈴達と距離を置いてるから今回は連れてこれなかった……それに、家族で出掛けるみたいだったからな」

「そうなんだね、それなら仕方ないか……」

東姉はどこか含みのある笑みを零していた

「あの、東博士？僕たちをどうして呼んだんですか？」

「よくぞ、聞いてくれた!!見よ！これが私が創り出した発明!!その名も……」

東姉の大声と共に東姉の後ろの暗い空間にライトが当たり、先頭が赤く車体が白い電車のような物が現れる

「その名も時の列車デンライナー〜」

「「それはダメでしょ?!」」「」

某ライダーの列車を創り出した東姉にそれを知っている何人かが叫んでしまった

「それで……俺たちを呼んだのはこれを見せる為なのか?」

「ノンノン!!この天災の東様がその為だけに呼ぶわけ無かるうなのだ〜」

それもそうだ……この人はISを創り出し、身体能力、頭の良さは多分誰も勝てない……例外はアイツくらいだろう

「こいつで時間旅行でもして過去を書き換えようとしてもしてるのか?」

「流石に東さんでも過去、未来を往き来させることは出来なかったよ〜」

過去と未来を往き来させることは出来なかった?それじゃあ、まるで……並行世界には行けるって言うてるような物だよな?

「東さんでも並行世界に?げることしか出来なかったよ〜」

「『並行世界!』」

「(やっぱり!?)」

俺の予想が当たってしまいカタナ達は驚き、俺とハルナは頭を悩ました

「束姉……またこんな機密の塊を創り出して……」

「束さんですからね……ですが……」

「ああ、ハルナの言いたいことは分かっている」

俺とハルナは軽く深呼吸をすると束姉の前に歩き出した

「何々? いくくんもはるちゃんもそんなに怖い顔してどうしたのかな?」

「やり過ぎだああああああああああああ!!!!」

「フギヤアアアアアアアアアア!!!!」

俺とハルナの怒声と束姉の悲鳴がラボに響き渡った

「ううう、まだ頭がガンガンするよ」

「自業自得ですよ、束さん」

あれから仕方なく列車の中に入った俺たちと先程の怒声で頭を抑えている束姉は先

頭車両に来ていた

「それじゃあ、みんな掴まってね!! デンライナー、出発進行!!」

先頭車両に備えられたレバーを束姉が引くと列車がガタゴトと音を出しながら走り始めた

「さあ、逝こう！空の彼方へ!!」

「だから、それはマズいって!!それに字が違う!!」

なんか、もう今日は疲れたよ……パトラッシュ……

続く

不思議な国の出鱈目旅行1—2

「みんな、着いたみたいだよ」

列車に揺られて30分弱、束姉の一言と共に列車が止まった

「ここって……学園前よね？本当に並行世界に着いたの？」

「ムウ、リツちゃん信じてないな。本当に着いてるんだよ。それに、ほら校門を見て見なよ」

外の景色……学園前にいることに鈴やみんなが並行世界に着いていると信じてないと束姉が頬を膨らませながら、校門を見るように言ってきた

「嘘!？」

「あ、アレって!？」

「どう見たって……」

「「私達じゃない!!」」

校門を見るやいなや、見覚えのあり過ぎる顔ぶれがそれぞれのISに乗りこの列車を警戒していた

「通信? ゲツ?!?!」

「束さん、どうしました? ム○カ大佐から通信でも来ましたか?」

「違うけど違わないかもしれないかも……た、多分通信を聞いた方が早いよ……」

束姉は回線を開くと聞きたくも無い奴の声が聞こえてきた

『私はIS学園防衛部隊総指揮官の織斑千冬だ! 所属と目的を言え!!』

「「「「「……………」」」」」

通信越しに聞こえたのは間違いなく俺とハルナの元姉こと織斑千冬だ……この列車内のみんな、驚きと嫌な顔をしていてハルナに至っては殺気が少しだけ漏れていた

「通信は無視して列車から降りよう、アイツと話すつもりは無いが、この世界の自分には興味がある」

「確かにそうね。私も気になることがあるし」

「僕もかな? こつちの僕はラファールみたいだし」

「私も気になるわね。それに、見た感じソウ君やキリト達がいなみみたいだから、その辺も聞いてみたいからね」

「私はシャルロットさんと同じかな？こっちの私のは多分、未完成の打鉄式だから……お兄ちゃんや彼らがないなら仕方ないかもだけど……気になる」

「わたくしもですわ……最近陰薄すぎて読者の皆様に忘れられてないか心配もありますわ」

メタイ心の声が聞こえた気がするが……気にしない方がいいな、本人の為に……

「それじゃあ、全員で降りるってことでいいかな？それから、デンライナーのスペアキーはいつくんに渡しておくよ。いつくんなら盗まれることも無いだろうから安全だろうからね」

「分かった」

俺は鍵を受け取ると外に出るために先頭車両から二両目に移った

並行世界 side

「一向に向こうからの連絡がありません……織斑先生どうしましょうか？」

「仕方ない……全員、砲撃用意！私の合図で……『相変わらず短気で物騒だな』ツ!!誰だ!!」

この世界の山田真耶と織斑千冬が通信から返答が無く10分経つと砲撃用意させよ

うとすると列車の方から声が聞こえ、織斑千冬が叫ぶと列車の二両目のドアが開いた
「なあ!？」

「え!?! どういう事よ!?!」

「そんな!?!」

出て来た顔ぶれにこの世界のラウラ、鈴音、シャルロットが驚愕の声を上げ、他は声を出すことが出来なかった

「やあ、初めまして。この世界の俺たち、俺の名は神薙・S・イチカ。旧姓織斑一夏だ」
「お、俺!?!」

こちら側の織斑一夏と見た目が全然違うイチカにこちら側の織斑一夏は驚愕して、こちら側の幼馴染みの篠ノ之箒と鈴音は信じられないような顔をしていた
「俺たちの事情を話す、がこれは他言無用で頼む」

イチカ side

「並行世界!?! そんなの信じられるわけ無いじゃ無い!!」

「並行世界」と聞いてまず、噛みついてきたのは鈴だった

「(やっぱり、お前が嘯みついてくるよな) お前なら、そう言うと思った。だが、お前と瓜二つのこちら側の鈴がいることにどう説明してくれる?」

「クツ……そ、それは」

「信じたくなかろうとこれは現実なんだ。目の前で起こっている事が全てが現実とは言わないが今、この瞬間は紛れもなく現実なんだ」

「わ、分かっているわよ……少し混乱してるだけ」

そう言つて鈴は一步下がりがり、頭を悩ませていた

「他に聞きたいことかはあるか? いや、何人かが聞きたいことは一つ分かっているけどな……本人もだろうが俺たちの世界の篠ノ之箒はどうしているのか気になるんだろ?」

一言で言えば奴は……奴らは敵だ」

「[[[[[[!?!?!]]]]]]」

予想通り篠ノ之箒が敵と伝えると並行世界の俺たちは驚愕していた

「それから、織斑千冬……お前もな。いや、俺たちの世界のお前が元凶なのか?」

「そうですね、兄さん……私達にはこの世界には居ないと思いますが一つ上の兄が居ました……かなりゲスですが……その兄と千冬さん、そして篠ノ之箒の三人は臨海学習の時に敵へ渡りました……千冬さんは元々スパイとしてIS学園に潜入していたみたいですが……」

「千冬姉がそんなことするわけ無いだろ!!」

そう、声を荒げたのはこちら側の俺……織斑一夏だ

「そっち側の織斑千冬は知らないが俺たちの世界の織斑千冬はそう言う存在だ。認めたくないのは分からなくもないがお前達の世界と俺たちの世界は全く別物だ。それを忘れるな……それとも、実力行使で分からせないとダメか？」

殺気を少しだけ漏らすと並行世界の俺は気がついていないのかケロツとして居るが他のシャルロットや刀奈達は冷や汗をかいていた

「いいぜ、1対1で勝負……あいたあ!?」

「いい加減にしろ、馬鹿者。お前はまだ、実力差がわからんのか!」

「ち、千冬姉だけど……」

「織斑先生だ!!」

俺の挑発に乗ろうとした織斑一夏は脳天直撃の拳骨を織斑千冬から喰らい、更に私生活と学校を区別も出来てなくもう一度、拳骨を喰らっていた

「私の生徒がすまないな」

「いや、俺もイタズラが過ぎた。でもまあ、そうだな。折角だし並行世界の自分自身の実力をこの目で見てみたいな。俺は一人で良いから全員で……」待ちなさい、チカ。ここは私に良い考えがあるわ……分かった任せる」

並行世界に来てから一言も喋ってこなかった刀奈が口を出してきた
「織斑先生。ここには両世界共に八人の専用機持ちが揃ってます…ですの…」

「八対八のチーム戦を行いませんか？」

続く

不思議な国の出鱈目旅行1―3

「お姉ちゃん、どうしてチーム戦の提案をしたの？」

「特に理由なんて無いわよ？。ただ、チカだけ戦うなんて面白くなかったからだけよ」

チーム戦をやることになったカタナ達はあてがわれた更衣室で着替えていた

「クスツ、お姉ちゃんらしいよ。そう言えば、チーム戦が決まって直ぐに東さんとイチカさんが話してたよね？」

「ええ、何でも本来、アマルティア博士がチカに渡すはずだった専用機をチカが使いたって言ったみたいよ」

「イチカさんの本来の専用機？それって……」

「はい、簪さんの考えているとおり秋……織斑秋羅が使っていた白式です」

姉妹で話していると近くで着替えていたイチカの妹でもあるハルナがイチカの専用機について話した

「兄さんは元々白式を使うつもりも無く東さんが解体することが決まってきましたが……」

なにを思ったのか兄さんは白式の改修を束さんに依頼したそうです。それを聞いた時に兄さんはこう言っていました「もし、SAOのチカが役目を終えて使えなくなったときに現実世界での力が必要だ。」だから、兄さんは改修してもらったそうです」

「へえ、チカは私に何も言ってくれなかったわね。まあ、そんなことだとは思ったのだけど……」

不敵に笑みを零すカタナ……そんなカタナを見て簪とハルナは少しだけ怖いと思っていた

「チカ、待たせたわね」

「いや、俺も白式のスペックを確認していたから問題ない」

「俺はBピットで今回使用する機体……白式のスペックを再確認しているとISSーツに着替えたカタナ達が更衣室から出て来た。」

「アンタ、本当にアレを使うつもりなの？」

「ああ、元々は俺用について束姉が造ってくれた機体だからな。現実世界でイチカとして戦うなら今のままじゃダメなんだよ」

「……そ、アンタが決めたんなら何も言わないわ」

「そうしてくれると助かるよ、鈴……さて、カタナ。作戦はどうする？」

俺と幼馴染みでもある鈴が心配そうに声をかけてきたが俺は自分の意思を伝えた

「そうね、簪ちゃん。今回の指揮を一任するわ。貴女なら私以上に務まると思うの」

「……お姉ちゃんがそう言うなら分かった」

今回の指揮をカタナは簪に一任したが……俺達は驚くことは無かった

簪の専用機が完成してから少ししてチーム戦を模擬戦に組み込んでから簪が良くチームの指揮を行っていたからだ

「まず、お姉ちゃんとイチカさん、鈴さんはフロントアタッカーでそれぞれの相手……こちら側の自分達を仕留めて、シャルさんとラウラ、それからハルナさんはガードウィング、やることはお姉ちゃん達と変わらないけど、一撃離脱で仲間の支援も行ってもらおう」

「フロントアタッカーね、わかったわ。こちらの私はどうなのかしらね？」

敵陣に先行するフロントアタッカー……近接メインの俺、カタナ、鈴、機動力を活かしての一撃離脱のガードウィング……ハルナ、シャル、ラウラ……かなり良いポジション人選だな

それぞれの戦い方に合わせての人選で鈴の機体はガードウィングにもなるが機動力が他に比べると劣ってしまうのもありフロントアタッカーか……

「セシリアさんはセンターガード、主に相手に支援砲撃をさせないポジションだけど、貴

女の性格を考えると1対1の戦闘になると思う」

「う……本当のことで何も言い返せませんわね…分かりましたわ。センターガードの任
お受けしますわ」

「うん。お願い、最後に私がフルバック。後方支援を行いつつ、指示を出していくよ……
それじゃあみんな…

勝とう!!」

「「「「「おう!! (うん!!) (ええ!!) (はいですわ!!)「「「「」

続く

不思議な国の出鱈目旅行 1—4

『各チーム、出撃して下さい』

少し待っていると並行世界側の山田先生のアナウンスがありBピットのカタパルトのハッチが開く

「俺から行かせてもらおう」

「ええ、チームリーダーが先頭よ。イチカ！新たな機体を見せなさい!!」

「分かってる」

俺は白式を展開する……以前の白式と違い、全身白でほぼ全身装甲状態…装甲が無いのは膝や肘などの関節部だけ、更に頭部には一角獣の角が一本と白式の面影を一切残さ
れていない

「白式改・雪獣^{セツジュウ}。いくぜ!!」

俺は勢い良くカタパルトから飛び出した

「あっちの一夏の I S はなんなの!？」

先にアリーナに出ていた並行世界側の鈴が驚愕していた

「機体名は……白式改・雪獣^{セツジュウ}……白式だと!？」

「え?! 嘘、アレが私達の知る白式なの!？」

「……」

白式だとわかった並行世界側の全員が驚愕して声を上げている中、簪と本人の一夏だけが驚いていたが何も言わなかった

「待たせたな。これが俺の専用機、白式改・雪獣^{セツジュウ}。織斑千冬によって束姉が俺用に用意し

ていたのを織斑秋羅用に勝手に造り直された機体を束姉が俺用に改修した機体だ。性能テストには十分だろう?」

「ッ!？」

俺の言い方がかんに障ったのか並行世界側の俺の顔色が変わり怒っているようだった

「初めて使う機体で戦う……ふぎけたこと言っつてんじやねえ!？」

「別にふぎけた事を言っつたつもりは無いんだがな……それにしても……其方の機体は懐かしいのが幾つかと……お前のそれは白式の第二形態^{セカンドシフト}移行か? 篠ノ之の機体も見たこ

と無いが……気にもする事も無いな」

「なあ!？」

並行世界側のシャルのラファール、ラウラのレーゲン……そして、簪の打鉄式式を見て少し懐かしく思う……それから並行世界の俺の形態変化している白式に篠ノ之の真つ赤な機体は見たことが無い機体……油断はするつもりは無いが篠ノ之と戦うことは無いな……それにしても、並行世界の俺は沸点が低くないか？

「そつちの機体は殆ど見たこと無いんだが……」

「私やラウラはIS委員会から機体の改修と新機体を渡されてる。シャルのはお父さんと和解しているから……」

「父さん!？」

並行世界のシャルが驚いて目を見開いているが……そんなに驚くことなのか？

「そつちは違うかも知れないけど……知り合いに頼んで父さんに会いに行つた時、父さんは僕をデュノア家から護るために男装までさせてIS学園に転入させたんだって……話を聞いた後に少しイザコザがあつたけど父さんとは和解してこの機体……ミスラル・オーブを受け取つたんだ」

「そ、そうなんだ……」

シャルの話を聞いて並行世界のシャルの顔は沈んでいた……無理も無いかもしれないな

い、この世界では和解できてないと思うからな

「貴女にこのデータを渡す。そのデータを活かすも殺すも貴女次第」

「これって……マルチロックオンシステム!？」

「「!?!?!」」

簪が並行世界の自分に何かのデータを送り、それを確認すると並行世界の簪はかなり

驚いていた

「どうして?」

「私だけ使えて貴女が使えないのは嫌だから……同じ土俵で戦いたい」

「……ありがとう」

簪同士はなんか仲良くなっているような気がするな……

『それでは、8対8のチーム戦始め!!』

少ししてチームごとに少し距離を空けると山田先生の合図で試合が始まった

続く

不思議な国の出鱈目旅行1—5

一夏V S イチカ

「はあああああああ!!!」

「……」

チーム戦が始まって直ぐ……同一自分で戦っている中、俺はシールドで防ぐことに専念していた

「(うーん、機体性能だよりの動きだな。あの雪羅って武装は零落白夜を射撃用、格闘用で使う武装みたいだが……本人の技量が低すぎるな)」

「反撃してこないのか？」

俺が分析していると並行世界の俺が手を止めてきた

「そうだな……分析は元々俺がすることじゃ無いからな……ここから反撃に移るからな……はあ!!」

「グウ!!」

俺の願いで改修された白式には抜刀術に耐えうる刀が何本か用意されていた
並行世界の自分に振るったのもその一本……名を時雨^{しぐれ}。

ビームコーティングされたこの刀は俺の技量次第ではビームやレーザー、シールドバ
リアをも切り裂くことが出来る代物と束姉に言われた

「雪羅、射撃モード」

並行世界の俺が距離を離すと左手の雪羅を射撃用に切り替えて大出力荷電粒子砲を
放つてきた

「あらよつと」

「ツ!!なら!!」

簡単に避けられたことで頭に血が上ったのか大出力荷電粒子砲を連射してき

「なんで、あたらねえ!!」

「射撃用のセンサーリンクが無いんだろ?それに、射撃はかなり苦手だな。まあ、苦手な
のは俺も一緒だな」

「うるせえ!!」

並行世界の俺は雄叫びを上げて突っ込んできた

箒VSハルナ

「はあ!!」

「クツ!はあ!!」

並行世界の箒ノ之と戦うことになった私は何度も打ち合っていた

「これじゃあ、らちがあかない……仕方ない、バレットシュート!!」

「クウ!き、貴様劍士では無かったのか!」

「私は双剣双銃使い……銃の腕だけなら兄さんにもセシリアさんにすら勝ってますよ……」

それではどんどん行きます。デイバインシューター、シュート!!」

箒ノ之は私が銃を使うと怒ってきた……そんなに銃を使うのを嫌いますかね?言っ

ている本人もレーザーを使ってきますけど

「このくらい!!」

「残念、そこ!」

「チイ!!」

無数の白のエネルギー弾を発射し箒ノ之が弾に気を取られている間に死角からバスターを放ちますがそれを察知したのか直撃はさせられませんでした

「なかなかの直感ですね……私達の世界の篠ノ之に見習つて欲しいくらいです」

「……そつちの私は一夏やお前に嫌われているんだな……」

「嫌われてる? いいえ、違いますよ。兄さんは分かりませんが私は私の世界の貴女が大っ嫌いです。兄さんが織斑の出来損ない? 剣道が弱い? ふざけんな、秋羅に良いように使われて剣道では八百長で負けさせては訓練と称して集団で虐めて……それを見ていりしか出来なかつた私の気持ち貴女に分かりますか? どんなに罵倒されても虐められてもいつかは姉や兄に認められると信じていた兄さんの気持ちが分かりますか?」

「……………」

篠ノ之は私の話で俯き黙り込んでしまいました……

「話はここからです。ここからは全力で行きますよ!! はああ!!」

「く!!」

話を終え突つ込んだ私の二刀からの連撃を篠ノ之は長刀二本で防いで来ました

「バレットシュート!!」

「同じ手を喰らうか!! 何!?!」

「同じ手なんて甘いことを代表候補生でもある私がすると思いませんか?」

篠ノ之が同じバレットと思つて避けたのは爆裂弾、これは発射前に爆発させるタイミングを決めてから放つ物で小刻みに回避する剣士や弾いたり防いだりする相手には有

効なのですが……欠点として意表を突いた時にしか使えないんですよ……

続く

不思議な国の出鱈目旅行1—6

鈴VS鈴

「だらあ!!」

「グウ!?重い!!」

甲龍を纏い双天牙月を振るう鈴に、並行世界の鈴はそれを双天牙月で防ごうとするが一撃の重さに耐えられずにいた

「アンタの機体、本当に甲龍なの?双天牙月の重さが違うわよ!!」

「多分同じよ?今のは双天牙月の重さに重心の移動であたしの体重も上乘せした物よ

……武術とかでも使われるやり方かしらね?」

「あたし、武術なんて習ってないわよ!!」

「そ、ならあたしとの差はそこよ。あたしは彼奴の隣に立つために八極拳を血反吐を吐く思いで覚えたわ。その位しないと彼奴の隣に立つことはできないと思ったからよ……あなたにその位の覚悟があるかしらね?」

「……」

鈴の言葉に並行世界の鈴は黙ってしまふ

「あるわけ無いわよね。こつちと違つてそつちの彼奴はいつ死ぬかもわからない世界に閉じ込められてないもんね？」

「ど、どういふことよ!?!」

鈴の言葉に並行世界の鈴は動揺を隠せずにした

「そうね……これは本人達に聞くのが一番だわ。もし、このチーム戦が終わつてから聞くなら一つだけ忠告しておくわ、彼奴の話でたかがを使わない方が良いわよ。彼らにとつてたかがはその世界を……その世界で生きた人たちへの最大の侮辱よ……。確かセシリアが侮辱して痛い目見たつて言つていたわね……。話はこれぐらいにしましょ?」

「ツ……ええ、そうね。ここからは……」

お互いに深呼吸をすると大声で叫び突つ込んでいく

「全力全開で叩き潰す!!」

シャルVSシャル

「……………」

イチカやハルナ、鈴とは違いシャル対シャルの周りは銃弾が飛び交っていた

「中遠距離が得意なのは変わらないんだね」

「そうみたいだね…」

同一人物では過ごし方が変わらなければ戦いスタイルはそう簡単には変わらない……イチカや鈴がそうみたい……だが、同一人物でも大きく変わっているのがシャルだった

「……………《ブースト》」

「は、はやい!？」

シャルが小声で呟くとミストラル・オーブの動きが変わると同時にシャルはそれを展開していた

「け、剣!？」

なんとかシャルの攻撃をシールドで防いだ並行世界のシャルは驚きを隠せなかった

当の本人は近接武器はシールド・ピアースことパイルバンカーしかなく剣を使ったことがなかった……が、目の前の自分が剣を使ってきたのだ、驚きを隠せるわけが無かった

「はあああああああ!!!」

「ううう……」

並行世界のシャルはなんとか距離を離そうとするが剣を持ったシャルは距離を離されまいと接近と連撃を続けた

「はあ……はあ……はあ、そつちの僕は剣を使うんだね……」

「僕たちの世界は近接のプロフェツショナルが多いからね……中遠距離だけじゃその人たちに勝てないから僕を……僕とお父さんを助けてくれた人に剣を教わってるところ」

「……」

並行世界のシャルはお父さんと聞くと顔色を暗くし黙り込んでしまう

「多分、君も昔の僕と同じ悩みを持っているんだと思うよ……僕は彼のお陰で助かったけど……君にはこの言葉を贈るよ……【ぶつからなきや伝わらないことだってあるよ。】」

「!!」

「ある人からの受け売りなんだけどね♪」

並行世界のシャルは暗くしていた顔色を驚愕に変えた

「話は……ここまでかな……そろそろ行くよ!!」

「……そ……そうだね!!」

シャルは剣を構え、並行世界のシャルはシールドとサブマシンガンを構える

続く

「は
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
!!!!
」

不思議な国の出鱈目旅行1—7

ラウラVSラウラ

「ちっ!!」

ラウラは並行世界のレーゲンを纏うラウラとlonelyで戦っていた

「はああ!!」

「グウ!!、負けてたまるか!!」

「ツ!!」

ラウラのクロスボーンのショットランサーと並行世界のラウラのレーゲンのプラズマ手刀が打ち合い、火花を散らす

「そこだ!!」

「ツツ!!」

並行世界のラウラは距離を取ろうとするがそれを読んでいたラウラはクロスボーン
のレールカノンを発射する

並行世界のラウラはレールカノンを躲しきれずに右腕に着弾してしまふ

「同一人物の所為か…貴様の動きがなんとなくわかったが…：…こつとも予想通りに動くかわな…」

「なんだと!？」

「いや、少し違うかもな。環境…過去…仲間、ほんの少しでも違ければそれは同一人物であつて、同一人物じゃない…：…確かに彼奴の言つていたことは正しかったかもしれん」

「試合中に考え事とは余裕だな!!」

ブツブツと呟くラウラに余裕を見せられたと勘違いする並行世界のラウラは怒りにまかせレールカノンを連射する

「遅い!!」

ラウラはザンバスターでレールカノンの弾丸を的確に撃ち抜いてみせる

レールカノンの弾丸を撃ち抜いたことに並行世界のラウラ含め、並行世界のメンバー達は驚愕していた

「レールカノンを撃ち抜いただと!？」

「IS委員会の委員長直属IS部隊の人達に短時間だが鍛えられた私にその程度のレールカノンを撃ち抜けないと思つていたのか!!」

ラウラはそう言うつとザンバスターをサーベルにし接近する

セシリアVSセシリア

「漸く？私の出番がやってきましたわ!!」

「いきなり叫ぶのはどうかと思いますわよ!?!」

アリーナ内の一番高い場所ではセシリアVSセシリアが行われていたが……並行世界のセシリアは急に叫びだしたセシリアに驚愕していた

「……ンン、申し訳ありませんわ。あの回(クラス代表戦)からほとんど出番が無かったものでつい、叫んでしまいましたわ」

「メタ過ぎますわよ!?!それよりも、貴方のビットはどうなっておりますの!!わたくしのテイアーズには防御機能はございませんわよ!?!」

念の為に確認しておくが……彼女達のポジションはセンターガード、相手同ポジションからの支援射撃を止めつつ自分のチームメンバーへの支援射撃を行うのだが……並行世界のセシリアは戦闘開始直後から集中砲火を浴びせて来ていた……が、そのほとん

どをブルー・ティアーズのBT兵器の「ブルー・ティアーズ」に防がれていた

「わたくしのティアーズはIS委員会のビット及びドラグーンを参考に改良された物になりますわ。今までの機能にシールドモード、スパアモードの二つ、更にレーザー型のビットを大型化し一基に三門、計12門となっておりますわ……尚も委員会の機体にはほど遠いのが現状ですわね……」

「……」

セシリアの話しに並行世界のセシリアは啞然としていた……自分の機体よりも性能が高くなっているのにも関わらずそれよりも上の存在が存在しているのだから……

続く

不思議な国の出鱈目旅行 1—8

楯無VS楯無・簪VS簪

「貴女はどういう教え方をしたら猪みたいに速攻突貫する人ができあがるのかしらね?!」

「私が教えたのは一夏くんだけよ!!」

ガキンと火花を散らしながら蒼流旋同土をぶつけ合いつつ言い争いをする2人の楯無……それを2人の簪が呆れてみていた

「……お姉ちゃんがごめん……」

「……それはお互い様……」

言い争いをする2人の姉を見つつ軽く話していた2人の簪は軽くだが打ち解け合っていた

兄が居たり少しの環境の違いはあったがやはり同一人物な為、仲良くはなれていた

「ちよつと、簪ちゃん？お互いに話し合うのは構わないけど……ちゃんと戦わないと駄目よ？」

「そうよ？」

「はあ……お姉ちゃんは黙ってて」

同時に姉にそう言うのと簪は距離をお互いに離すと薙刀の夢現を構える

「…一応、チーム戦でもあるから……」

「うん。手加減はしない!!」

気持ち切り替えた2人はぶつかり合う…一撃、また一撃と数度打ち合うだけで並行世界の簪はあることに気がついた

「(……数度の打ち合いでわかった……私の打鉄二式に比べて出力が高い!!)」

並行世界の簪の打鉄二式よりも簪の伐鐘聖式の方が出力が高かった……それは当然のことではあるが、並行世界の簪はそんなことは当然知らない

「簪ちゃん!!」

「あ、待ちなさい!!」

並行世界の楯無が押されている簪を見て自分の相手をほっぽり出して助太刀しようとする

「邪魔!!」

「ぐう!?!」

助太刀しようとするも簪に不意打ちで一発もらってしまい、並行世界の楯無は吹き飛んでしまう

「簪ちゃん!!邪魔しないで!!」

「……自分の妹を信用出来ないの?」

「ど、どういふことよ!!」

並行世界の楯無は簪の言葉に驚いていた

「ピンチに助けるのなら……わかる。だけど、今は劣勢であるだけでまだ彼女は戦う意思がある……その状態で助けようとするなら貴女は自分の妹の力を信用できてない証拠……」

「そんなこと……」

「あるわよ」

簪と並行世界の楯無が話している中、楯無が話しに割り込んできた

「……まあ、同一人物だから簪ちゃんを優先するのはわかるわ……だけどね、それは本当に簪ちゃんが望んでいるのかしら?」

貴女は押されている簪ちゃんを見ただけで助けに行こうとした……ほんの少し押されているだけよ?まだ、彼女の機体には武装が二つ残っている。それを使えばなんとか

なると思うわよ?」

「……彼女達の言うとおりでよ、お姉ちゃん」

「簪ちゃん?」

楯無が並行世界の楯無にそう言っていると並行世界の簪が上がってきた

「私は一人でも戦えるから、お姉ちゃんは相手に集中して……」

「わかったわ……」

並行世界の楯無は妹の願いで引き下がったが、納得は出来ていないようだった

「……貴女を倒して簪ちゃんの援護に行くわ」

「へえ……良いわ。その言葉そっくり返してあげるわ」

楯無はそう言うと蒼流旋をしまい、赤細い槍を展開する

「この槍は『ロンギヌス』。私が《楯無》で無く《カタナ》としての本気の武器よ」

同じ頃

「お姉ちゃんがごめん」

「いいよ。私のお姉ちゃんも同じようなものだから……」

簪同士は向かい合い、並行世界の簪は先程の姉のことで謝っていた

「ここからは本当に二人での戦い…」

「うん、だから…」

簪は夢現をしまうと一本の刀を展開する

「それは…?」

「真銘・正宗…私が《簪》では無《カンザシ》としての本気…だから」

「本気の私を倒してみなさい!!」

続く